

京都大学構内遺跡調査研究年報

2018年度

2020

京都大学大学院文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センター

京大文化遺産調査活用部門

京都大学構内遺跡調査研究年報

2018年度

2020

京都大学大学院文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センター

京大文化遺産調査活用部門

序

本学構内に残る遺跡の調査・研究および保存・活用を主たる業務としてきた文化財総合研究センターは、2019年4月1日、文学研究科附属ユーラシア文化研究センターとともに統合再編され、文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センターとして新たに出発した。旧センターが担ってきた業務は、新センター内に作られた京大文化遺産調査活用部門が継承することになった。本年報は、旧センターが調査・研究の成果を広く発信するために刊行してきたものであり、新センターにおいても同様の形態で継続させることにした。

第Ⅰ部で報告する2件の調査報告のうち、田中関田町遺跡は試掘調査で新たに見つかった遺跡で、「名勝清風荘庭園」の東側に隣接している。出土遺物には大量の近代遺物が含まれており、そのなかには、「清風荘」と墨書のある陶片や「京都府立療病院」「府立医大」「京都府立医大附属医院」「京陶」といった文字をもつ陶磁器などが含まれていた。「清風荘」やその前身である「清風館」に関する遺物であり、清風荘の歴史の一端を明らかにする貴重な資料となった。岡崎国際交流会館新設に伴って調査された白河街区跡・延勝寺跡・岡崎遺跡からは、古代～近代までの多種多様な遺構が見つかった。近世の大溝は、岡崎村の境界溝とみられ、幕末期の加賀藩邸の西を限る堀としても転用され、藩邸廃絶から時を経ずに埋められ整地されたことが埋土の状況や出土遺物から推測された。近世から近代にかけて、岡崎村の土地利用がどのように変遷していったかを示す重要な知見が得られた。

第Ⅱ部の紀要は、構内の遺跡から検出された道路遺構に関してまとめたものである。本年度から3年間の予定で進めている「白川道」に関する研究プロジェクトの成果の一端である。第Ⅰ部・第Ⅱ部ともにご高覧いただき、ご批評をいただければ幸いである。

新センター京大文化遺産調査活用部門では、旧センターがおこなってきた文化財情報の社会的発信事業をさらに推し進めていきたいと考えている。本学総合博物館と連携した特別展「文化財発掘」の6回目となる今回は、「幕末・近代の出土文字資料」と題して、2月19日～4月19日の会期で展示をおこなっている。また、2018年6月18日の大阪府北部を震源とする地震で、旧センター資料室（尊攘堂）は内部が損傷し、長らく非公開としてきたが、施設部のご尽力のもと復旧工事も終了し、本年3月、展示資料もリニューアルして公開する運びとなった。今後も多方面と連携しつつ、社会的発信事業に継続的かつ積極的に取り組む所存であるので、ご支援、ご協力をお願いする次第である。

なお、文化財総合研究センターの前身である埋蔵文化財研究センターの時代から、34年間の長きにわたって、旧センターの発展・運営に尽力された清水芳裕氏が2019年7月3日に逝去された。氏は、京都大学構内遺跡の調査・研究を指揮するとともに、土器の胎土分析による産地同定研究の分野で学界をリードしてきた。ここに謹んでご冥福を申し上げる。

2020年2月

京都大学大学院文学研究科附属
文化遺産学・人文知連携センター長

吉井秀夫

例 言

- 1 本年報は、京都大学構内で2018年4月1日から2019年3月31日までに発掘、整理作業をおこなった埋蔵文化財調査と保存の報告、および京都大学大学院文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センター京大文化遺産調査活用部門における研究成果をまとめたものである。
- 2 国土座標にしたがって一辺50mの方形の地区割りをして、遺跡の位置を表示した。
- 3 層位と遺構の位置については、国土座標第Ⅵ座標系（日本測地系、 $x = -108,000$ $y = -20,000$ ）が（ $X = 2,000$ $Y = 2,000$ ）となる京都大学構内座標により表示した。
- 4 遺構の略号は、奈良文化財研究所の方式にしたがって、井戸：SE、土坑：SKのように表示し、各調査ごとに通し番号を1から付した。
- 5 遺物には、遺跡の調査名を示すローマ数字と、調査ごとの通し番号を1から付した。この遺物番号は、本文、実測図、写真を通じて表示を統一した。
I：京都市田中関田町遺跡の発掘調査
（例 I 1：京都市田中関田町遺跡出土遺物1番）
- 6 原則として、遺物の実測図は縮尺1/4、遺物の写真は約1/2に統一した。他の縮尺のもの、それぞれに縮尺を明記した。
- 7 参考文献は、本文中に〔著者名 発表年〕の形式で表わし、巻末に一括した。
- 8 古代・中世土師器の型式分類は、とくにことわりがない場合、『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ』（1981年）にしたがっている。
- 9 本文の執筆者名は各章の初めに列記した。また、遺構・遺物の撮影は原則として、それぞれ報告者が担当した。
- 10 編集は、千葉豊が担当し、伊藤淳史、富井眞、笹川尚紀、内記理、磯谷敦子、柴垣理恵子、長尾玲、西田陽子が協力した。

京都大学構内遺跡調査研究年報 2018年度

目 次

第 I 部 2018年度京都大学構内遺跡発掘調査報告

第 1 章 2018年度京都大学構内遺跡調査の概要	1
1 調査の経過	1
2 調査の成果	1
第 2 章 京都市田中関田町遺跡の発掘調査	3
1 調査の概要	3
2 層 位	5
3 中世の遺跡	5
4 近世・近代の遺跡	15
5 近代の遺物にかんする文献史料などからの考察	58
6 小 結	66
第 3 章 京都市白河街区跡・延勝寺跡・岡崎遺跡の発掘調査 I	75
1 調査の概要	75
2 層 位	79
3 近世の遺構	83
4 近世の遺物	91
5 小 結	104
参 考 文 献	108
京都大学構内遺跡調査要項	111
報告書抄録	123

第Ⅱ部 京都大学大学院文学研究科附属
文化遺産学・人文知連携センター
京大文化遺産調査活用部門紀要Ⅰ

道路遺構の考古学的検討に向けて

—京都大学構内遺跡での検出事例から—

1	はじめに	127
2	京都大学構内遺跡検出の道路遺構	127
3	発掘道路遺構の分類試行と課題	131
4	おわりに	134

図	版	卷末
---	---	----

図 版 目 次

- 図版 1 京都大学吉田キャンパスの地区割と調査地点
- 図版 2 京都市田中関田町遺跡
- 1 灰褐色土掘削後の南調査区全景（北から）
 - 2 灰褐色土掘削後の北調査区全景（北東から）
- 図版 3 京都市田中関田町遺跡
- 1 褐色土掘削後の南調査区全景（北から）
 - 2 褐色土掘削後の北調査区全景（南西から）
- 図版 4 京都市田中関田町遺跡
- 1 完掘後の南調査区全景（北から）
 - 2 完掘後の北調査区全景（南西から）
- 図版 5 京都市田中関田町遺跡
- 1 流路 S D 23完掘後（東から）
 - 2 流路 S D 23石仏出土状況（北西から）
 - 3 攪乱 S K 2 からの五輪塔出土状況（北から）
 - 4 井戸 S E 20（西から）
 - 5 井戸 S E 18（南から）
 - 6 流路 S R 1 検出状況（東から）
- 図版 6 京都市田中関田町遺跡
- 1 S D 23出土遺物, S D 24出土遺物
 - 2 石仏
- 図版 7 京都市田中関田町遺跡
- 1 五輪塔(1)
 - 2 五輪塔(2)
- 図版 8 京都市田中関田町遺跡
- 1 S P 1 出土瓦
 - 2 瓦の刻印
- 図版 9 京都市田中関田町遺跡
- 墨書と刻印をもつ土器
- 図版10 京都市白河街区跡・延勝寺跡・岡崎遺跡 I
- 1 調査地全景その 1（表土攪乱除去後・東から）
 - 2 調査地全景その 2（黒色粘質土掘り上げ後・東から）

- 図版11 京都市白河街区跡・延勝寺跡・岡崎遺跡 I
1 灰褐色土除去後調査区全景（東から）
2 黄灰色土除去後調査区全景（東から）
- 図版12 京都市白河街区跡・延勝寺跡・岡崎遺跡 I
S D 1（南から）
- 図版13 京都市白河街区跡・延勝寺跡・岡崎遺跡 I
1 S D 1 北壁断面（南から）
2 S D 1 南壁断面（北から）
3 S D 1 上部の東肩断面（南から）
4 S D 1 上部の西肩断面（南から）
- 図版14 京都市白河街区跡・延勝寺跡・岡崎遺跡 I
1 S X 2（南から）
2 S X 2（北から）
3 S X 2 東肩（西から）
- 図版15 京都市白河街区跡・延勝寺跡・岡崎遺跡 I
1 S X 2 第1列最下部の横木と西側の横板（北から）
2 S X 2 第1列の辺材（北から）
3 S X 2 東肩の縦置き板（西から）
4 S X 2 第2～5列の杭（南から）
5 S X 2 の構造材（東から）
6 S X 2 第4列の横木直下の堆積相（南から）
- 図版16 京都市白河街区跡・延勝寺跡・岡崎遺跡 I
1 S X 2 第5列の横木直下の堆積相（南から）
2 S X 2 第2列南側の底面（北から）
3 S X 1（東から）
4 S X 1 横板の合わせ目（東から）
5 S E 1 井筒検出状況（南から）
6 S E 8（南から）

挿 図 目 次

京都市田中関田町遺跡	
図1 南調査区 X = 1950東西畔と北調査区東壁の層位…………… 4	S E 18出土遺物, S E 15出土遺物, S E 8出土遺物, S K 1出土遺物, S D 4出土遺物……………27
図2 中世 I 期・II期の遺構…………… 6	図16 石仏……………28
図3 盛土の層位…………… 7	図17 五輪塔(1)……………29
図4 中世 III期の遺構…………… 8	図18 五輪塔(2)……………30
図5 S D 17出土遺物, S D 25出土遺物, S D 26出土遺物, S D 27出土遺物, 盛土下層出土遺物, 盛土中層出土遺物, 盛土下層出土遺物……………10	図19 S E 1出土遺物, S E 3出土遺物, S E 4出土遺物, S P 1出土遺物, S E 10出土遺物……………32
図6 S D 5出土遺物, S D 6出土遺物, S D 9出土遺物, S D 14出土遺物, S D 16出土遺物, S X 2出土遺物, S X 4出土遺物, S R 2出土遺物……………11	図20 灰褐色土小穴(北調査区)出土遺物, 灰褐色土出土遺物(北調査区)(1)……………33
図7 茶褐色土出土遺物……………12	図21 灰褐色土(北調査区)出土遺物(2)……………35
図8 茶褐色土出土遺物, 明茶褐色土出土遺物, 灰黄褐色土出土遺物, 褐色土出土遺物……………13	図22 灰褐色土小穴(南調査区)出土遺物, 灰褐色土(南調査区)出土遺物(1)……………37
図9 褐色土出土遺物……………14	図23 灰褐色土(南調査区)出土遺物(2)……………39
図10 近世 1 期の遺構……………17	図24 灰褐色土(南調査区)出土遺物(3)……………40
図11 井戸 S E 18……………19	図25 表土・攪乱出土遺物(1)……………42
図12 近世 2 期・近代の遺構……………21	図26 表土・攪乱出土遺物(2)……………43
図13 S D 23出土遺物, S E 11出土遺物, S E 19出土遺物, S E 12出土遺物, S X 3出土遺物……………24	図27 表土・攪乱出土遺物(3)……………45
図14 S D 24出土遺物……………26	図28 表土・攪乱出土遺物(4)……………46
図15 S E 20出土遺物, S E 13出土遺物,	図29 表土・攪乱出土遺物(5)……………47
	図30 表土・攪乱出土遺物(6)……………48
	図31 表土・攪乱出土遺物(7)……………49

第 I 部 2018年度京都大学構内遺跡発掘調査報告

第1章 2018年度京都大学構内遺跡調査の概要

第2章 京都市田中関田町遺跡の発掘調査

第3章 京都市白河街区跡・延勝寺跡・岡崎遺跡の発掘調査 I

第1章 2018年度京都大学構内遺跡調査の概要

千葉 豊

1 調査の経過

旧・京都大学文化財総合研究センター（2008年4月1日～2019年3月31日）では、吉田キャンパスおよび附属施設の敷地内における建物の新営やそのほかの掘削工事に際し、予定地の埋蔵文化財調査を、既知の遺跡との関係や過去の調査結果により、発掘・試掘・立合にわけて実施してきた。2018年度には、以下のように発掘調査1件、立合調査7件、資料整理1件をおこなった（括弧内は、図版1および表1の地点番号）。

発掘調査	京都大学外国人宿舍新営（京都市白河街区跡・延勝寺跡・岡崎遺跡）	（第1章，図版1-463）
立合調査	京都大学（北部）ガス管入れ替え工事（北部構内B C 33区）	（第1章，図版1-464）
	京都大学外国人宿舍（百万遍）新営（西部構内A Z 20区）	（第1章，図版1-465）
	京都大学（吉田南）総合館ほか高压ケーブル更新工事（吉田南構内A R 23区）	（第1章，図版1-466）
	京都大学（医学部）外灯新設工事（医学部構内A M 19区）	（第1章，図版1-467）
	京都大学（熊野）キャンパス環境整備（熊野構内Z Z 16区）	（第1章，図版1-468）
	京都大学（本部）接地線改修に伴う工事（本部A X 30区）	（第1章，図版1-469）
	京都大学（西部）総合体育館躯体その他工事（西部A X 20区）	（第1章，図版1-470）
資料整理	京都大学関田学生寄宿舎新営（京都市田中関田町遺跡）	（第2章，図版1-455）

2 調査の成果

以上のうち、2018年度に整理を終えたものについて、成果を略述する。なお、田中関田町遺跡については第2章、白河街区跡・延勝寺跡・岡崎遺跡については第3章で成果を詳述しているので参照されたい。

田中関田町遺跡の発掘調査 「名勝清風荘庭園」の東側に隣接する本地点は従来、遺跡指定の範囲外であったが、老朽化した京都大学女子寮の建て替え工事が計画されたため、2017年5月に遺跡の有無を確認するための試掘調査をおこなった。その結果、中世や近世の遺物包含層が良好な形で残存していることが確認されたため、田中関田町遺跡として新たな遺跡登録がなされ、建て替え工事区域全域にわたる発掘調査が実施された。

調査の結果、中世の溝や近世・近代の井戸・野壺・溝・集石・段差、中世から近世まで長期にわたって利用されたと思われる盛土や流路といった遺構とともに、中世の土器・陶

磁器、近世・近代の土器・陶磁器・瓦・ガラス製品などが多数見つかった。

中世における本調査区周辺では、吉田泉殿をはじめとする貴族の邸宅が設けられたことが文献資料から判明しており、それにともなって一帯の開拓などが進められたと想定できる。今回の調査で見つかった中世の遺構である溝や盛土は、こうした開発を裏付ける資料として重要であろう。

今回の出土遺物で注目されるのは、「大攪乱」と名付けた廃棄土坑や表土などから大量に出土した近代の遺物である。これらには、「清風荘」と墨書のある陶片や「京都府立療病院」「府立医大」「京都府立医大附属医院」「京医」「京陶」といった文字をもつ陶磁器などが含まれていた。本調査地点のうち北調査区の東半を除く大部分の区域は、明治40年頃、清風荘を所有する住友家が買い上げ、畑地としていた。大攪乱から出土した多量の近代遺物は、明治44年に始まった清風荘の新造にともなって、前身である清風館で所持して不要となった器物と考えることができる。清風荘の歴史の一端を明らかにする資料といえよう。

白河街区跡・延勝寺跡・岡崎遺跡の発掘調査 本調査区は、京都市左京区岡崎成勝寺町に所在する。六勝寺の一つ、延勝寺跡地に比定されるとともに、弥生～古墳時代を中心とする岡崎遺跡の範囲内でもある。ここに岡崎国際交流会館を新設することが計画されたため、2017年7月に試掘調査を実施し遺跡の残存状況を確認したうえで、発掘調査を実施した。

調査の結果、古代末～中世前期の方形石敷土坑・井戸・土器溜・瓦溜、近世の大溝・井戸などの遺構が検出され、下層の流路内からは弥生～古墳時代に編年される多量の土器が出土した。方形石敷土坑は、底面に角材を井桁状に組んで内部を石敷とした類例のない特異な遺構である。延勝寺との関連も含めて、その性格解明が課題となる。

近世の遺構として注目されるのは、調査区西辺で検出された南北方向に伸びる大溝S D 1である。幅3m、深さ2m前後の大規模なもので、丸太や板を組み合わせた護岸や堰状の木組み遺構をともなっていた。文献資料や絵図などとの比較検討の結果、この大溝は宝永の大火（1708年）を契機とした市街化によって岡崎村の西を限る境界溝として整備されたと考えられる。そして幕末期に、加賀藩岡崎屋敷がこの地周辺に設けられたさいには、大溝はそのまま藩邸の西を限る堀として転用されたが、藩邸廃絶から時を経ずに埋められ整地されたことが埋土の状況や出土遺物から推測された。近世から近代にかけて、岡崎村の土地利用がどのように変遷していったかを示す貴重な資料といえる。

なお、今回の報告では近世の遺跡に関してのみ詳述しており、中世以前の成果については次年度の年報で詳細を報告する予定である。

第2章 京都市田中関田町遺跡の発掘調査

笹川尚紀 内記 理

1 調査の概要

本調査区は、今出川鞠小路の北西、「名勝清風荘庭園」の東隣に位置する。京都大学吉田キャンパスの地区割では、BB18区にあたる（図版1-455）。

ここには、昭和34年から京都大学女子寮が所在し、その老朽化が進んだことから、建てかえが計画されるにおよんだ。

ところが、この地は、周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲外であったため、遺跡の有無を確かめるべく、2017年5月15日に試掘調査を実施した（図版1-454）。それにより、広い範囲にわたって中世・近世の遺物包含層が存在することが明らかになり、京都市によって田中関田町遺跡として登録がなされた。

そうした結果にもとづき、2017年10月16日から2018年1月26日まで、発掘調査をおこなった。調査面積は約900㎡であり、出土遺物の総量は整理用コンテナ40箱であった。

本調査区の南東のあたりには、吉田泉殿町遺跡が位置している。そのなかには、13世紀前期に西園寺公経によって造営され、彼の死後、九条頼経や後嵯峨上皇などによって伝領された、吉田泉殿にかんする遺構・遺物が含まれているのは、まずまちがいあるまい。

京都大学西部構内の348地点からは、石敷と掘込地業をとまなう建物SX12や庭園遺構とみられる流路SR3・4などが検出されており〔伊藤・笹川2012〕、それらは吉田泉殿にかかわる可能性が存しているといえる。

くわえて、女子寮の敷地の大半は、のちに詳説するように、明治時代の末ごろ以来、西園寺公望の別邸であった清風荘と同様、長らく住友家の所有となっていた。

したがって、発掘調査にあたっては、上記の事柄をふまえたうえで、鎌倉時代の遺構ならびに清風荘関連の遺物の有無に、とりわけ注意をはらうにいたった。

ちなみに、廃土置き場が確保できないがために、発掘調査にかんしては、X=1961のあたり以南と以北という、2回に分けて実施した。そのため前者を南調査区、後者を北調査区と称する場合があることを、あらかじめことわっておきたい。

京都市田中関田町遺跡の発掘調査

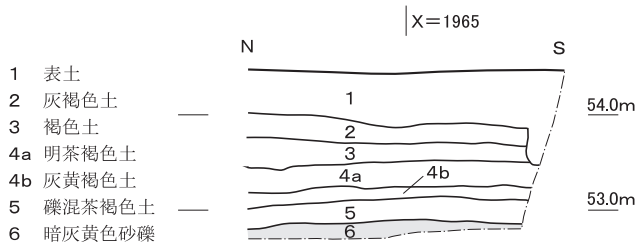
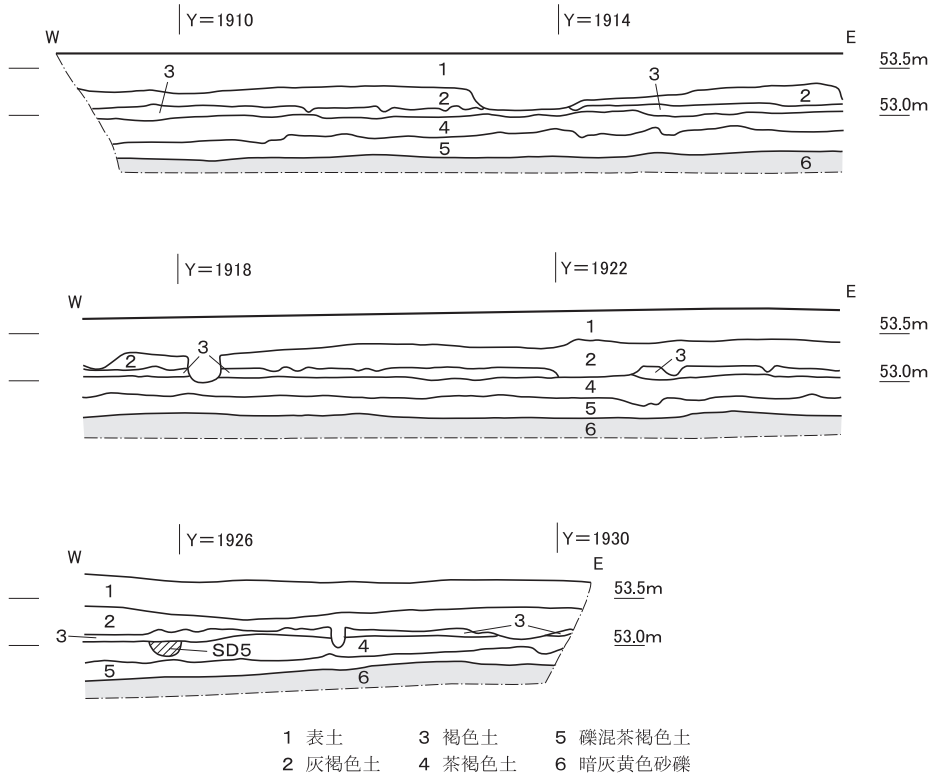


図1 南調査区X=1950東西畔と北調査区東壁の層位 縮尺1/80

層 位

2 層 位

本調査区の現地表の標高は、その大半が $\approx 53.7\text{m}$ 前後である。けれども、北東部は約 54.5m と 0.8m ほど高くなっている。

層序については、X = 1950のラインに観察用の畔をもうけた(図1上)。第1層は表土で、重機によって掘りさげた。第2層は灰褐色土、第3層は褐色土で、それらのなかに含まれる遺物より、前者は近世中期から近代、後者は16世紀から近世中期ごろの地層であると考えられる。

第4層と第5層はともに茶褐色土であり、後者には拳大のもの以下、多量の礫が混じっている。遺構の検出にかんしては、両層を掘りあげたのち、第6層の暗灰黄色砂礫、すなわち地山の砂礫の上面でおこなった。第4層は、そのなかに含まれる遺物より、13世紀から15世紀の年代があたえられる。いっぽう、第5層は、遺物がほとんど出土せず、それゆえに、その時期を確定するのは、なかなかむずかしい。しかしながら、平安時代末期よりも前にさかのぼることは、まずないと推断される。

なお、本調査区の北東部の層位については、東壁の一部のものを提示している(図1下)。そのうち第4 a層の明茶褐色土と第4 b層の灰黄褐色土は、第4層の茶褐色土に対応する。北東部北半は盛土であり、その層序は後で説明をくわえる。それ以外の南半の各地層は、本調査区の大方のそれよりも、総じて高くなっているのが知られる。ちなみに、第4 a層以降の遺構の検出にかんしては、第4 b層の上面と第6層の暗灰黄色砂礫の上面の2回に分けておこなっている。

3 中世の遺跡

(1) 中世I期・II期の遺構(図版4、図2)

中世I期を13世紀、中世II期を14・15世紀とし、第4層の茶褐色土、第4 a層の明茶褐色土・第4 b層の灰黄褐色土を埋土とする遺構について、解説をおこなう。

S D17は北東から南西方向に流れる二俣の溝。検出面からの深さは、X = 1943あたりより以北で 40cm 前後をはかり、それ以南ではだんだんと浅くなっている。S D25は北東から南西方向に流れ、南に折れる溝。曲がる前のところの底部は、検出面から 60cm 前後の深さである。S D17とS D25は、出土遺物よりI期の遺構と判断され、つながっている可能性も十分存するといえる。

京都市田中関田町遺跡の発掘調査

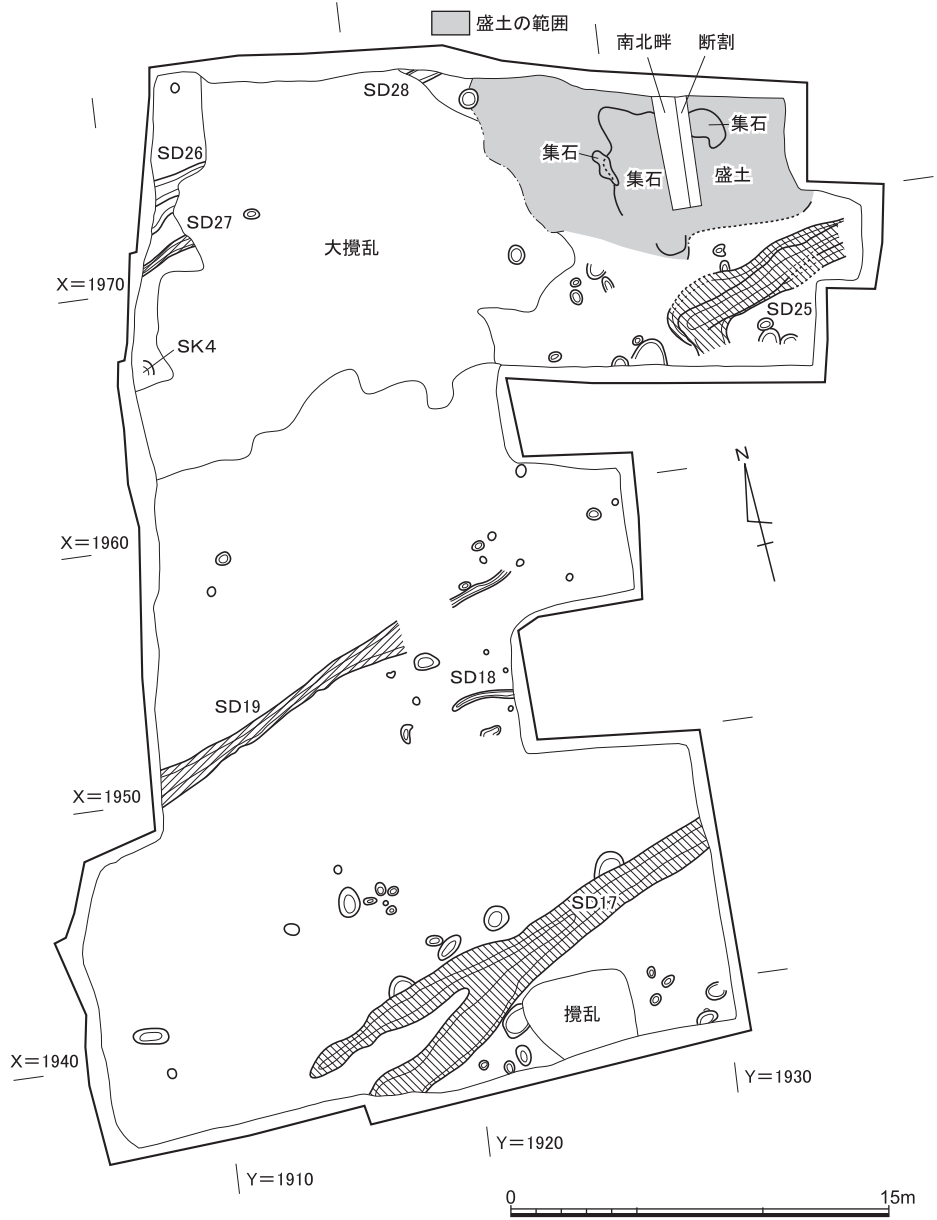


図2 中世I期・II期の遺構 縮尺1/300

中世の遺跡

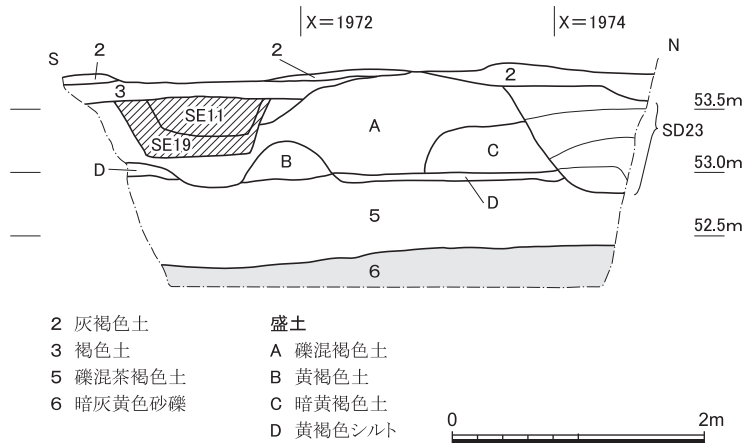


図3 盛土の層位 縮尺1/60

SD27は検出面からの深さが約15cmをはかる溝。Ⅱ期，そのなかでも14世紀後半の年代があたえられよう。

SD19は北東から南西方向に流れる溝。その底部は検出面より20cm前後の深さである。遺物の出土はあまりなかったものの，F₁類と目される土師器皿の口縁部小片が1点とりあげられていることから，Ⅱ期，そのなかでも15世紀代に掘削されたものと推測される。

本調査区の北東部では，盛土の一部が認められた（図3）。そのA層には，小児頭大・拳大といった礫が多量に含まれている。掘りさげていく過程で，それらが広がっているのが確かめられた。盛土の中・下部からは13世紀代，上部からは15世紀前半ごろの遺物がみついている。こうした事柄をふまえると，もともとⅠ期に構築され，そののちⅡ期において，礫混じりの土が積みあげられたことが推量される。

なお，上記以外の遺構にかんしては，遺物がほとんど出土しなかったことにより，造作された時期を明らかにすることができない。

(2) 中世Ⅲ期の遺構（図版3，図4）

中世Ⅲ期を16世紀とし，第3層の褐色土等を埋土とする遺構などについて，説明をくわえる。

図4で赤線で示したように，本調査区の北東部ならびに南西隅において，褐色土の落ちが認められる。そして，それらのあたりには集石がみうけられる。どちらも西に約20度振れており，当該期における土地の区画であった公算が大きい。くわえて，SD5やSD7など，それらとほぼ平行もしくはほぼ直交するライン上に，もうけられているものが多い

京都市田中関田町遺跡の発掘調査

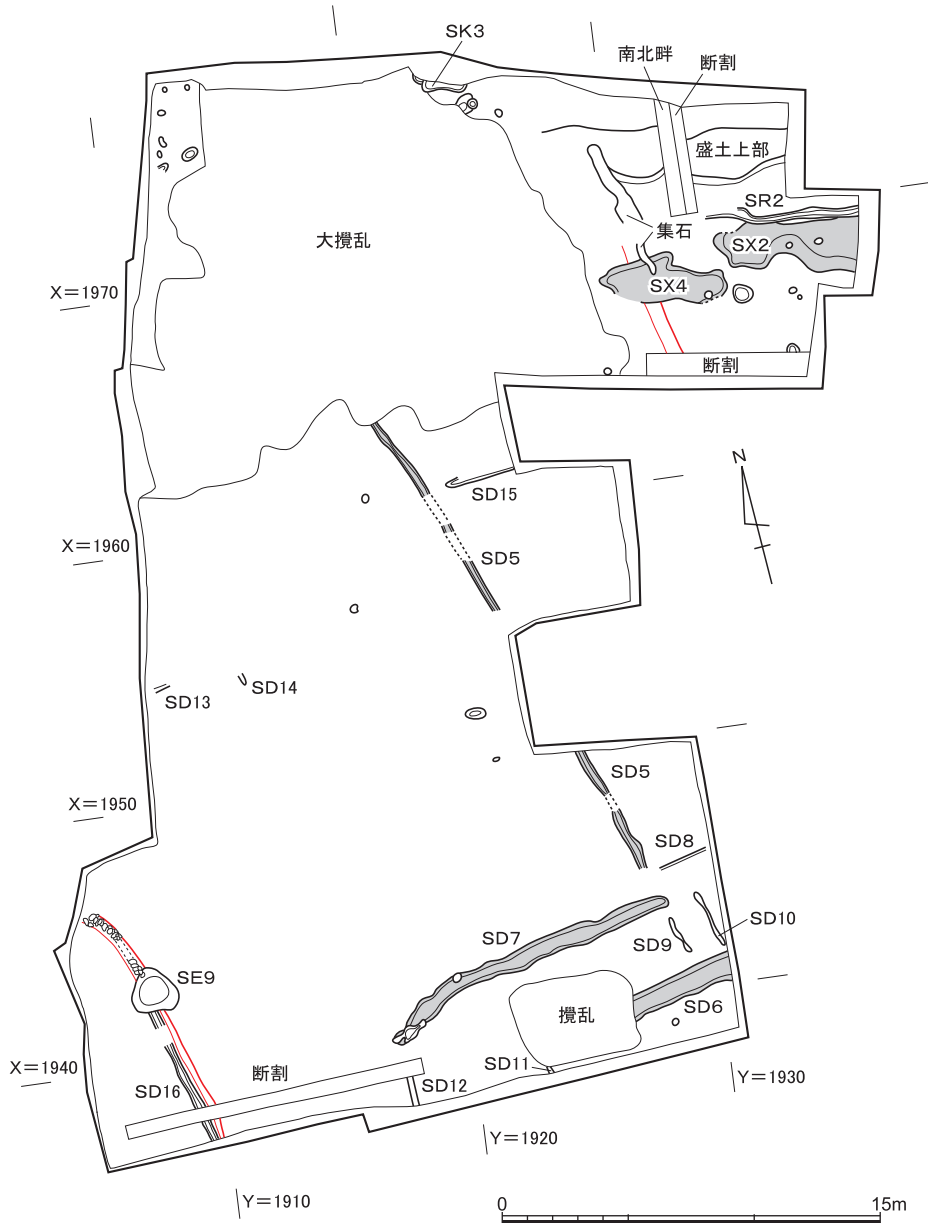


図4 中世Ⅲ期の遺構 縮尺1/300

中世の遺跡

という点は、すこぶる注目される。

S D 5 は幅約30cmの長い溝。検出面から底部までは一定せず、深いところで20cm、浅いところで5cmをはかる。S D 6 と S D 7 は平行する位置に存する溝。検出面からの深さは、ともに10cm前後である。

S X 2 と S X 4 は白砂で埋まっていた不定形の遺構。検出面から底部までは、前者が約30cm、後者が約80cmをはかる。すぐ近くに、自然流路である S R 2 がみつかった点などを勘案すると、洪水によって白砂が流れ込んだ可能性が推測される。

(3) 中世Ⅰ期・Ⅱ期の遺構の遺物 (図5)

溝出土遺物 (I 1～I 10) I 1～I 5 は D₃類, I 6 は D₄類の土師器皿。S D 17 より出土。I 7 は D₃類の土師器皿。S D 25 より出土。I 8 は灰白色を呈する土師器高杯の脚部。S D 26 より出土。I 9 は E₃類の土師器皿。I 10 は灰白色の土師器碗。S D 27 より出土。

盛土出土遺物 (I 11～I 38) 盛土にかんしては、機械的に3回に分けて掘削した。よって、下層・中層・上層という名称を付して、それぞれのところからみつかった遺物について、説明をくわえる。

I 11・I 12 は C₃類, I 13 は C₅類, I 14～I 18 は D₃類, I 19・I 20 は D₄類, I 21 は D₅類の土師器皿。I 22 は平瓦。凹面に布目の痕跡を残し、凸面には縄叩きがおこなわれている。下層より出土。

I 23・I 24 は C₃類, I 25～I 28 は D₃類, I 29 は D₄類の土師器皿。I 30 は青磁碗。体部外面に鎬蓮弁文を有する。中層より出土。

I 31 は E₃類, I 32～I 34 は E₄類の土師器皿。I 35・I 36 は灰白色を呈する土師器小碗・碗。I 37 は土師質の脚部片。底部外面に糸切り痕がみうけられる。I 38 は瓦器鍋。口縁端部をつまみあげている。上層より出土。

(4) 中世Ⅲ期の遺構の遺物 (図6)

溝出土遺物 (I 39～I 46) I 39 は F₃類の土師器皿。口縁端部に煤が付着している。S D 5 より出土。I 40 は灰白色の土師器小碗。I 41 は青磁杯。口縁を横に折り曲げ、端部をつまみあげる。また、体部内面は縦に削りをほどこし、花卉形とする。I 42 は白磁の底部片。見込みに目跡が残る。S D 6 より出土。I 43 は F₂類の土師器皿。S D 9 より出土。I 44 は白磁碗。口縁端部は外反し、その内面を口禿げとする。S D 14 より出土。I 45 は E₁類, I 46 は F₂類の土師器皿。S D 16 より出土。

京都市田中関田町遺跡の発掘調査

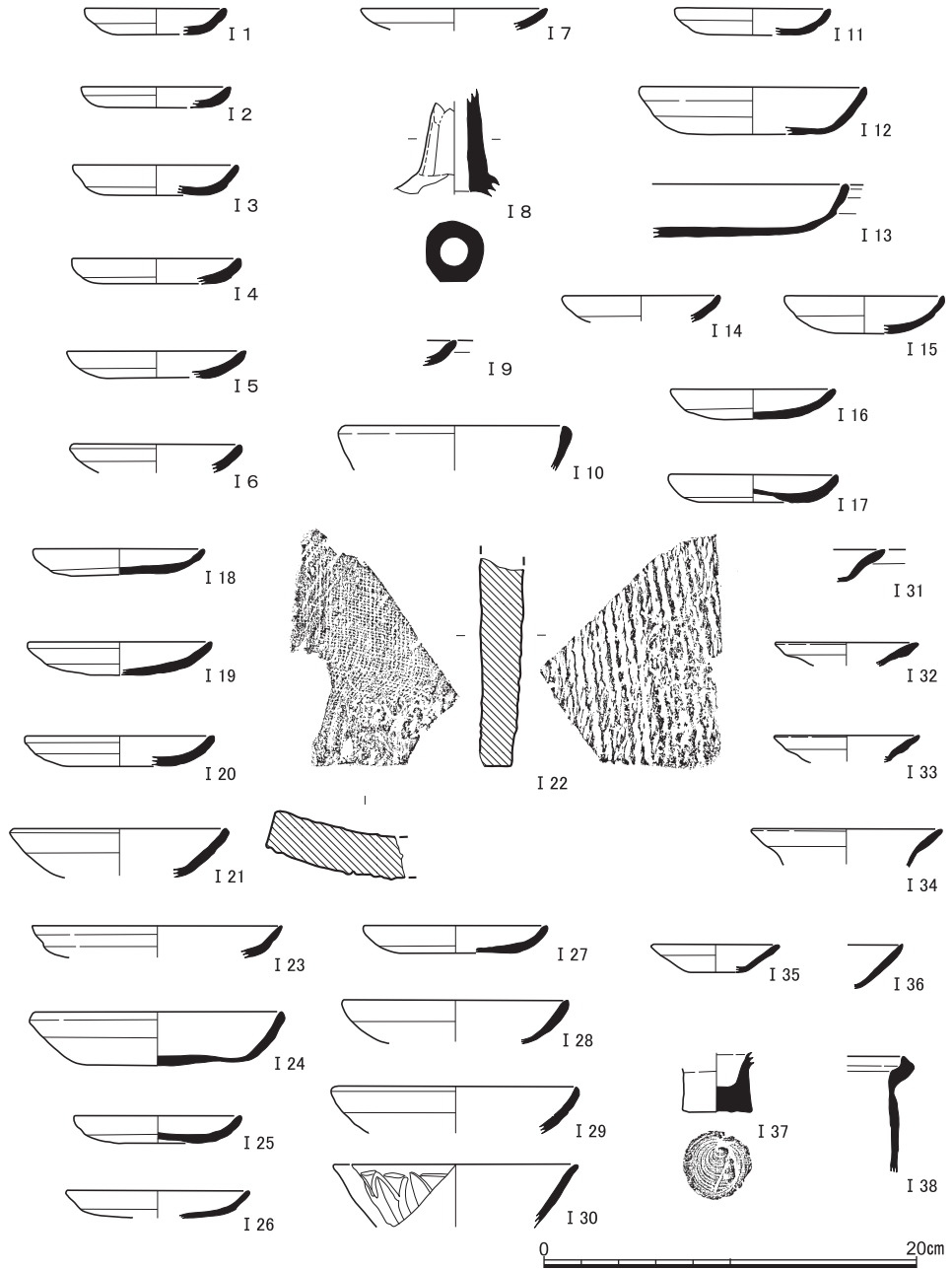


図5 S D17出土遺物 (I 1 ~ I 6 土師器), S D25出土遺物 (I 7 土師器), S D26出土遺物 (I 8 土師器), S D27出土遺物 (I 9 · I 10土師器), 盛土下層出土遺物 (I 11 ~ I 21土師器, I 22 瓦), 盛土中層出土遺物 (I 23 ~ I 29土師器, I 30青磁), 盛土下層出土遺物 (I 31 ~ I 37土師器, I 38瓦器)

中世の遺跡

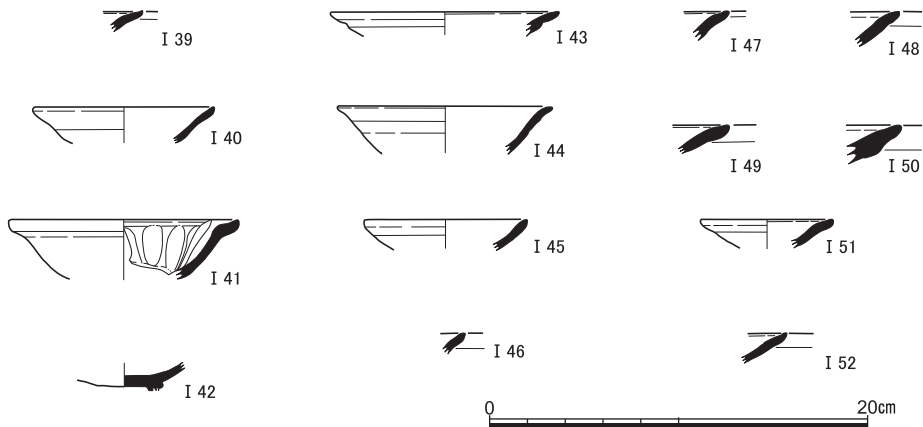


図6 S D 5出土遺物 (I 39土師器), S D 6出土遺物 (I 40土師器, I 41青磁, I 42白磁), S D 9出土遺物 (I 43土師器), S D 14出土遺物 (I 44白磁), S D 16出土遺物 (I 45・I 46土師器), S X 2出土遺物 (I 47～I 50土師器), S X 4出土遺物 (I 51土師器), S R 2出土遺物 (I 52土師器)

その他の出土遺物 (I 47～I 52) I 47・I 48はF₂類, I 49はF₃類の土師器皿。I 50は大型で厚手の土師器口縁部片。S X 2より出土。I 51は灰白色の土師器小椀。S X 4より出土。I 52はF₂類の土師器皿。S R 2より出土。

(5) 遺物包含層の遺物 (図7～9)

茶褐色土出土遺物 (I 53～I 110) I 53はB₃類, I 54～I 58はD₃類, I 59はD₄類, I 60～I 66はE₁類, I 67・I 68はE₃類, I 69はE₄類, I 70～I 75はF₁類, I 76はF₂類の土師器皿。I 59は口縁端部に煤が付着している。I 77・I 78は灰白色を呈する土師器受皿。I 79～I 84は灰白色の土師器小椀・椀。I 85・I 86は灰白色を呈する土師器高杯の脚部。I 87は土師器羽釜。I 88は灰白色のミニチュア土師器羽釜。I 89は瓦器羽釜。I 90・I 91は瓦器鍋。前者は口縁端部に面をもつ。後者は口縁部を折り曲げ, その端部を尖らせている。I 92は瓦器火鉢の底部片。平面方形で, 一角に脚が付くのが認められる。

I 93は須恵器杯B。I 94は須恵器鉢。口縁端部は上下に拡張される。I 95は硬質の緑釉陶器。削り出しの輪高台を有する。I 96は灰釉陶器段皿。I 97は灰釉系陶器の椀。低い貼り付け高台で, 断面三角形を呈する。I 98は青磁。高台置付を露胎とする。I 99は青磁椀。体部外面に鎬蓮弁文がみうけられる。I 100・I 101は白磁底部片。ともに高台部を露胎とする。I 102～I 105は白磁椀。I 102・I 103は口縁端部を口禿げとする。I 104はやや扁平な玉縁状の, I 105は肉厚な玉縁の口縁を有する。I 106は青白磁瓶。I 107・I 108は青

京都市田中関田町遺跡の発掘調査

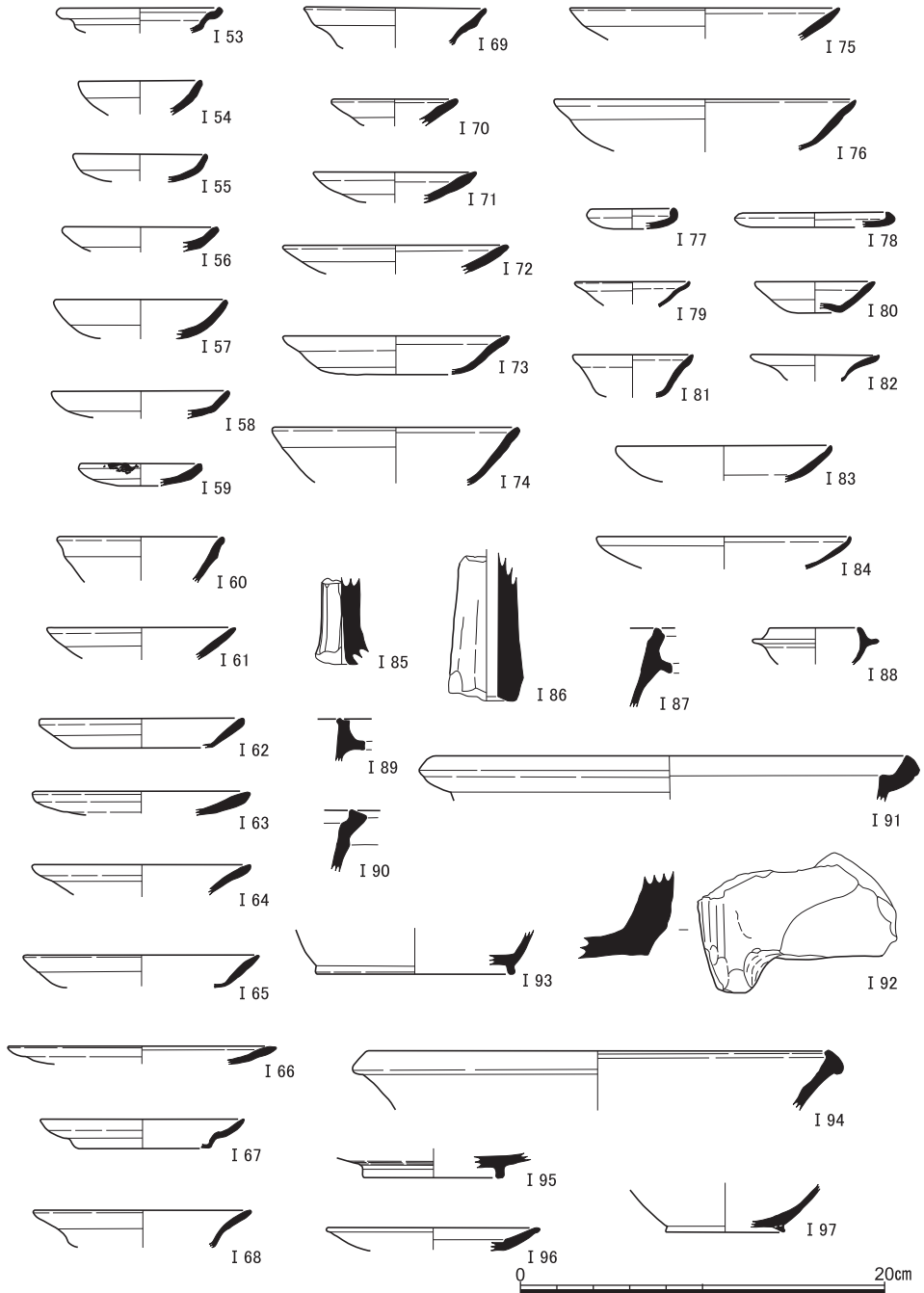


図7 茶褐色土出土遺物（I 53～I 88土師器，I 89～I 92瓦器，I 93・I 94須恵器，I 95緑釉陶器，I 96灰釉陶器，I 97灰釉系陶器）

中世の遺跡

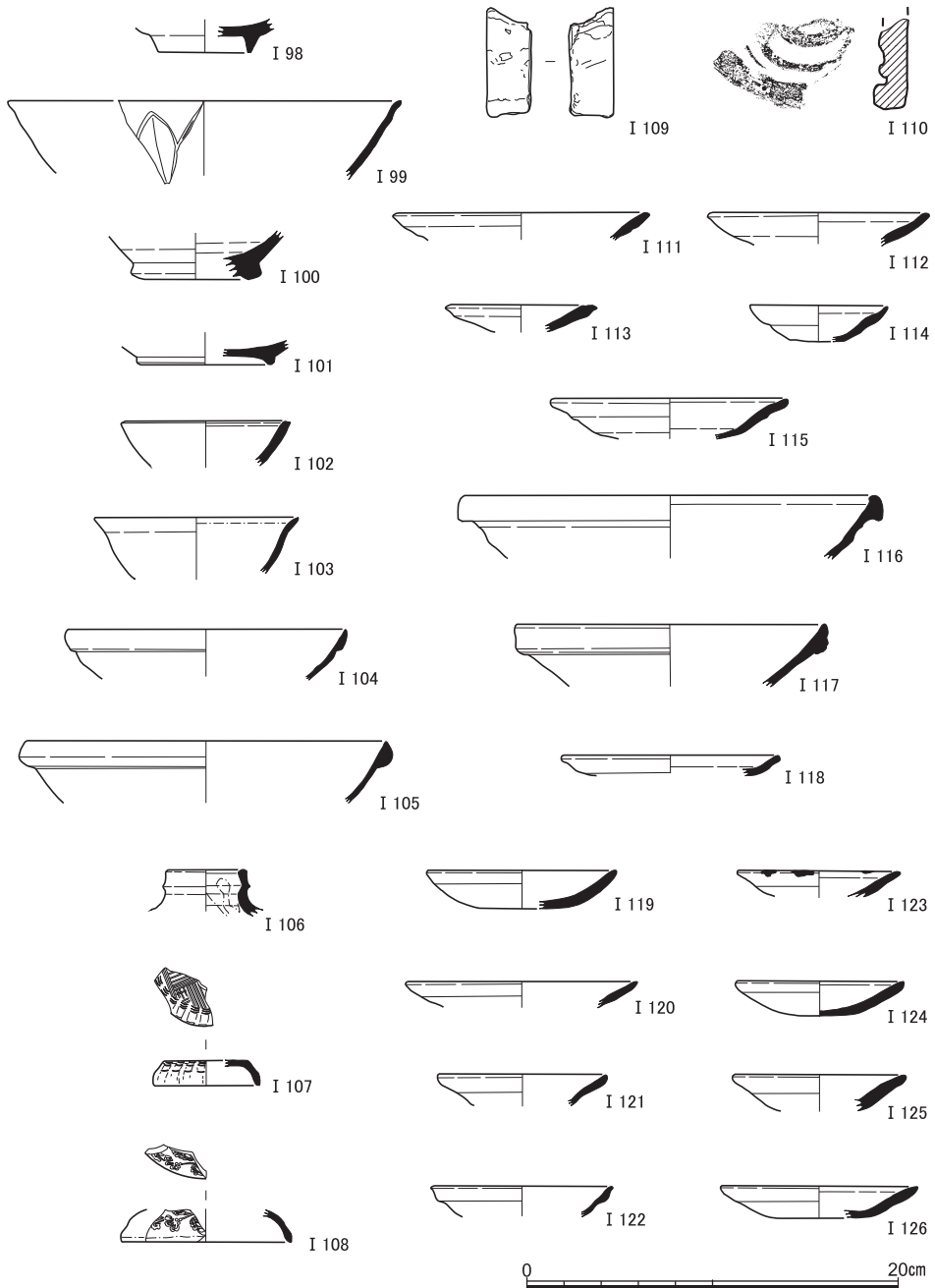


図8 茶褐色土出土遺物 (I 98・I 99青磁, I 100～I 105白磁, I 106～I 108青白磁, I 109砥石, I 110瓦), 明茶褐色土出土遺物 (I 111～I 115土師器, I 116須恵器, I 117白磁), 灰黄褐色土出土遺物 (I 118土師器), 褐色土出土遺物 (I 119～I 126土師器)

京都市田中関田町遺跡の発掘調査

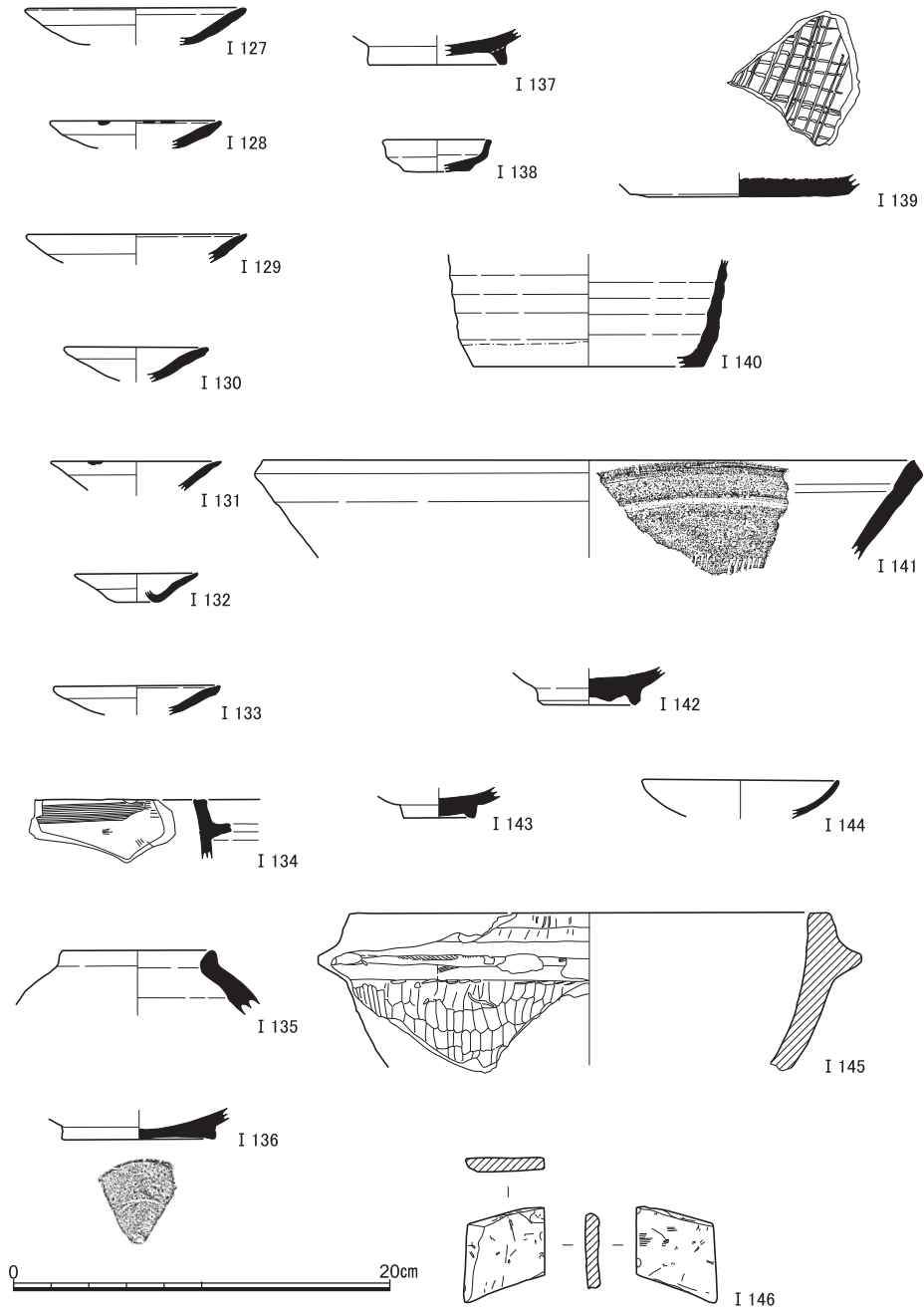


図9 褐色土出土遺物 (I 127~ I 133土師器, I 134瓦器, I 135須恵器, I 136緑釉陶器, I 137灰釉陶器, I 138~ I 141陶器, I 142青磁, I 143・I 144白磁, I 145石鍋, I 146砥石)

白磁の合子蓋。I 109は灰白色を呈する砥石。I 110は巴文の軒丸瓦。

明茶褐色土・灰黄褐色土出土遺物（I 111～I 118） I 111はE₁類，I 112はF₁類，I 113はF₂類の土師器皿。I 114・I 115は灰白色の土師器小椀・椀。I 116は須恵器鉢。口縁端部は上下に拡張される。I 117は白磁玉縁の椀。明茶褐色土より出土。

I 118はE₁類の土師器皿。灰黄褐色土より出土。

褐色土出土遺物（I 119～I 146） 16世紀から近世中期ごろの年代があたえられる、褐色土からの出土遺物のうち、中世のもののみをとりあげる。

I 119はD₂類，I 120はE₁類，I 121はE₃類，I 122はE₄類，I 123～I 127はF₁類，I 128・I 129はF₃類，I 130・I 131はF₄類の土師器皿。I 123・I 128・I 131は口縁端部に煤が付着している。I 132・I 133は灰白色の土師器小椀。後者は口縁部が弱く外反し、端部を内につまんでいる。I 134は瓦器羽釜。頸部外面は撫で、内面は刷毛調整がおこなわれている。

I 135は須恵器短頸壺。外面に自然釉が付着している。I 136は硬質の緑釉陶器。糸切り無調整の円盤状高台を有する。I 137は貼り付け高台の灰釉陶器。I 138は古瀬戸の小皿。I 139は古瀬戸の卸皿。I 140は陶器。体部には灰白色の釉をほどこし、その下端から底部外面を露胎とする。I 141は陶器すり鉢。I 142は青磁。高台は低く、その端部外面を面取りする。I 143は白磁。外面を露胎とする。I 144は白磁皿。体部はわずかに内湾する。I 145は石鍋。断面正台形の鏝がめぐり、口縁部は直立する。内面は研磨され、体部外面には鑿によるこまかな削り出し痕がみうけられる。I 146はにぶい赤橙色を呈する砥石。

4 近世・近代の遺跡

中世と近世のものに分けられる褐色土を埋土とする遺構のうち、中世の遺構については前節で紹介した通りである。本節では、褐色土を埋土とする残りの近世の遺構と、灰褐色土を埋土とする近世から近代にかけての遺構について記述する。ここでは、前者を近世1期の遺構として、また、後者を近世2期および近代の遺構として叙述する。それぞれの時期に帰属する遺構について述べた後に、これらの遺構や包含層から出土した遺物を紹介する。出土遺物の年代から、褐色土の近世1期は18世紀頃まで続き、18世紀後半頃から19世紀前半頃にかけてのある段階で堆積する土に変化が生じ、灰褐色土が堆積する近世2期となった。やはり出土遺物の年代から考えて、灰褐色土が堆積した時期は20世紀第2四半期まで続いたようだ。

(1) 近世1期の遺構 (図版3・5, 図10・11)

褐色土を埋土とする遺構のうち出土遺物から近世の時期のものと認められたものの多くが、北調査区東半で検出された西に向かって落ちる段差の付近でみつかった。注目すべき遺構としては、中世の盛土の北方で検出された、流路と思われる遺構SD23が挙げられる。盛土と同様に中世から使われていたと考えられるが、出土遺物の中に近世の遺物が含まれることから、近世1期の遺構として報告する。段差の上(つまり東側)では、盛土より南において、野壺と思われる数点の円形土坑が南北に並んだ状態でみつかった。一方、段差の下(つまり西側)では、段差に沿った南北方向に走る溝と井戸・野壺が検出された。

南調査区北半でも、褐色土を埋土とする遺構の中に、出土遺物から近世まで用いられたことがわかるものが2点あった。野壺と考えられるSE8とSK1である。これらの遺構の存在からも、本調査区で検出された褐色土を埋土とする遺構に、中世から近世にかけてのものが混在する状況がわかる。

一方、南調査区南半では、褐色土包含層を掘削する過程で、砂が堆積する溝状の遺構が数点検出された。遺物は出土しなかったが、検出状況から考えて褐色土と灰褐色土の中間の時期にあたるものである。さらに、西南隅では、砂の堆積を切る溝SD4が検出され、近世の土師器片が出土した。

以下に、検出された遺構についてやや詳しく説明する。北調査区東半、南調査区北半、南調査区南半の順に記述する。なお、北調査区の西半は西北隅を除いて大きく攪乱を受けており、元来どのような遺構が存在したかが判断できない(図10中の「大攪乱」)。

東西流路SD23 中世に構築された盛土の北では、流水に起因するものと考えられる大規模な砂の堆積が認められた。流れは東から西に向かっていたと考えられ、盛土はその南岸にあたる。今回の調査区内では北岸が検出されなかったため、流路の幅は不明であるが、1m以上あったことがわかる。溝の深さは盛土上部から70cmほどであった。西は盛土が途切れる辺りで不明瞭になり、流路がその後どの方向に向かったかは、遺構の状況からは判断できない。出土遺物には中世の土師器や青磁が含まれ、流路の使用開始時期は盛土が構築された中世に遡ると考えられる。そして、そこには近世の陶磁器も含まれることから、近世に至っても流路が使用され続けたことがわかる。近世遺物のいくつかは、17世紀頃のものと考えられる。なお、この流路からは中世に彫られたと考えられる花崗岩製の石仏(I248)や五輪塔片(I249上部)がみつかった。また、流路に切り込む攪乱SK2からは、五輪塔片2点(I249下部・I250)がみつかっており、そのうちの1点は上述のS

近世・近代の遺跡

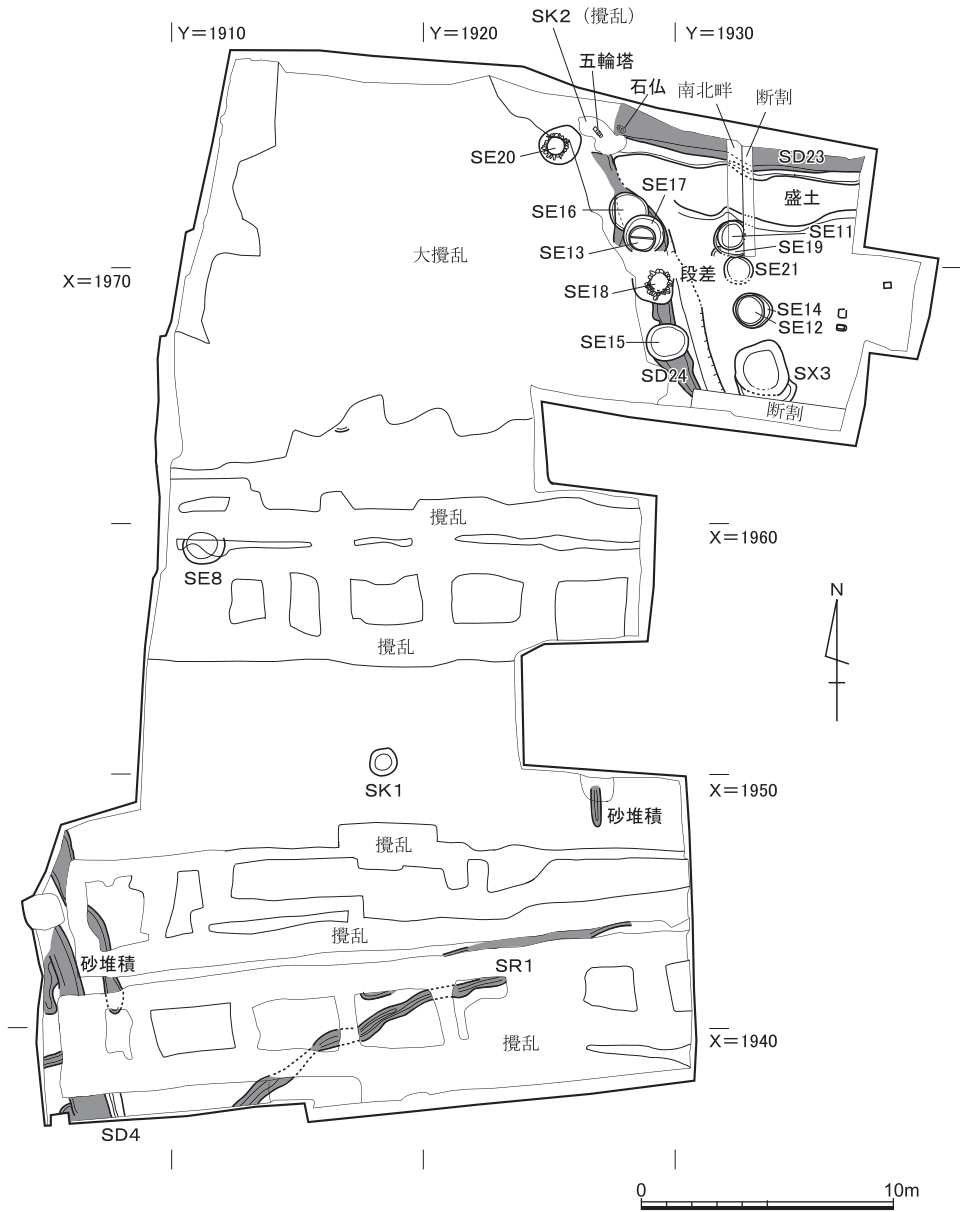


図10 近世1期の遺構 縮尺1/300

D23出土の五輪塔片と接合する。出土状況から考えて、これらは元来は盛土の上に立てられていたもので、ある時期に何らかの理由で流路に落ち込んだものようだ。

段差 Y=1930付近において、東から西へ落ちる褐色土の段差を検出した。段差の上下の高低差は20cmほどである。段差上と段差下で検出された遺構を順に説明する。

段差上の野壺群 段差の上では、野壺が段差に沿って南北に並んだ状態でみつかった。それらのうち、SE11とSE19が、そして、SE12とSE14が重なり合う。これらの中で、SE19とSE14が相対的に古い時期のもので、SE11とSE12はそれらを切る新しい時期のものである。SE19の埋土はわずかに淡い褐色を呈し、大きさは南北長120cm、深さ50cmであった。一方、SE11は褐色土を埋土とし、その南北長は90cmを、深さは25cmをはかる。SE11とSE19からは見込みに圈線をもつ土師器や磁器の破片がみつかり、近世の遺構であることがわかる。SE14の東西長は140cmで、SE12の東西長は110cmである。深さは50cmあった。SE14からは中世の遺物のみが出土した。一方で、SE12からは近世の陶磁器片がみつかり、遺物からも遺構の新古が確かめられる。SE21はSE11・SE19のSE12・SE14の間で検出された、東西長110cmの野壺である。近世の陶器が出土した。

不定形土坑S X 3 SE12・SE14の南で不定形の土坑を検出した。東西長は200cmで、深さは60cmある。見込みに圈線のある近世の土師器が出土した。

段差の下では、段差に沿って南北に走る溝SD24が検出された。また、その溝と重なるようにして、井戸や野壺がみつかった。遺構同士の切り合い関係を判定できなかったため、溝と井戸・野壺の間の時間的な前後関係はわからない。ただし、出土遺物を見ると、溝SD24に近世の遺物が多数含まれる一方で、野壺の中に中世に遡る可能性のあるものが含まれる。そのため、遺物の状況から野壺や井戸が溝に先行すると思われる。

南北溝SD24 段差下を南北に走る溝である。淡い褐色土を埋土とする。東西幅は一定せず、100cmから200cmある。深さは20cmほどである。近世の土師器が多量にみつかったほか、陶磁器片も出土した。

段差下の2基の井戸 段差下では2基の石組の井戸SE20とSE18がみつかった。いずれも掘方の直径は200cmほどで、井戸の石組みの直径は100cmほどである。SE18を用いてやや詳しく説明しよう(図11)。石組みには拳大から人頭大の石が用いられる。残りの良い部分では、石組みは110cmほどの深さまで残存する。石組みが途切れる地点から底面までの深さは60cmほどである。これらの井戸からは近世の土師器や陶磁器片が出土した。SE18からは17世紀後半頃のものと思われる陶器もみつかり、

段差下の野壺群 段差の下でみつかった野壺は4基ある。S E 16・S E 17・S E 13は切り合い関係にあり、この記載順に古い。S E 16の東西長は190cmほどで、深さは40cmほどである。S E 17は東西長190cmほどで、その中に東西長120cmほどのS E 13が掘り込まれる。深さは30cmほどである。S E 13の底には、東西方向に据えられた木質の痕跡があった。S E 15は東西長200cmほどで、深さは50cmほどである。S E 17からは中世の土師器片のみがみつかっており、遺物の出土しなかったS E 16と合わせて、その使用時期が中世に遡る可能性がある。S E 13からは近世の土師器や陶磁器が出土した。そこには、17・18世紀頃のものと思われる陶器が含まれる。S E 15からも近世の陶磁器が出土した。

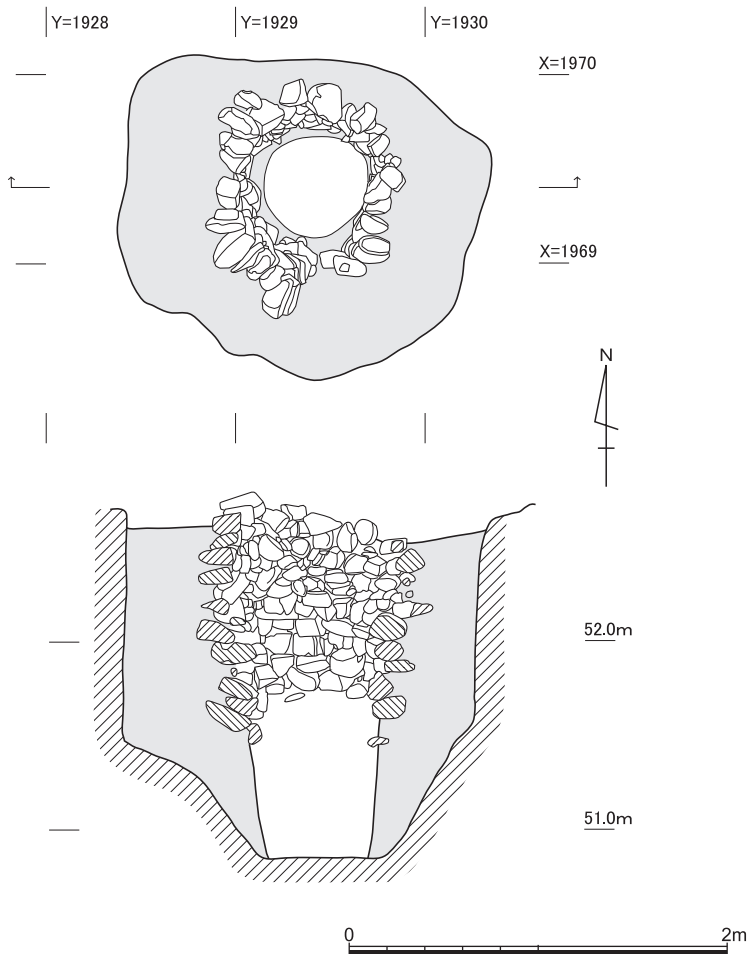


図11 井戸S E 18 縮尺1/40

南調査区北半の野壺 南調査区北半においては褐色土を埋土とする近世の遺構を2点検出した。いずれも円形土坑であり、野壺であったと考えられる。S E 8は東西長170cmほど、深さ50cmほどの土坑で、近世の土師器や瓦片が出土した。S K 1は東西長100cmほど、深さは25cmほどで、近世の土師器や磁器片がみつかった。

南調査区南半の砂堆積溝等 南調査区南半においては、褐色土包含層を掘り下げる過程で、砂が堆積する溝状の遺構を複数点検出した。小さな流路の痕跡と考えられる。それらのうち、S R 1から見込みに圈線をもつ近世の土師器片が出土した。検出された層位から考えて、褐色土を埋土とする遺構よりは新しく、後に詳しく述べる灰褐色土を埋土とする遺構よりは古い。また、調査区の西南隅では、砂堆積溝を切る南北溝S D 4が検出された。やはり、褐色土包含層を掘り下げる過程で検出されたもので、東西幅は40cm、深さは30cmである。見込みに圈線をもつ近世の土師器や瓦片が出土した。

(2) 近世2期および近代の遺構 (図版2, 図12)

褐色土包含層の上には、灰褐色土の包含層が堆積していた。出土遺物から考えて、19世紀頃から近代の20世紀第2四半期にかけての時期に堆積した土層である。褐色土層の上面で検出した灰褐色土を埋土とする遺構は、主に野壺・小溝・小穴であった。これらの遺構の存在は、褐色土の時代に引き続き、同地が畑地として利用されたことを示す。

段差と集石S X 1 北調査区東半では褐色土の段差と概ね同じ位置において、つまりY = 1930付近で、東から西に落ちる灰褐色土の段差を認めた。その段差の上面から斜面にかけては、石がまばらに据えられていた(S X 1)。石の一部は下位層の褐色土に食い込むが、大部分では集石の下位まで灰褐色土が続いていた。よって、この集石は灰褐色土の時期に構築されたものである。集石は90cmの幅で認められ、段差に沿って南北に延びる。北側では二股にわかれる状況がみられた。集石を掘削する際に近世の陶器片や伏見人形と思われる土製品の破片が出土した。伏見人形片が出土していることから、集石は18世紀半ばから幕末頃にかけての時期に構築されたものとなる。

小溝S D 21・S D 22 段差の上では2本の小溝を検出した。いずれも幅10cm~20cmで深さ5cmほどの溝である。S D 22は概ね段差の向きに沿い、S D 21は北へ走った後、直角に東に折れる。遺物は出土しなかった。

野壺S E 10 段差上において、流路S D 23の砂の堆積を切り、灰褐色土を埋土とする円形土坑を検出した。直径80cm、深さ15cmほどであり、野壺と考えられる。底部では、一部が盛土をも切る。この検出状況から、中世より使用され続けた流路S D 23および盛土が、

近世・近代の遺跡

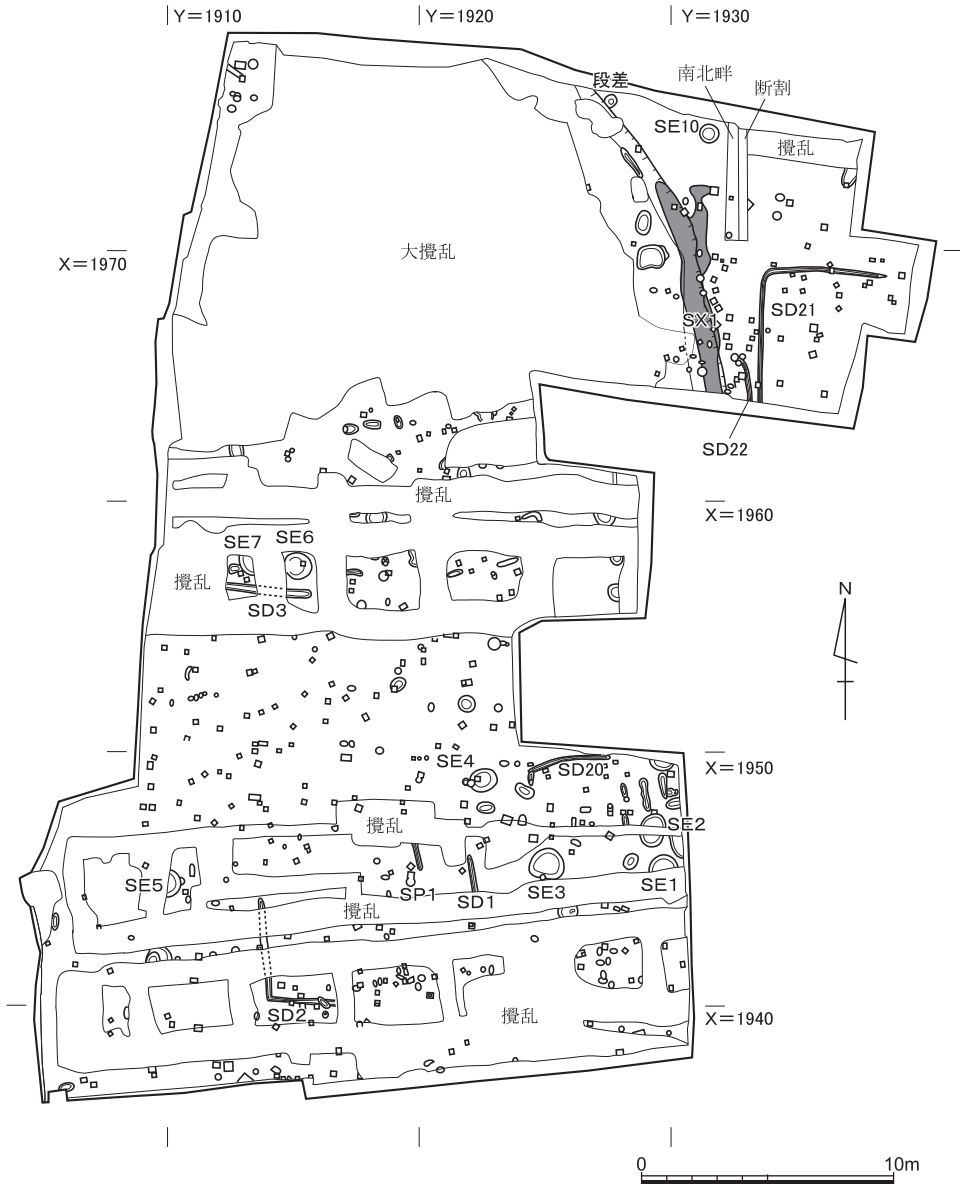


図12 近世2期・近代の遺構 縮尺1/300

灰褐色土の時期にはその役割を終えていたことがわかる。S E 10からは近世ないし近代のものと思われる磁器片が出土した。

南調査区においても、野壺や小溝を検出した。

S E 1～S E 7は灰褐色土を埋土とする円形土坑で、いずれも野壺と考えられる。出土遺物から、これらの野壺は幕末から近代にかけてのものと考えられる。

野壺 S E 1 南調査区南半東部で検出した円形の遺構である。北半のみが残る。東西長は125cmで、深さは10cmであった。近世の瓦片や、灯明皿を含む陶磁器が出土したほか、上位でガラス片が出土した。灯明皿は19世紀半ば頃のものと思われる。

野壺 S E 2 S E 1の北で検出した。攪乱により中央部を欠損する円形の土坑である。南北長は140cmで、深さは7cm。近世陶磁器の細片が出土した。

野壺 S E 3 S E 1・S E 2の西で検出した不定形の土坑である。東西長150cm、南北長120cm、深さは10cmほど。近世の陶磁器片が出土した。口縁端部が外反する磁器が出土したことから、幕末頃の遺構と考えられる。

野壺 S E 4 S E 3の北西で検出した円形の土坑である。東西100cm、南北90cmで、深さは15cmほどある。近世の陶磁器片や磁器のパレットが出土した。

野壺 S E 5 南調査区南半西部で検出した円形の土坑である。攪乱により西半を欠く。南北長は100cmで、深さは10cm。遺物はみつからなかった。

野壺 S E 6 南調査区北半で検出した円形土坑である。攪乱により西端を欠損する。東西110cm、南北105cm、深さ15cmである。近世の磁器や土師器が出土した。

野壺 S E 7 S E 6の西で検出した。攪乱で全容は明らかでないが、円形の土坑であったと想定される。残存するのは西南部のみである。東西60cm、南北80cmが残る。深さは10cmである。

小溝群 S D 1・S D 2・S D 3・S D 20などの溝を検出した。いずれも東西方向や南北方向に向かって走り、S D 2は東から西へ走った後に、直角に北へ向きを変える。幅は20～40cmで、深さは5cm程度である。遺物は出土しなかったが、上述の野壺群と同じ時期に使われたものと考えられる。

小穴群 調査区全体にわたって、小穴を多量に認めた。それらのうち、南調査区南半の中央部で検出したS P 1からは、「西京深草□□甚兵衛」の刻印をもつ軒棧瓦（I 267）が出土した。また、小穴群から出土した遺物の中には、蠟石製石筆やガラス製容器などが含まれる。明治期以降のものが含まれることがわかる。

(3) 近世・近代の遺物 (図版6～9, 図13～図38)

近世・近代の遺構から出土した遺物を以下に示す。まずは、褐色土を埋土とした遺構から出土した遺物を紹介する。

S D23出土遺物 (I 147～I 163) I 147～I 155は土師器である。I 147～I 154は皿で、そのうちI 147は小皿である。I 150・I 151は14世紀のE類の中皿で、I 152～I 154は見込みに圏線のある近世の中皿である。I 153・I 154の口縁部の内外面には煤が付着するため、これらが灯明皿として用いられたことがわかる。I 155は蓋物の身である。I 156は土製品で身が中空となり、急須の把手と思われる。表面は凹凸が激しく、3カ所に横方向の切り込みが、1カ所に縦方向の切り込みが入る。また、菊花の文様の刻印が3カ所で見られる。I 157・I 158は青磁である。I 158の見込みには花文様が描かれたらしい。I 159～I 161は陶器で、いずれも底部である。I 159は壺の底部と思われ、体部外面には白化粧土が塗られる。I 160・I 161は播鉢で、I 160には刻み目が認められないが、I 161には4本の線を一単位とする刻み目が間隔をおいて認められる。なお、I 161の焼成は非常に甘く、一見すると土師器のようである。16世紀末頃の信楽焼の播鉢と思われる〔京都市埋文研編2004 F1605-3-3〕。橙色を呈するI 160も信楽焼のものと思われる。I 162・I 163は磁器碗で、それぞれ口縁部と底部にあたる。いずれも外面に染付を施したらしいが、文様の詳細はわからない。I 162の外面口縁に沿って二本線が引かれる。17世紀の中国産や肥前系の磁器碗にみられる特徴である〔京都市埋文研編2004 C548B-1-37等；F1432-2-6等；B725-3-5等；F1455-2-18等；F1244-2-8等；F1387-2-24等〕。I 163の高台内では漢字が認められるが、内容はわからない。

S E11出土遺物 (I 164～I 170) I 164～I 169は土師器の中皿。I 164～I 166の見込みには圏線が認められ、おそらくI 167にも存在した。I 167・I 168の口縁部には煤が付着する。I 170は磁器染付の碗である。外面に葉が描かれる。

S E19出土遺物 (I 171～I 176) いずれも土師器皿である。I 171は小皿でほかは中皿。I 173～I 176は見込みに圏線をもつ。I 173・I 175には煤が付着し、とくに内面には全面に付着する。

S E12出土遺物 (I 177～I 179) I 177・I 178は土師器である。I 177は褐色の中皿で、I 178は白色の受け皿である。I 179は軟質施釉陶器の鉢の口縁部である。

S X 3出土遺物 (I 180～I 182) いずれも土師器である。I 180は白色の容器である。「つぼつぼ」と呼ばれる伏見産の玩具で、天正10年(1582)には存在したことが史料によ

京都市田中関田町遺跡の発掘調査

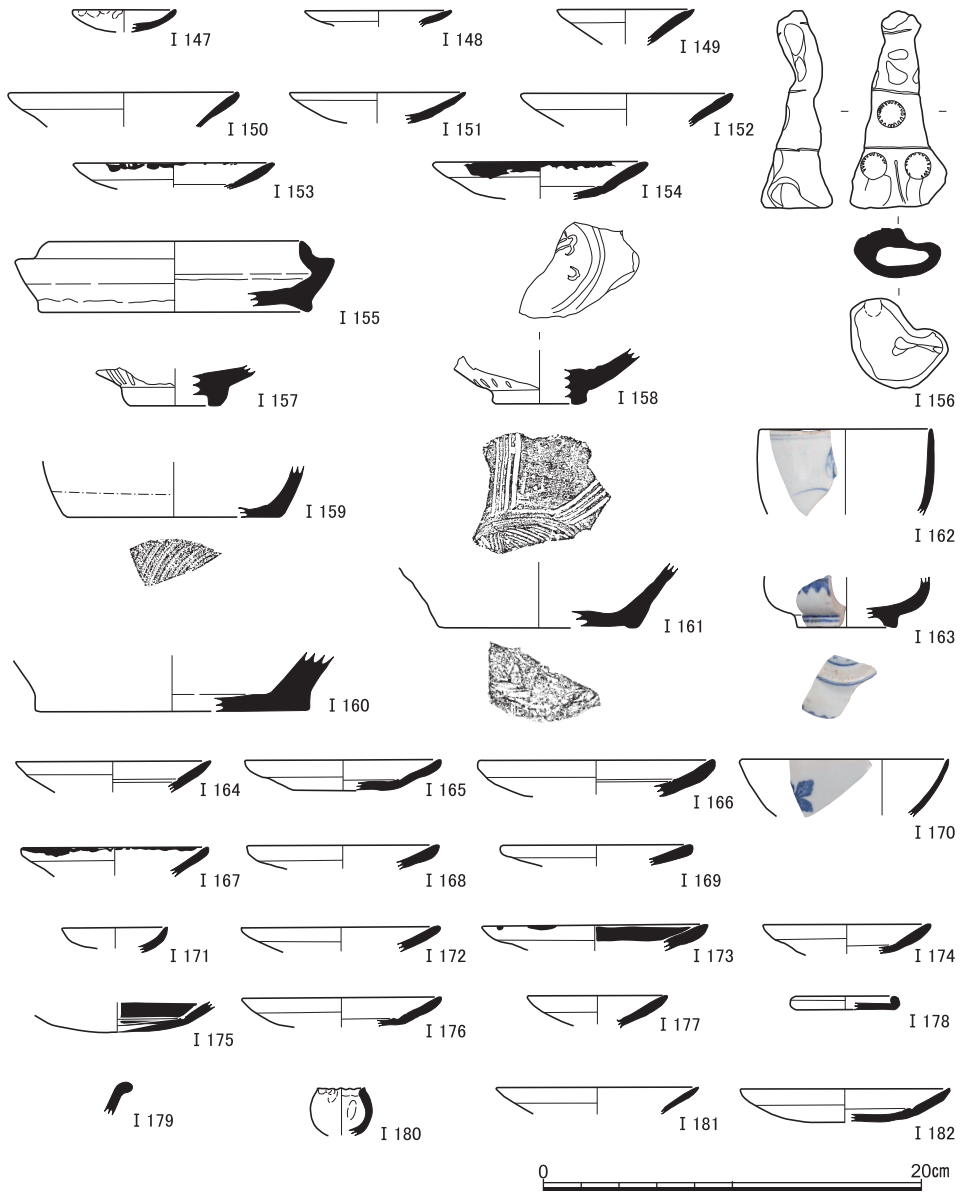


図13 S D23出土遺物 (I 147~ I 155土師器, I 156土製品, I 157・I 158青磁, I 159~ I 161陶器, I 162・I 163磁器), S E11出土遺物 (I 164~ I 169土師器, I 170磁器), S E19出土遺物 (I 171~ I 176土師器), S E12出土遺物 (I 177・I 178土師器, I 179軟質施釉陶器), S X 3出土遺物 (I 180~ I 182土師器)

り確かめられる〔東京大学史料編纂所1959, p.236〕。つぼつぼの出土は、18世紀第3四半期頃まで確認される〔京都市埋文研編2004 C548B-1-19; F1432-1-40~45; B725-1-69~84; F1455-1-21~26; F1244-1-41~44; F1387-1-52~55; H271-1-28; E45-1-29〕。I 181はF類の中皿で、I 182は見込みに圏線をもつ中皿である。

S D 24出土遺物 (I 183~ I 213) I 183~ I 204は土師器である。I 183は小皿で、ほかは中皿である。I 185~ I 197の見込みには圏線が走る。I 198~ I 202もおそらく見込みに圏線を持ち、I 203・I 204はもたない。口縁部に煤の付着するものが多数認められる。I 205・I 206は陶器。I 205は播鉢で、内面に間隙なく刻みが施される。I 206は色絵陶器の椀の底部である。I 207~ I 210は磁器染付である。I 207は筒状の容器、I 208は仏飯の脚、I 209・I 210は椀の底部である。I 211は瓦で、隅瓦と思われる。I 212は砥石で、I 213は石硯である。

S E 20出土遺物 (I 214~ I 217) I 214~ I 216は土師器皿。いずれも見込みに圏線をもつものと思われる。口縁部には煤が付着する。I 217は陶器小椀の底部である。

S E 13出土遺物 (I 218~ I 228) I 218~ I 224は土師器である。I 218~ I 222は中皿で、I 223・I 224は小皿である。I 218はE類、I 219はF類で、I 220・I 221は見込みに圏線をもつ。I 225・I 226は陶器である。I 225は播鉢で、内面には8本線を一単位とする刻みが隙間なく入れられる。17世紀半ばから後半頃の信楽焼と思われる〔京都市埋文研編2004 F1432-3-1; F1244-3-24〕。I 226は椀で、内外面に灰白色の釉がかけられる。外面には上絵の植物文がわずかに確認される。また、内面の見込みには目痕が残る。18世紀全体でみられる椀で、半ばから後葉にかけて多くみられる〔京都市埋文研編2004 B776-2-5; H166-2-26; H271-3-7~14; E45-5-21~30〕。I 227は青磁の椀で、外面に花卉文が浮かび上がる。I 228は磁器染付の椀である。

S E 18出土遺物 (I 229~ I 241) I 229~ I 234は土師器の中皿。I 229・I 230の見込みには圏線がある。I 235・I 236は灰釉系陶器椀の底部である。I 237~ I 239は陶器である。I 237は大型の壺の底部と思われる。17世紀後半のものであろうか〔京都市埋文研編2004 B725-7-14〕。I 238は甕の口縁部、I 239は鉢の口縁部である。I 240は磁器染付で、中空となる。急須の把手であろう。I 241は中世の丸瓦の玉縁部である。

S E 15出土遺物 (I 242・I 243) I 242は軟質施釉陶器の皿であるが、釉の痕跡が残るのは口縁部内面のみである。I 243は磁器染付の椀の口縁部である。

S E 8 出土遺物 (I 244) I 244は土師器の受け皿である。

京都市田中関田町遺跡の発掘調査

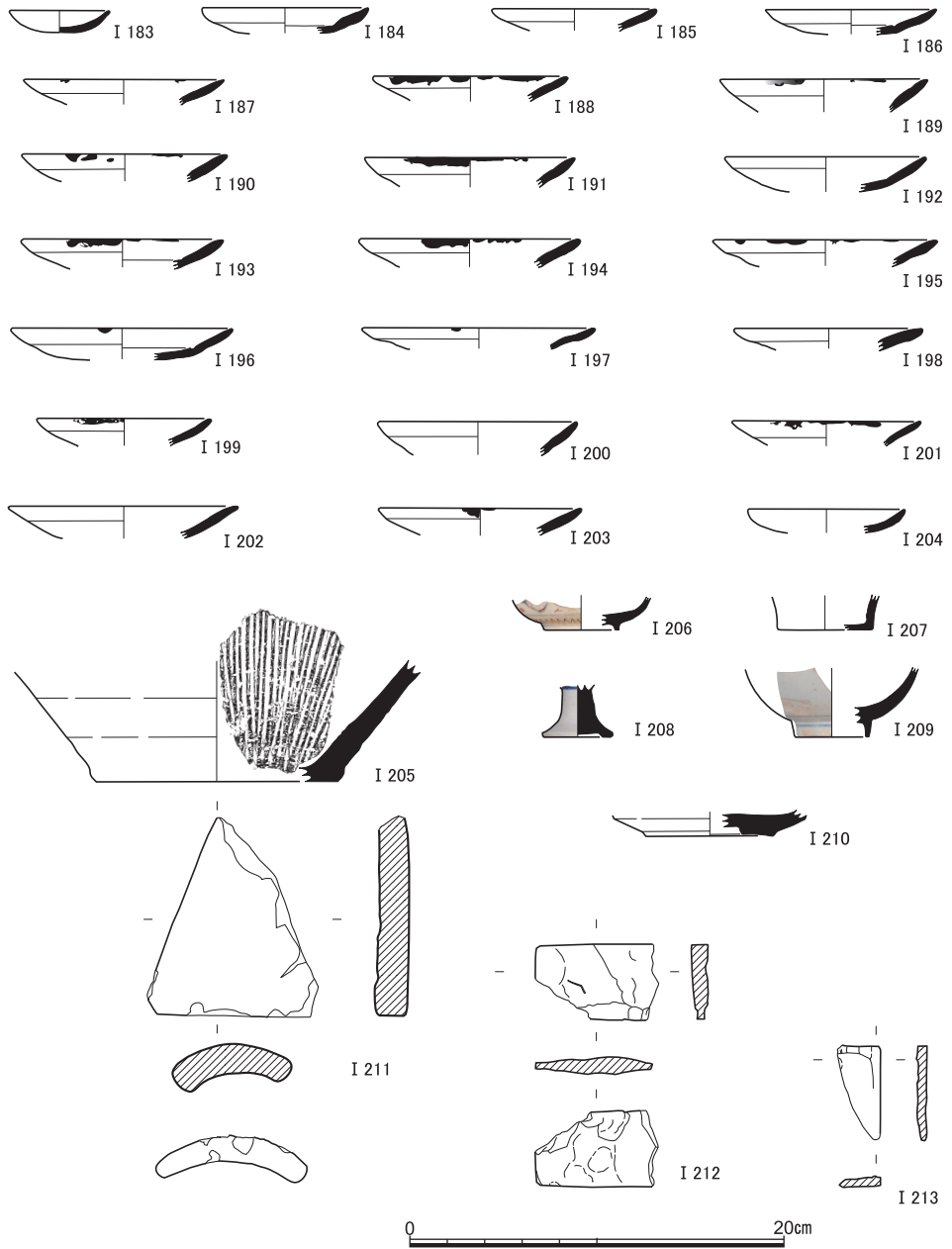


図14 S D24出土遺物 (I 183～I 204土師器, I 205・I 206陶器, I 207～I 210磁器, I 211瓦, I 212砥石, I 213石硯)

近世・近代の遺跡

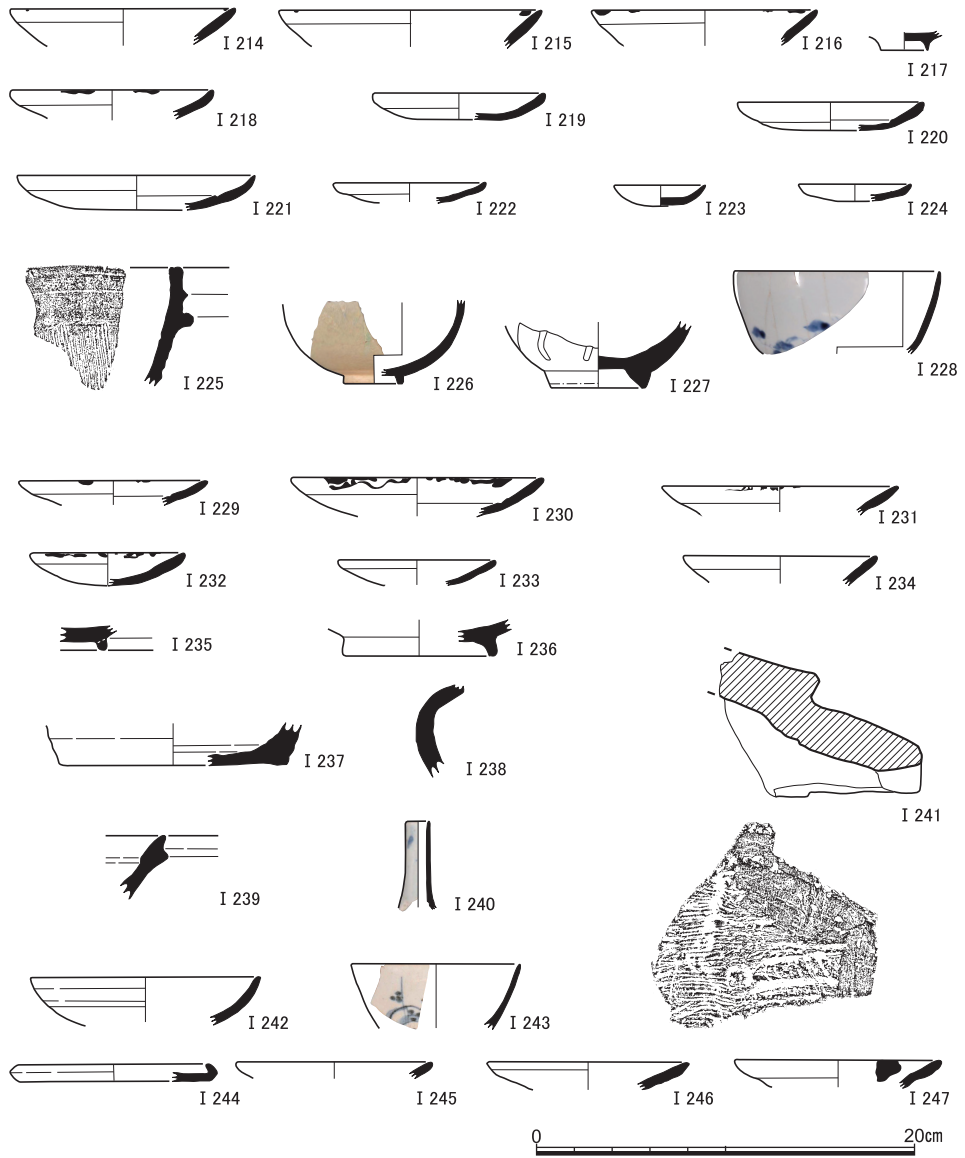


図15 S E 20出土遺物 (I 214~I 216土師器, I 217陶器), S E 13出土遺物 (I 218~I 224土師器, I 225・I 226陶器, I 227青磁, I 228磁器), S E 18出土遺物 (I 229~I 234土師器, I 235・I 236灰釉系陶器, I 237~I 239陶器, I 240磁器, I 241瓦), S E 15出土遺物 (I 242軟質施釉陶器, I 243磁器), S E 8出土遺物 (I 244土師器), S K 1出土遺物 (I 245・I 246土師器), S D 4出土遺物 (I 247土師器)

SK 1 出土遺物 (I 245・I 246) I 245・I 246は土師器の中皿である。

SD 4 出土遺物 (I 247) I 247は土師器中皿で、見込みに圏線があったと思われる。

石仏・五輪塔 (I 248～I 250) 中世から近世1期にかけて使われた盛土の上に据えられていたと推測される花崗岩製の石仏および五輪塔をここでまとめて報告する。I 248の石仏は流路SD23の底に近い深さでみつかった。また、I 249の五輪塔の上部はSD23の掘削中に、比較的浅い深さで盛土に貼り付いた状態でみつかった。一方、I 249の下部とI 250の五輪塔は、石仏発見地点の西隣にあった攪乱SK 2から出土した。

石仏は激しく摩滅しており、その細部文様などについてはわからないが、坐仏であり、

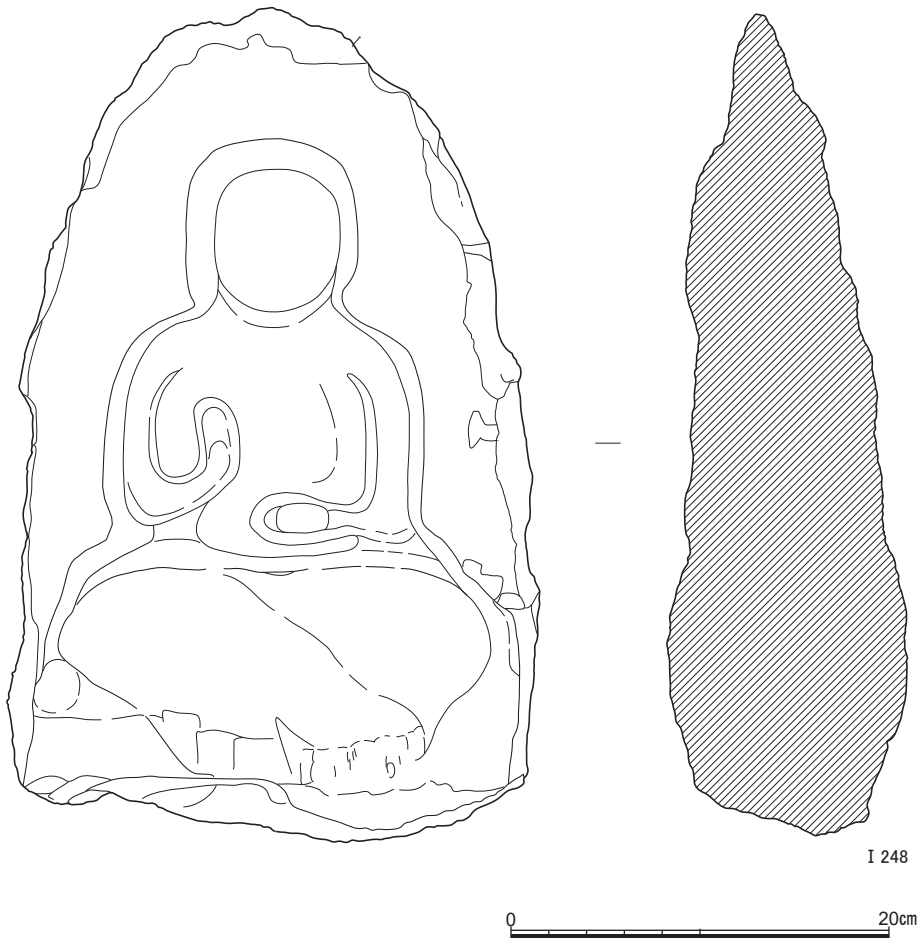


図16 石仏 (I 248)

右手を胸の前に挙げ、左手を膝の上に置く、いわゆる「施無畏印」の印相をとった姿で表される。裏面は粗彫りされ、文字などは刻まれない。一方、五輪塔 I 249と I 250の表面にはいずれも刻文が認められる。I 249の刻文は読解不可能なまでに摩滅してしまっているが、I 250のものはわずかに「妙西禅尼」「文明四〇（〔五カ〕）月廿八」の単語を残す。文明4年は西暦1472年にあたる。

続いて、灰褐色土を埋土とする遺構から出土した遺物を示す。

SE1出土遺物（I 251～I 256） I 251～I 254は陶器である。I 251は灯明皿で、内面のみ釉がかけられる。内面見込みに返りをもつ灯明皿は18世紀後半には現れるが、これは19世紀半ばのものに近い〔京都市埋文研編2004 H15-11・12〕。I 252は小椀で、外面に文字が認められるが内容は不明である。I 253は土瓶で、内面に緑色の釉がかけられる。

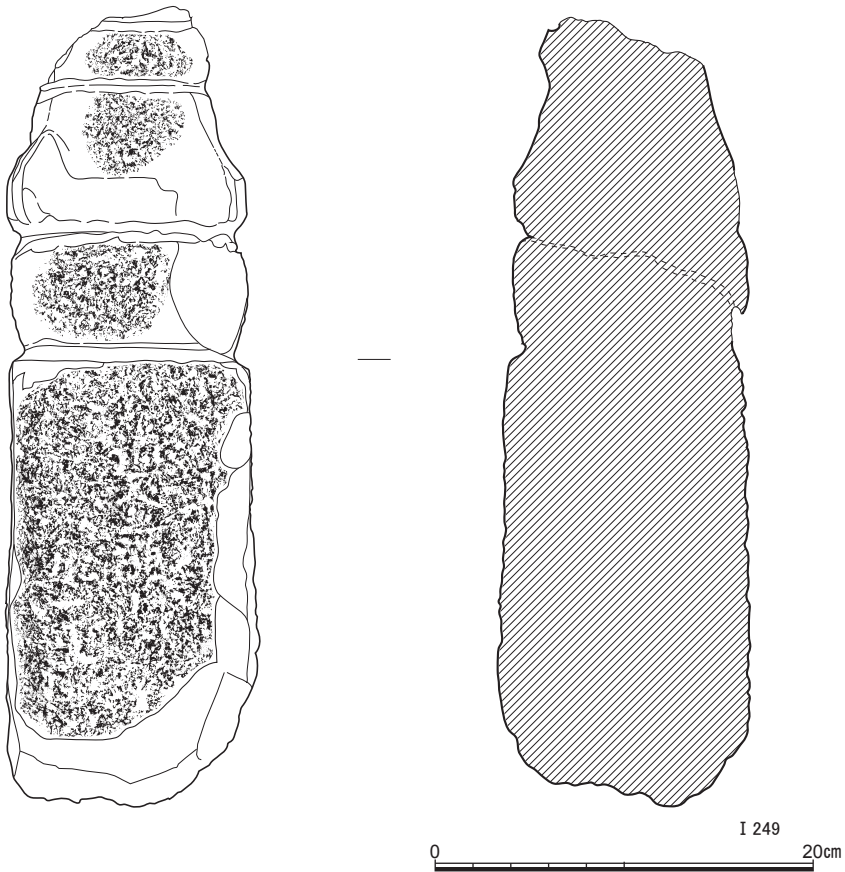


図17 五輪塔(1) (I 249)

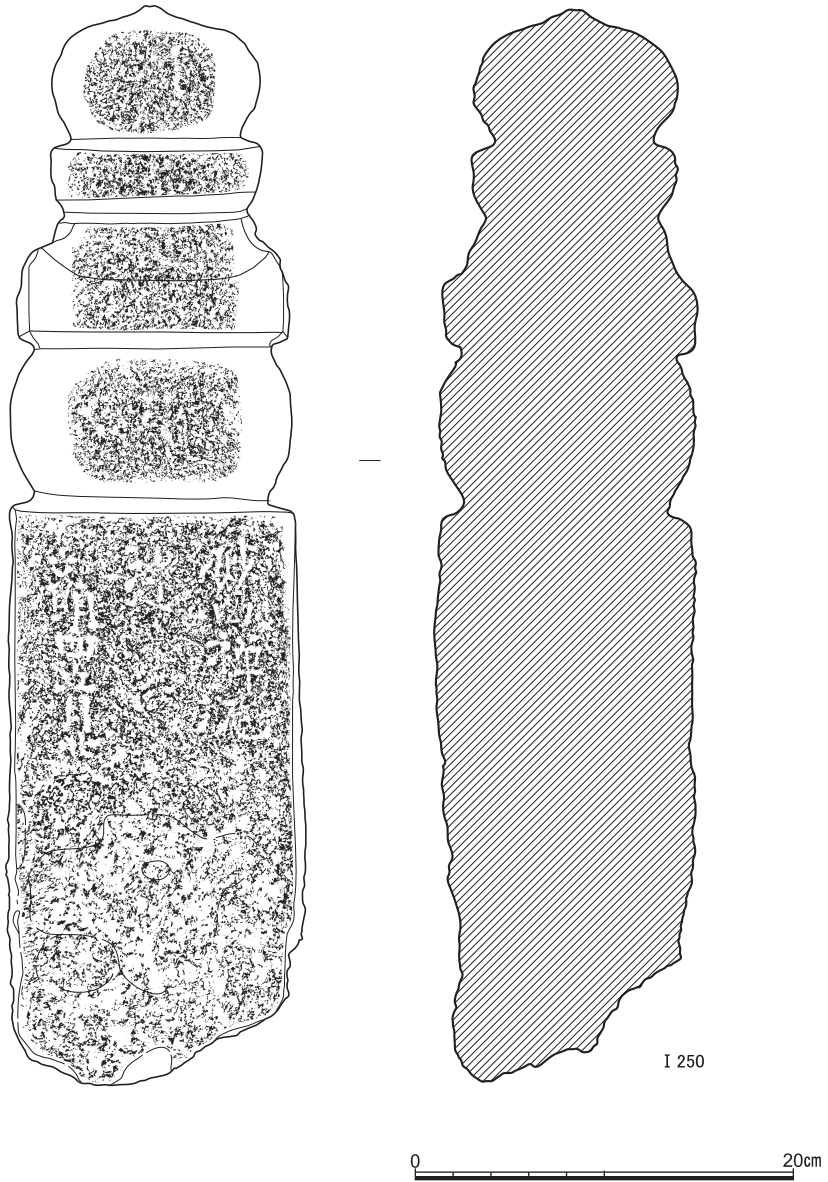


図18 五輪塔(2) (I 250)

I 254は長胴の容器で、花瓶の底部であったと推定される。I 255・I 256は磁器である。I 255は染付椀で、I 256は無文の皿である。

SE 3 出土遺物 (I 257) I 257は磁器染付の皿の高台部である。見込みに「寿」の文字が認められる。

SE 4 出土遺物 (I 258～I 266) I 258～I 260は陶器である。I 258は用途不明だが、下面と思われる面に墨書がみられる。I 259は蓋、I 260は椀である。I 260の内外面には黒色線と赤色線を交互に配置する縞模様が書かれるが、黒色線が透明釉の下に書かれた一方で、赤色線は釉の上に書かれた。I 261～I 266は磁器である。I 261は染付の小椀で、I 262はパレットである。底面に3文字の刻印が残る。明確に文字を読み取ることはできないが、後述のI 361を参考にすると、「煥生堂」と書かれていたことがわかる。I 263は猪口である。I 264は土瓶で、外面に「・・・渉風波・・・扁舟・・・」などの文字が染付される。I 265は小椀で、内外面に草木が描かれる。I 266は皿で、内面には馬首を象った玩具で遊ぶ子供が描かれる。

SP 1 出土遺物 (I 267) I 267は軒棧瓦である。瓦当には唐草文が描かれる。下面には横方向の刷毛目が認められる。また、刻印が認められ、「西京深草□□甚兵衛」の文字が書かれる(図38・図版8も参照)。深草は西京にはないため「西京深草」とする表現が不可解ではあるものの、後に述べるように、表土・攪乱から出土した棧瓦の中に「京都深草瓦師／寺本甚兵衛」の名前が現れることから(I 498～I 502)、I 267もまた同一の瓦工集団による製作であると考えられる。

SE 10 出土遺物 (I 268) I 268は磁器小皿で、内外面に緑色で植物文が描かれる。

灰褐色土小穴(北調査区) 出土遺物 (I 269～I 275) I 269～I 271は土師器の皿である。I 271は見込みに圏線をもち、口縁部に煤が付着する。I 272・I 273は陶器。I 272は灯明皿として使われたと考えられる小皿で、内面から外面口縁部にかけて釉がかけられる。I 273は大鉢で、内面に白色の化粧土が付けられる。I 274は磁器染付の小皿で、内面に菊花と思われる文様が描かれる。I 275は蠟石製の石筆と考えられる。筆記具として明治期以降に使われたものである〔須藤2008, p.39〕。

灰褐色土(北調査区) 出土遺物 (I 276～I 300) I 276は土師器の中皿で、見込みに圏線がはしる。I 277は板状の土製品で、用途は不明である。側面に切り込みが入れられるため、元来は箱状の遺物であったと考えられる。外面に刻印が認められ、「イ印」「共□□□造証(?)」「名産」などと書かれる。I 278・I 279は伏見人形。伏見人形は18世紀

京都市田中関田町遺跡の発掘調査



図19 SE 1 出土遺物 (I 251~I 254陶器, I 255・I 256磁器), SE 3 出土遺物 (I 257陶器), SE 4 出土遺物 (I 258~I 260陶器, I 261~I 266磁器), SP 1 出土遺物 (I 267瓦), SE 10 出土遺物 (I 268磁器)

近世・近代の遺跡

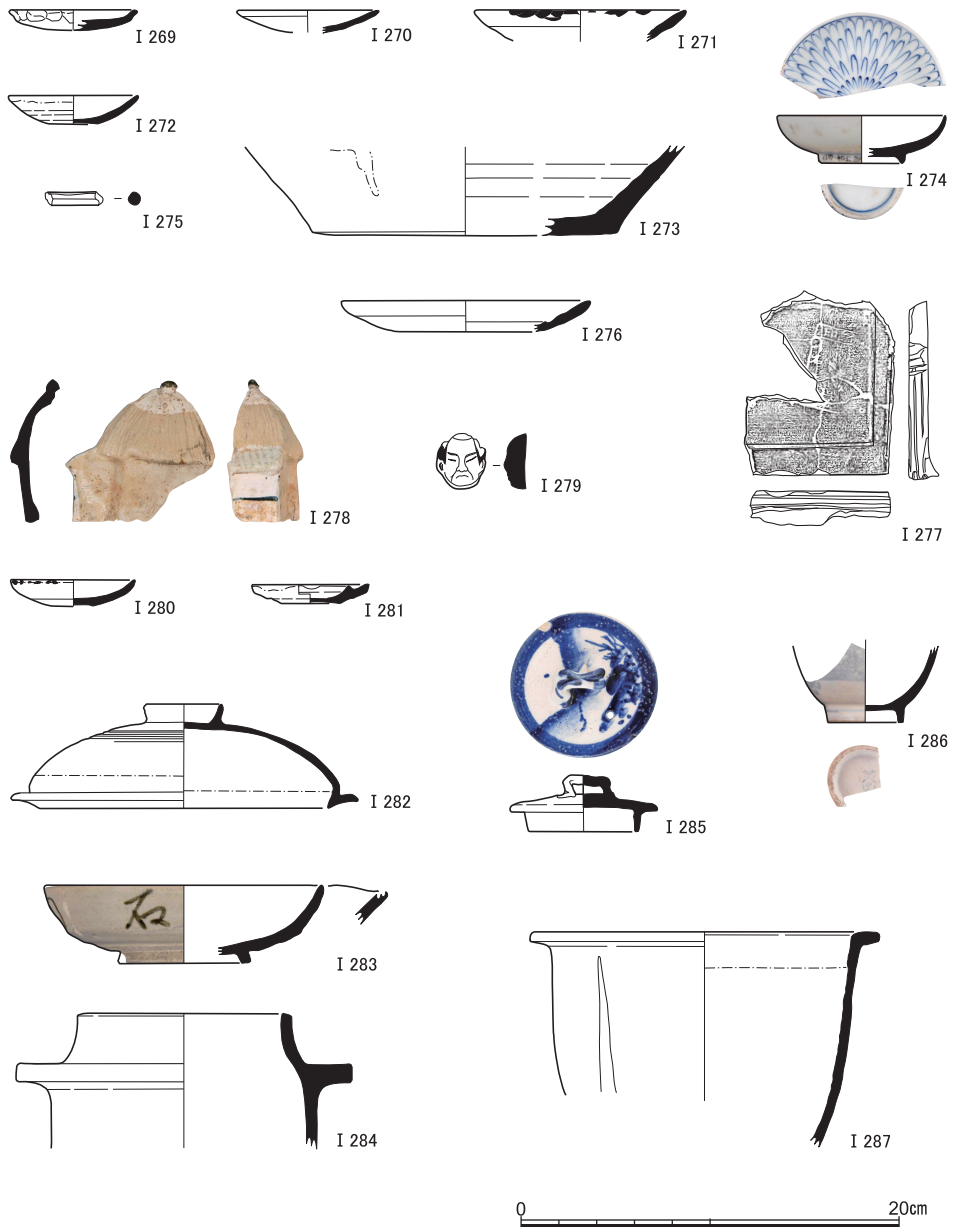


図20 灰褐色土小穴（北調査区）出土遺物（I 269～I 271土師器，I 272・I 273陶器，I 274磁器，I 275石製品），灰褐色土出土遺物（北調査区）(1)（I 276土師器，I 277土製品，I 278・I 279土製品，I 280～I 287陶器）

半ば以降、幕末にかけて認められる〔京都市埋文研編2004 H166-1-37等；B687-2-19～24〕。I 278は家屋を象ったもので、白色の化粧土により色付けがなされる。I 279は男性の顔を象った泥面子で、髪や眼の線が黒色に塗られる。

I 280～I 287は陶器。I 280・I 281は灯明皿である。I 280の外面には煤が付着し、I 281の内面には返しがつく。I 281の灯明皿は19世紀半ば頃のものと考えられる〔京都市埋文研編2004 H15-11・12〕。I 282は鍋の蓋。内外面には緑色の釉がかけられる。I 283は小鉢で、一方に注口がある。外面胴部には文字が認められ、「石罎」と書かれる。I 284は羽釜である。I 285は土瓶ないし急須の蓋で、上面に風景が描かれる。I 286は椀で、外面に施文される。高台内には、「茨□」の文字が認められる。I 287は小型の甕である。外面から内面の口縁部まで白色の化粧土が塗られる。

I 288～I 297は磁器。I 288～I 290は蓋物の蓋である。I 288とI 290は磁器染付で、I 289は赤絵磁器である。I 290のつまみ内部には「信精□製」の文字が書かれる。I 291は湯飲みで、金色で丸に右重ね違い鷹の羽の文様が書かれる。この家紋を使う一族としては福山藩の阿部家が有名であるが、かわりはあるだろうか。I 292・I 293は椀である。I 292の外面には印版による染付が認められる。I 294・I 295は皿。I 294内面には草花が描かれる。I 295の内面には、中央よりややずれた場所に雷文風の文様が陰刻される。類例が19世紀半ばの遺物に認められる〔京都市埋文研編2004 H15-3-20・21〕。I 296は赤絵の合子の身である。I 297は染付の大皿である。内外面に印版による文様が認められ、高台内部には一字の印（木偏に廣）が捺される。

I 298・I 299は石製品である。I 298は白色の蠟石の石筆で、明治期以降のものである。I 299は小型の硯で、底面には何か文字が刻まれる。

I 300は骨製品で、歯ブラシの柄部と思われる。筆記体でアルファベットが刻まれ、「Brranted Secur」と書いてあるように見えるが定かではない。なお、骨製の歯ブラシの柄は同志社大学の寒梅館地点の発掘調査でもみつかっており、明治半ばから昭和初期にかけて同地点に存在した寮にかかわるものとされる〔藪田2013, p.61〕。後述の表土・攪乱から出土した骨製歯ブラシと合わせて注目される（I 478）。

灰褐色土小穴（南調査区）出土遺物（I 301～I 304） I 301は陶器で湯飲みと考えられる。底面に刻印があり、「□光」と読める。I 302・I 303は磁器。I 302は合子の蓋で、I 303は蓋物の蓋である。I 303の上面には文字が書かれ、「福縁寿福」と読める。I 304はガラス製の小瓶で、新橋色を呈する。

近世・近代の遺跡



図21 灰褐色土（北調査区）出土遺物(2)（I 288～I 297磁器，I 298・I 299石製品，I 300骨製品）

灰褐色土（南調査区）出土遺物（I 305～I 377） I 305は土師器皿で、見込みに圏線をもつ。I 306～I 312は土製品。I 306はミニチュア容器の蓋で、I 307は牛頭を象った伏见人形である。I 308～I 311は泥面子で、I 308は兜を被る侍の頭部、I 309は顔面以外を布で覆う忍者と思われる人物の頭部、I 310は男性の頭部、I 311は猿の頭部をあらわす。I 312は碁石のような形をした土製品である。I 313・I 314は軟質施釉陶器。I 313は小皿で、I 314はミニチュアの蓋である。I 315は蓮華文の瓦当で、やや時代をさかのぼり、中世の遺物と思われる。

I 316～I 327は陶器である。I 316～I 319は蓋。I 318は土瓶の蓋で、白化粧に鉄絵を施す。つまみから縁に向かって波線が描かれるが、類似の意匠が19世紀前半から半ばにかけての遺物にみられる〔京都市埋文研編2004 G348-3-12, H15-4-26〕。I 319は土鍋の蓋で、曲線がイッチン描きされる。イッチン描きで施文された陶器蓋は、19世紀前半の遺物に認められる〔京都市埋文研編2004 G348-3-10～13〕。I 320は小皿と思われる。底面に「帯山」の刻印が認められる。I 321は器種不明だが、やはり底面に楕円囲いに「大□」の刻印が認められる。I 322は植木鉢の底部であり、底部の中央に穴が開けられる。I 323・I 324は灯明皿である。19世紀半ば頃のものと考えられる。I 325・I 326は合子の身と思われる。I 327は小椀である。

I 328～I 334は石製品。I 328は白色の玉石で、I 329は白色の碁石である。I 330～I 333は蠟石の石筆で、明治期以降のものである。I 334は滑石製品。一面に研ぎ目が残されるため、砥石と思われる。I 335は金属製のキセルの吸い口である。

I 336～I 363は磁器。I 336は小型壺の蓋で、I 337は合子の蓋である。I 338・I 339は皿で、I 338の平面形は八角形である。I 339の内面には文字が染め付けられ、「生」が認められる。I 340～I 344は染付の椀。それぞれの椀の外面には、花と蔦草（I 340・I 344）、鶴の群れ（I 341）、花卉文（I 342・I 343）が描かれる。I 342の高台内には印が捺される。I 345は湯飲みである。外面には植物文が、高台外面には雷文が、内面底には龍が印版で表される。高台内面に、「玉」・「柏」が読めるが残りの字は不明である。I 346～I 349は皿である。I 346・I 347は小皿で、見込みに「府立醫大」と書かれ、注目される。明治5年（1872）に開設された療病院を前身とする医療系の学校が、名称を変えながら京都府立医科大学を名乗ったのは大正10年（1921）10月のことであった〔京都府立医科大学1955, p.314〕。I 348・I 349は中皿である。全面に緑色の釉がかけられ、草花や野菜が陽刻される。花卉のみ白色と濃緑で着色される。I 348の高台内部には、丸囲いに「宮竹」

近世・近代の遺跡

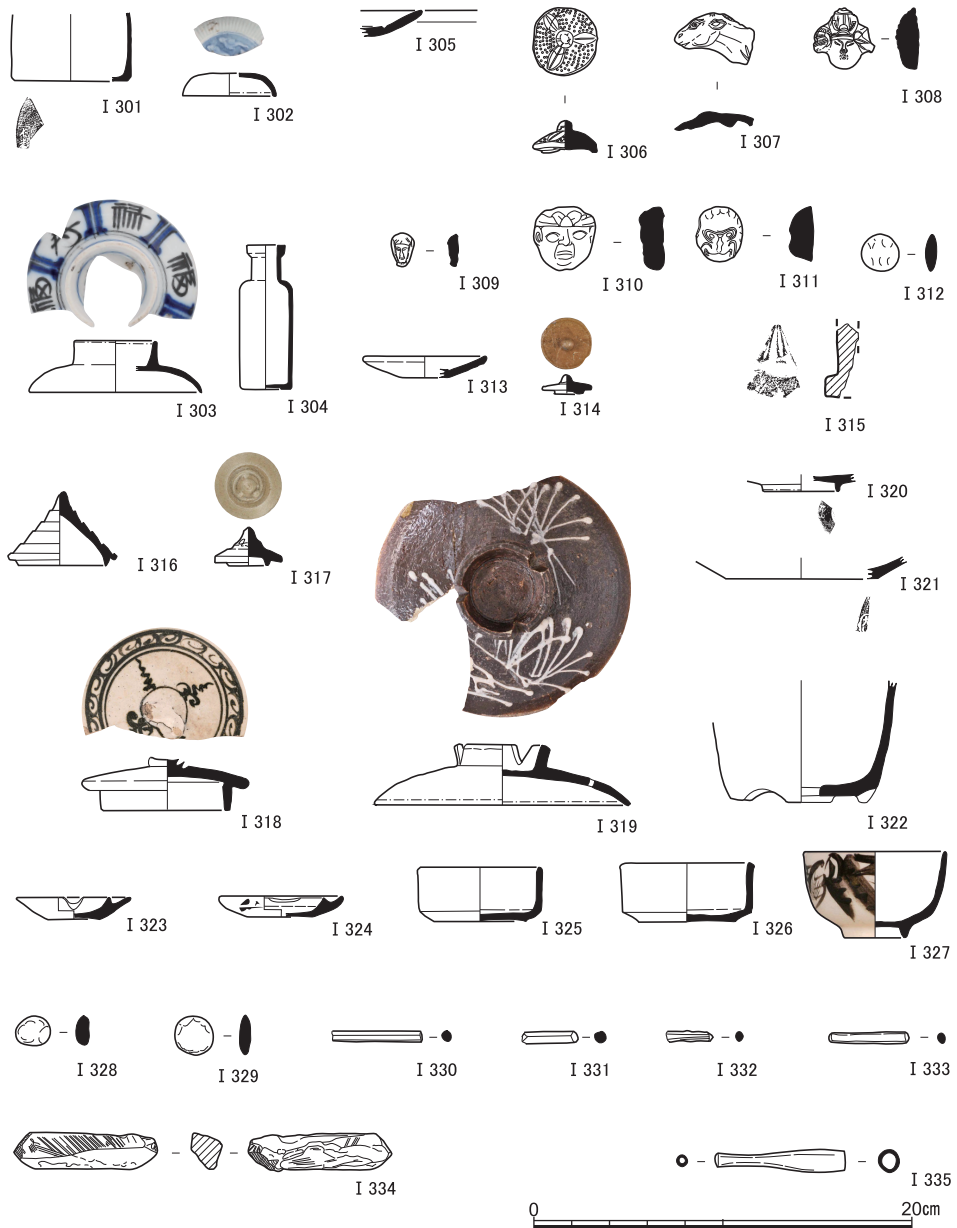


図22 灰褐色土小穴（南調査区）出土遺物（I 301陶器，I 302・I 303磁器，I 304ガラス製品）、灰褐色土（南調査区）出土遺物(1)（I 305土師器，I 306～I 312土製品，I 313・I 314軟質施釉陶器，I 315瓦，I 316～I 327陶器，I 328～I 334石製品，I 335金属製品）

の刻印が、I 349には不定形の囲いに「宮竹製」の刻印が認められる。I 350は蓋物の身と蓋のセットである。身には把手がつく。I 351～I 357は猪口。I 351は内外面に編み目の文様が描かれ、高台内には「情山」が陰刻される。I 352の見込みには「運送」と書かれる。I 353の高台内には「秀山」と書かれる。I 354の外面には柳の絵とともに崩し字で文章が書かれるが、内容は不明である。高台内には「進八」と書かれる。I 355の内外面には草花が描かれる。I 356の見込みには「錦」が赤色で書かれる。I 357の外面には「室萱」と書かれる。I 358～I 362は化粧用のパレットと考えられる。I 358は貝殻を模したもの。19世紀半ばの類例が知られる〔京都市埋文研編2004 H15-2-25・26〕。I 360・I 361の裏面には刻印がある。I 360のものは3字認められるが、2字目の「文」以外は読解できない。I 361のものは「煥生堂」と読める。I 363は童子の頭部である。頭髮が黒く、また、口が赤く塗られていた痕跡が認められる。

I 364～I 377はガラス製品。I 364～I 374は無色透明のガラスである。I 364・I 365は平面楕円形の容器で、表面に目盛りとともに「京都府立醫大附属醫院」が浮き出る。医学専門学校の附属となっていた療病院の名称が京都府立医科大学附属医院の名に改められたのは、大正13年（1924）10月のことであった〔京都府立医科大学1955, p.341〕。また、附属医院の名前は昭和26年（1951）3月に附属医院に改められた〔京都府立医科大学1955, p.405〕。よって、これらのガラス製品は、20世紀の第2四半期に属する。I 366は平面円形の容器で、外面には目盛りのみが付く。I 367は平面隅丸方形の容器で、胴部外面の1面に椰子の木などが表現される。I 368・I 369・I 372・I 373は小型の平面円形の容器である。I 368の底面には「15」の数字が、I 369の外面には「本村商會」「エス／ヨチユム丁」が認められる。I 370は注射器で、I 371は試験管である。いずれにも目盛りがつく。I 374は平面がラグビーボール形の容器で、蓋が附着する。底面には「AJINOMOTO」と書かれる。容器内には粉末が残る。I 375・I 376は白色のガラス容器である。I 375の底部の文字は「カ」「ガ」「シ」と読めるが、どこから読むのかはわからない。I 376には「丸善」と書かれる。I 377は新橋色のガラス容器である。

表土・攪乱出土遺物（I 378～I 506） 北調査区の西半においては大きな攪乱が認められた（図12中の大攪乱）。この大攪乱は本来存在したであろう灰褐色土や褐色土の包含層を破壊したもので、その中には近代以降の同地の利用にかかわると想定される遺物が多数含まれる。そこでここでは、表土・攪乱から出土した遺物を報告する。ここに掲載する遺物のほとんどが北調査区の大攪乱から出土したものであるが、それ以外の地点から出土

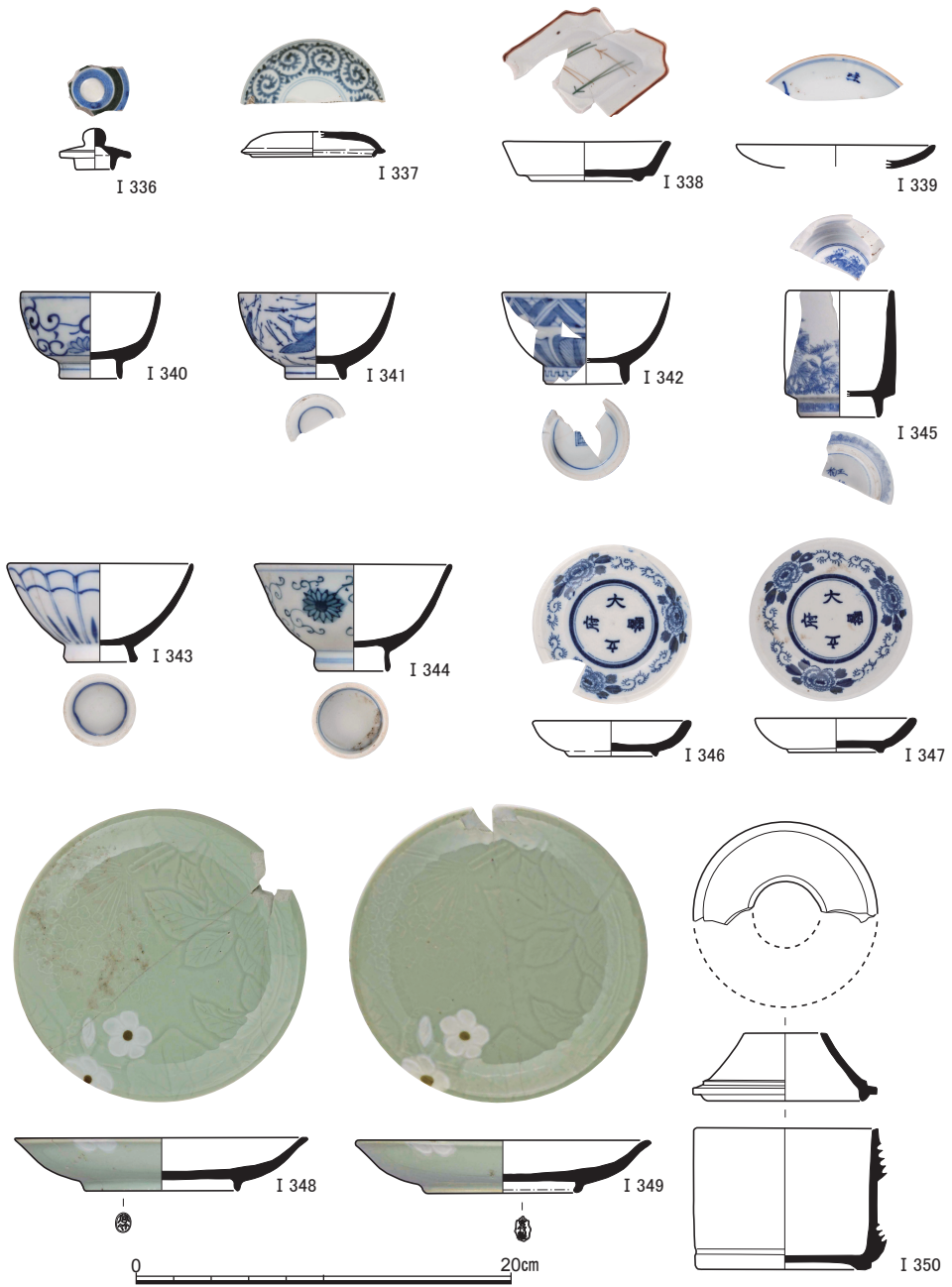


図23 灰褐色土（南調査区）出土遺物(2)（I 336～I 350磁器）

京都市田中関田町遺跡の発掘調査

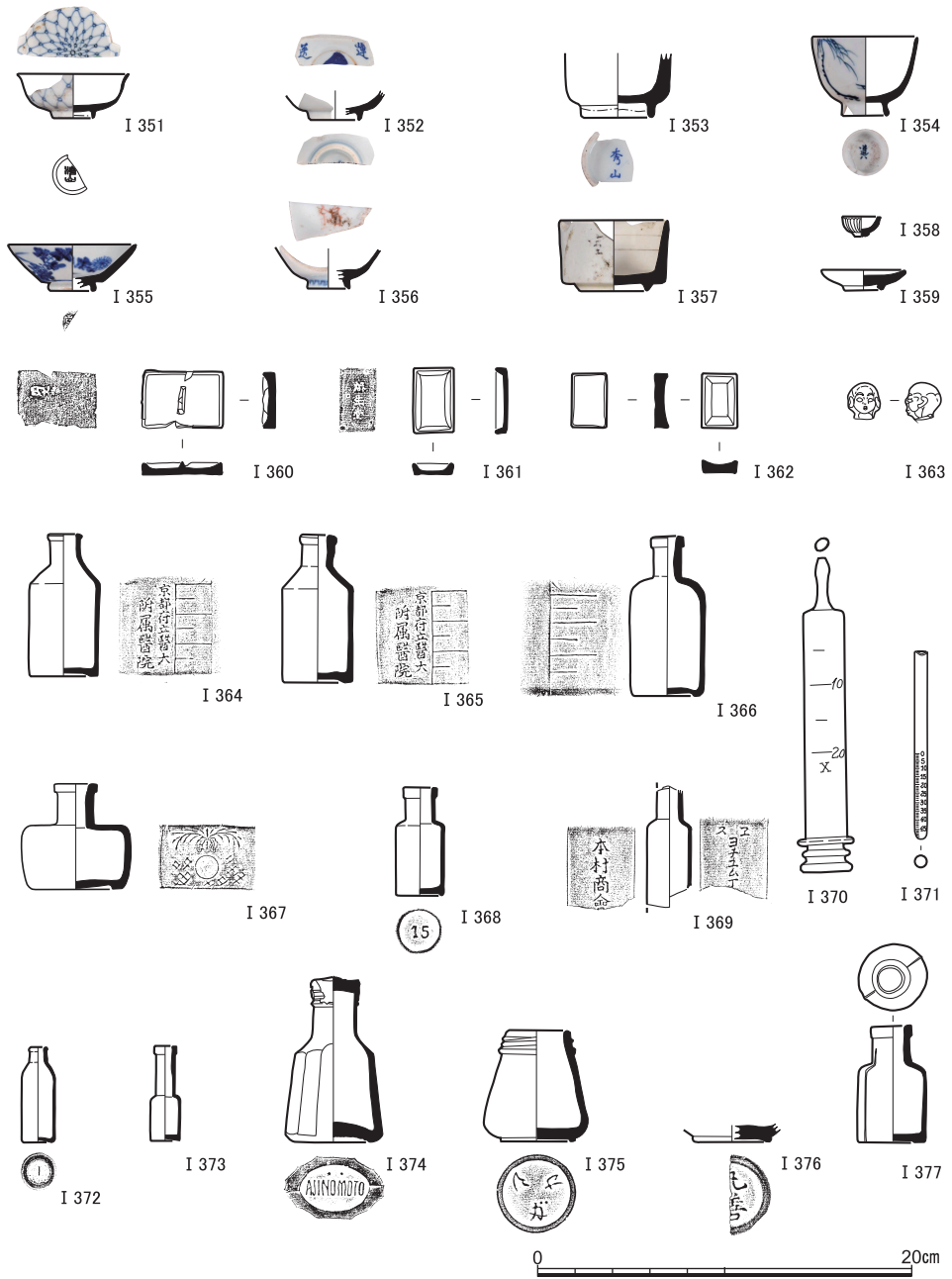


図24 灰褐色土（南調査区）出土遺物(3)（I 351～I 363磁器，I 364～I 377ガラス製品）

した遺物もある。南調査区出土の I 378・I 379・I 381・I 394・I 419・I 460・I 462・I 471・I 474・I 479・I 480・I 482～I 484・I 488・I 489・I 492・I 494・I 495・I 502・I 505, 北調査区東半から出土した I 450・I 496, 表採の I 470である。

I 378～I 381・I 383～I 419・I 423～I 426・I 439～I 441は陶器で, I 382は土製品, I 420～I 422・I 427～I 438・I 442～I 470は磁器である。I 378は一輪挿しで, 底部に「善星皆来／悪星退散」と墨書きされる。I 379は破片であるが, 一方の面には白色の釉がかり, もう一方の面には釉はかからず「清風荘」と墨書きされる。破片は墨書がある側にわずかに屈曲しており, わずかに反った底部をもつ皿であったと考えられる。「清風荘」以外にも墨書があったようだが, 判読できない。清風荘は住友友純が明治40年(1907)に徳大寺家より同地にあった清風館を譲り受け, 実兄の西園寺公望の別邸にあてたものである。作庭は明治44年(1911)になされ, 昭和15年(1940)の公望の死後, 昭和19年(1944)になって住友家から京都帝国大学へ寄贈された〔尼崎2012, pp.138-9〕。大学へ寄贈されて後も清風荘は存在しつづけたことから断定はできないものの, 今回の調査地点は昭和34年(1959)5月より女子寮として使われたことから, 墨書の陶器は寄贈前の20世紀前半のおおよそ30年間のものと考えられる。I 380は小鉢の底部で, 内面にのみ黄色の釉がかけられる。底面で墨書を認めるが, 文字は判読できない。I 381は土瓶ないし急須の蓋で, 文字が線刻される。I 382は五徳で, 「松本」の刻印がある。熊野構内の調査でも出土しており, 寛政期(1789～1801年)の深草の陶工松本五三郎のものである〔富井・内記2019 I 1008〕。I 383は植木鉢の口縁部片で, 口縁外面に丸囲いに「朝日□」の刻印がある。「朝日」印をもつ陶器碗が平安京左京北辺四坊からも出土しており, 19世紀前半のものと考えられる〔京都市埋文研編2004 B687-7-11〕。I 384・I 385は播鉢で, いずれにも底面に墨書があるが内容は判読できない。さらにI 385の胴部下端には, 丸囲いに「由」の刻印がある。I 386～I 393は皿である。いずれも同じ植物が描かれるが, 細部が異なり, 一点ずつ筆で描かれたものである。I 386～I 388は緑色と赤色で, I 389～I 391は黒色と赤色で, I 392は濃緑色と赤色で, I 393は緑色と黒色で描かれる。I 394は平面長方形の器で, 外面の2面にだんごの絵とともに「あらし山」「花見」「正本家」などの字が書かれる。I 395～I 398は土鍋の蓋である。「い」や「か」, 「う」などの字が認められる。I 399・I 400とI 401・I 402はそれぞれ, 土鍋の蓋と身の組み合わせ。後者には, 紅葉の絵が描かれる。I 403は鹿を象った陶器で, 臀部に穴が空き, 身体が中空となる。I 404は湯飲みで, I 405・I 406・I 411は一合徳利である。I 405には草花と蜻蛉が描かれる。I 407は大型の

京都市田中関田町遺跡の発掘調査

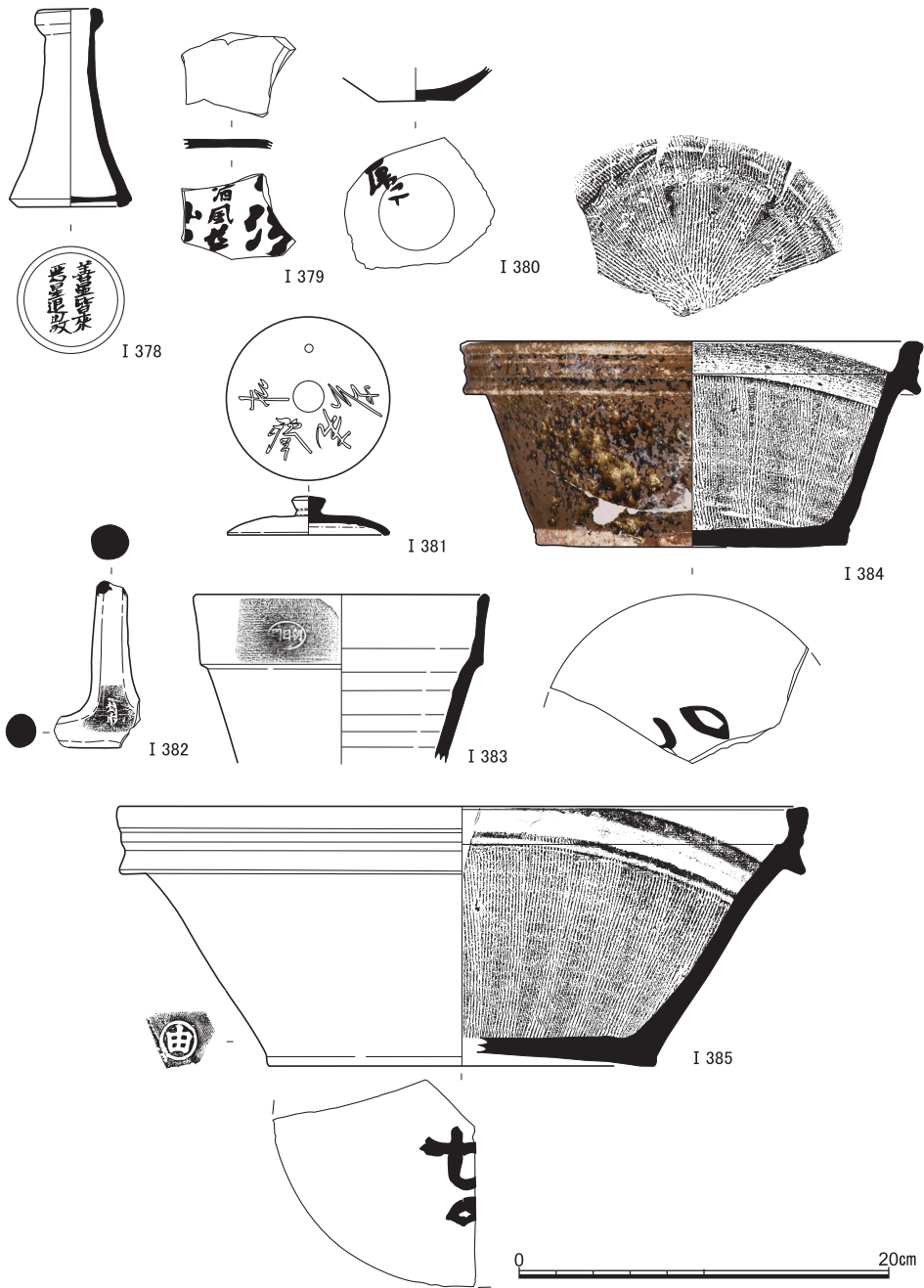


図25 表土・攪乱出土遺物(1) (I 378~ I 381・ I 383~ I 385陶器, I 382土製品)

近世・近代の遺跡

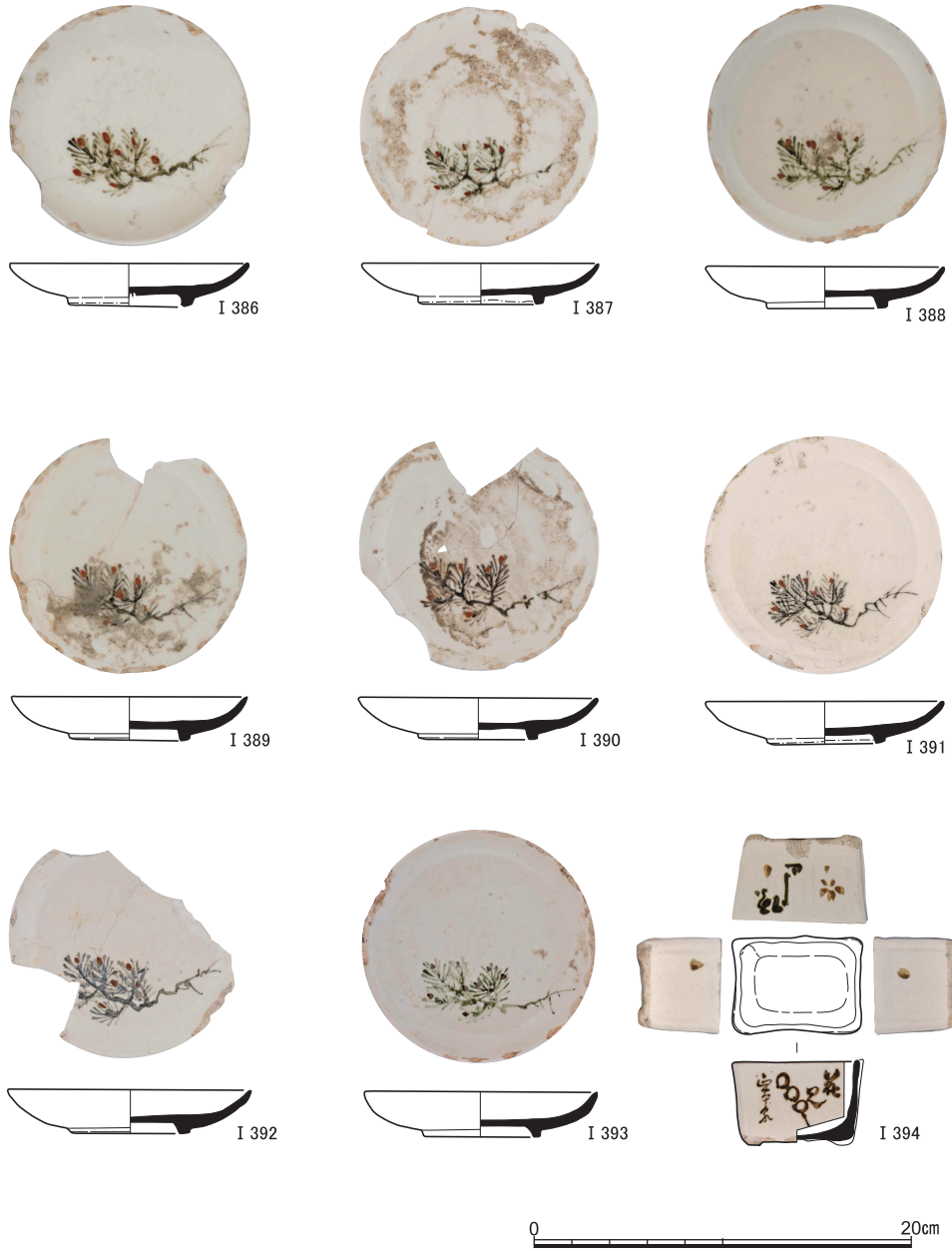


図26 表土・攪乱出土遺物(2) (I 386~ I 394陶器)

猪口で、外面には草花が描かれ、また、高台内に文字が書かれる。I 408・I 409は一輪挿しで、I 410もその可能性がある。I 409は19世紀半ばのものである〔京都市埋文研編2004 H15〕。I 412は信楽焼と思われる湯たんぽである。I 413は丹波焼と思われる大型の徳利で、19世紀前半頃のものである〔京都市埋文研編2004 B687-10-18〕。

I 414～I 422は、上面に文字の書かれる蓋である。I 415～I 422は「療病院」の三文字が書かれていたものである。I 414のみ文字が異なり、「大」のみが残るほか、全部で四文字書かれていたようだ。「府立醫大」などと書かれていたと想像する。なお、I 414のみつまみが付かず、その痕跡が文様で描かれるだけである点も注目される。I 414～I 419は陶器で、I 420～I 422は磁器である。陶器のものの中では、I 414・I 418・I 419とI 415～I 417の間で釉の色合いが異なる。磁器のものでは、I 420では黒色で文字が書かれるのに対し、他では藍色で書かれる。

I 423～I 438は円筒形の器であるが、用途は不明である。陶器製のもの（I 423～I 426）と磁器製のもの（I 427～I 438）がある。I 423・I 424は口縁部に青色の線がはしり、底面に「硬陶」の印が捺される。I 425は口縁部に赤色の線がはしり、表面に赤色で「京…」の印が捺される。文字は隅に切り込みがはいる長方形の枠に囲まれ、文字は鮮明である。I 426の表面には「病」が認められ、やはり病院関係のものであることがわかる。I 427～I 438は表面に八角形枠に「京都府立療病院」の印判がみられる。文字はぼやけ、不鮮明である。底部の形態によって、平らな底部をもつもの（I 427～I 431）と、低い高台をもつもの（I 433～I 438）の2種類に分けられる。

I 439は陶器の蓋で、つまみの内部に「京医」の字がある。I 440は陶器の椀で、外面に「京医」と書かれる。I 439とI 440はセットであった可能性がある。I 441は口縁端が玉縁状に膨らむ陶器の皿で、見込みには「療病院」がみられる。I 442・I 443は磁器の蓋で、つまみ内部に「京医」と書かれる。I 444は磁器の椀で、外面に「京医」と書かれる。I 443はI 444とセットであった可能性がある。I 445は八角形の磁器の皿で、見込みに円形枠に囲まれた「療病院」を認める。I 446・I 447は平面円形の磁器の皿で、高台内部に「京陶」と書かれる。I 446の内面には草花とともに「京医」が認められる。I 447の内面には、草花が色鮮やかに描かれる。

I 448・I 449は小鉢。口径は同等だが、高さはわずかにI 448の方が高い。I 448には注ぎ口が残る。見込みにはいずれも、二重の圏線の中に8点の「ス」に囲まれた「本」が陰刻される。I 448の高台内には「丸寺」、I 449の高台内には「出町」と書かれる。I 450・

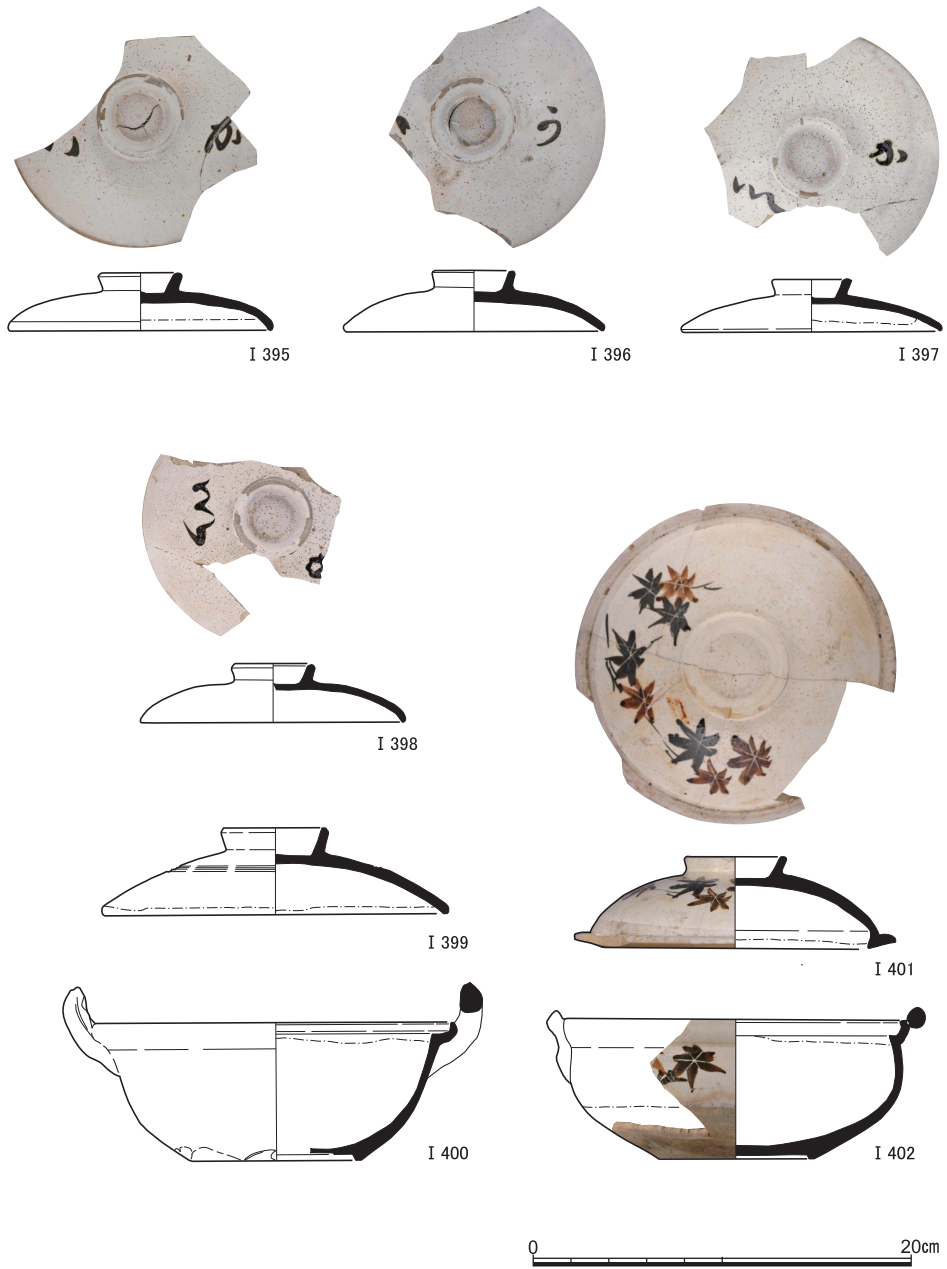


図27 表土・攪乱出土遺物(3) (I 395~ I 402陶器)

京都市田中関田町遺跡の発掘調査

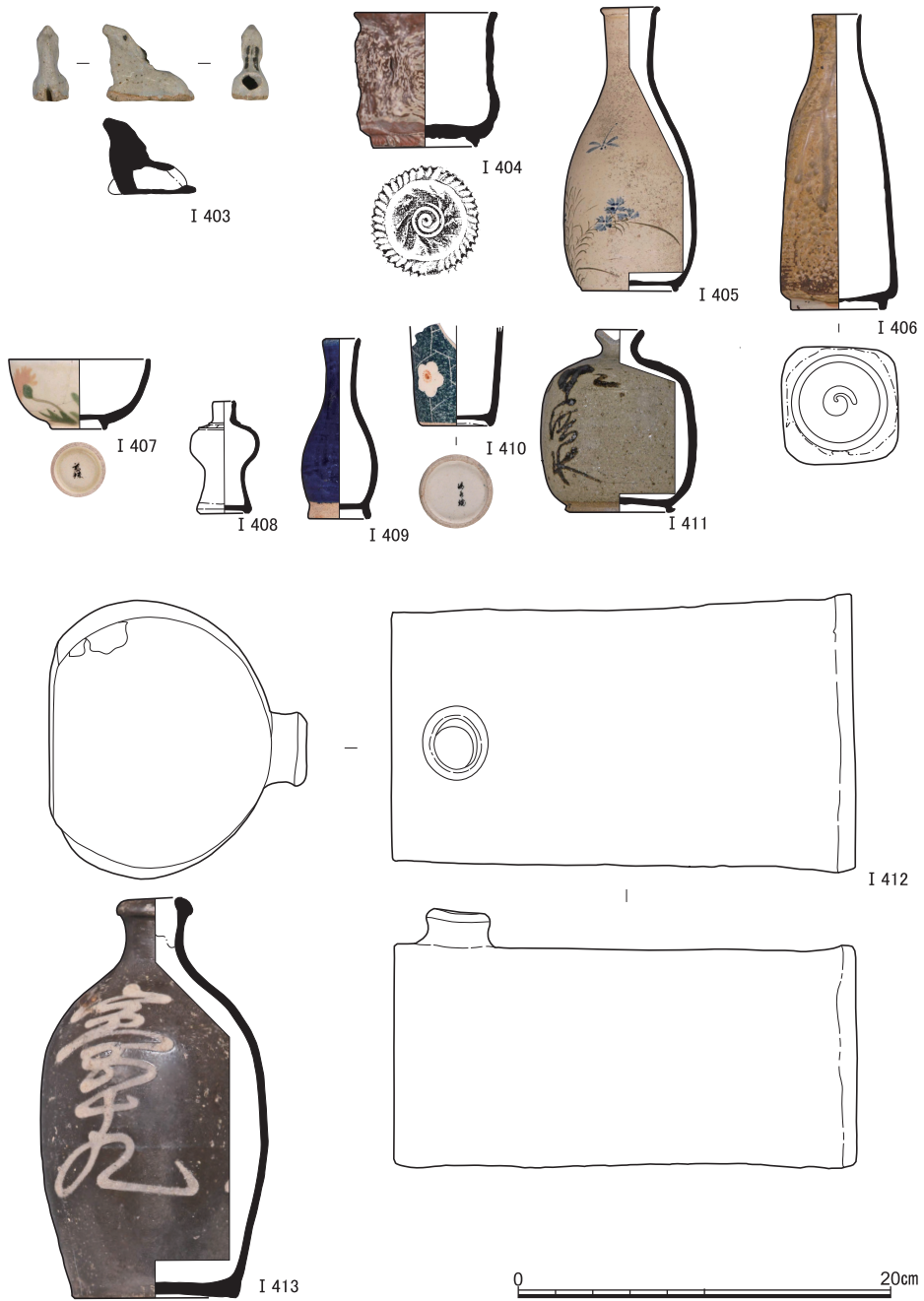


図28 表土・攪乱出土遺物(4) (I 403~ I 413陶器)

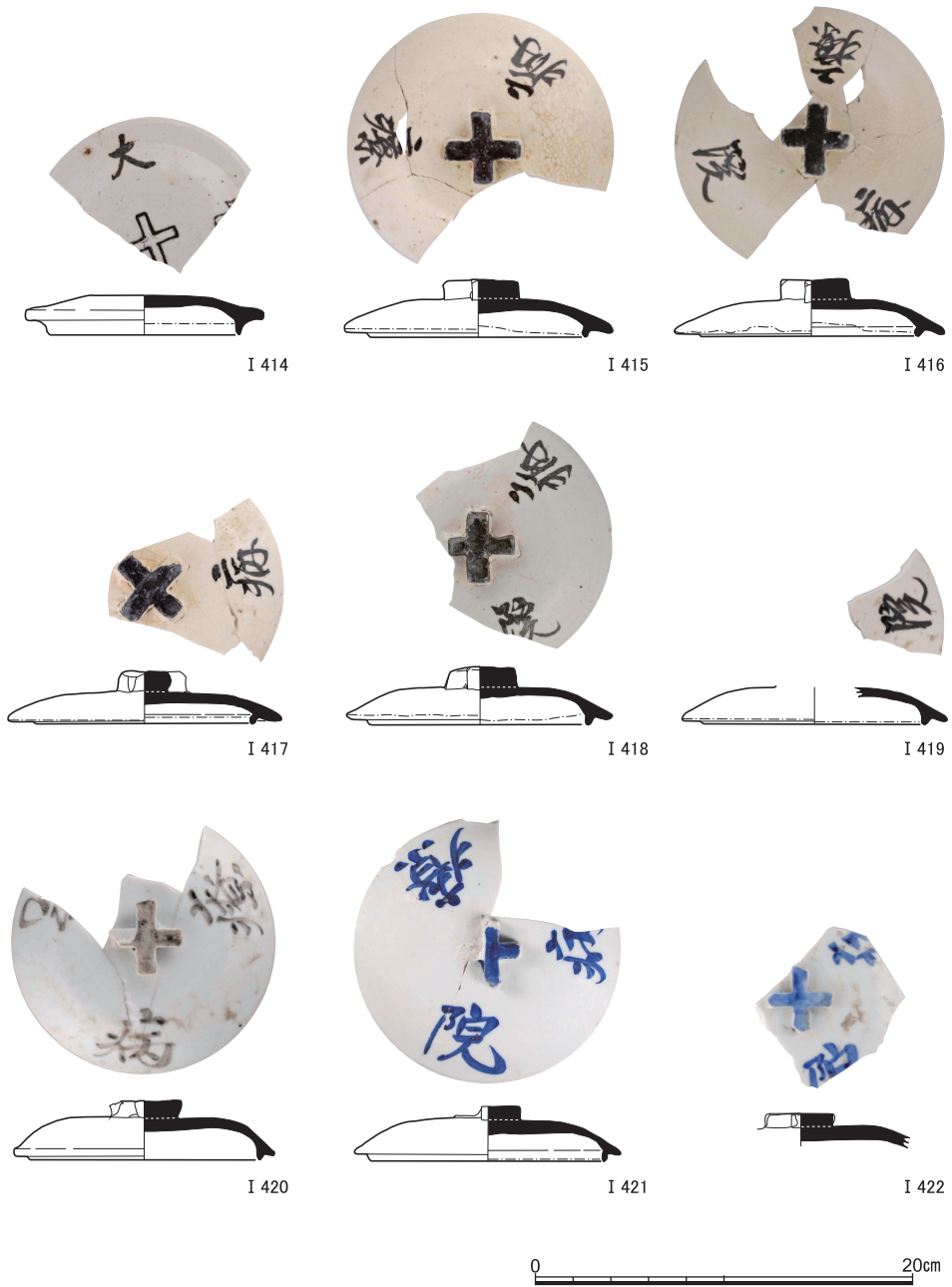


図29 表土・攪乱出土遺物(5) (I 414~ I 419陶器, I 420~ I 422磁器)

京都市田中関田町遺跡の発掘調査

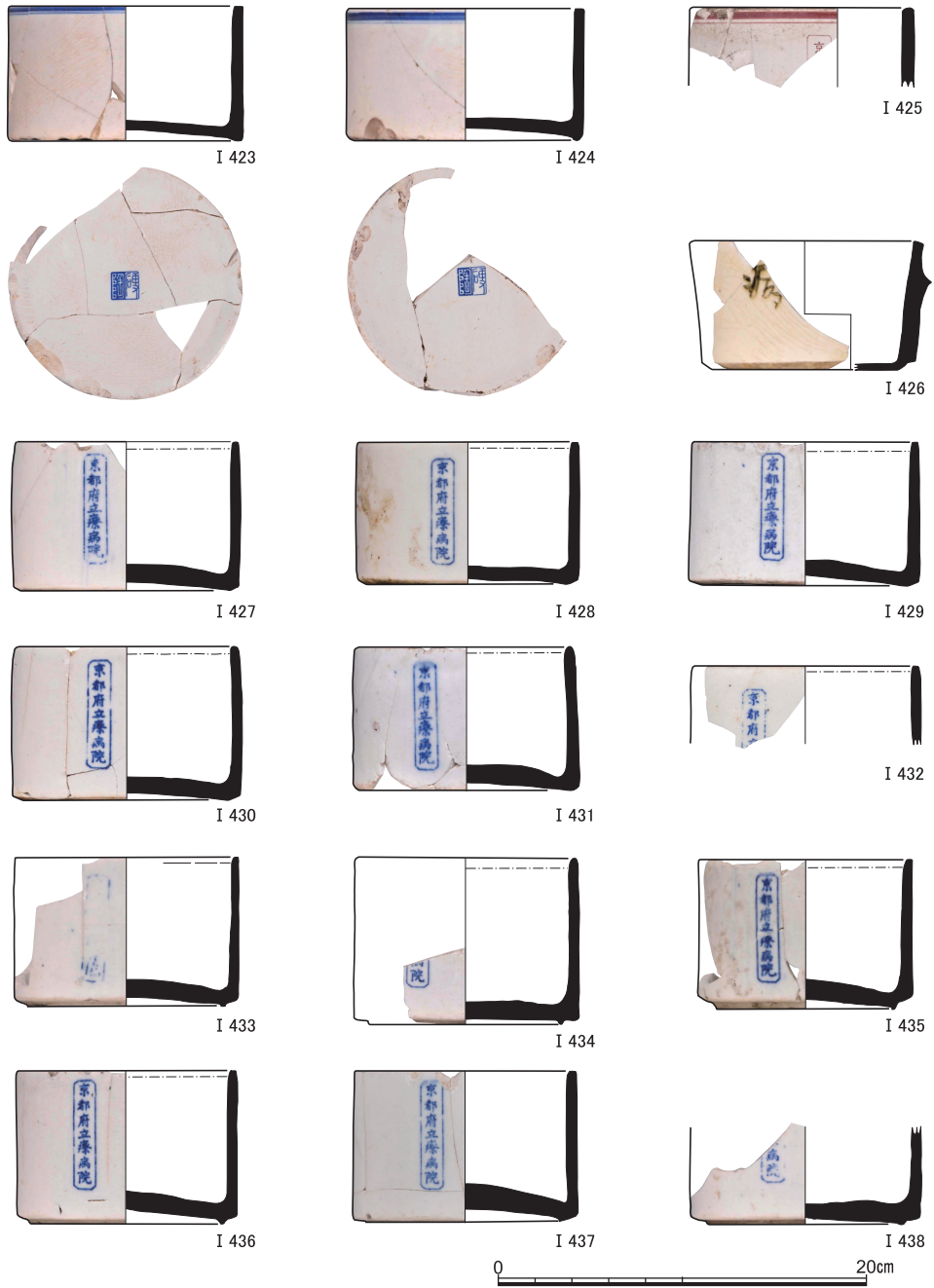


図30 表土・攪乱出土遺物(6) (I 423~ I 426陶器, I 427~438磁器)

近世・近代の遺跡

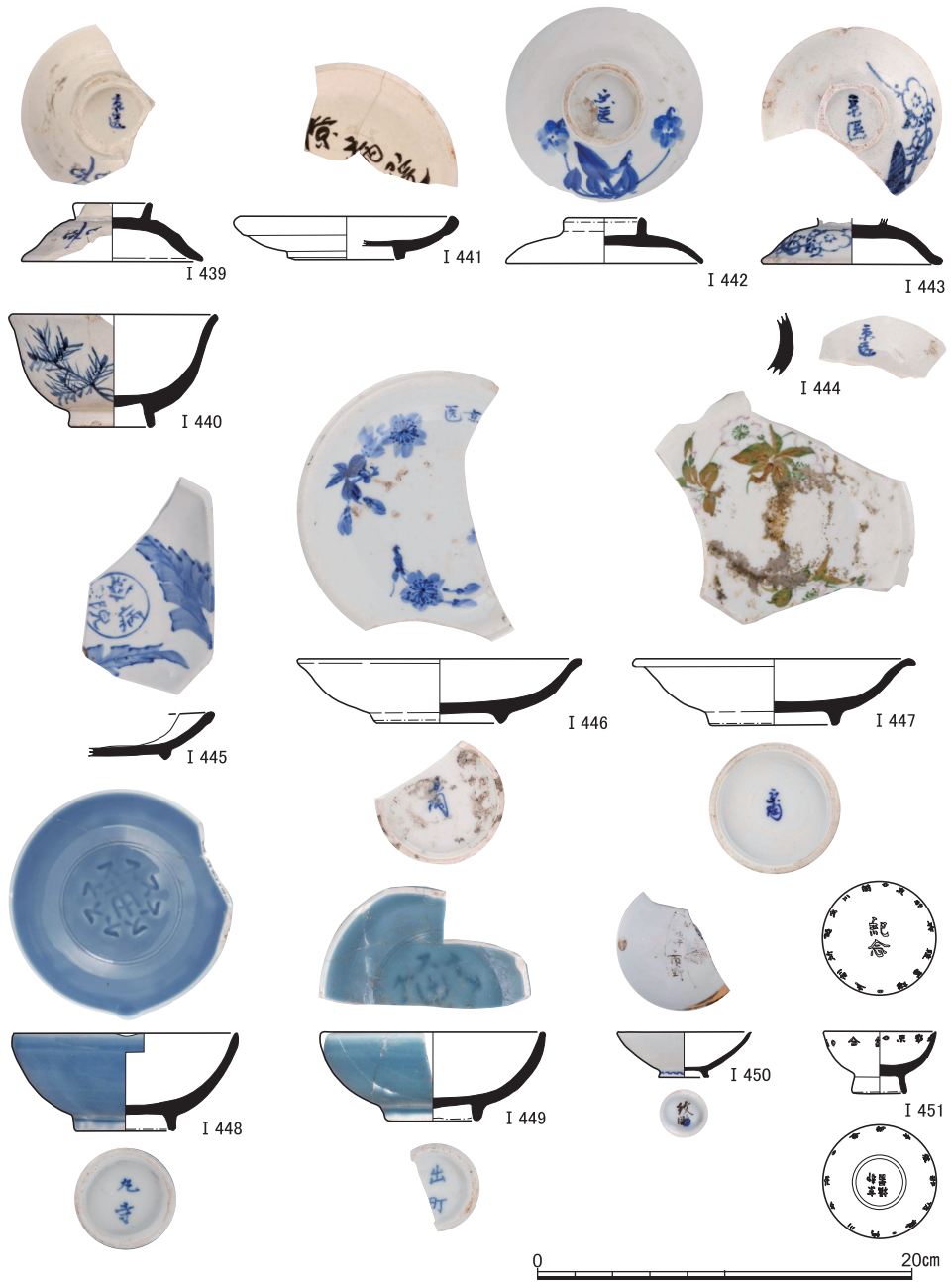


図31 表土・攪乱出土遺物(7) (I 439~ I 441陶器, I 442~ I 451磁器)

I 451は猪口である。I 450には釉薬の上に金色で絵や文字が書かれる。内面には短冊内に「市野」が、外面の高台内には「牧彫」が書かれる。I 451には全面に文字が書かれる。文字の色素は消失しているが、その痕跡から字の判読は可能である。まず、内面の見込みには縦向きに「紀念」と書かれ、口縁部には左から右に向かって「○京都府種蓄場○立創所張出川筒」と書かれる。一方、外面には高台内部に縦向きに「京都橋古」と、口縁部に左から右に向かって「○筒川牛市○合組牛□(産?)郡佐與」と書かれる。現在の京都府与謝郡伊根町に京都府種畜場筒川出張場が設立されたのは、大正2年(1913)7月のことである〔京都府1973, p.79〕。I 452～I 454は大椀である。それぞれの見込みと高台内には同じ字が書かれるが、字は判読できない。高台の内部には切り込みが入り、6弁の花弁様になる。I 455は大鉢で、口縁が波打つ。I 456～I 459は洋皿である。I 456・I 457は内面に植物文様が描かれる。I 458・I 459の裏面には、「MEDAILLES D'OR/1867・1878/CH:PILLIVUYT.C./PARIS」の印が捺される。フランスのピリヴィッツ社製の洋皿である。1867年および1878年にパリで金メダルを受賞したことを謳っていることから、本製品は1878年以降に作られたものと分かる。I 460～I 462は化粧用のパレットである。I 460とI 461は平面長方形で、I 462は楕円形である。それぞれの裏面には刻印があり、I 460には「煥生堂」、I 461・I 462には4弁の花に囲まれた「勢」の下に「□彩□堂」の文字が認められる。I 463・I 464は極小の容器で用途は不明。いずれにも把手がつく。I 463の把手の下には2点の刻印が認められる。いずれも正方形に囲まれ、「陶」「金」と読める。I 464は植物文が染付される。I 465は徳利で高台内に楕円形囲いに「錦山」の印がある。I 466はレンゲで、「寿」の文字が認められる。I 467は小型の容器で、少量の液体を飲用するためのものと考えられる。I 468は2人の童子を象った人形で、赤や緑で彩色される。I 469・I 470は洋風の児童の胸像である。男女共に認められるが、女兒を象ったものが8点見つかったのに対し、男児のものは1点であった。前面と後面を別々に型作りし、それらを接合したものである。

I 471～I 476は白色のガラス製品である。I 471～I 475は蓋付きの容器で、クリーム状のものを入れたものと思われる。いずれにも内蓋と外蓋があったらしい。I 471は内蓋と身のセットである。I 472の底面には三角形に囲まれた5弁の花弁が浮き出る。I 473は平面形が隅丸正方形で、胴部の向かい合う2面に文字が陽刻される。「LOLICA」と「ロリカクレーム」と読める。I 474・I 475はほぼ同形だが、細部が若干異なる。I 474の底面には「レート」の文字列が浮き出る。東京日本橋の平尾賛平商店が大正7年(1918)7月

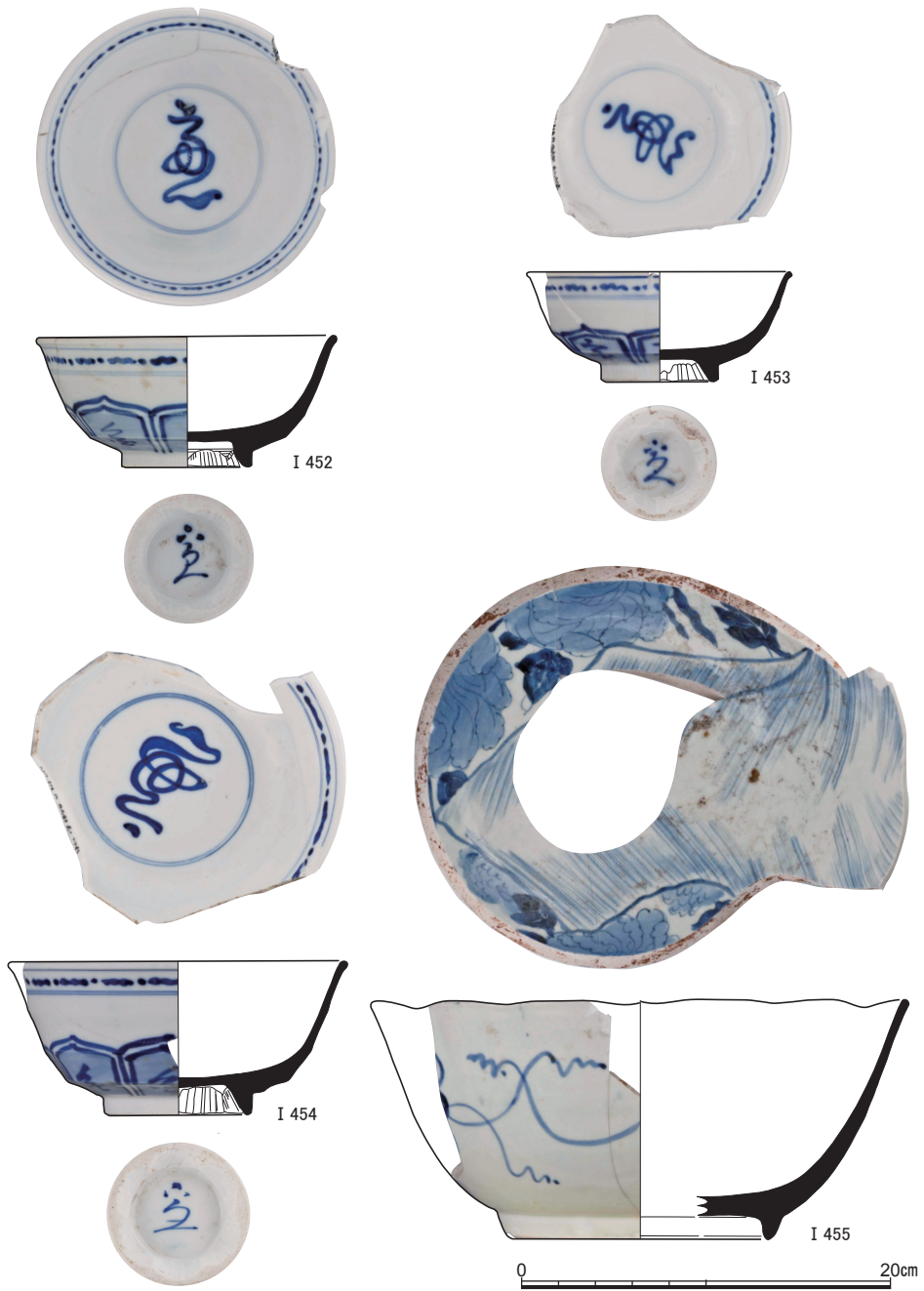


図32 表土・攪乱出土遺物(8) (I 452~ I 455磁器)

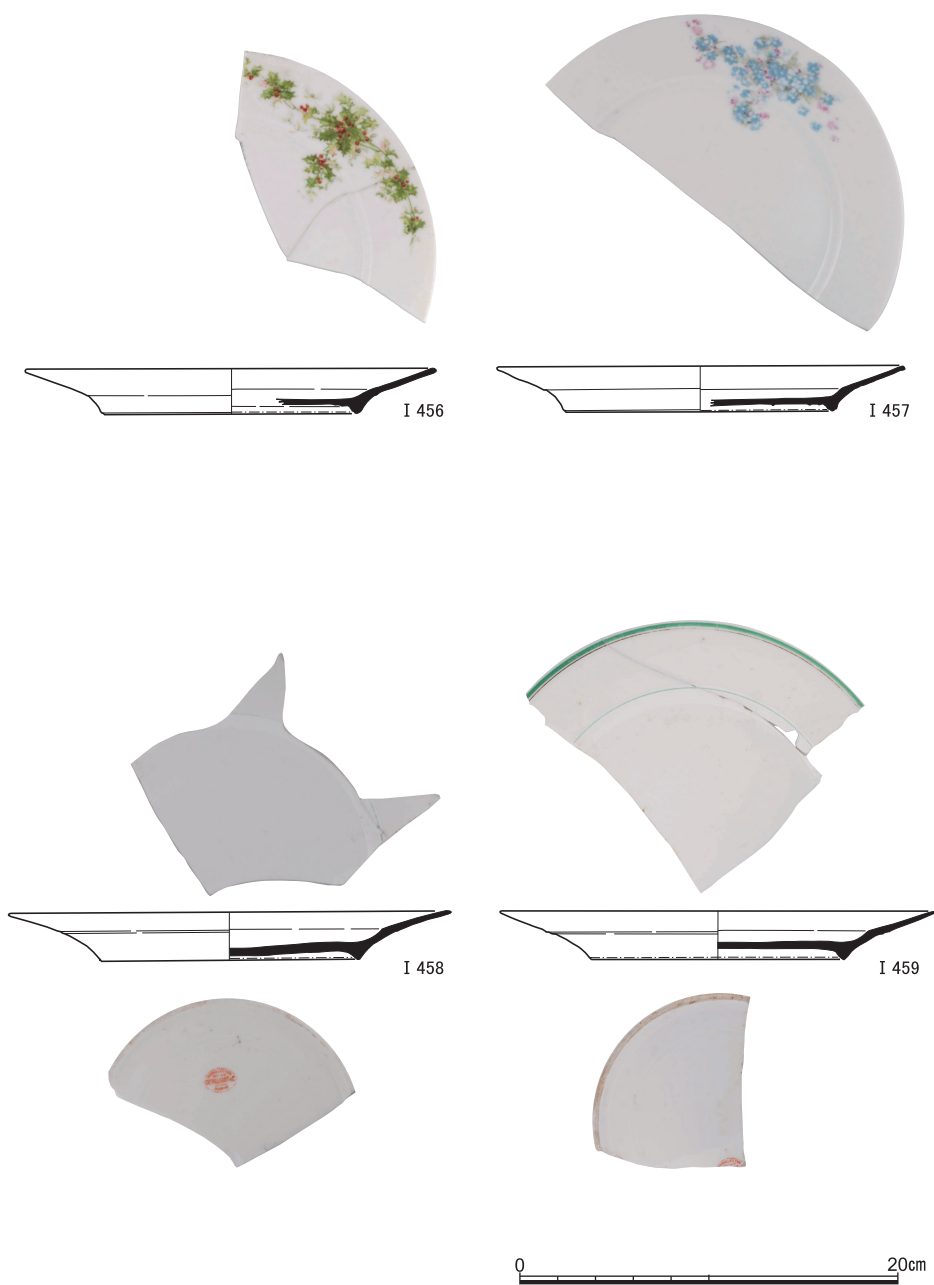


図33 表土・攪乱出土遺物(9) (I 456~ I 459磁器)

に発売した化粧品「レートメリー」の小瓶である〔平尾1929, p.102, p.159〕。そのまま化粧が出来、肌なめらかに白くなる当時においては最新式の化粧料である。なお、I 475においては内蓋が身に密着して離れない。I 476は円筒形の瓶で、全体の高さは不明である。底面に「YKS」と書かれる。

I 477は珐瑯鉄器である。鉄製のマグカップ全体に白色の釉を、口縁部と把手部に青色の釉をかけたもの。底面には「K.E.R.」「SWEDEN」の印が捺される。19世紀後半に創業したスウェーデンのKockums社の製品と思われる。

I 478は骨製の歯ブラシである。表面は磨かれ、光沢をもつ。台部には植毛孔が空けられるが、毛は残らない。柄部の腹面中央に、筆記体でアルファベットが刻まれる。「Estis Fine」と書いてあるように見え、先に見た灰褐色土包含層出土の柄（I 300）に刻まれた単語とは異なる点が注目される。

I 479～I 495はガラス製品である。I 482の蓋を除いて、いずれも瓶である。I 479～I 491は透明ガラスで、それらのうちI 482がわずかに緑色がかかる。また、I 490は磨りガラスとなる。I 492・I 493は紺色のガラスで、I 494・I 495は茶色のガラスである。それぞれの体部や底面には意匠や文字が浮き出る。I 479の体部には「るり羽」「定容」が、底面には「3」の数字が認められる。「るり羽」は大阪市北区にあった山発商店が明治44年(1911)に発売した白髪染め液である。I 480の体部には「意匠登録」の字とともに薄雲のたなびく富士山が、I 481の体部には蜻蛉が、I 483の底面には丸囲いに「P」が、I 484の底面には「登録/M」が、I 485の体部には「全乳」がそれぞれ認められる。I 486の体部側面には「ホワイトビニウ」「意匠登録」が、底面には「H」と「Y」を組み合わせた意匠が見られる。「ホワイトビニウ」は矢野芳香園が大正5年(1916)に発売した乳液である。

I 487・I 488の体部には目盛りが、I 488の底面には「昭12」（昭和12年=1937年か）と「7」が、I 489の体部には「Merika」と花卉文が、I 490の体部側面には「ビネス香水髪洗液」と目盛りが、I 491の体部には目盛りや「12」の数字が、底面には「H.J.Heinz CO.」「57回」「PATD」が、I 492の体部には「明治ヨーグルト」、楕円囲いに「Meiji」「100cc」が認められる。明治乳業がヨーグルト製品を販売したのは昭和25年(1950)以降のこととされる。ただし、明治乳業が昭和25年に発売したヨーグルト製品は、「明治ハネーヨーグルト」と呼ばれる製品で、ガラス容器は透明である。よって、今回みつかった「明治ヨーグルト」の紺色のガラス容器がいつの時代のものであったかは特定できていない。I 493の体部には「美顔水」が、I 494の体部には「京都府立醫大／附属醫院」の文字列と目盛りが認め

近世・近代の遺跡

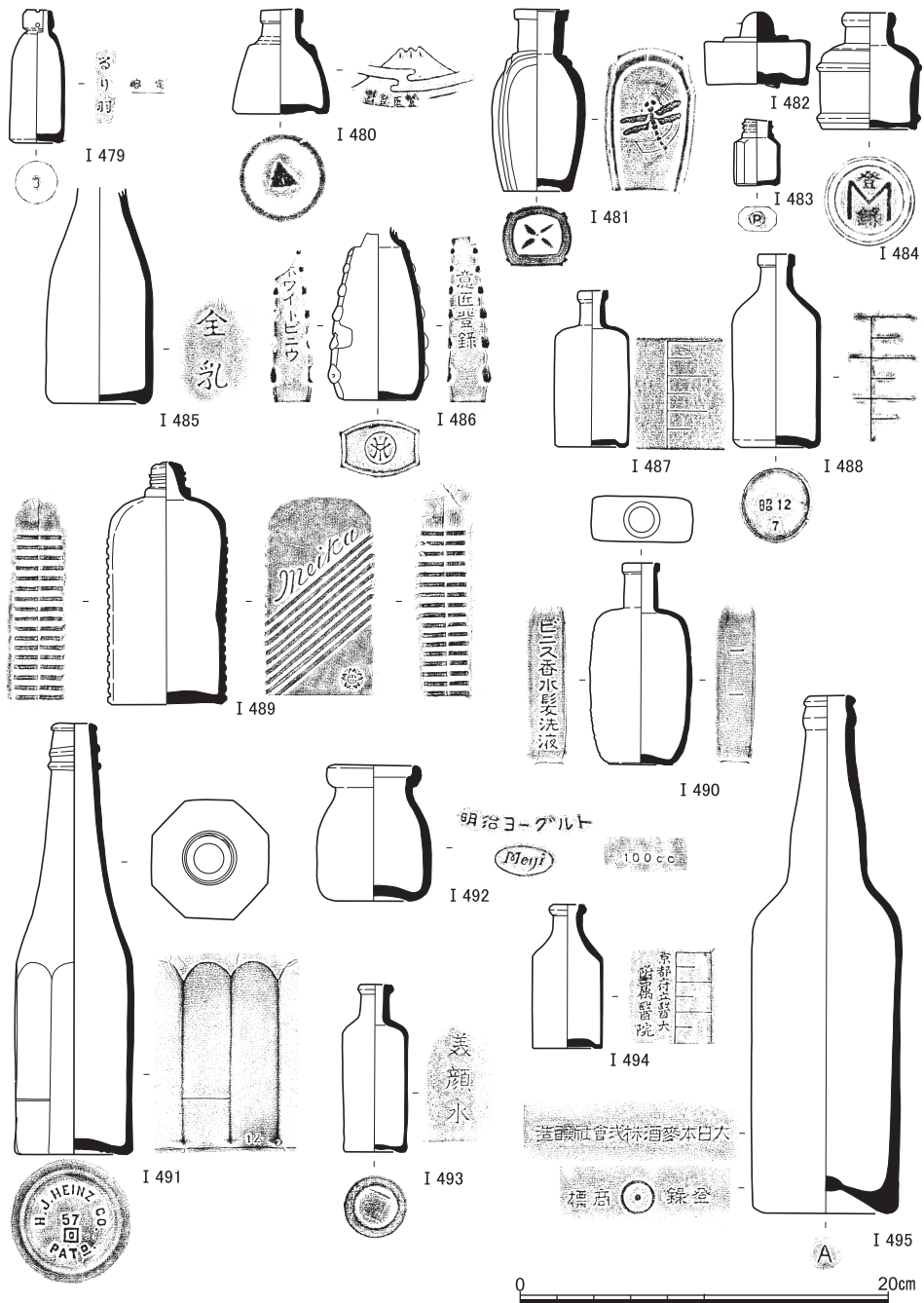


図35 表土・攪乱出土遺物(1) (I 479~ I 495ガラス製品)

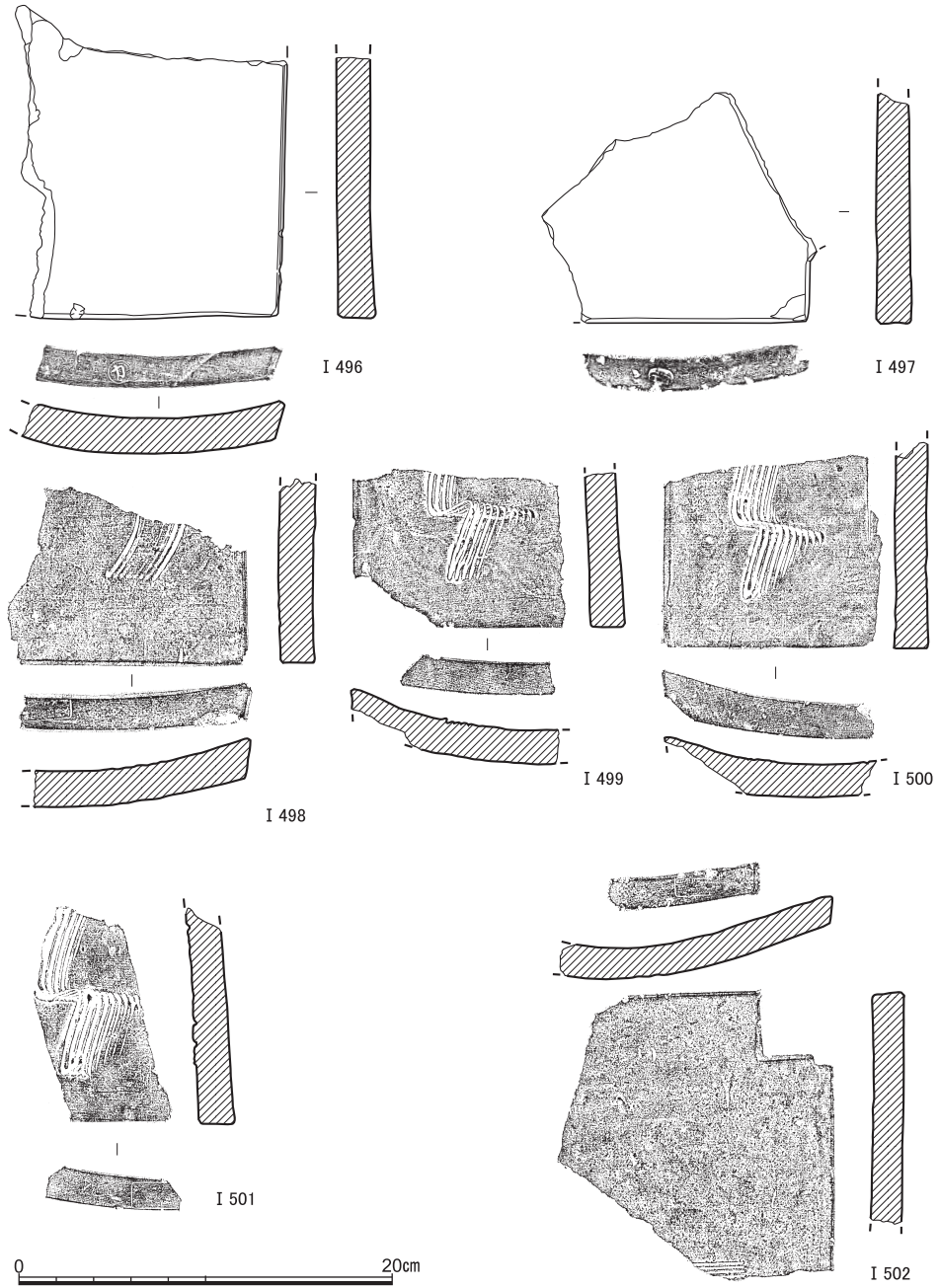


図36 表土・攪乱出土遺物(12) (I 496~ I 502瓦)

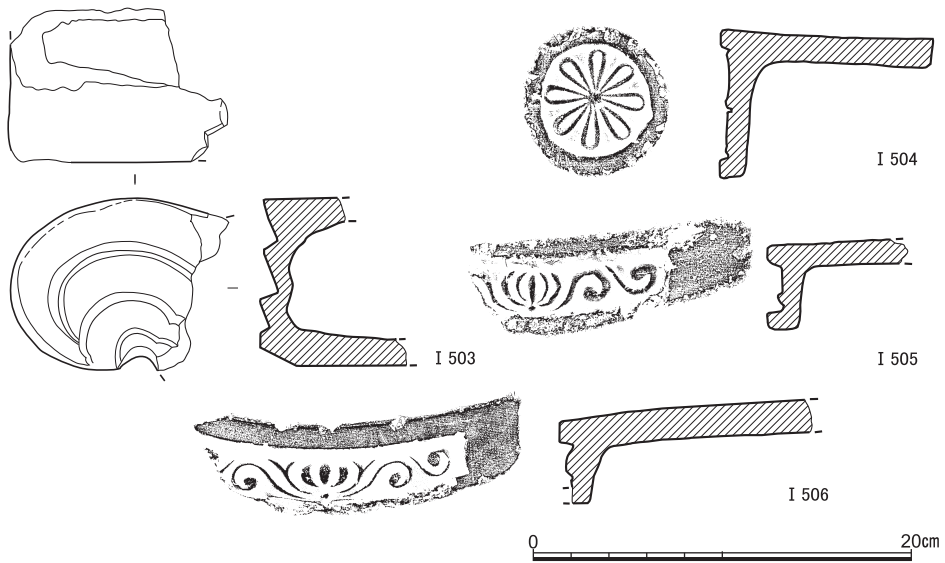


図37 表土・攪乱出土遺物(13) (I 503~ I 506瓦)

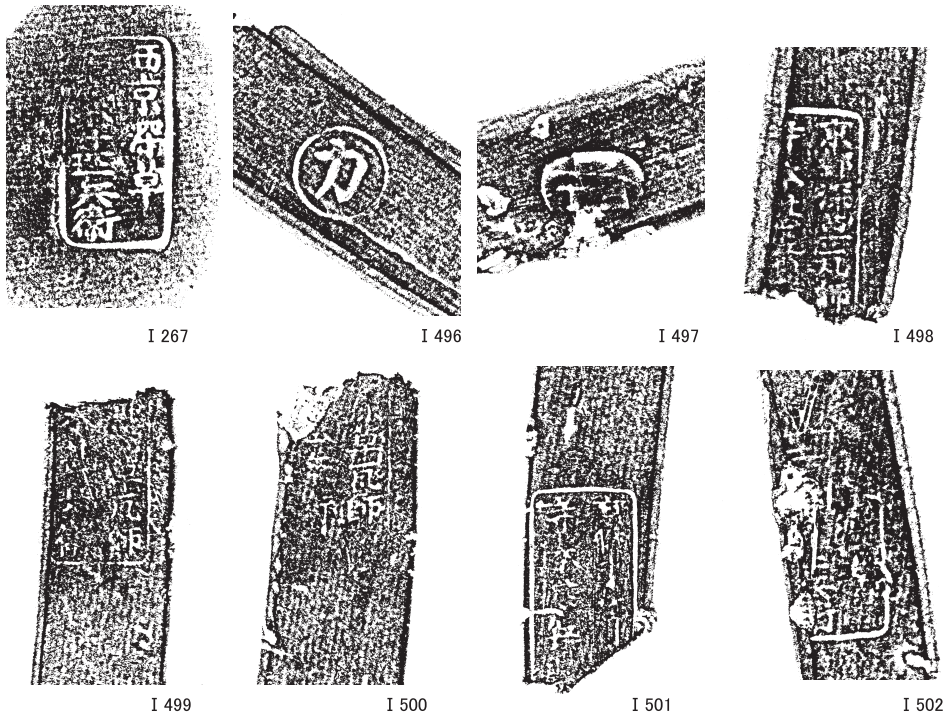


図38 瓦の刻印 実大

られる。美顔水は桃谷順天館が大正3年(1914)に発売した化粧水である。I 495の体部には「登録商標」,「大日本麦酒株式会社醸造」が,底面には「A」がみられる。大日本麦酒株式会社は,日本麦酒,札幌麦酒,大阪麦酒が合同して,明治39年(1906)3月に成立したビール製造会社である〔濱田1936, p.1〕。大日本麦酒は昭和24年(1949)9月に日本麦酒および朝日麦酒が設立されるまで存続した〔藤沢2009, pp.265~267〕。なお,大日本麦酒の関西における製瓶工場としては,尼崎と吹田にあったものが知られる〔濱田1936, p.60〕。底面に浮き出る文字「A」は,あるいは尼崎工場で製瓶されたことを示すものではあるまいか。

I 496~I 505は瓦である。I 496~I 502は刻印をもつ棧瓦片である。I 496では円囲いに「カ」の文字が, I 497では楕円形の囲いに「甚」と思われる字が書かれる。I 498~I 502では長方形囲いに複数文字による刻印が確認され,それらを総合すると「京都深草瓦師/寺本甚兵衛」と書かれることがわかる。江戸時代初期に創業したと伝わり,株式会社寺本甚兵衛製瓦として現在まで続く京都深草の瓦工集団による製作であることがわかる。瓦工名はしばしば1字に省略して刻印されたようであるから〔内記2018, pp.115~118〕,今回の調査で出土したI 497の「甚」の刻印瓦も同じ瓦工集団の製作と考えられる。なお,ここで紹介する刻印瓦のうち,「カ」をもつI 496のみが北調査区東半の段差の上でみつき,ほかは大攪乱からみつかった。I 503は鬼瓦の一種と思われるものである。I 504は棟巴瓦で,瓦当には8弁の花が描かれる。I 505・I 506は軒平瓦で,同文の唐草文様が表現されるが細部が異なる。

図38には本調査区で出土した刻印の拓本を原寸で提示した。図版8に示した刻印の写真とともに参照いただきたい。

5 近代の遺物にかんする文献史料などからの考察

本調査区からは,陶磁器・ガラス製品・瓦といった,近代のあまたの遺物がみつまっている。なかんずく,北調査区西半の大攪乱には,それらが大量に混じりあっていた。

そのような大攪乱は,表土掘削の過程で,重機によって掘りあげている。それゆえに,遺物のすべてを収集しえたわけではない。けれども,発掘調査をはじめの前に,455地点と清風荘とのつながりをおおよそ理解していたので,そうした点を念頭におきつつ,できるかぎりひろいとることに努めた。

ここでは,文献史料,ならびに近代の出土文字資料等を分析の対象にすえて,その時期

における遺物の性格などにかんし、卑見を提示していく所存である。

455地点の所有者 まずは、本調査区の近代における所有者をめぐって、明治時代の末ごろから検討をおこなう。

大正元年（1912）10月31日に発行された『京都地籍図』第参編 接続町村之部、および『京都市及接続町村地籍図附録』第参編 接続町村之部⁽¹⁾によると、「愛宕郡／田中村大字田中ノ内／字開田^(ママ)」の地番「四ノ三」は、地目が「畑」で、反別が「・八一六」（8畝16歩）、地主が「住友吉左衛門」であったのが知られる。北調査区西半の大攪乱から南調査区にかけては、この地番「四ノ三」に含まれ、したがって、その場所は、大正元年には、住友家の所有地となっていたことが判明する。

地番「四ノ三」にかんしては、住友史料館に所蔵されている「田中村小字関田・大溝土地見取図」⁽²⁾には、「四番ノ三／畑 八畝拾六歩」^(ママ)、「田中邸用地周辺土地見取図」⁽³⁾には、「四ノ三番／畑 貳百五拾六坪／買入代 壹千七百九十二円」と記されている。くわえて、どちらにも「(元津田)」と朱で書き込まれているので、住友家は、津田某から、この土地を買いあげたのがわかる。

なお、同館蔵の「京都田中村別邸外田畑耕作残坪調」⁽⁴⁾には、「四番ノ三」（朱書）について、「畑／九畝貳歩九合七勺五才」とあり、北の「道路」に面しているところに「土堤」、東と南の境目には「生ガキ」・「イキガキ」が描かれている⁽⁵⁾。そして、「藤木政次郎／四円」という朱書がみうけられる。

藤木政次郎にかんしては、住友史料館に所蔵されている『自 明治四十年／至 大正二年 京都田中村往復綴』⁽⁶⁾のなかの2通の書簡から、「字百万辺」の「小作人」であったのが知られ⁽⁷⁾、よって、政次郎は、「四番ノ三」の小作人であったこと、かつ「四円」は、1年間の小作料であったことが考えられよう。

北調査区西半の大攪乱から南調査区にかけては、大正時代のはじめ以降、畑として用いられるにいたった⁽⁸⁾。そうした点は、昭和19年（1944）に、西に隣接する清風荘とともに、住友家から京都帝国大学に寄贈されても、かわることがなかったのが確かめられる⁽⁹⁾。この場所に、京都大学の女子寮が開設されたのは、昭和34年のことであった。

ところで、残る北調査区の東半についてとりあげるに、この箇所をめぐっては、そこに存する1基の小さな石碑に目をむけなければならない。その表面には、「寄贈 澤村志づ／土地一九七平方米」、裏面には、「平成五年十二月」とあって、結局のところ、平成5年（1993）12月に、澤村志づ氏によって京都大学に進呈された土地の一部である、というこ

とがおさえられる。

ここで、注意をばらうべきは、澤村という姓であって、『京都地籍図』第参編 接続町村之部、および『京都市及接続町村地籍図附録』第参編 接続町村之部によると、地番「四ノ三」のすぐ東に位置する地番「一」は、地目が「畑」で、反別が「・四一〇」（4畝10歩）、地主が「澤村榮次郎」とある点だ⁽¹⁰⁾。すなわち、同姓であるということを前提にすると、志づ氏は、榮次郎の縁者にあたと察せられる。要するに、澤村志づ氏は、澤村榮次郎が所有していた地番「一」のすべて、もしくは、その一斑を引き継いでいたことが考えられる。

清風荘 話題を清風荘に移そう。よく知られているように、清風荘は、西園寺公望の京都における別邸であった。まず最初に、公望の同母弟である住友吉左衛門友純（春翠）の伝記『住友春翠』⁽¹¹⁾に、主として依拠することで、その創建にかんし、簡略に述べていくことにしたい。

清風荘の前身は、江戸時代後期にもうけられた⁽¹²⁾、徳大寺家の別邸である清風館にあたる。徳大寺公純の次男であった公望は、西園寺師季の養嗣子となり、師季が他界したのをうけて、嘉永5年（1852）1月に、4歳で西園寺家を継ぐことになった。そのような血筋であったがゆえに、公望は、清風館に滞在することがあった⁽¹³⁾。

明治40年（1907）8月、清風館は、公望の異母兄である徳大寺実則から、その同母弟である住友吉左衛門友純（春翠）にゆずられることになった。徳大寺公純の五男であった隆磨は、明治25年4月に、住友登久の養嗣子となり、その翌年の4月には、住友15代の家長となって吉左衛門を襲名し、諱を友純とした。このような徳大寺家から住友家への譲渡により、清風館は、西園寺公望の京都における控邸にあてられることが決定した。

そののち、公望の改築の計画をうけて、友純（春翠）の命により、清風館の建物の解体・撤去などがおこなわれ、その跡地に新館の造営が進められることになった。なかでも、その主屋は、明治44年7月に、敷地に縄がはられるなどし、翌8月から、工事が本格化して以来、大正元年（1912）の末には、ほぼ完成するにいたっている⁽¹⁴⁾。そうした新館にたいして、公望は、「旧名を保つて清風荘と名附けた」とする⁽¹⁵⁾。

ちなみに、『住友春翠』第7章によると、清風館の主屋にかんしては、「田中里ノ前町に移して、末弘家を嗣いだ兄威磨に贈」ったとみえる。威磨は、徳大寺公純の四男で、友純（春翠）の同母兄にあたる。威磨および公望・友純（春翠）の母は、徳大寺家の家女房であった千代浦（末弘斐子）であり、彼女が明治36年12月に亡くなると、威磨は、程なくし

て末弘の家を継ぎ、その姓を負うことになった。

とりあげるべきは、『京都地籍図』第参編 接続町村之部と『京都市及接続町村地籍図附録』第参編 接続町村之部であって、「愛宕郡／田中村大字田中ノ内／字里ノ前」の地番「一三ノ一」は、地目が「宅地」で、反別が「四八三・〇〇」（48町3反）、地主が「末弘威麿」であったのがわかる。つまりは、地番「一三ノ一」に、清風館の主屋が移建されたのであった。なお、財団法人立命館の理事を務めた末弘威麿は、昭和2年（1927）8月に、京都市田中里の前町の自宅において、68歳で鬼籍に入っている⁽¹⁶⁾。

ところで、西園寺公望は、大正2年2月に、第一次山本権兵衛内閣が成立したのち、事実上、立憲政友会の総裁を辞任する。そして、政界から遠ざかるため、清風荘に移ることを実行した。

公望は、大正2年3月22日から6月末まで、清風荘に滞在する。その後、東京に行ったものの、同年の10月末には、清風荘にもどるにいたった⁽¹⁷⁾。公望は、大正2年10月28日から同4年6月27日まで、基本的には京都に居住し、東京に帰ることはなかった⁽¹⁸⁾。結局のところ、公望は、主として清風荘において、3年にわたって静養するにおよんだ⁽¹⁹⁾。

大正5年以降、公望は、京都を幾度か訪れたものの、昭和7年9月15日から11月8日までの2ヵ月弱が、清風荘における最後の滞在となった⁽²⁰⁾。

公望は、昭和15年11月24日に、92歳で永眠する。その後、前述したように、清風荘は、昭和19年に、住友家から京都帝国大学に寄贈されるにいたった。

ちなみに、住友家は、清風館を徳大寺家からゆずりうけてのち、その周囲の土地等を買収あげて、小作や借家を経営していた⁽²¹⁾。地番「四ノ三」にかんしては、明治40年8月からさほど下らないころに、住友家によって購入されるにおよんだ公算が大きい⁽²²⁾。

出土文字資料の検討（1）　ここで、本調査区のうち、もともと住友家が所有していたところからみつかった、近代の遺物に目を転じる。そのなかでも、まずは、「京都府立療病院」「府立医大」「京都府立医大附属医院」という出土文字資料をとりあげて、考察をくわえていく。

北調査区西半の大攪乱から、外面に「京都府立療病院」とみえる円筒形の磁器10点がひろいあげられている（I 427～I 431・I 435～I 437など）。また、南調査区の灰褐色土などから、底部内面に「府立医大」とある磁器小皿2点（I 346・I 347）、「京都府立医大附属医院」とあるガラス製の薬瓶3点が出土している（I 364・I 365・I 494）。

「府立医大」は、京都府立医科大学、「京都府立療病院」「京都府立医大附属医院」は、

京都府立医科大学附属病院の前身にあたる。よって、それらにかんしては、以下に、まとめて説明をおこなう⁽²³⁾。

明治12年(1879)4月、京都療病院に、ともに4年制の医学予科校・京都療病院医学校が付設された。それらは、同年9月に、上京区第十二組梶井町(現在の^{ふくいな}上京区河原町通広小路上る梶井町)に位置をかえた後、明治14年7月には、前者が廃止されるいっぽう、後者が療病院から独立して、はじめの1年を予科とする5年制の京都府医学校となった。そして、その翌年の11月には、京都府医学校が4年制の甲種医学校に認定されるとともに、おなじ地に移転していた京都療病院は、京都府立療病院へと改称されるにいたった。

そののち、京都府医学校は、明治34年9月に、京都府立医学校に変名され、明治36年6月には、4年制の京都府立医学専門学校となった。くわえて、同年同月に、京都府立療病院は、京都府立医学専門学校附属療病院と改名した。

時代がかわって、大正10年(1921)10月に、京都府立医科大学の設立が認可され、初代の学長が任命された。そして、同13年9月に、最後の卒業生を送りだしたのをうけて、京都府立医学専門学校は廃止され、また、その年の10月には、京都府立医学専門学校附属療病院が京都府立医科大学附属医院へと改称されるにおよんだ。

如上の事柄をふまえると、北調査区西半の大攪乱から出土した「京都府立療病院」の遺物は、明治15年11月から同36年6月のあいだに作られたことがくみとれる。そして、南調査区からの「府立医大」のそれは、大正10年10月以降、「京都府立医大附属医院」のものは、同13年10月以降にこしらえられたのが確かめられよう。

出土文字資料の検討(2) つづいて、北調査区西半の大攪乱からとりあげられた、「京陶」という文字資料に着目する。2点の陶器皿の底部外面には、「京陶」と書かれ(I446・I447)、そのうち1点の内面には、「京医」とみうけられる(I446)。

「京陶」については、製造元であると判断され、先にふれた「京都府立療病院」のことを考慮すると、京都陶器(株)会社⁽²⁴⁾に該当する蓋然性が高い。ちなみに、京都大学病院東構内の366地点の攪乱からは、外面に「京都陶器株式会社」と記された磁器漏斗がみつまっている⁽²⁵⁾。

そこで、京都陶器(株)会社の沿革にかんし、これまであまり留意されてこなかった史料をもっぱら用いることで、ややくわしく概観する⁽²⁶⁾。

京都陶器(株)会社は、明治20年(1887)5月に創立された陶磁器製造会社で、その工場は、紀伊郡深草村^{ふくいな}福稲に設置された。「京都陶器会社株金分担見込書」によると、当

初の資本金が20万円であったこと、田中源太郎・濱岡光哲・内貴甚三郎といった発起人21名の姓名が知られる⁽²⁷⁾。

同社は、機械生産により国外への輸出をおこなったものの、さまざまな原因から経営不振におちいった。その結果、支配人を務めた丹羽圭介によると、「明治二十五年遂に会社の解散を見るの止むなきに至つた」という。ただし、丹羽はまた、「右と同時に私も会社を退いたが、その後暫く五車楼書店主の藤井孫六氏が社長として経営して見たが、これも長くは続かなかつた」とも語っている⁽²⁸⁾。

そのなかにみえる「五車楼書店主の藤井孫六氏」にかんしては、藤井孫兵衛のあやまりであろう。菱屋 五車楼は、御幸町通御池下ルの地において、明治時代の末ごろまで12代つづいた書肆であり、おのおのの主人は、孫兵衛を名乗っていた⁽²⁹⁾。

注目すべきは、先にとりあげた「京都陶器会社株金分担見込書」であって、そのなかに、発起人のひとりとして、藤井孫兵衛の名前が掲げられている。察するに、この人物が、京都陶器（株式）会社の事業を引き継いだのであろう。

同社は、この時期、内地向けの生産に転換するとともに、電気用の^{がいし}碍子などの製造にとり組んだ。その一環として、明治28年4月から7月にかけて、岡崎公園で開催された第四回内国勸業博覧会に、西洋食器・西洋茶具・菓子皿・花瓶・製茶試験器・電気用器械の6点を出品するにおよんでいる⁽³⁰⁾。その結果、洋式食器が進歩三等賞、電気電話用磁器が有功三等賞に選ばれ、前者は、「夙ニ製造ノ方法ヲ改良シテ、洋式ノ食器ヲ製出ス。爾來益意匠ヲ凝シ、工作大ニ進メリ。奮励怠ラスンハ、輸入ヲ防止スルニ足ラン」、後者は、「工作ニ注意シテ、能ク需用ニ適ス。形状亦其宜キヲ得タリ」というように評された⁽³¹⁾。

しかしながら、経営の悪化を払拭することはかなわず、ついには解散するにいたった。こうした点をめぐっては、明治36年3月25日付の『京都日出新聞』（第5701号）の記事を、けっしてみおとすことができない。

京都陶器会社の任意解散 同社は一昨年以來業務休止中なるが、斯ては益々欠損を重ねるを以て、之が恢復の爲昨年未より事業開始の計画をなせしも、是亦意の如くならざれば、今回遂に任意解散することに決し、来月四日午後一時より同社内に於て臨時株主總會を開き精算人を定めたる上、財産の処分を爲す由なるが、他に債権者もなきこととて、精算手続きの完了は速かなるべしと。而して資本金五万五千五百円の中約三万円の欠損あるが、未だ買受人等はなき由。

これより、京都陶器会社は、明治36年4月4日に、任意解散したのがうかがえる。くわ

えて、前半の部分から、明治34年以来、磁器などの製造を停止していたことがみとれる。

このような京都陶器（株）会社の変遷を前提にすると、北調査区西半の大攪乱から出土した、2点の「京陶」の磁器皿は、明治20年代後半から同33年のあいだに作られた、という点が推量される。また、「京陶」とともにみえる「京医」にかんしては、すでに述べた京都府医学校に相当する公算が大きい。さらに付言すると、大攪乱からは、そのほかに、「京医」と書かれた陶磁器が5点とりあげられている（I 439・I 440・I 442～I 444）。それらもまた、京都府医学校を略したのものであるとも考えられ、ひいては、京都陶器（株）会社でこしらえられた可能性が存しているといえよう。

大攪乱出土の近代遺物の性格　ここで、これまでの考察の成果をふまえたうえで、北調査区西半の大攪乱からひろいあげられた、大量の近代の遺物について、拙見を提示していくことにしたい。

想起するに、大攪乱が存する場所は、住友家の所有地の一部であった。清風館が徳大寺家からゆずられた明治40年（1907）8月以降、あまりときをおかずして、買いあげられるにおよんだと推量される。

いっぽう、多くの出土文字資料のうち、「京都府立療病院」のものは、明治15年11月から同36年6月のあいだに、「京陶」のものは、明治20年代後半から同33年のあいだに作られた、ということがうかがわれる。

これらの事柄を念頭においたうえで、みすごすことができないのは、清風荘の新造である。もとより、それが進められたのは、清風館の主屋等が解体・撤去などされたのちのことであった。それらをばらしたり、とりのぞいたりした時期にかんしては、清風荘の主屋を造営するために、敷地に縄がはられるなどした、明治44年7月上旬のころには、すでに完了していたと想定される⁽³²⁾。

こうした点をも加味することで、大攪乱から出土した近代の遺物の大半は、清風館のものであったと考える。つまるところ、清風館の主屋などが移建や解体・撤去されるにともない、不必要と判断された物品が次つぎに、その場所にすてられたのではなかろうか。

以上のような卑見をめぐって、すこぶる興味深いのは、住友史料館に所蔵されている「田中村耕地実測図」⁽³³⁾である。作成時期が不明のそれには、地番がいっさい書き込まれていない。けれども、地番「四ノ三」にあたると目される土地においては、ふたつにわけられ、北側を「荒地」、南側を「畑／六畝」と書き入れている。

この荒地は、大攪乱の位置とおおむね合致するとみなされ、ひっきょう、かような状態

になったのは、清風館で所持されていた、数多くの陶磁器などの廃棄に基因するのではあるまいか。そうした理由から、「田中村耕地実測図」にかんしては、明治時代の末ごろに描かれたと解しておきたい。

なお、「京都府立療病院」や「京医」などの遺物については、徳大寺家の人びととのつながりが注意されよう。

たとえば、徳大寺公純は、東京に行かず、明治16年11月の死にいたるまで、清風館で妻や子らと生活した。『住友春翠』第3章によると、病にふせていた公純のもとに、同年10月23日、京都府医学校の校長で、京都府立療病院の院長を兼任していた半井澄が招かれ、診察ののち、「胸部の症状の憂慮すべきを告げた」としたためられている。

公純が他界した後、友純（春翠）といった家族は、東京に移り住み、清風館は、京都における徳大寺家の別邸となった。もちろん、徳大寺家の人びとは、別邸である清風館を利用したはずであり⁽³⁴⁾、その際に、かつ病気におかされたときに、京都府立療病院や京都府医学校等の関係者による診療をうけた可能性は十分考えられよう。さような事柄を機縁にして、それらにかかわる陶磁器などが、清風館にもたらされたと憶測しておきたい。

京都府立医科大学関連の出土文字資料　最後に、南調査区からとりあげられた、「府立医大」「京都府立医大附属医院」とみえる遺物について、いささか考察をおこなう。

上述したように、南調査区は、住友家の所有地のなかに含まれていたこと、また、「□^(清)風荘」と墨書された陶器片（I 379）がみつまっていること等から、それらにかんしては、清風荘にかかわる可能性が残されているといえる。

そこで、西園寺公望の主治医に目をむけると、大正8年（1919）に、公望がパリ講和会議の全権委員として渡仏したおりに、その任をになったのは、東京帝国大学医科大学教授などを務めた三浦謹之助であった。そして、公望がフランスから帰国したのちは、三浦謹之助を顧問として、その教え子である勝沼精蔵が主治医となるにおよんだ⁽³⁵⁾。勝沼精蔵は、名古屋帝国大学医学部教授などに就いた人物であり、公望が鬼籍に入るまで、その診療にあたった⁽³⁶⁾。しかしながら、公望が清風荘に滞在しているときに、その診察に訪れたのは、京都帝国大学医科大学教授や京都帝国大学医科大学附属医院院長などを務めた、中西亀太郎⁽³⁷⁾であった⁽³⁸⁾。

前記したように、公望は、大正2年3月下旬から、主として清風荘において生活を送った。そのおりに、健康状態がすぐれなかった時期が少なくなかったといえる⁽³⁹⁾。

注視すべきは、『自 明治四十年／至 大正二年 京都田中村往復綴』のなかに収めら

れている、(大正2年)12月28日付の物加波中次郎から「住友御本家／詰所」にあてられた書簡⁽⁴⁰⁾である。それには、「候爵様廿五日夜分ヨリ少シク御風氣之御模様ニテ(中略)中西博士之御診察致候処、御当分之御事申居候」としたためられていて、公望が風邪がみの際、中西亀太郎のみたてをうけたのが知られる⁽⁴¹⁾。その年月から推すに、公望が清風荘に滞在するようになった当初から、中西亀太郎が診察などをおこなっていたことがうかがえよう⁽⁴²⁾。

このようにみえてくると、「府立医大」の磁器小皿や「京都府立医大附属医院」のガラス製の薬瓶が、公望に関係するとは、なかなか考えづらい。けれども、公望の家族や彼が引きつけてきた女中・料理人等、もしくは、清風荘の管理・事務にたずさわった執事⁽⁴³⁾など、そこに勤め仕えていた者等⁽⁴⁴⁾が、それらとかかわりあいをもした可能性は否定できないといえる。こうした点をめぐっては、より広汎な史料調査が必要であり、それゆえに、後日の吟味・分析にゆだねたいと思う。

6 小 結

(1) 中世I期の遺構について

中世I期、すなわち13世紀代の遺構と考えられるのは、南調査区南東部のSD17と北調査区東半のSD25という溝である。ふたつの溝は、本調査区の外にも存在しているのは事実であって、検出面からの深さや幅などを勘案すると、ひとつづきのものである可能性が想定される。察するに、このあたりの田や畑を耕作するといった点などにおいて、重要な役割をはたしたであろう。

くわえて、北調査区東半には、盛土が確認された。大小さまざまな礫を混ぜることで、しっかりと造られているのがみてとれる。その中・下部の出土遺物から、当初は中世I期にきずかれたと判断される。残念ながら、北調査区西半の近代における大規模な攪乱により、西の方向にどのようにのびていたのか、つまびらかにしえない。したがって、その性格について明らかにするのは、困難をきわめるといえよう。けれども、この付近の開発・開墾などにかかわってもうけられるにいたったのは、まず否定することができまい。

13世紀代には、吉田地域とその周辺において、吉田泉殿をはじめとする貴顕の邸宅がいくつ設置されたことが、文献史料より読みとれる。それにともなって、その一帯の開拓などが進められたことは、容易に想像されよう。つまるところ、本調査区からみつかったSD17やSD25、ならびに盛土にかんしては、かような点を示すものとして把握していか

なければなるまい。

(2) 近世・近代の土地利用

今回の調査において認められた褐色土の一部と灰褐色土が、近世から近代におよぶ時期の土である。出土遺物の内容から、褐色土の近世遺構は18世紀頃まで、灰褐色土の遺構や包含層は19世紀頃から20世紀第2四半期頃までに形成されたものであることが判明した。その画期は18世紀の後半から19世紀の前半頃に求められる。

発掘により、今回の調査地点は近世から近代を通して畑地であったことが明らかになった。北調査区東半において西に落ちる段差が認められたものの、その段差の上と下では同様に畑地が営まれた。段差上における土地の利用の方法は、褐色土の時代と灰褐色土の時代で若干異なっていた。つまり、褐色土の時代には段差上に中世につくられた盛土とその北を西に向かう流路があり、畑地としての土地利用は盛土の南に限られていた。褐色土が堆積した時代にこの流路はしばしば流量を支えきれなくなったようで、南調査区南半で流水によるものと思われる砂が堆積する溝がみられる。灰褐色土が堆積する時代になると盛土や流路は埋没し、その上にも野壺が掘られた。調査区内で灰褐色土の時代の流路は確認されなかったため、この時代には流路は北の調査区外に移動したと考えられる。

同地の歴史を考えるのに、絵図などは便利である。江戸時代に描かれた絵図をみても、また、天保2年(1832)以降に書かれたとされる清風館見取図や昭和26年(1951)に書かれた清風荘見取図をみても、同地に建物の記載はない〔京を語る会1975, 京都大学2014, pp.14~19〕。ついでに、昭和21年(1946)段階で米軍により撮影された空中写真にも、同地に建物の痕跡はみられない〔京都大学2014, p.18〕。

同地周辺の歴史的な背景をやや詳しくみよう。まず、19世紀の前葉に徳大寺実堅によって清風館が本調査区の西隣に建てられた〔京都大学2014, p.22〕。敷地の北には東西方向に道が走り、その北に沿って太田川が流れていたようだ〔京都大学2014, 図2-2-1-1〕。明治16年(1883)には徳大寺一家が東京に移り住み、清風館は住人のいない家となったが、清風館で育った住友友純(春翠)が明治40年(1907)に清風館を徳大寺家から譲り受け、実兄の西園寺公望の京都での控邸にあてた。この際に付近の田畑を購入しており、今回の調査地点もこの時に清風館の所有する土地となったと考えられる。明治43年(1910)から3年かけて建物の改築がおこなわれ、大正2年(1913)に清風荘が完成した。大正3年(1914)には離れの増築工事がおこなわれたようだ。公望の死後、昭和19年(1944)には住友家が清風荘を京都帝国大学に寄贈した〔京都大学2014, pp.22~28〕。その後、昭和29年(1954)

6月に農学部橋本記念館の地に仮設置されていた京都大学の女子学生のための寮が、昭和34年（1959）5月に本調査地点に移転され、正式に「京都大学学生寄宿舍女子寮」が開設された〔京都大学1997 a, p.758, 1997 b, pp.196-197, 1998, p.1150〕。

18世紀以前の褐色土の堆積した時代の同地周辺の状況を文献史料から確認することはできない。しかし、それ以後に灰褐色土が堆積した時期は、おおむね19世紀前葉に清風館が建てられた後、清風荘が京都大学に寄贈され、寮が建てられる20世紀半ば頃までの時期に対応させられよう。今回の調査地点が清風館の所有地となったのは20世紀初頭になってからのことであるから、灰褐色土を埋土とする遺構および包含層から出土した遺物には、清風館にかかわりのない20世紀初頭までの遺物と、清風館（ないし清風荘）にかかわりのあるそれ以後の遺物が混ざることになる。

ここで気になるのは、「寺本甚兵衛」の刻印をもつ棧瓦が、灰褐色土を埋土とする遺構SP1や大攪乱から複数見つかったことである。というのも、前述のように同地には20世紀半ばに至るまで建物の存在が認められなかったためである。そのため、瓦は近隣から持ち込まれ廃棄されたものと考えざるを得ない。上述の歴史的な背景に鑑みるならば、これらの瓦は20世紀初頭の清風館の改築に際して廃棄されたものと考えられる。つまり、19世紀に清風館の屋根を葺くのに用いられた瓦と考えられるのである。瓦工「寺本甚兵衛」は江戸時代初期に深草の地で創業したと伝わり、現在まで続く。なお、今回の調査で見つかった刻印瓦の中には、「寺本甚兵衛」にかかわるもののほかに、「カ」と書かれるものもある。ただしこれは北調査区東半にある段差の上で見つかっており、清風館／清風荘の所有地からは外れる。この「カ」字瓦については、別の由来を想定すべきであろう。段差の東西では土地の利用法が違っていたことを例証する遺物の出土状況であると言えよう。

もう1点特筆すべき点は、灰褐色土包含層や表土・攪乱から京都療病院や京都府立医科大学にかかわる遺物が多数出土したことである。それらの組織の沿革は以下の通りである〔京都府立医科大学1955, 1974〕。

現在の京都府立医科大学の前身組織である京都療病院は、明治4年（1871）10月に設立が府令により公示され、翌年（1872）9月に木屋町で診療を開始した〔京都府立医科大学1955, pp.33, 56〕。そして、11月には三条粟田口青蓮院において療病院が設立された。それに附属する医学校は、まず、明治9年（1876）に京都府仮中学校内にその予科が設けられ、明治12年（1879）4月には京都療病院医学校が療病院の敷地内に付設された。医学校は同年9月に上京区へ移され、明治14年（1881）7月には療病院から独立し、京都府医学

校となった。明治34年（1901）には京都府立医学校に名称を変え、また、明治36年（1903）には京都府立医学専門学校へと改称された。京都療病院は明治15年（1882）11月に京都府立療病院と改称された後、明治36年（1903）には京都府立医学専門学校附属療病院となった。ここに療病院と医学校の立場の逆転が見られる。大正10年（1921）10月には京都府立医科大学の設立が認められ、大正12年（1923）9月に医学専門学校は廃止された。同年10月に療病院は京都府立医科大学附属医院となり、昭和26年（1951）には附属病院と改められた〔京都府立医科大学1974, pp.609～651〕。

上記の経緯を踏まえるならば、南調査区の灰褐色土包含層から出土した「府立醫大」皿や「京都府立醫大附属醫院」ガラス容器は、1921年から1951年までの間に作られたものと考えられる。表土・攪乱出土の「大」字の蓋も、医科大学になってからのものであろう。

一方、北調査区の大攪乱からは、「療病院」「京都府立療病院」「京医」の認められる陶磁器・ガラス製品が出土した。これらのうち、「京医」は医学専門学校へ改称された1903年以降のものと考えられよう。残りの2つの「療病院」「京都府立療病院」はやや古く、名称に従うならば前者は1871年から1923年までの、後者は1882年から1903年までの間につくられたものとなる。北調査区の表土・攪乱遺物の中に、南調査区の灰褐色土遺物より古い時代につくられたものが含まれるのは、北調査区の大部分が大攪乱によって大きな破壊を被ったためであろう。これらの遺物が示す年代は、同地が清風館の東隣にあった畑地であった時代から、清風荘所有の畑地であった時代にあたる。これら医療関係の遺物が同地から出土した事情はわからないが、20世紀の前半の間に清風荘所有の畑地に廃棄されたものと考えられよう。なお、「京都府立療病院」が浮き上がるガラス容器は、京都大学ではほかに病院構内でも見つかっている〔伊藤2014, II 312〕。

今回の発掘における表土・攪乱出土遺物には、化粧品のような古風なガラス瓶や洋皿などが含まれていた。これらは一見すると、女子寮に住む学生達が使用していたもののように見られる。しかし、それらの出土遺物の中で制作時期の判明する資料を見ると、それらはいずれも19世紀後半から20世紀前半にかけてのものである。寮が20世紀後半に設置されたものである点を考えると、表土・攪乱出土のものとして取り上げた遺物の大部分は女子寮設置以前、つまり、同地が清風館東隣の畑地であった時代から清風荘所有の畑地であった時代に属する。西園寺公望は明治4年（1871）から明治13年（1880）にかけてパリに留学している。1878年以後にフランスで製作されたことわかる洋皿は、あるいは公望が留学を終える頃に購入し持ち帰ったものではないだろうか。なお、清風荘には西園寺家が用いてい

た食器類が保管され、その中には洋皿も含まれる。化粧品の容器も含め、西園寺家が用いていたものと考えられよう。

本章は、笹川が第1節～第3節・第5節・第6節（1）を、内記が第4節・第6節（2）を執筆し、笹川が全体を若干調整した。発掘調査と整理作業は、笹川と内記が担当し、長尾玲が補佐した。また、測量や出土資料の実測・復元などは、磯谷敦子・西田陽子・高山典子・陳彦如・川北奈美・高野紗奈江・二村真司・陳豪がおこなった。

なお、第5節をまとめるにあたって、「清風荘史料」の閲覧・複写を許可していただいた住友史料館にたいし、あつく御礼申しあげる。

〔注〕

- (1) 京都地籍図編纂所 発行『復刻版 京都地籍図』第1巻 京都地籍図 第壱編 上京之部・第貳編 下京之部・第参編 接続町村之部, 第4巻 京都市及接続町村地籍図附録 第参編 接続町村之部, 不二出版, 2008・2009年。
- (2) 近代08-6-126-21。
- (3) 近代08-6-126-18。
- (4) 近代08-6-126-22。
- (5) 住友史料館に所蔵されている『明治45年～（書面）田中村報告』（本家雑書類123-4）のうち、（大正2年）2月9日付の物加波中次郎が住友御本家詰所にあてた書簡には、「一、植木職人ハ東澤村ノ塚ニ杉植ヘ垣ヲ致シ候」とみえている（写真番号039）。それゆえに、この図の「生ガキ」は、そのときよりも前に作られたものであったと思われる。
- (6) 本家雑書類123-1。
- (7) 6月19日と27日付の、物加波中次郎が住友御本家詰所にあてた書状（写真番号228・223）。
- (8) たとえば、住友史料館蔵の「昭和五年一月現在」という書き込みがみうけられる「京都田中別邸実測平面図」（近代08-6-126-1）。なお、この図は、『史料からみた清風荘の建築—建造物調査報告書—』（京都大学 名勝清風荘庭園整備活用委員会, 2011年）51頁に掲載されている）では、そのあたりを「畑」としている。
- (9) たとえば、昭和26年の「清風荘見取図」（『名勝清風荘庭園保存修理事業報告書』（京都大学, 2014年）19頁）では、この付近を「畑」としている。
- (10) 注（5）において、太字であらわした「澤村」にかんしては、この榮次郎に相当すると判断してよからう。
- (11) 芳泉会, 1975年, 初版1955年。
- (12) 『住友春翠』第2章によると、徳大寺公純きんいとの父である実堅さねみが、文政12年（1829）の春に、「別墅を経営し」、その5月に、「本館が建」ったとする。いっぽう、小泉策太郎『隨筆西園寺公』（小泉三申全集第3巻『隨筆西園寺公』, 岩波書店, 1939年）では、天保3年（1832）に、実堅が創建したとする。

ちなみに、実堅と公純は、ともに鷹司家から徳大寺家に養子に入った人物であった（梶田明宏「徳大寺実則の履歴について—明治十七年侍従長就任以前を中心に—」〔沼田哲編『明治天

皇と政治家群像—近代国家形成の推進者たち—, 吉川弘文館, 2002年)。

興味深いのは、両者の生家である鷹司家が、田中村に別邸を所有していた点である(岸泰子・杉田そらん「史料からみた清風荘の建築」〔注(8)前掲書〕)。その正確な位置や造営年、存続期間などについては、検討が必要である。けれども、清風館の建設地をめぐることは、鷹司家の別邸の存在が少なからず影響をあたえたかもしれず、それゆえに、そうした点にかんしては、今後の調査・考究に期さなければなるまい。

- (13) たとえば、『瓶史』昭和9年夏の号(去風洞, 1934年)に収められている、「京洛名苑記 清風荘」によると、「幼少の時、清風館の「庭の池に入つて遊んだ事があると、いつか」公望の「述懐を伺つた事がある」と記されている。
- (14) 岸泰子・杉田そらん注(12)前掲論文。
- (15) 『住友春翠』第7章。なお、高橋箒庵『東都茶会記』第4輯 上巻 「陶庵侯閑居」(高橋箒庵著 熊倉功夫・原田茂弘校注『東都茶会記 3 大正5年』, 淡交社, 1989年)によると、大正5年11月22日に、清風庵を訪れた箒庵は、公望から、「是れは旧徳大寺家の下屋敷にて、自分の祖父が経営せし者なれども、旧建物のいたく破損しければ、四五年前遂に之を取払ひて、新に御覧の如き蝸廬を営み」というような話を聞いたとする。
- (16) 「本学園の悲痛事 本学園創立以来学務を担当し立命館の理事であつた末弘威磨氏の逝去」(『立命館学誌』107, 1927年)。
- (17) 岸泰子・杉田そらん注(12)前掲論文。
- (18) 永井和「西園寺公望と京都」(京都橋大学文学部歴史文化ゼミナール2019「京都・人とモノの再発見」第4回〔2019年6月7日〕配付資料)。
- (19) 伊藤之雄『文春新書 609 元老西園寺公望 古希からの挑戦』第5章, 文藝春秋, 2007年。
- (20) そのおりの公望の動向にかんしては、伊藤之雄注(19)前掲書の第10章において、くわしく記されている。

なお、永井和氏によると、大正5年から同7年にかけては、「少なくとも年2回(春と秋)は、必ず京都に滞在した」とされる。くわえて、大正8年には、秋に1回、同9・10年には、おのおの2回訪問したものの、大正11年から昭和7年のあいだは、春または秋の年1回になったとする。ただし、そのうちの昭和元・3・5年については、京都には行かなかったと指摘されている(注(18)前掲資料)。

- (21) 岸泰子・杉田そらん注(12)前掲論文。
- (22) 『自 明治四十年／至 大正二年 京都田中村往復綴』には、明治40年のものと思われる10月4日付の、小川治兵衛から「住友吉左衛門殿／御執事」にあてられた書簡が含まれる(写真番号304～307)。そのうちの付図には、「百万遍 街道」の南に沿って、「澤村畑地」の西に、「御買得地 植木畑」とみえており(写真番号306)、これが地番「四ノ三」に該当する可能性が存する。
- (23) 主として、京都府立医科大学百年史 編纂委員会編『京都府立医科大学百年史』(京都府立医科大学長 佐野豊発行, 1974年)に収められている「年表」にもとづいて、執筆した。
- (24) 念のため確認しておく、明治26年7月に施行された会社法(旧商法の一部)にのっとり、社名に「株式会社」を付すのが義務づけられた(高村直助「かぶしきがいしゃ 株式会社」〔『国史大辞典』第3巻(か)〕)。
- (25) 網仲也・東洋一「京都大学病院構内A J 16区の発掘調査」(『京都大学構内遺跡調査研究年報2010年度』, 京都大学文化財総合研究センター, 2013年)のⅢ85。

なお、そのⅢ86は、見込み「医院」の円形意匠が存し、底部外面に「陶器会社精製」と書

かれた磁器碗である。出土遺物を調べたところ、それ以外に、3点の同様のものが含まれているのが確認された。それらにみえる「陶器会社精製」の「陶器会社」は、筆跡からすると、「京都陶器株式会社」のことを指すとみなしてよからう。Ⅲ85とともに、「医院」、すなわち、京都帝国大学医科大学附属医院において使われていたと理解される。

- (26) 京都陶器(株式)会社について、ふれたものとしては、奈良本辰也「海外市場の形成と京都陶器会社—明治陶磁業史の一断面—」(奈良本辰也選集 別巻『初期論文集』, 思文閣出版, 1982年, 初出1948年), 藤岡幸二編『京焼百年の歩み』第2篇第2章第7節(財団法人 京都陶磁器協会, 1962年), 宮地英敏「先駆的な機械制大工業化の失敗—有田・京都・名古屋の事例—」(『近代日本の陶磁器業 産業発展と生産組織の複層性』, 名古屋大学出版会, 2008年, 初出2005年), 江澤恵理子「京都陶器会社史料にみる内海吉堂」(『敦賀市立博物館 研究紀要』24, 2010年), 石沢誠司「京都陶器会社」(『角川 日本陶磁大辞典 普及版』, 角川学芸出版, 2011年), 網伸也・東洋一注(25) 前掲報告文などがあげられる。

- (27) 藤岡幸二編注(26) 前掲書。

- (28) 「陶器会社に従事せる当時の思ひ出—丹羽圭介翁談—」(『田中原太郎翁伝』第2章第1節5, 水石会代表 三浦豊二編輯・発行, 1934年)。

- (29) 京都出版史編纂委員会 編『京都出版史 明治元年—昭和20年』(社団法人 日本書籍出版協会京都支部, 1991年)の「参考資料 創業一覧・出版社小史・出版関連組合員名簿(全国書籍商名簿〈京都府〉[明治43年9月])」を参照。なお, 明治28年4月に刊行された『京華要誌』上巻 著名商店 書籍商及び印刷業には、「漢籍絵画 上京区御幸町通／姉小路上ル 五車楼 藤井孫兵衛」とみえる(新撰 京都叢書刊行会編『新撰 京都叢書』第3巻)。

ちなみに, 明治18年10月改正『五車楼蔵版発兌書目』には, 五車楼の店先の挿絵が存する。それは, 鈴木俊幸「袋屋東生亀次郎と上方書商との交易—書籍輸送の実際—」(『書籍文化史料論』, 勉誠出版, 2019年)において, 掲載されている。

- (30) 『第四回内国勸業博覧会出品目録 一(上巻) I 第一部 工業』京都府 第一部 第十類 焼窯及石材製品(『明治前期産業発達史資料 勸業博覧会資料 64 一第四回内国勸業博覧会出品目録(事務局) 一・上巻 I 明治二十八年—』)。なお, 『京華要誌』上巻 著名商店 陶磁器及び瓦商工業には、「陶器製造 紀伊郡深草村字／福稲 京都陶器(株式)会社」とある。

ちなみに, 京都陶器会社は, 明治23年4月から7月にかけて, 上野公園でもよおされた第三回内国勸業博覧会に, 洋食器2点と咖啡具1点を出品している(『第三回内国勸業博覧会出品目録 壺 第一部 工業』京都府 第一部 第二類 焼窯製品〔大手前大学史学研究所研究報告 第19号『関西窯業の近代Ⅱ』, 大手前大学史学研究所, 2019年)。

- (31) 『第四回内国勸業博覧会授賞人名録 I』(『明治前期産業発達史資料 勸業博覧会資料 107 一第四回内国勸業博覧会授賞人名録(事務局) I 明治二十八年—』)。

- (32) 岸泰子・杉田そらん注(12) 前掲論文。

- (33) 近代08-6-126-23。

- (34) 久保田謙次氏によると, 明治29年に, 友純(春翠)が川端丸太町東入ル東丸太町に家をもうけて, 母の正心院(千代浦〔末弘斐子〕)を迎えると, そのときに清風館にいた徳大寺(のちの末弘)威磨が, 隣に入って母の世話をしたとする(「懐かしの立命館」末弘威磨と立命館〔立命館 史資料センターホームページ「立命館あの日あの時」, 2016年)。

『友友春翠』第5章には, 清風館に徳大寺実則の母である栄寿院がいて, 川端丸太町の家で暮らしていた「正心院は此処にも出入し, 彼女らと作歌などをつうじて, むつまじくしていたとする。くわえて, その第6章では, 明治34年2月に, 「京都の清風館に在つた徳大寺実則

の生母榮寿院が歿した」と記されている。

榮寿院は、徳大寺家の家女房の竹島で、泉州信達社の神主である矢野桜大夫の娘にあたる（梶田明宏注（12）前掲論文）。だが、彼女が清風館で亡くなったとする点は、まちがいである。

『徳大寺実則日記』明治34年1月26日条には、「生母竹島病痾インフルエンザ、加之胃加答児症併発ス。看護ノ為不参」とあって、実則の母である竹島が病床についたのがわかる。それ以降、侍従長という明治天皇の側近であった実則は、「看護ノ為不参」しつづけたものの、同年2月1日、竹島は、「容体益危篤、終午後七時三十分逝去」するにいたった。そののち、2月4日条には、「今日午後一時出棺。葬式。予喪服徒歩、谷中ニ埋葬ス」としたためられている（岩壁義光・福井淳・梶田明宏・植山淳・川畑恵「昭和天皇御幼少期関係資料—「徳大寺実則日記」と「木戸孝正日記」一」〔『書陵部紀要』53, 2002年〕）。

こうした記述からすると、実則は、京都には行っておらず、ましてや、竹島は、清風館で他界したのではなかったことが確かめられる。しかるに、そうであったとしても、榮寿院（竹島）が清風館に幾度か滞在したことは、事実であったに相違あるまい。

- (35) 勝沼精蔵「三浦謹之助先生」・「西園寺公望公」（『桂堂夜話 邂逅と郷愁』2・4、黎明書房、1955年）。なお、勝沼は、後者において、主治医にかんし、「宮内大臣・内大臣の依嘱、文部大臣の通達によってそうなったのであるから、半ば公式といってもよいであろう」と書きつづけている。

- (36) たとえば、昭和15年11月25日付の大阪朝日新聞の記事「西園寺公爵遂に薨去 昨夜九時五十四分」を参照。

- (37) 中西亀太郎は、明治元年生まれ（京都府医師会編『京都の医学史』第8篇第8章第3節〔中野進執筆〕、思文閣出版、1980年）で、同34年9月に、京都帝国大学医科大学教授に就任した。そののち、大正9年9月に、停年をまたずに、京都帝国大学医学部教授を辞職している（菊池武彦「中西先生を憶ふ」〔『芝蘭会雑誌』28, 1942年〕）。亡くなったのは、昭和17年3月12日のことであった（小川陸之輔「弔辞」〔『芝蘭会雑誌』28〕）。

なお、いささか付言するに、明治32年7月の京都帝国大学医科大学の設置にともない、その12月には、京都帝国大学医科大学附属医院本館における診察がはじめられている。その第3代の院長に任じられたのが、中西亀太郎であった。

- (38) 北野慧『人間西園寺公』（大鳥書院、1941年）の「5 晩年の健康打診」には、「御殿場避暑の際は勝田医学士も時々診察に訪れ、京都清風荘滞在の時は中西博士が代り」とある。また、三戸時雄「わが師わが友 126 中西亀太郎先生」（『日本医事新報』1393, 1951年）には、「故山県公が京都の無隣庵へ、又故西園寺公が京都の清風荘或は興津の座漁荘へ逗留の場合に、病氣だと常に中西先生を招聘して居た」とみえる。

ちなみに、坐漁荘は、現在の静岡市清水区興津清見寺町に所在した公望の別邸で、大正8年9月に竣工した。公望は、死去する昭和15年11月まで、この坐漁荘を拠点とした。

こうした坐漁荘にかんする三戸時雄氏の指摘、すなわち、公望のそこへの「逗留の場合に、病氣だと常に中西先生を招聘して居た」という点については、あやまりであると判断される。ただし、先掲の「5 晩年の健康打診」では、昭和5年3月末より、公望が肺炎に苦しみ、生命の危険にさらされたおり、「勝沼主治医のほか東京から三浦謹之助博士、静岡から北村博士と柴医学士が動員され、京都から中西博士も診察陣に加はつた」としたためられている。

それを執筆した北野慧は、昭和4年から東京日日新聞社清水通信部の公望担当記者となっており、したがって、その内容にたいしては、信頼をよせてもよかろう。つまるところ、中西亀太郎は、坐漁荘にまで診療に向いた場合が存したことがおさえられる。

- (39) 荒船俊太郎「大正前・中期の西園寺公望と「元老制」の再編」(『日本歴史』760, 2011年)。
- (40) 写真番号003。
- (41) なお、『自 明治四十年／至 大正二年 京都田中村往復綴』のうち、9月11日付の物加波中次郎から「住友御本家／詰所」にあてられた書状(写真番号195)には、末弘威麿が「イカイチヨ」におかされたこと、その結果、「大学病院」に入院し、「大学中西先生」にかかるという点を話したことが書きつづられている。
- (42) 公望が「京都田中村」から原敬にあてた、大正3年3月17日付・同年7月6日付・大正4年4月14日付の書簡には、「医師の言」・「医師其他の勧告」・「医師の考」がみうけられる(林茂・原奎一郎編『原敬日記 第6巻 総索引・関係資料』のうちの「諸家来信 西園寺公望より」82・86・89〔福村出版株式会社, 1981年〕)。それら医師については、中西亀太郎に該当する可能性が高かろう。
- なお、公望の秘書であった原田熊雄によると、昭和7年10月20日の午後に、公望は、清風荘において、急に発熱したとする。それをうけて、原田は、清風荘にいる勝沼精蔵に、電話で公望の様子を聞いたところ、勝沼は、「よほど大事をとる必要があるから、当分自分も滞在して充分注意しますが、なほ念のため三浦博士にも来てもらつて下さい」と話したという。そこで、原田は、三浦謹之助に依頼し、その結果、次の日曜日に、清風荘に行くのが決定したとする(原田熊雄述『西園寺公と政局 第2巻一自昭和6年7月至昭和8年1月一』, 岩波書店, 1950年)。このような指摘によると、主治医である勝沼精蔵が、京都で公望を診察した場合もあったことが知られる。
- (43) 清風荘の執事であった神谷千二^{かみやせんじ}氏の「日誌」が、一部伝存しており、それは、すでに翻刻されるにいたっている(馬部隆弘「西園寺公望別邸清風荘の執事所蔵文書」〔『ヒストリア』242, 2014年〕)。
- (44) 小泉策太郎は、清風荘について、「其土地家屋に関する平生の雑費、留守番の給金まで、総て住友の会社が支弁し」たこと、「住友に属する留守番が、朝夕の掃除に任ずる外には、公が家の従属は一人も居ない」ことを述べている(注(12)前掲書)。

第3章 京都市白河街区跡・延勝寺跡・岡崎遺跡の発掘調査 I

伊藤淳史 富井 眞

1 調査の概要

調査地点は京都市左京区岡崎成勝寺町に所在し、鴨川の東方約700m位置する（図版1-463地点，図39）。古代末の白河街区の範囲に含まれ、六勝寺のひとつ延勝寺の跡地に比定されているとともに、下層には弥生～古墳時代を中心とする岡崎遺跡のひろがり知られてきた。現地では1972年にアパート建設に先立つ発掘調査が実施されており、池汀らしき落ち込みや瓦溜まりなどが報告されている〔六勝寺研究会1972〕。また、南側隣接地も近年調査され、井戸や多量の瓦を包含する整地層の広がりなどが確認されている（図39-A）〔京都市埋蔵文化財研究所2014〕⁽¹⁾。今回、敷地を購入した京都大学が既存のアパートを取り壊し、岡崎国際交流会館を新設することが計画されたため、2017年7月19日に試掘調査を実施し、既存建物周囲には遺跡が良好に遺存していることを確認したうえで、1972年の調査区を含む予定地全面516㎡について、2018年7月23日～11月9日に発掘調査した。なおこのうち、掘削土置き場の都合から、調査区東南隅の70㎡程度については10月23日以降に調査している。

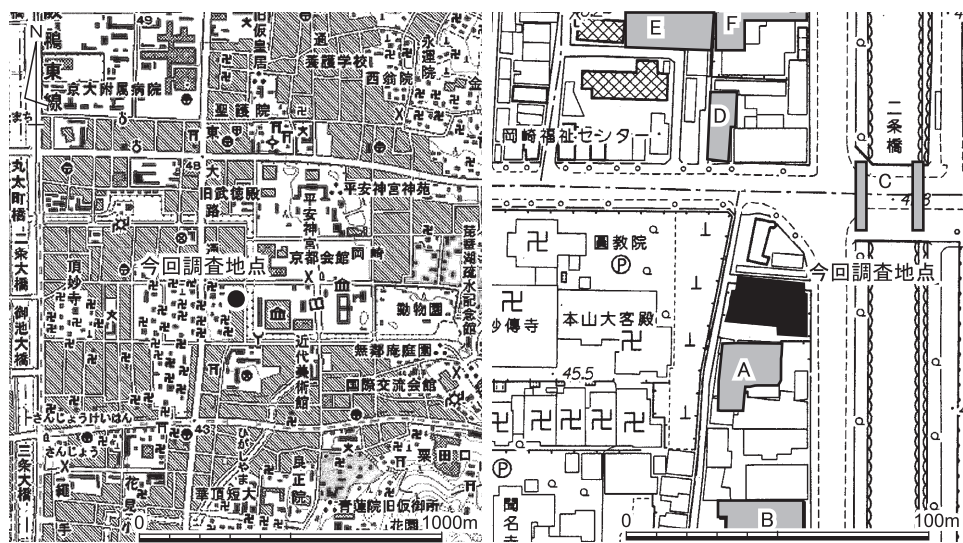


図39 調査地点の位置（左1/25000，右1/2500）

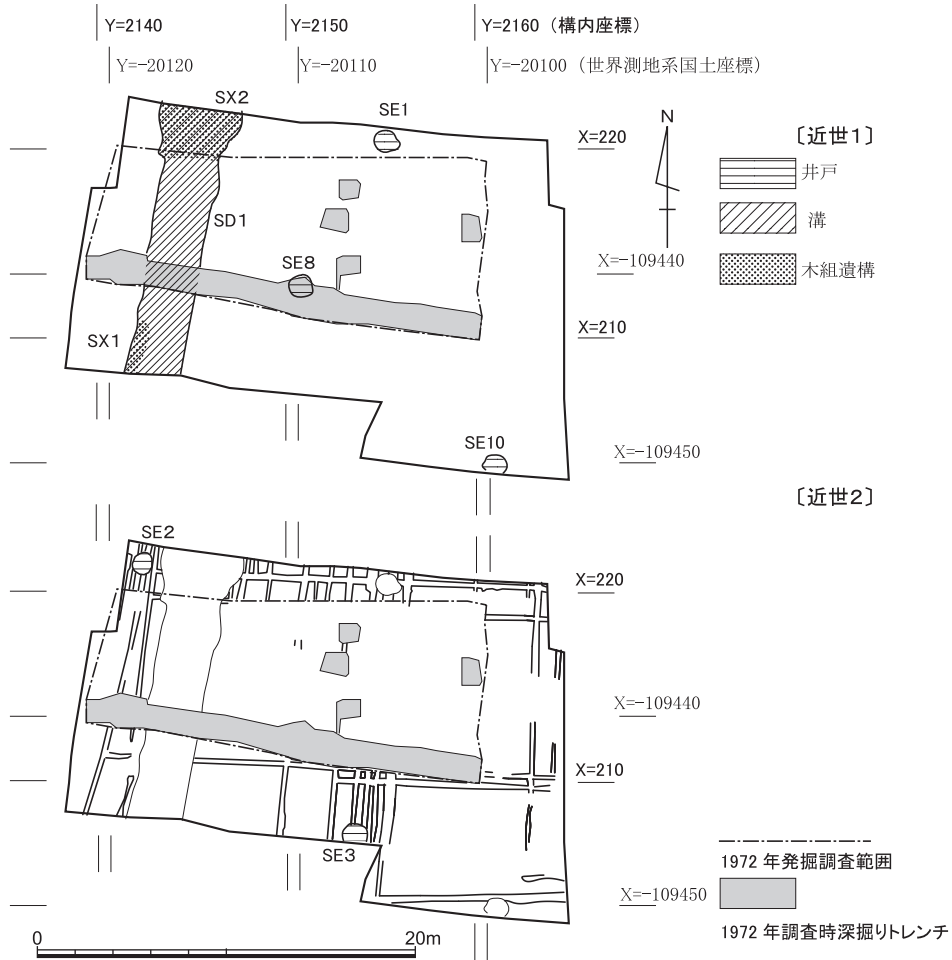


図40 遺構配置概略図(その1) 縮尺1/400

調査の結果、1972年の調査範囲においても(図40の一点破線範囲)、深掘りされたトレンチ部分を除いて、現地表から1m程度の深さに平安後期～鎌倉前期の黒褐色土層(同図基本層序の第5層)以下の堆積がほぼ残されていることが判明し、その周囲の未調査範囲では、中・近世の遺物包含層(第2層～第4層)も良好に遺存していた(図版10上段)。これら各層について、面的な遺構検出と掘り下げを順次進めたところ、近世については南北大溝や井戸、古代末～中世前期については複数の井戸や土器溜・瓦溜のほか方形の石敷土坑(SK1)、弥生～古墳時代については流路内からまとまった土器の出土をみるなど、各時期にわたる多様な成果があり、出土遺物の総量は整理箱240箱に及んだ。とくに、方

調査の概要

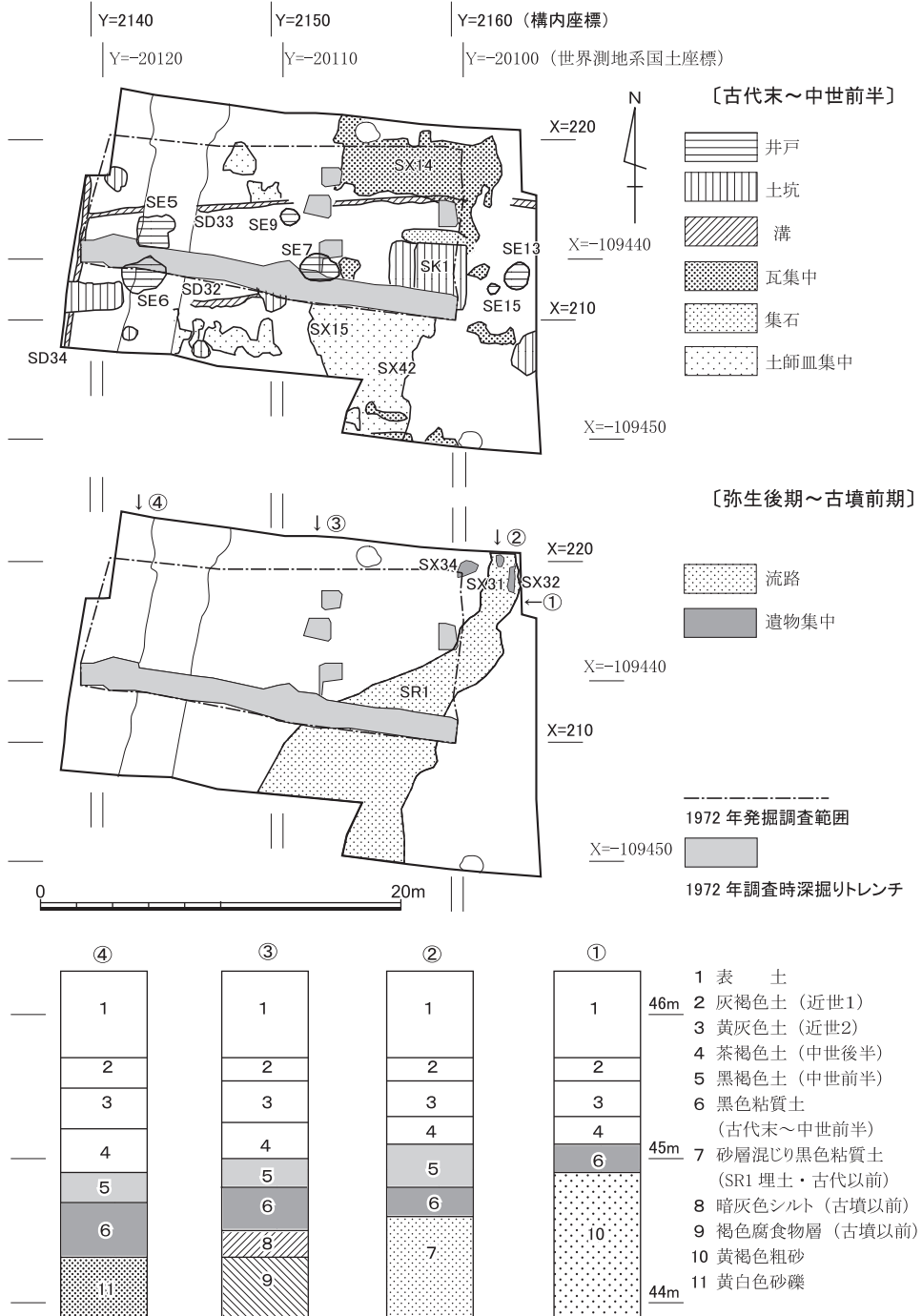


図41 遺構配置概略図 (その2) 縮尺1/400および調査区基本層序 縮尺1/50

形の石敷土坑（SK1）については類例を見ない貴重な事例であることから、重要性に鑑みて10月5日に近隣住民と関係者を対象に現地公開した。

以下、本節ではそれぞれの時期ごとの概略を示し（図40）、次節以降で層位と近世の調査成果について詳しく報告する。なお、中世以前の成果については、ここでの概略のみとし、来年度の年報において詳報する予定である。

近世の遺跡 黄灰色土（第3層）の上面で検出された近世1、茶褐色土（第4層）上面のそれを近世2としている。近世1についてはおおむね幕末期前後、近世2はおおむねそれ以前の江戸時代とみられる。近世1については、上面が削平されている範囲も多く、深い掘り込みをもつ井戸3基と南北大溝の確認にとどまる。このうち注目されるのは、幅3m深さ2m前後の大規模な南北大溝SD1で、丸太や板を組み合わせた護岸や堰ないし橋状の木組遺構SX1・SX2をともなっていた。調査地は近世岡崎村の西端に位置しているとともに、幕末期に設置された加賀藩邸敷地の西辺にも比定され、それらの土地境界との関連が注意される。近世2では、遺存している範囲全面で、黄灰色土を埋土とし、わずかに東に振れる方位をもつ南北・東西方向の小溝群が検出されている。耕作にかかわるものであろう。幕末に至るまで長らく耕作地であった様子がうかがえる。

古代末～中世の遺跡 茶褐色土（第4層）には中世後半期の14～15世紀代の遺物がわずかに包含されるが、この時期の遺構は全く確認されない。黒褐色土（第5層）および黒色粘質土（第6層）中には、12世紀後葉～13世紀前葉ころに比定される段階の土師器とともに陶磁器や瓦類が多量に含まれており、全域からこれらの遺物集中部をはじめとして、土坑・井戸などが多数見つかっている（図版10下）。なかでも注目されるのは、底面に角材を井桁状に組みその内部を石敷きした方形土坑SK1であり、類例のない特異遺構として性格の検討が課題となる。また、井戸や土坑内では木製遺物が良好に遺存しており、井戸の水溜として据えられた曲物のひとつに墨書が確認されていることも特筆される。

弥生後期～古墳前期の遺跡 調査区の東辺では、基盤の黄褐色粗砂層（第10層）が高まっており、西へと下る斜面地が形成され、その裾部を蛇行するように砂層をまじえた粘質土を中心に埋積する流路SR1が把握された。また、その西肩一帯にもシルトや有機物の腐食層がひろがっていた。これらの埋積の上部を中心に、弥生後期末～庄内式期の土器が多数出土しており、とくに調査区東北部の斜面裾には良好に遺存する個体が集中する傾向がみられた（SX31・32・34）。調査地の東～北方の微高地となっている範囲に、岡崎遺跡にかかわる居住域や墓域などが展開している可能性を示唆する情報と言えよう。

2 層 位

本調査区の現地形はおよそ平坦で、標高は46.3~46.6mをはかる。調査区には中央一帯に1972年の発掘調査区が内包されていることから、地層の断面観察はおもに北壁と南壁でおこなった(図版13, 図42・43)。第1層の表土・攪乱は、厚さ80cm程度。底面は平坦なので、広く均質に削平したことがうかがえ、そこから上位50cmの厚みで砂質土と粒径10mm程度までの灰白色粗砂との互層が、西下がりである。ここまでは明治時代の堆積と思われる。近代に、東方から土砂を投じて一帯を大規模に造成したことがうかがえる。

第2層は灰褐色土で、層厚は20cm前後で底面は平坦である。幕末から明治にかけての堆積と思われる。機械により掘削した。窪みや遺構に堆積している部分(第2'層)には黒色粘質土のようなブロックが目立つ。

第3層は黄灰色土で、江戸時代の堆積層である。調査区の南辺および北辺にのみ残存していた厚さ30cmほどの耕作土で、底面はおよそ平坦である。北辺では、基質の違いで3細分でき、上位(第3 a層)と下位(第3 c層)は基質が砂質だが中位(第3 b層)はシルト~粘土質で、粒径が10mmを超えるような礫はおもに下部にしか認められず、そうした大きさの礫はほとんど堆積岩である。ただし、Y=2156辺りから東側の第3 b層は、徐々に、基質が粗くなるとともに内包される10mm台までの砂礫の比率も高くなり、第3 c層との境界が不明瞭になる。また、南北大溝SD1以西では、下部ほど基質が粗粒だが、中部から上部にかけてでもシルト質~粘土質になる部分は抽出しづらい。

これに対して南辺では、およそ上位10cmと下位5cmは、基質が粘土からシルトで、内包される砂粒も5mm程度までの花崗岩および堆積岩だが、中位は砂質で、含まれる砂粒も10mm程度までのものが主体で30mm台の堆積岩も散在する。第3層の内部に見られる堆積物の様相が南北で対応しないが、第2層の底面も第4層の上面もおよそ平坦で南北で標高がほとんど変わらないことから、その原因は、堆積の前後の整地や削平による掘削深度の違いとは考えにくい。第3 b層はSD1の埋土に連なることがうかがえるように(図版13-3)、大溝SD1を流れる水が溢れたときに第3層の基質となる碎屑物をもたらされたと考えられるならば、大溝から溢れるときの水流の強弱を反映しているのかもしれない。

第4層はおよそ砂質の茶褐色土。中世後半までの堆積層である。礫の種類や大きさは第3 c層と同様だが、遺物を多く含む。北辺には第3層との境界付近には黒みがかっている部分がある(第4 a層)。

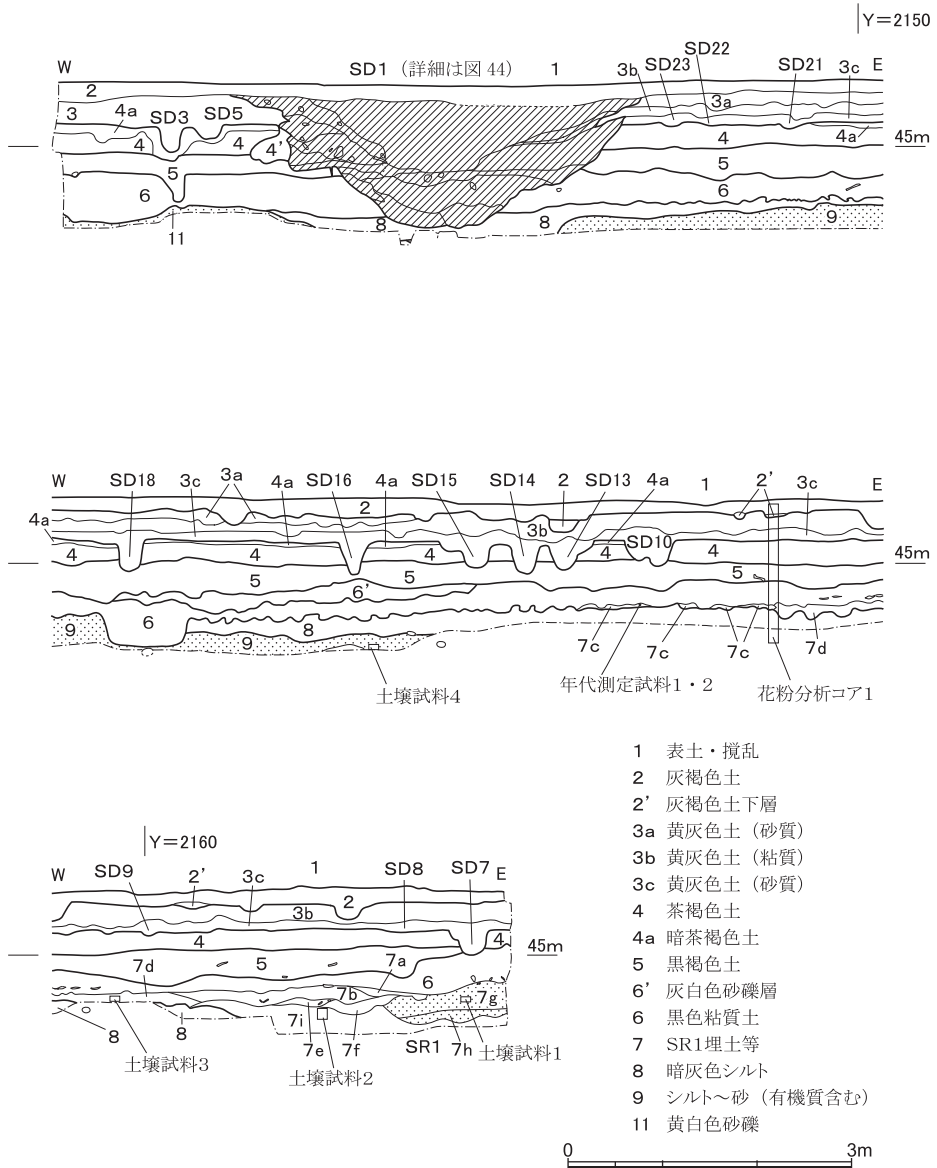


図42 北壁の層位 縮尺1/80

層 位

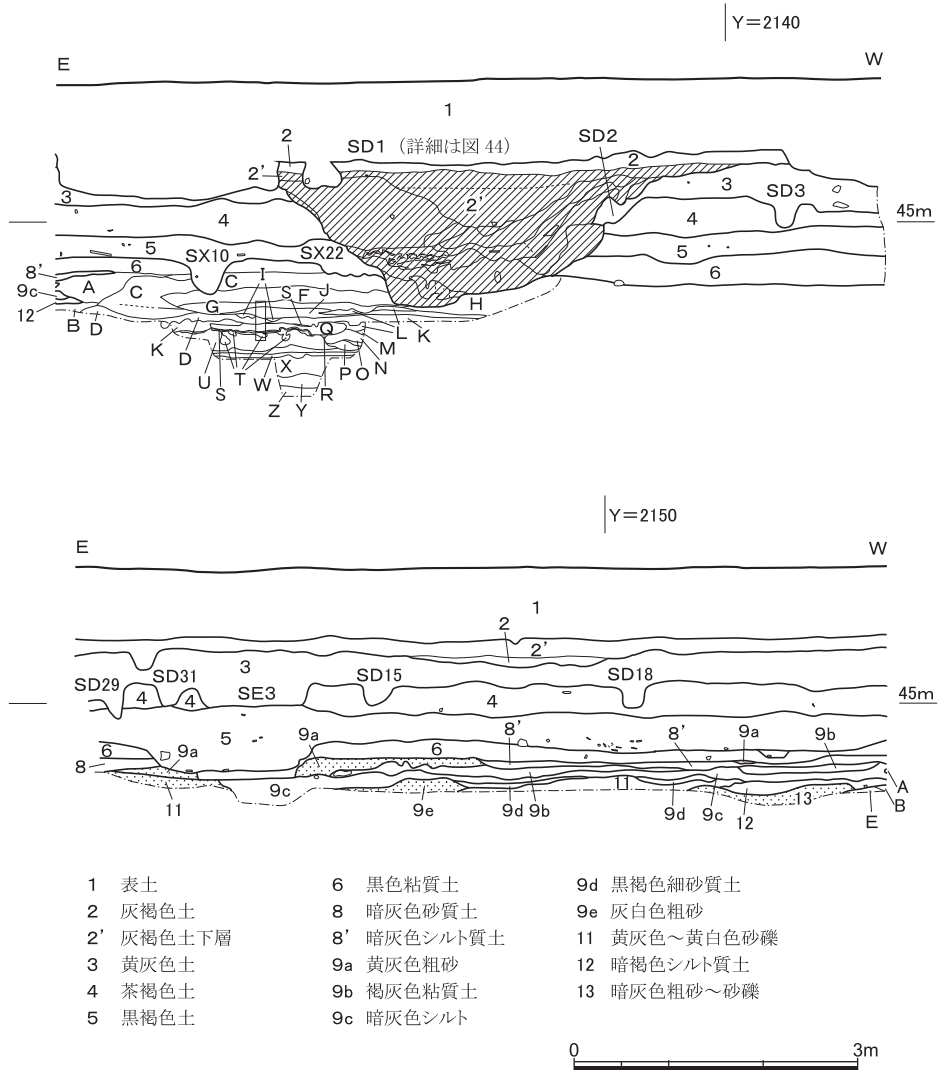


図43 南壁の層位 縮尺1/80

第5層は黒褐色土で、基質は第4層と同様で色調が漸次的に変化しており、遺物も中世前半までしか含まない。含有物については、礫は、種類は第4層と同様だが大きいものが目立つようになる。炭化物も目立ち、遺物量も多くなる。

第6層は黒色粘質土で、遺物は量がかなり少なくなるが年代はあまり変わらず、基質や粘性は、西辺および北辺では、第5層から漸次的に変化している。北辺では、Y=2151～

2155辺りの第5層との境界に、径100mm大の礫を含む粗砂が分布する土石流状の堆積物がある（第6'層）。また、Y=2158～2159辺りには灰白色砂が点々とレンズ状に入るので、時折小さな出水があったことがうかがえる。

第7層は、調査区東半の自然流路SR1やその出水にかかわる堆積物。

第8層は暗灰色シルト。北辺では、Y=2154辺りを境に、西は木片や炭化物を多く含むが、東は分解が進んでいて有機質が少ない。南辺では、Y=2155以東は砂粒が少なく有機質が多いが、以西では砂粒が多くて有機質が少なく土壌化が進んでいる。出土遺物から、弥生時代後期頃までの堆積と思われる。なお、北壁のY=2148～2158辺りでは上部が波打ったように変形しているのを確認できる。第6層が堆積している間の滞水期に地震があったのかもしれない。

第8層の下位の堆積は複雑で、まとめて第9層とした。出土遺物から、これも弥生時代後期頃までの堆積と思われる。北辺では、腐食層や有機質を多く含むシルト～粗砂までの砂層が堆積しており、東側ほど木片の多い腐食分が目立つ。南辺では、北辺よりも土壌化が進んでいるが、北辺と同様に有機質を含む砂層が、分布する部分もある。北壁の堆積を見ると、Y=2151以西は最上部に青灰色シルトが堆積する。その下位は有機質を多く含む細砂から粗砂の水性堆積層と腐食層の互層で、Y=2151～2154にかけてはその互層が最上部となって、青灰色を呈するシルトは直上の第8層に斑状にいく込むようにしか分布しない。北辺はあまり安定的でない環境だったといえる。南壁の堆積では、上部に有機質をあまり含まない粒径5mmくらいまでの粗砂（第9a層）や分解が進んだ土壌化層（第9b層）が堆積するが、その下位には有機質を含むシルト（第9c層）や粒径3mm程度までの粗砂（第9e層）、あるいは土壌化層（第9d層）が堆積するので、南辺は、北辺よりは安定的で陸化しやすかったのだろう。

第10層は、自然流路SR1の東肩となっている粒径10mmくらいまでの黄褐色粗砂で、東壁際の北半でしか分布を確認できなかった（図41-①）。遺物も認められない。

第11層は黄白色～黄灰色の粗砂を主体とする無遺物の砂礫層。北壁では、Y=2144以西で確認できた。上部は花崗岩が主体の3～5mmの粗砂で下部は粒径20～30mmの堆積岩も含むようになる。南壁ではY=2150以東を確認でき、10mmくらいまでの花崗岩と堆積岩が認められる。北壁と南壁の第11層が一連の堆積かどうかは不明。

南壁では、第11層の下位に無遺物で有機質を多く含む土壌化層（第12層）や同じく有機質を多く含む無遺物の上方細粒化する砂層（第13層）が認められる。

近世の遺構

調査区東南辺には、第6層の下位に青灰色を呈して上方細粒化する粒径が1mmより小さい厚い無遺物の堆積が認められた(図43のA～Z層のうちのC・F・G・H層)。この層群の東縁(Y=2147辺り)は、非常に硬質であるとともに、5mmくらいまでのおもに花崗岩の砂粒を含むようになり、黄色味がかってやや土壌化の進んでいないシルト質土～砂質土になる(A・B層)。このシルト質土と、より東辺の第9～11層までの堆積の時間的關係はよくわからないが、A層については、その硬さからかなり古い堆積物と思われ、東辺の堆積層の基質を運んだ水流によって東部を徐々に浸食されたと解釈している。

南北の壁面からは、古環境に関するデータを得るために、各種の試料を採取している。北壁では、年代測定用の種実や大型植物遺体分析用の土壌をサンプリングしたほか、花粉分析用の柱状コアも採取している。南壁では、Y=2144辺りの標高43.8～43.9mで火山灰堆積が認められたため(Q・S層)、その試料採取とともに、その前後の堆積層も含めた花粉分析用の柱状コアも採取したほか、断ち割りを入れて、火山灰層の下位の堆積も、標高41.9mまでは確認している。(中世以前については来年度の年報で詳述する予定である。)

3 近世の遺構

第3層(黄灰色土)上面が近世の第1遺構面で、そこで検出した遺構を近世1とする。そして、第2遺構面の第4層(茶褐色土)上面で検出した、第3層を埋土とする遺構を、近世2とする。

(1) 近世1の遺構(図版11～16, 図40・44～46)

2基の木組を有する大溝1条と、3基の井戸を検出した(図版11上, 図40)。

南北大溝SD1 SD1は(図版12)、調査区西辺を南北にはしる大溝で、南接する京都市調査区でも検出されている。本調査区では、北辺と南辺を除く大半は、1972年の調査の際に掘削され既に埋め戻されていたが、北辺では、攪乱除去後に黄灰色土上面で検出できた。埋土は(図版13, 図44)、北辺でも南辺でも、上部に灰褐色土が堆積しており、包含遺物に明治期のものは認められない。北壁の層位によれば、黄灰色土の中部で基質がシルトなどの細粒分となっている部分(第3b層)がSD1からの氾濫を示していると判断できるので(図版13-3)、遅くとも黄灰色土の堆積中には存在していたことになる。埋土下部は、北辺でも南辺でも粘質土が主体となる。

この埋土下部の粘質土と埋土上部の灰褐色土の間の堆積は複雑で、基質がシルト～5mm程度の粗砂の薄層が互層になったり、土壌化していたりするが、いずれも面的に広くは展

開しない。南辺では、砂層はあまり認められず、あっても堆積は薄く粒径は3mm程度におさまる。北辺では、土を含まずに50mm台の礫も含む粗砂層の堆積する部分もあり、そうした粗砂や粒径が1mm程度の細砂でも明瞭なラミナを確認できる場合もあるので、水が勢いを変えながら流れてきたことがわかる。平面的には流向を確定できなかったが、地形および後述する木組遺構SX2の構造から、SD1は南流する水路だったといえる。

SD1には、北辺には堰と思われる木組遺構SX2が、南辺の西肩には土留めと思われる木組遺構SX1が、それぞれあり、ともに1972年の調査区の外側に残存していた（図版12）。北辺の堆積では目立つ砂礫層が南辺でほとんど認められないのは、SX2の作用によると思われる。SD1は、少なくともSX2以南では、通常は空堀と言える状況だったと判断する。なお、SD1の遺物は、SX2より南の1972年の京都市調査区までの残存部では、砂が目立つようになるまでの上層とそれ以下の2層に分けて回収したが、南辺では、砂層の堆積が不均質だったので埋土一括で回収した。

木組遺構SX2 SD1内の調査区北壁際で検出した、木材で構築された堰のような取水施設（図版14・15、図45・46）。全体的に西側の遺存状態が悪いが、全体の規模は、幅4m、奥行き2mである。東西方向を軸とする横木や横板の南側に杭を打ち込んでいるので、北側が上流と判断できる。横木・横板を受ける杭は、上流側である北から順に5列ある。発掘調査後の立合調査で北壁の北側1m余りまで確認した際には、木材の構造物を確認できなかったため、木組は第1列より北には広がらない。

第1列のみ横板を有するが、その横板の下端は44.4mをはかる。横板を下流側で受ける杭は（W16～W14・W35A・W20～W23・W37A）ほとんどが上部を欠損しているが、最も東のW37Aの頭部で標高45.3mをはかるので、SX2の残存高は、0.9mとなる。また、SD1の両肩は、第1～3列までは東西に大きく拡幅されているとともに、第1～4列まででは土留め状の壁体をあてがわれている。

第1列の横板は、東側と西側で遺存状態に大きな違いがあるが、最下部には、両肩の第6層がテラス状に張り出した部分に橋を渡すように、杭状に先端が加工された丸太の横木（W18）が横位に置かれている（図版15-1）。それに接して下端を揃えるように、東側と西側それぞれに横板（W24下・W17）がある。西側の板（W17）は遺存状態も悪いが、どちらの横板もSD1中央側の小口面は生きており、両者の間隔は40cm程度ある。

横板は、遺存状態の良い東側を見ると、W24下の上にW24上が載っている。どちらも厚さ3cm前後のニヨウマツの板材で、当初は幅60cm前後の一枚板と認識していた程に隙間が

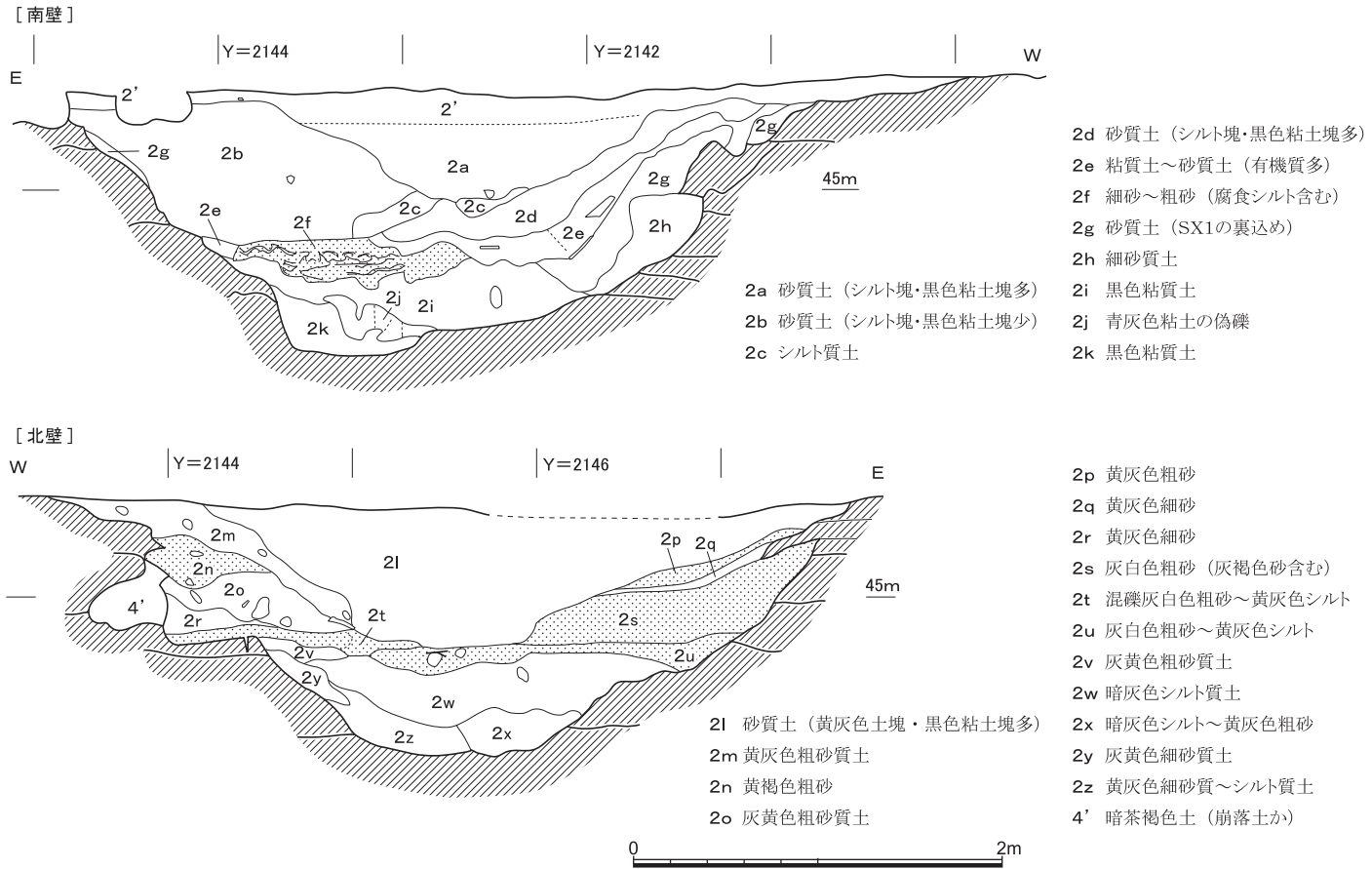


図44 大溝SD1の層位 縮尺1/40

全くない状態で載っていた。しかし、両者の継ぎ目に接着などの痕跡は確認できなかった。横板の上流側には、2段重ねで大径のスギの辺材（W25上・下）を宛がう（図版15-2）。この第1列の北側には、平坦面をもつ人頭大以上の礫が数点あり、横板に宛がった辺材や横木（W18）を上流側から押さえ込んでいたものと思われる。

西側ではW17の上位には構造材が認められないが、西側も同様の構造だったと仮定すると、東西の横板の間にある東西幅40cmの空隙は、水量調節用の水門だった可能性が高い。そうすると、その空隙部で丸太（W18）の数cm上位にあったスギの薄板（W19）は、水門の部材かもしれない。また、東端の上流側には、残存長80cm程の板材（W26）が、立てられた状態で出土している（図版15-3）。地盤のシルト層に差し込まれてはいないことからこの場で機能したとは考えがたく、水門部に上から差し込んで使う部材の一つが不使用時に置かれていたのかもしれない。

最上位の横板（W24上）の上端面は、小口面と同じく製材時のきれいな面が残るが、この板を下流側で受けていた杭（W21・22・23）はおおよそ直立しているものの、いずれもその数cm上位で折損しており、横板の西端の杭（W20）はそれより下位で折損している。また、西側の横板（W17）では、上縁が製材時の面をとどめているかは不明だが、それを受けた杭（W35A・W15）も、横板の上縁とおおよそ同じくらいの高さまでしか残っていない。

第2～5列までの下流側4列は、第3列を除き、1本の横木が渡るだけである。第3列には横木は認められずそれを支えた杭（W8・W9）のみが残るが、第2～5列は、おおよそ等間隔で平行しており、これら4列はいずれも、横木を受ける杭（W1・W2・W5・W6・W8・W9・W13）の頂部平坦面が標高44.7m台で揃っていて、横木を実質的に1本分しか受け止められない深さまで打ち込まれている（図版15-4）。SD1の両肩が窄まる第3～5列では、左右両肩のテラス状の平坦部に杭が穿たれるだけで中央には杭はないが、第2列では、横木（W11）を受ける杭は、東西の両端近くだけでなく（W12・W27）、中央にもある（W13）。なお、第2列と第1列の間は、西側がやや広がっている。

東肩と西肩には、上部が竹垣で下部が横板組みの土留め状の壁体が構築されている。遺存状態の良い東肩では、ニヨウマツの横板1枚（W30）の上に15本以上のタケを垣根状に積み重ね（W31）、それらを溝の立ち上がりラインに沿うように斜位に打ち込んだスギの丸太杭（W27～W29）で支えている。横板と竹垣は、北端ではラインが揃って第1列の横板（W24上）に接しているが、南端では、横板が支持杭（W29）より下流側に延びているのに対して竹垣はおおよそ支持杭の裏で終わっている。壁体の製作では、南側より北側に注

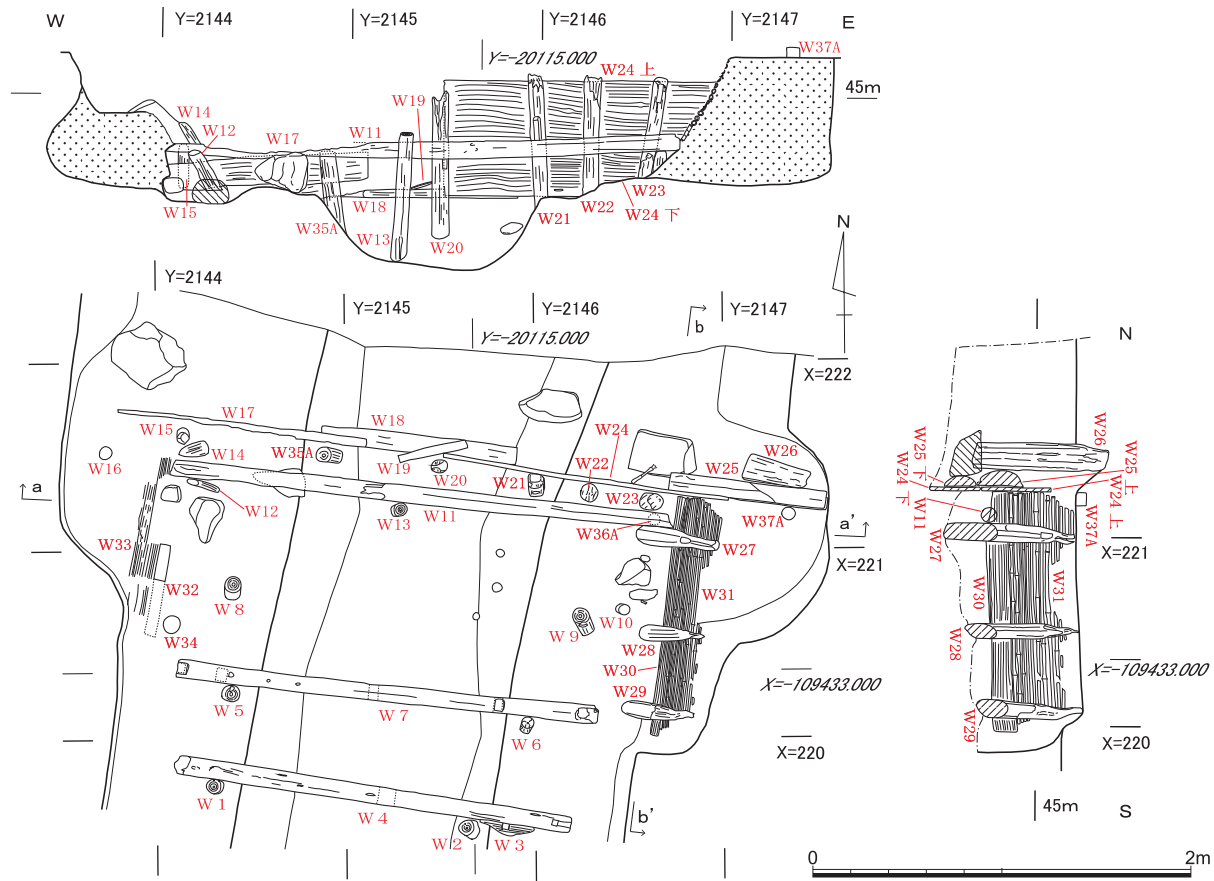


図45 木組遺構 S X 2 縮尺1/80

意がより払われていたと思われる。

西肩は、遺存状態が悪いが、壁面に横方向の繊維が見える有機質の残滓があり、下部は板状で (W32)、上部は竹管状だった (W33)。残存するのは、北端は第 2 列までで南端は第 4 列近くまでである。そのすぐ東には、縦方向の繊維が残る杭状の木質 (W34) を検出しているので、東肩と同様の土留め状構造で、配置も規模も東肩に対応すると思われる。

S X 2 では、第 3 列には杭 W 8・W 9 が受ける横木が存在しないことから、全 5 列が最終機能時点で同時に機能していたかは断言できないものの、上述の状況は、配置プランにも構築作業にも、全体的な計画性をうかがわせる。少なくとも当初は、両肩の壁体と合わせて 5 列一帯の木組として、堰の機能を想定して構築されたと考えたい。なお、木組全体では明確な補修痕跡は見いだしがたい。

構成材は、基本的に針葉樹で、杭にはスギやヒノキ、板にはスギとともにニヨウマツが用いられている。しかし、これらのうち、横木の W 4・W 7 は、体部にはぞ継ぎ穴などが残っており、とくに W 4 は釘で W 3 と結合されていたこともあって、建築物などに用いられた部材を転用したと判断できる (図版 15-5, 図 46)。杭の W 9・W 20・W 21・W 27 にも、ほぞの盲孔ないし穿孔があるので、横木と同様の部材を裁断して杭に転用したと思われる。また、横板に上流側から宛がわれた横木 (W 18) は、西側の先端が杭状に面取りされているが、杭として機能していないので、これも意図して施した加工ではなかったと判断できる。そのほか、杭 W 1・W 5 の頂部平坦面や W 4・W 7 の側面をはじめ、釘の打ち込み箇所があるが、S X 2 のなかで別の材と接続しているわけではなく、ここに持ち込まれる前に紙札などを留めていたかのようなものである。以上より、構造材のすべてないし多くは、S X 2 の構築を目的に伐採・製材されたものではない転用材と判断している。

S X 2 の内部の堆積は複雑だが、およそ、上部に灰褐色土、その下の中位には粗砂を主体とするシルト～砂の層がある。埋土の掘削では、この中位の砂層およびその上下の 3 層に分けて遺物を回収した。また、東西の肩部で構築材のあるところでは裏込めの遺物も分離して回収している。下部の堆積は、西辺では、北壁から第 4 列辺りまでは 50mm 台の礫も含む砂礫層が主体だが (図版 14-1, 15-1・6)、第 5 列になると礫径は小さくなり上方薄層化し、S D 1 全体の下部と同じく黒みがかった粘質土が主体となって、わずかに粗砂層を介在する程度になる (図版 16-1)。東辺は、西辺ほどの粒径や層厚ではないものの、上流ほど粘質土よりも砂質層が目立ち、下流に向かっての傾向も西辺と同様で、第 5 列ではほとんどが粘質土の堆積である。また、第 2 列南側の中央付近の底面は、下位の堆積の

近世の遺構

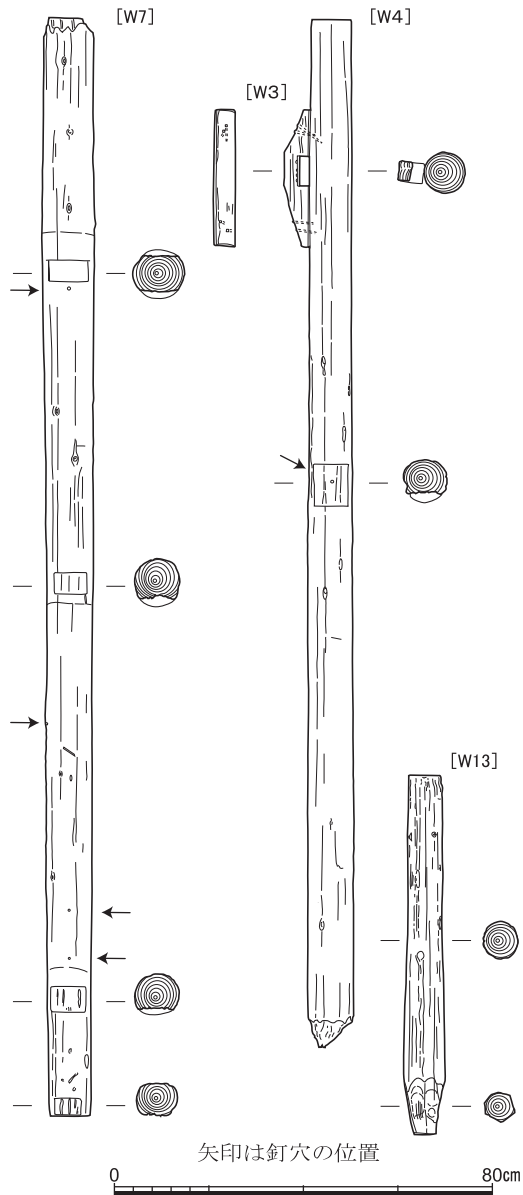


図46 木組遺構 S X 2 の構造材 縮尺1/16

黄白色砂層（第11層）と判別できない深さまで滝壺状に粗砂を含んで埋積していた（図版16-2）。

こうした堆積状況も踏まえると、SX2は、テラス状の平坦面が本来の底面だった大溝SD1に、必要に応じて粒径10mm程度の砂を流せる程度までの強さの水が北方からSD1に引き込まれるときの、堰として機能するべく構築されたと判断する。導水は、ここで深さ約1mのダム湖状態まで溜まった後で少なくとも左岸（＝東側）に溢流して、一帯に黄灰色土の中層の堆積をもたらせたこともあった。細粒分を堆積させる田畑の滋養に供したこともあったのだろう。機能した期間は不明だが、最終的には、50mm台の礫をもたらす強い水流によって、西半が損壊し、西肩も大きく破損・劣化して（図版13-4、14-1）、堰としては機能不全になったと思われる。この損壊は、第1列の横木（W18）の西端があたかも砂礫層に挟まれているかのような堆積状況が示すように（図版15-1）、SD1の本来の基底部の特に西側が洗掘されて、横板（W17）より下位にトンネル状の隙間ができて、水の流れが西側に集中したことが大きく影響したと思われる。堰の西側に水が進んだろうことは、第1列と第2列の隙間が西側ほど広がっていることからもうかがえる。

年代については、包含遺物では、上位堆積層には明治期の遺物は認められないが、下位堆積層からは端反りの染付の椀（II52）が出土している。したがって、19世紀中頃までは機能していて明治までには埋没した遺構と判断している。構築年代は、層位的には上部では第3a層（黄灰色土）を切り込む一方で中位の埋土層は第3b層連なる部分があることと、裏込めから出土した遺物に関する限りでは、18世紀にさかのぼりえる。

木組遺構SX1 SD1西肩に構築された土留めと思われる板組で（図版16-3）、調査区南壁際で検出した。南端は調査区外へと続いているが、確認できた部分では幅2.6mをはかる。スギやヒノキなど針葉樹の丸太を縦に半裁した杭を、60cmほどの間隔で地盤のシルト層に深く打ち込んで、裁断面側でスギやニヨウマツの横板を支えている。横板は、下の段に上の段が重なっており、南壁際では3段目まで確認できるが、遺存状態が良いのは下から2段目までで、SX2のようにそれより上位に竹垣があったかは不明である。最下段の板の下端から最上部の板材の残存部上縁までの高さは0.4mをはかる。対岸の東肩には同様の構築物は認められない。横板の継ぎ目が北から4本目の杭の裏側にあり、南側の板が北側の板の上に4cm程度被さっているのを確認できたので、（図版16-4）下流側が上に乗っていることになる。したがって、SX1は、水流があることを想定した木組とは思いがたい。

近世の遺物

S X 1の構築年代は、層位的には黄灰色土の堆積中ないしそれ以後である。板組の下部で板組に近接して近世の陶器や瓦が出土したが、いずれも細片で時期を限定できなかった。また、裏込めから出土した遺物は、中世の土師器や瓦の破片などで、近世のものは見られなかった。

井戸 S E 1・8・10 北壁際中央の S E 1は(図版16-5)、井筒が、上部は漆喰、下部はニヨウマツなどの15枚の板材を縦に組んだ木桶で構成される。検出面の標高は45.1mだが、底面標高は確認できなかった。調査区中央の S E 8は(図版16-6)、1972年の調査区内にあり、井筒の下部は S E 1と同様の構造で、残存する最下段の縦板は13枚。その上にもう一段の縦板組みがあるが、途中で削平されている。井筒上部の漆喰の下端がわずかに残存する。底面の標高は43.1m。東南辺の S E 10は、桶の木枠の痕跡をできた。漆喰を用いていないので、 S E 1・8に先行するのかもしれない。底面の標高は43.8m。

(2) 近世2の遺構

2基の土坑と、南北・東西方向の小溝群を検出した(図版11下、図40)。西北隅の S E 2は隅丸方形の土坑で、底面標高は44.3m。野壺だろうか。中央南壁際で検出した S E 3も野壺と思われる円形土坑。底面標高は43.6m。わずかに東に振れる方位をもって調査区全面に広がる小溝群は、磁器や砥石などを包含していたが(II114~II117)、ほとんどが細片で出土量も少なく、いずれも散在していた。耕作に関わる溝と判断する。

4 近世の遺物

コンテナ17箱分の遺物が出土した。近世1の遺構出土の遺物、近世2の遺構出土遺物、包含層などから出土した近世遺物、の順に説明する(図47~56)。

SD1出土遺物(II1~II32) II1は、土師器小皿で器壁が摩滅している。II2~II10は陶器で、II2・II3は京・信楽系の椀。II3の外側は、鉄釉の施文後に釉をかけていない。II4は高台に切り込みの入る巴高台の京・信楽系の小杯。II5・II6は土瓶の蓋で、II5の内面は煤の付着が著しい。II6は白化粧に緑釉・鉄釉で上絵をつける。II7は京・信楽系の徳利で、焼け歪んでいる。II8は播り鉢。II9・II10は京・信楽系で、前者は仏飯で後者は灯明皿。II11~II18は磁器で、II11~II17は椀。II11はくらわんかで、II12~II14は広東椀。II15には上絵があり、文様を描かないII16の底裏の墨書は「阪」か。II17は筒形。II18は大鉢の底部で、蛇の目凹形高台。

II19は埴塙で、外面には、溶銅を流すために本体をユトリハシで挟み上げるときの引っ

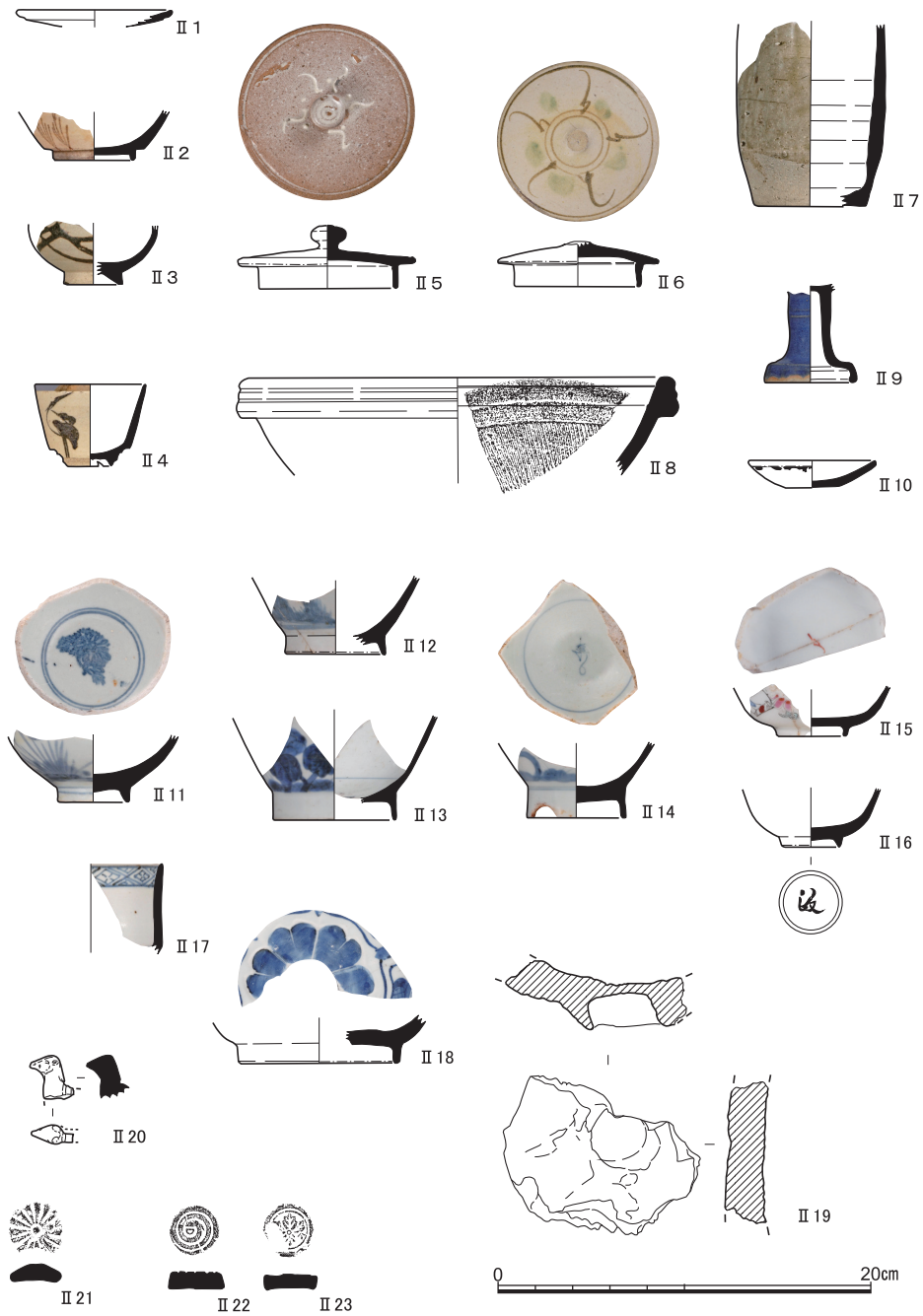


図47 SD 1 出土遺物(1) (II 1 土師器, II 2 ~ II 10 陶器, II 11 ~ II 18 磁器, II 19 埴塼, II 20 ~ II 23 土製品)

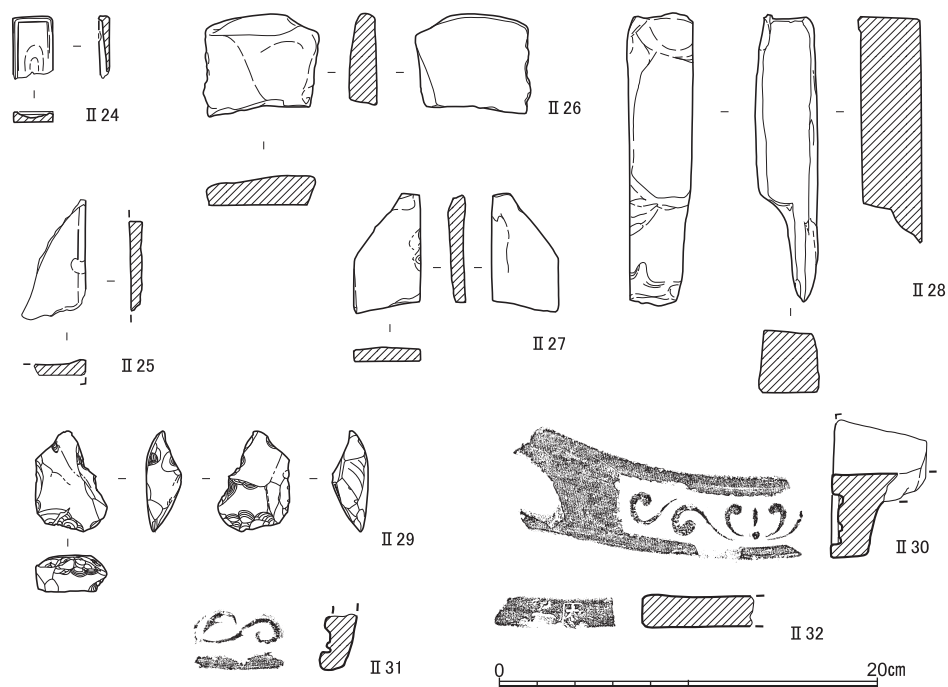


図48 S D 1 出土遺物(2) (II 24～II 29石製品, II 30～II 32瓦)

かり用の凹みがある。II 20・II 21は土製の玩具で、II 22・II 23は泥メンコ。II 24・II 25は硯。II 26～II 28は砥石。II 27・II 28は泥岩ないし粘板岩で、II 26は凝灰岩か。II 29は緑色チャート製の火打ち石。II 30は軒棧瓦。II 31・II 32は平瓦ないし棧瓦で、前者は瓦当の一部で後者は端面に刻印を有する。

S X 2 出土遺物 (II 33～II 89) II 33～II 48は陶器で、II 33～II 35は椀。高台の大半を失っているII 33の小椀には、草花文の上絵がある。II 34は、胴下半が四方に尖る内外施釉の小椀で、色調は外面が灰色で口端および内面が白色を呈する。京・信楽系と思われるII 35の底裏には、「錦□□」の刻印がある。幕末の錦頂山か〔加藤編1972〕。II 36は淡桃色を呈する信楽の洗で、外面にも底部を除いて釉がかかる。II 37は軟質施釉陶器の手塩皿で、見込みは草花文か。II 38は内外面施釉の徳利で、焼きが甘いので軟質施釉陶器に似る。飛び鉋に鉄釉のII 39は鍋。II 40は外面施釉の急須蓋。内面に四角囲みで「寶山」の刻印があるが、何代目かはわからない。II 41～II 43は播り鉢。II 44は、信楽の灯明皿で、口縁内外面ともに煤が付着する。II 45は信楽の灯明受け皿。II 46は信楽と思われる鉄釉の灯火具。II 47・II 48は焼き締め陶器で、ともに植木鉢か。

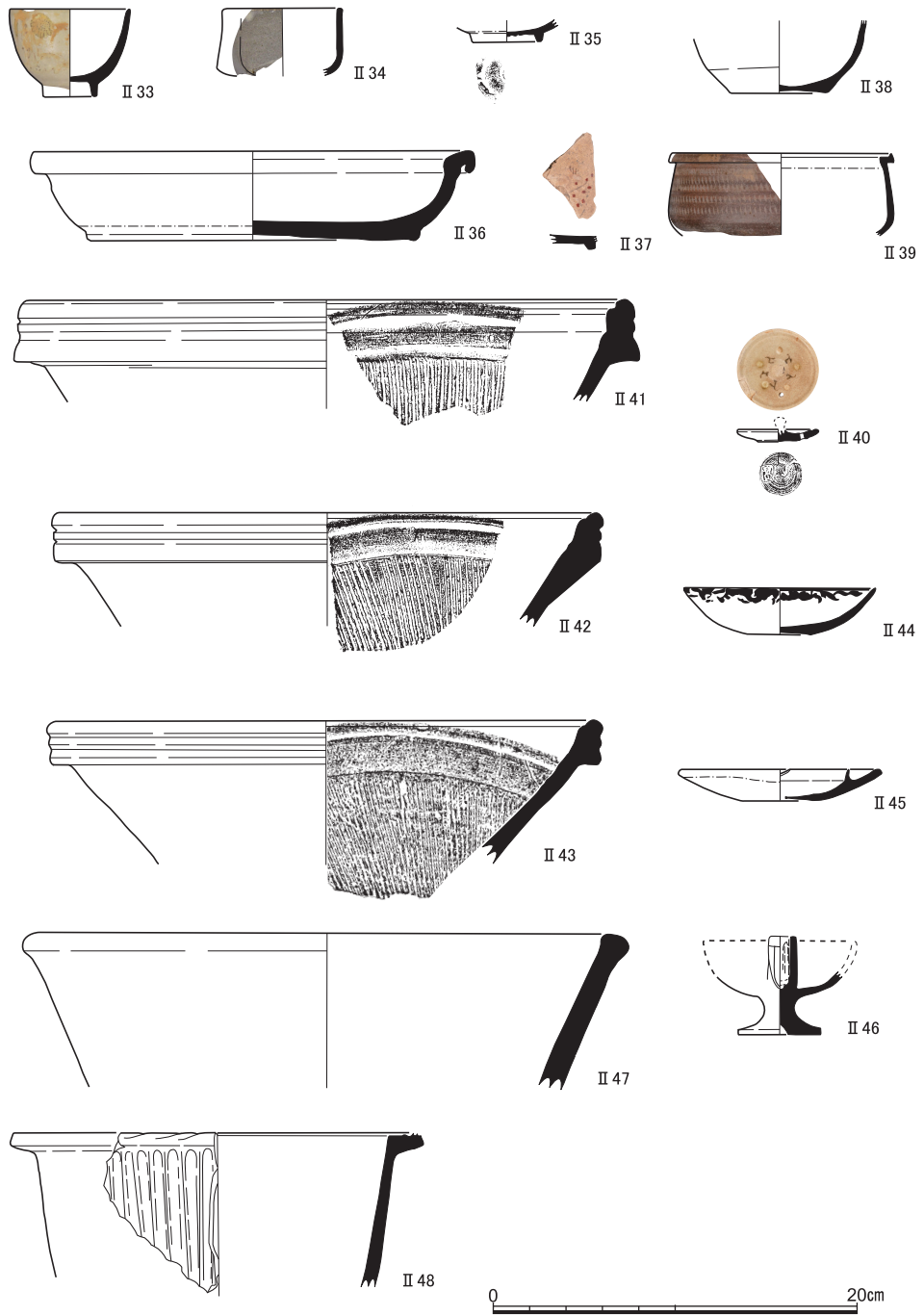


図49 S X 2 出土遺物(1) (II 33~ II 48陶器)

Ⅱ49～Ⅱ61は磁器。Ⅱ49～Ⅱ56は椀で、Ⅱ51・Ⅱ52は端反り。Ⅱ55は絵付けのない小杯で、Ⅱ56は筒形。Ⅱ57～Ⅱ60は蓋。Ⅱ61の鉢は、外面が型押しによると思われる草花文で、見込みは呉須による絵付け。Ⅱ62・Ⅱ63は窯道具で、前者がピンで後者が輪トチン。Ⅱ64は、上面および側面上半が著しく被熱しており、焼き台と思われる。Ⅱ65～Ⅱ69は柑槁。Ⅱ65は底部近くで割れている。Ⅱ66は底部近くと思われる。Ⅱ67は栓のような形状だが、軸部にもガラス化している部分が認められる。Ⅱ68・Ⅱ69はドーナツ状で、測縁が弧を描き中央は穿孔。穿孔部の表面もよく被熱している。Ⅱ67の軸部とは径が異なるが、栓を受けるための孔だったと思われる。

Ⅱ70～Ⅱ81は土製の玩具類。Ⅱ71は頂部の穿孔部内面にも緑釉がかかる。Ⅱ72は人形の台座だろう。Ⅱ76は残存部に「文銀」とある。Ⅱ82・Ⅱ83は砥石。Ⅱ84は緑色チャート製の

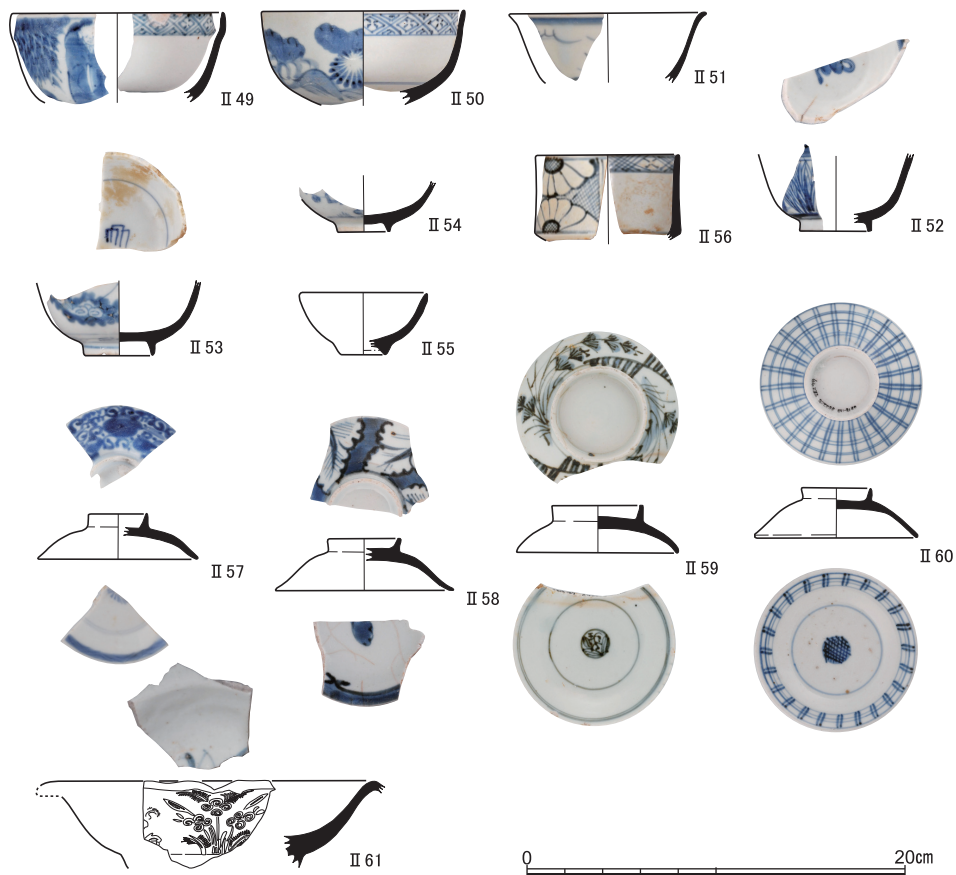


図50 S X 2 出土遺物(2) (Ⅱ49～Ⅱ61磁器)

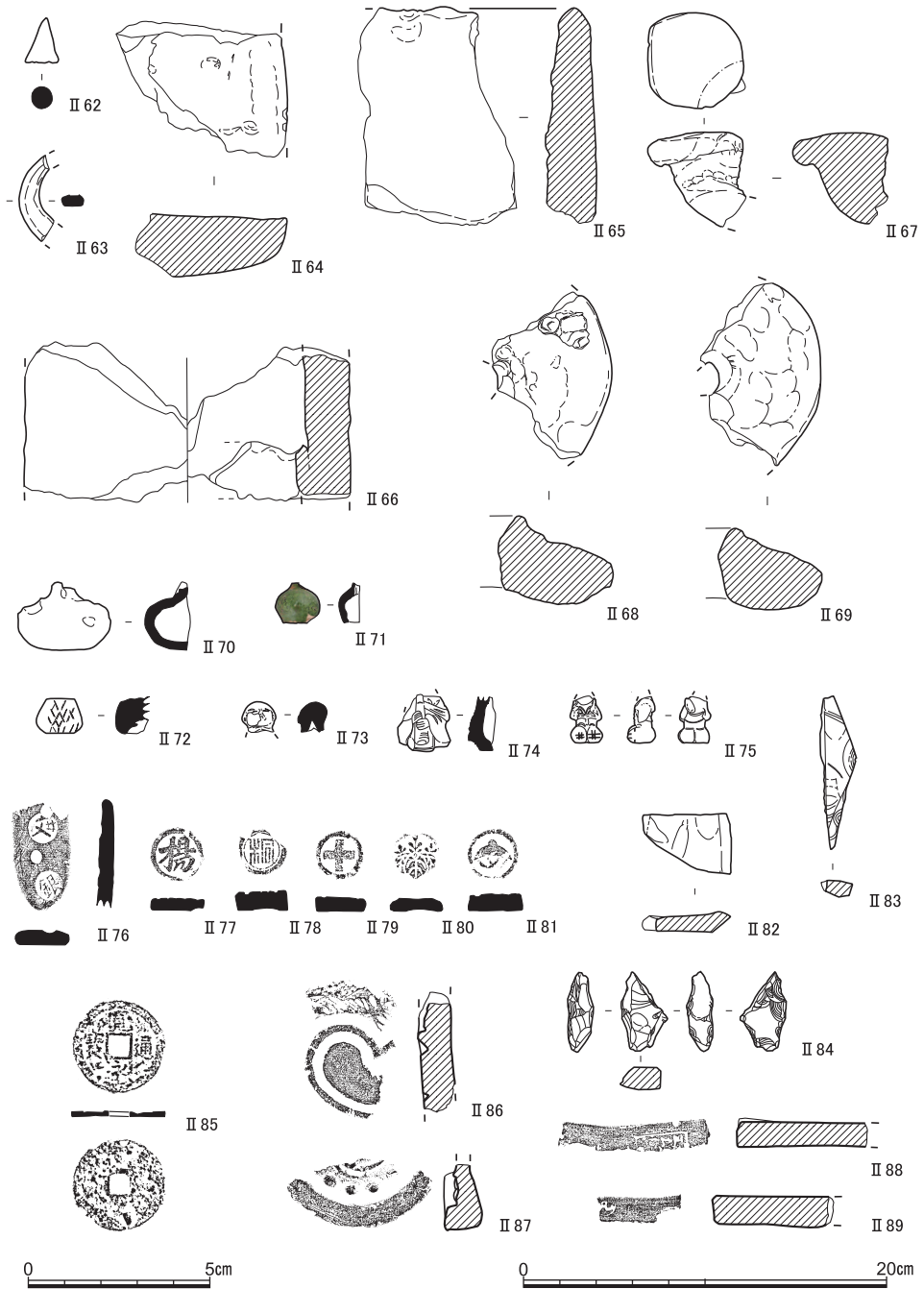


図51 S X 2 出土遺物(3) (II 62~II 64窯道具, II 65~II 69埴塼, II 70~II 81土製品, II 82~II 84石製品, II 85錢貨, II 86~II 89瓦) II 85のみ縮尺1/2

の火打ち石でⅡ85は寛永通宝。Ⅱ86～Ⅱ89は瓦で、棟端瓦のⅡ86は雲形の鬼瓦の右辺近くだろう。Ⅱ87は大棟を飾る小菊か。Ⅱ88・Ⅱ89は軒先側の端面に刻印をもつ平瓦ないし棧瓦。ともに判読が難しいが、Ⅱ88は四角囲みで左行には4字あり、Ⅱ89には丸囲みに「瓦」とも読める文字ないし記号がある。

S X 2には、上部に灰褐色土、その下に粗砂を主体とするシルト～砂の層があり、それより下位は黒みがかった粘質土が堆積していたので、埋土の掘削では、中位の砂層およびその上下の3層に分けて遺物を回収した。また、東西の肩部で構築材のあるところでは、裏込めの遺物も分離して回収している。Ⅱ46・Ⅱ61・Ⅱ74・Ⅱ76・Ⅱ89は裏込め出土で、Ⅱ40・Ⅱ52・Ⅱ58は下層出土、Ⅱ34・Ⅱ37・Ⅱ54は上層出土で、そのほかはいずれも中層から出土している。

S E 1 出土遺物 (Ⅱ90～Ⅱ108) Ⅱ90～Ⅱ101は陶器。Ⅱ90は、高台の内側が挿り鉢状に凹む小杯で、外面にコバルト釉で描かれた文字は「枝」と読める。Ⅱ91の小杯はⅡ92の椀と同じく京・信楽系。Ⅱ93は大鉢。Ⅱ94は京・信楽系の鉢で、無釉の底裏の墨書は「井力」か。京・信楽系のⅡ95は、碁笥底状の内外施釉で、片口と思われる。Ⅱ96は、外面と口縁内面が無釉の土瓶。Ⅱ97は明褐色を呈する無釉の急須。Ⅱ98は土瓶の蓋で、京・信楽系だろう。Ⅱ99は内外施釉で褐色を呈する甕で、肩部におそらく2個一対になる把手がつく。Ⅱ100は、蓋受け部以外は内外面にしっかりと施釉された白色無文の香炉で、3単位になるとと思われる獣脚をもつ。京・信楽系か。底裏に「大改良／丁丑^[未カ]□／□」の墨書があるⅡ101の大甕は、破片が、井筒の中からも出土しているが、大半はⅡ97・Ⅱ99と同じく井筒より上部の埋土から出土した。丁丑は明治10年(1877)だろう。

Ⅱ102は瓦質土器と思われるが、焼成により黒化した土師器の可能性もある。内面に1単位の櫛歯文が見られ、また、口縁付近を中心に煤が付着している。Ⅱ103は内面施釉で白色を呈する型押し成形の紅皿。Ⅱ104は輪トチンだろう。Ⅱ105は外面下半に墨で彩色された土製の玩具。Ⅱ106・Ⅱ107は軒平瓦ないし軒棧瓦。Ⅱ106は井筒より上部の埋土から出土している。Ⅱ108は軒丸瓦で降り棟用か。

S E 8 出土遺物 Ⅱ109は赤絵の陶器皿。

S E 10 出土遺物 (Ⅱ110～Ⅱ112) Ⅱ110・Ⅱ111陶器。前者は信楽の灯明受け皿で、後者は内外に鉄釉のかかる通徳利。Ⅱ112は軒平瓦ないし軒棧瓦。

S E 3 出土遺物 Ⅱ113は土師器小皿で器壁がやや摩滅している。

小溝群 (S D 3・30・22・23) 出土遺物 (Ⅱ114～Ⅱ117) Ⅱ114・Ⅱ115は磁器染付

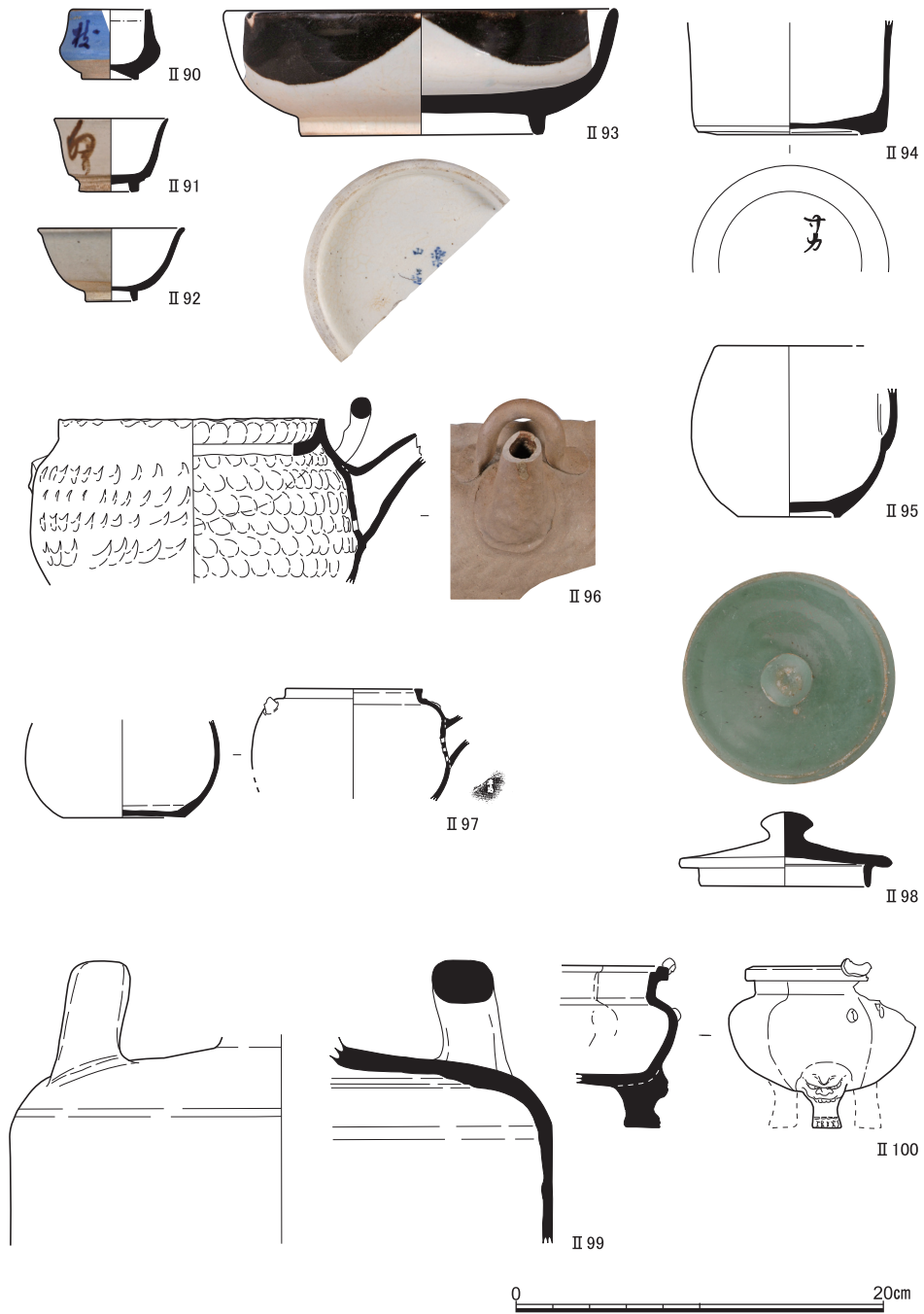
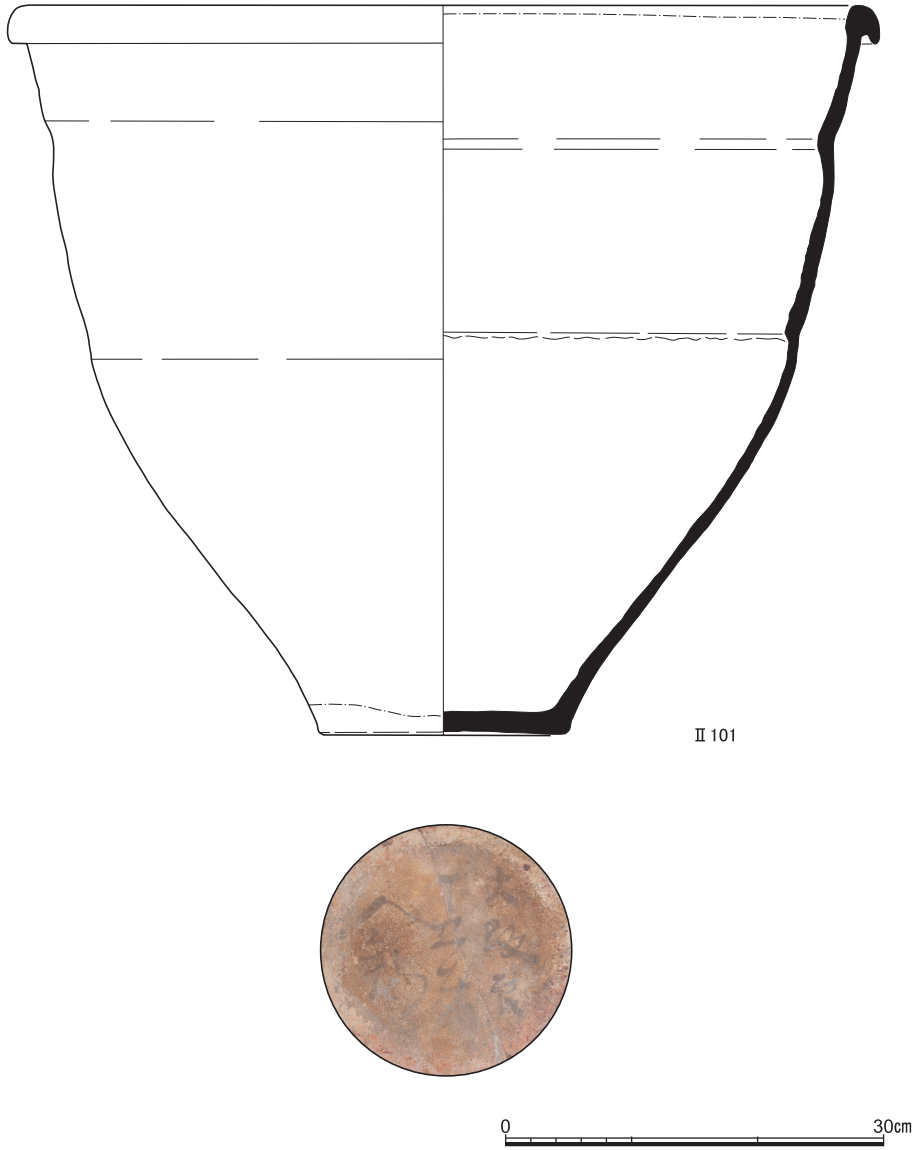


図52 S E 1 出土遺物(1) (II 90~II 100陶器)



II 101

図53 S E 1 出土遺物(2) (II 101陶器) 縮尺1/6



図54 S E 1 出土遺物(3) (II 102瓦器, II 103磁器, II 104窯道具, II 105土製品, II 106~II 108瓦), S E 8 出土遺物 (II 109陶器), S E 10 出土遺物 (II 110・II 111陶器, II 112瓦), S E 3 出土遺物 (II 113土師器), S D 3 出土遺物 (II 114磁器), S D 30 出土遺物 (II 115磁器), S D 22 出土遺物 (II 116石製品), S D 23 出土遺物 (II 117石製品)

近世の遺物

の椀。Ⅱ116・Ⅱ117は砥石。Ⅱ114はS D 3から、Ⅱ115はS D30から、Ⅱ116はS D22から、Ⅱ117はS D23から、それぞれ出土した。

以下、表土・攪乱や近世遺物包含層から出土した近世遺物、そしてそれらの層の直下に堆積していた中世以前の遺構や遺物包含層の上面清掃時に出土した近世遺物を記す。

黄灰色土出土遺物（Ⅱ118～Ⅱ126） Ⅱ118～Ⅱ121は土師器で、Ⅱ118はひな皿で、Ⅱ119は端部をつまみ上げ、Ⅱ120は圏線をもち、いずれも近世。Ⅱ121は中世末期。Ⅱ122は磁器染付の皿。Ⅱ123～Ⅱ126は泥面子。黄灰色土からは、明らかに幕末と思われる遺物は確認できず、18世紀までの堆積と思われる。

中世以前の層位の上面出土遺物（Ⅱ127～Ⅱ142） Ⅱ127～Ⅱ129は土師器で、Ⅱ127は1段撫で素縁手法で14世紀、見込みに圏線をもつ近世のⅡ128は、口縁に煤が附着しており、灯明に供したことがわかる。Ⅱ129は近世の五徳の足。Ⅱ130は瓦器。環状で、内側には滑り止めの効果を狙ってかカキメが施されている。内面には被熱で黒化した部分があるので、焔炉のような用途があったのだろうか。Ⅱ131・Ⅱ132は陶器椀の底部。Ⅱ131は見込みに渦状のケズリを施している。Ⅱ133・Ⅱ134は磁器染付の小杯と皿。焼継ぎされているⅡ134は、底裏には釉下に朱書きもある。高台は残存部分では円弧を描くが、見込みの意匠に照らせば、角皿なのかもしれない。Ⅱ135は白磁のキセル吸い口。Ⅱ136は埴塙の破片。Ⅱ137は近代の煉瓦だが刻印があるので掲載した。Ⅱ138・Ⅱ139は寛永通宝。Ⅱ140～Ⅱ142は泥岩ないし粘板岩の砥石。Ⅱ141は黄色味が強く、鳴滝産か。

表土・攪乱の出土遺物（Ⅱ143～Ⅱ159） いずれも近世と思われるものを掲載した。Ⅱ143～Ⅱ147は陶器で、皿の底部のⅡ143・Ⅱ144は見込みに、前者は鉄釉で「栄」、後者は呉須で「大佛」と書かれる。Ⅱ145は段重の底部と思われ、無釉の底裏に書かれた墨書は「材」か。焼締め陶器のⅡ146は土瓶の蓋。Ⅱ147は大型厚手で、底部に焼成前の穿孔があるので、植木鉢と思われる。Ⅱ148は磁器染付の椀で、高台内面に「因／イン」と朱書きがある。Ⅱ149は、ウィローパターン〔岡1984〕を呈する欧州陶器の皿。Ⅱ150は黒色を呈するガラス製のビール瓶ないしワインボトルの底部。Ⅱ151は埴塙の底面か。側面がガラス化している。土製のⅡ152は、俯瞰が円形となり外面に菊花状の文様をもつ容器の型。Ⅱ153は芥子面。Ⅱ154は泥面子。Ⅱ155は軒平瓦で、Ⅱ156は凸面に「三州／二四九」の刻印がある平瓦で、Ⅱ157は隅巴瓦。Ⅱ158・Ⅱ159は黒灰色を呈する粘板岩の砥石。

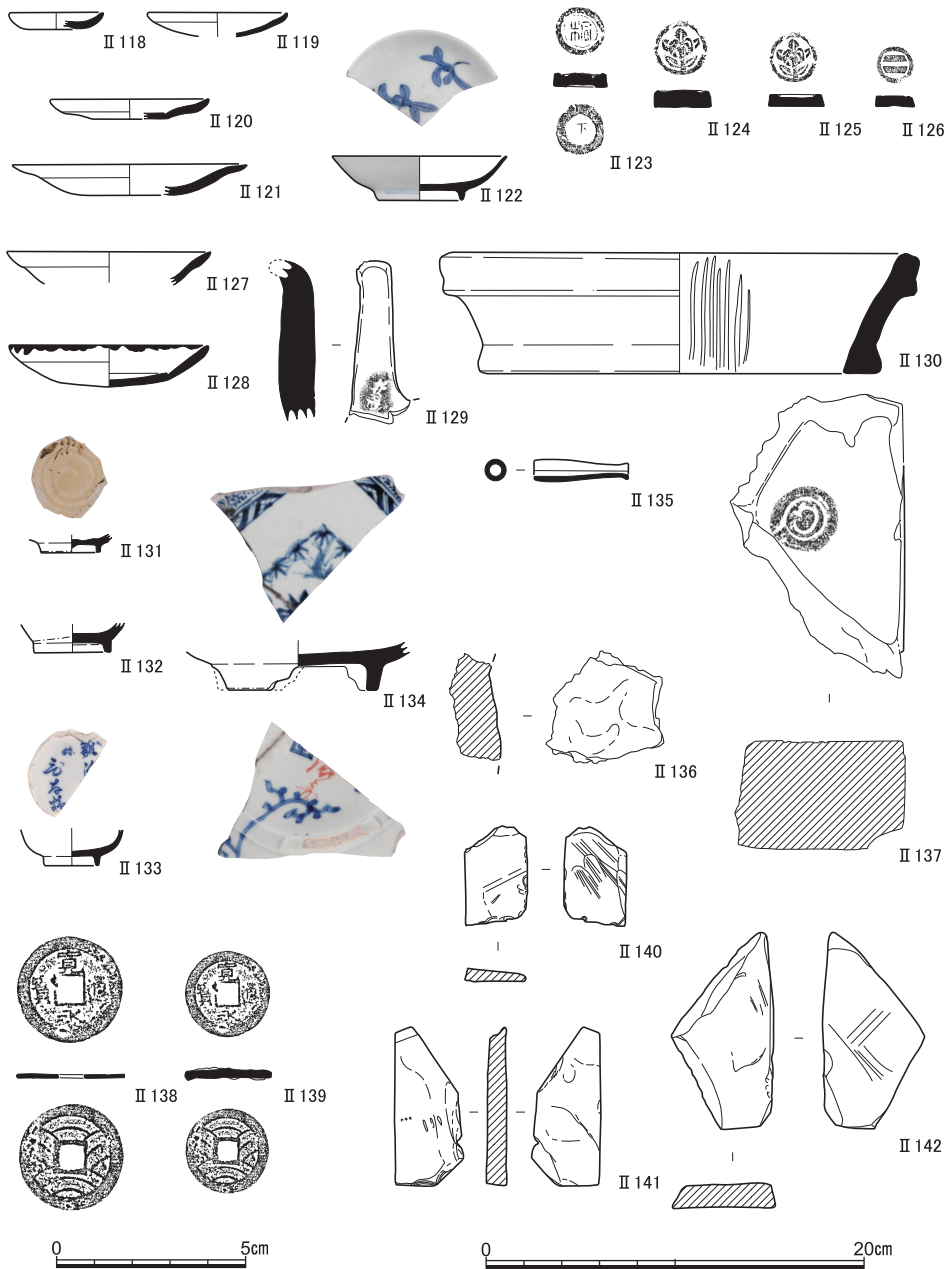


図55 黄灰色土出土遺物（II 118～II 121土師器，II 122磁器，II 123～II 126土製品）中世以前の包含層上面・遺構上面出土の近世遺物（II 127～II 129土師器，II 130瓦器，II 131・II 132陶器，II 133～II 135磁器，II 136埴塼，II 137煉瓦，II 138・II 139銭貨，II 140～II 142石製品）
II 138・II 139のみ縮尺1/2

近世の遺物

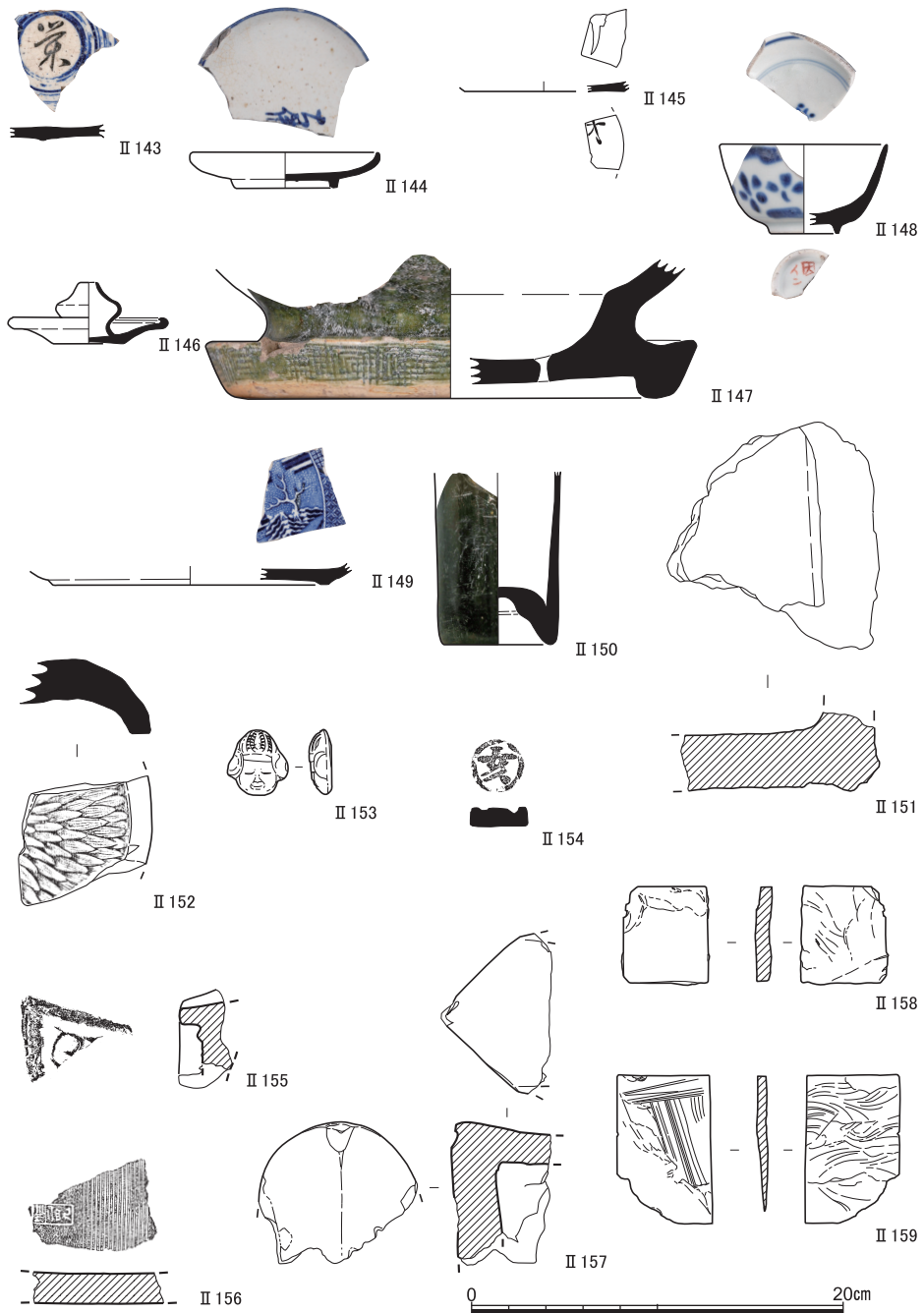


図56 表土・攪乱の出土遺物（II143～II147陶器，II148磁器，II149西洋陶器，II150ガラス製品，II151埴塙，II152～II154土製品，II155～II157瓦，II158・II159石製品）

5 小 結

今回の近世における調査成果に主としてもとづきながら、調査地の歴史の変遷を簡潔にたどり、まとめに代えることにしたい。

調査地の履歴 最初に、調査地点が所属する行政区画の近世以降の履歴を確認してみると、幾つかの画期が指摘できる。愛宕郡岡崎村であった調査地一帯は、江戸時代前半にはわずかな寺院の所在のほかは田畑のひろがる農村であったが、宝永五年（1708）の大火で禁裏・仙洞御所をはじめとする広大な範囲が焼失した際、復興の市街整備のために禁裏周辺の寺院と町家の移転先となることで、大きく変化した。調査地西側に現在も軒を並べる妙伝寺をはじめとした寺院群までがその範囲であり、京の町組に属する拡張した市街地が形成されたのである。この時点で、調査地点は岡崎村の西縁となり、現在は新洞学区と呼称されている新市街地と境を接する位置となった（図57上段）。

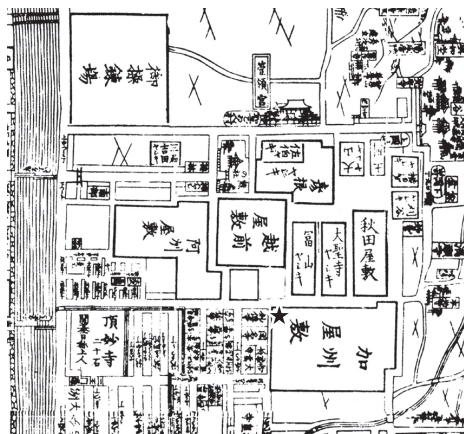
その後も、岡崎村の側はしばらく近郊農村として推移するが、幕末のごく一時期、おおむね1860年代において、上洛する諸藩が藩士の駐屯地として藩邸敷地を求めたため、景観は激変を遂げることになる。その状況の一端は幕末期の絵図に顕著に示されることである（図57下段左）。調査地点は、広大な敷地を占める加賀藩邸の西端付近となっていたことがわかるが、その期間は長く続かず、維新後に撤去された藩邸敷地は再び耕地となり、明治期前半には再び農村へと回帰していることがわかる（同右）。そして明治23年（1890）以降、現在は調査地点の東側を北流している琵琶湖疎水の建設を契機に、近代都市京都の一角として、土地利用は大きく変貌していくことになる。

南北大溝の性格 調査区西辺を南北に走る南北大溝SD1については、1972年の報告では、東側の古川町通りと並行してはしることから、その側溝との推測がされている。しかしながら、3m近い規模があること、SX1・SX2とした木製構造物の存在などを考慮すると、側溝以上の機能を担う重要な遺構の可能性を考えておく必要がある。

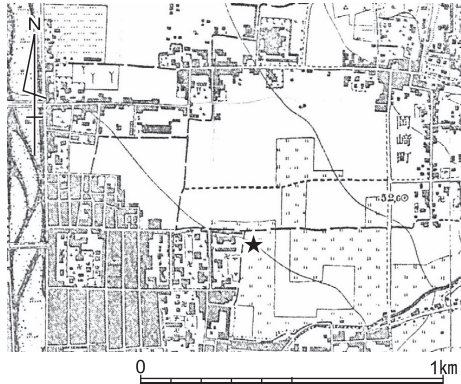
そこで、上記した履歴を考慮しながら、埋積状況もふまえて南北大溝SD1を性格づけると、1708年の宝永大火を契機とした市街化により、岡崎村西限の境界溝として整備されたものと考えるのがふさわしい、という結論に至る。先行する溝や流路の存在は不詳であるが、近世遺物を包含する耕作土の黄灰色土層（第3層）と、その下の近世面2で検出された黄灰色土を埋土とする耕作溝群を切っていることは、近世段階のなかで手を加えられたとみる想定と整合的であろう。溝内の埋積については第3節で詳報したところであるが、



『京都明細大絵図』正徳4年(1714)~享保6年(1721)頃



『改正京町御絵図細見大成』慶応4年(1868)刊



陸地測量部発行仮製地形図「京都」
明治22年(1889)測量25年(1892)製版
*縮尺1/20000を1/25000に縮小

図57 近世～近代における調査地点周辺 (★が調査地点比定地)

複数回の埋積を繰り返す中で、東側への溢水氾濫と復旧が黄灰色土中に認識されるなど、溝には豊富な流量があり、長期にわたり水路としても整備され機能していた様子がかがわれる。溝の護岸が市街地となる西岸側に重点的に確認されることも、矛盾しないといえる。

幕末期の状況 その後の加賀藩邸となる期間は、実質的には設置が了解された慶応三年（1867）から翌年にかけての2年間程度とみられる〔宮下2006〕。金沢市立玉川図書館近世史料館所蔵の清水文庫に残される岡崎屋敷の図（特18.6-26『京都新御屋敷絵図』（慶応二年三月））には、幅2間と表記される堀がめぐるように描かれている。仮にこの通り施工されたとすれば、南北大溝SD1は、そのまま藩邸の堀として転用されたのであろう。

加賀藩岡崎屋敷にかかわる堀の遺構としては、調査地から250m東方の京都市美術館（当時）敷地内において東西方向の堀27が44mにわたり検出され、北側の二条通とを区画する外堀として報告されている〔(公財)京都市埋蔵文化財研究所2015〕。断面逆台形の形状、幅3m深さ2m程度の規模、出土遺物が少量であることから短期間での埋め戻しと推定、という属性は、規模を除くと今回のSD1と異なる部分が多い。ただし、「堀の南壁は、板材や割竹と丸杭を用いて護岸している」と報告されているものが、今回のSX2東壁の護岸（図版14-3）と同種であるならば、堀のための造作としての共通性を有する遺構として認定できる可能性はあろう。

しかしながら、宝永大火後の鴨東の二条通南側には、新市街地へ白川から導水するための東西水路が設けられており（図57上段）、加賀藩邸建設時そのまま機能していた可能性が高い。この水路が基幹的で重要なものであったことは、明治24年（1891）において、疎水開削の結果断ち切られた白川水源の水路の代替として、疎水からの導水が請願され許可されるという出来事からもうかがうことができる〔松本2013〕。そこからの分流となるSD1よりも、重要性ゆえに底ざらえなどが徹底されていたとすれば、遺物が稀少であることも理解可能であろう。したがって、近世二条通の路面が確認されていない現状では決定しがたいものの、藩邸北側の堀についても、SD1と同様に、既設水路が転用された可能性をここでは指摘しておきたい。

近代の展開 SD1の上半は一気に埋め戻されており、その上面を第2層の灰褐色土が覆っている。藩邸の廃絶後からさほど時を経ず整地され、耕地に戻る過程を反映する堆積状況といえよう。明治23年（1890）の疎水建設前の状態を示す地図では、調査地一帯に水田としての土地利用が示されており（図57下段右側）、灰褐色土は、こうした明治前半

期の短期間の耕作土であろう。さらにその上面に厚く堆積する表土層は、東から西へと縞状に積み重ねられており、調査地の東側に疎水が開削された際、その掘削土を低平な西側へと盛って整地した様子がうかがわれる。

上部に漆喰、下部に堅固な桶を井筒に用いた近世の井戸SE1・8は、藩邸期かそれ以後に設けられたとみられ、SD1が埋没した後も機能していた可能性がある。枯渇しつつある水路からの給水を補う意味で重要な役割を果たしたであろうが、最終的にレンガなども含む近代の廃棄物で埋没している。疎水開削にともなう一帯の近代化過程で、もはや耕地ではなくなった一帯では不要となり、廃絶したとみられる。岡崎における近代のはじまりを象徴する推移といえよう。

今回の発掘調査と遺物整理作業は伊藤淳史と富井真が担当し、長尾玲が補佐した。また、磯谷敦子・西田陽子・高山典子・石田真葵・岩永玲・板垣優河・田中龍一・菊池望・式田洸の助力を得た。出土木材の樹種同定については、杉山淳司氏（生存圏研究所）の指導のもと西原和代（文学研究科博士後期課程）が担当した。今回は関連する一部結果の引用提示のみとし、全体の詳報は次年度におこなう。

本章は、第1・4節を伊藤、第2・3節を富井が執筆し、伊藤が調整編集した。

〔注〕

(1) 図39-A地点以外の周辺調査成果は、以下の文献に報告されている。

地点B：六勝寺研究会1973『延勝寺跡』

地点C：竜子正彦1999「8岡崎遺跡・延勝寺跡」『京都市内遺跡立会調査概報平成10年度』

地点D：熊谷舞子2016「VI尊勝寺跡・岡崎遺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告平成27年度』

地点E：梶川敏夫1987「14尊勝寺跡」『昭和59年度京都市埋蔵文化財調査概要』

地点F：上村和直・西大條哲1994「29尊勝寺跡・岡崎遺跡1」『平成元年度京都市埋蔵文化財調査概要』

参考文献

- 尼崎博正 2012年 『山紫水明の都にかへさねば 七代目小川治兵衛』 ミネルヴァ書房
- 石田志朗・中村徹也・中村友博 1972年 『京都大学理学部構内遺跡発掘調査の概要』
- 泉 拓良 1977年 「京都大学植物園内遺跡」『仏教芸術』115号
- 伊藤淳史 1999年 「北白川追分町弥生時代遺跡の展開—京都大学北部構内B A30区（追分地藏地点）の出土資料—」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1995年度』
- 2010年 「鴨東の古代—古墳—奈良時代の遺跡調査成果からみた集団動態—」『京都大学構内遺跡調査研究年報 2007年度』
- 2014年 「京都大学病院構内A H15区の発掘調査」『年報2011・2012年度』
- 伊藤淳史・笹川尚紀 2012年 「京都大学西部構内A W20区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 2009年度』
- 上村和直・堀内明博 1981年 『六勝寺跡発掘調査概要』
- 梅原末治 1923年 「京都帝国大学農学部敷地ノ石器時代遺跡」『京都府史蹟勝地調査會報告 第5冊』
- 1935年 「京都北白川小倉町石器時代遺跡調査報告」『京都府史蹟名勝天然紀念物調査報告 第16冊』
- 1936年 「摂津阿武山古墓調査報告」『大阪府史蹟名勝天然紀念物調査報告 第7輯』
- 岡 泰正 1984年 「ウィロウ・パターンの起源と変様について—18世紀輸出陶磁史の一視点—」『神戸市立博物館研究紀要』第1号
- 小野山節・都出比呂志 1973年 『高槻市安満遺跡の条里遺構』
- 小野山節・中村徹也 1976年 『京都大学教養部A号館増築予定地内埋蔵文化財発掘調査の概要』
- 梶川敏夫・木村捷三郎・渡辺和子 1977年 『六勝寺跡—六盛西店新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告—』
- 梶原義実 2003年 「13世紀における「中央官衙系」瓦工の編成と展開—京都大学医学部構内A O18区の資料から—」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1999年度』
- 加藤唐九郎編 1972年 『原色陶器大辞典』（淡交社）
- 川上貢 1977年 「京都大学構内における史跡の文献的考察」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和51年度』
- 木村捷三郎・畑美樹徳・上原真人 1975年 「京都市動物園爬虫類館建設工事に伴う“法勝寺跡”発掘調査報告」『京都市埋蔵文化財年次報告 1974—II』
- 京大調査会(京都大学農学部構内遺跡調査会・京都大学理学部附属瀬戸臨海実験所構内遺跡調査会)
1977年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和51年度』
- 京大埋文研(京都大学埋蔵文化財研究センター)
1978年 a 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和52年度』
1978年 b 『京都大学埋蔵文化財調査報告第1冊—京大農学部遺跡B G36区—』
1979年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和53年度』
1980年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和54年度』
1981年 a 『京都大学埋蔵文化財調査報告II—白河北殿北辺の調査—』
1981年 b 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和55年度』

参 考 文 献

- 1983年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和56年度』
1984年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和57年度』
1985年 『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅲ—北白川追分町縄文遺跡の調査—』
1986年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和58年度』
1987年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和59年度』
1988年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和60年度』
1989年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1986年度』
1990年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1987年度』
1991年 『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅳ—京都大学病院構内遺跡の調査—』
1992年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1988年度』
1993年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1989～1991年度』
1995年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1992年度』
1997年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1993年度』
1998年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1994年度』
1999年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1995年度』
2000年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1996年度』
2002年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1997・1998年度』
2003年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1999年度』
2005年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 2000年度』
2006年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 2001年度』
2007年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 2002年度』
2008年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 2003年度』
- 京大文総研（京都大学文化財総合研究センター）
- 2009年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 2004～2006年度』
2010年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 2007年度』
2011年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 2008年度』
2012年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 2009年度』
2013年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 2010年度』
2014年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 2011～2012年度』
2015年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 2013年度』
2016年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 2014年度』
2017年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 2015年度』
2018年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 2016年度』
2019年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 2017年度』
- 京都市 1985年 『史料京都の歴史 8 左京区』
- 京都市埋蔵文化財研究所 2014年 『延勝寺跡・岡崎遺跡』（京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2014-1）
2015年 『円勝寺跡・成勝寺跡・白河街区跡・岡崎遺跡』（京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2014-13）
- 京都大学 2014年 『名勝清風荘庭園保存修理事業報告書』
- 京都大学百年史編集委員会 1997年 a 『京都大学百年史』資料編 1

参 考 文 献

- 京都大学百年史編集委員会 1997年 b 『京都大学百年史』写真集
京都大学百年史編集委員会 1998年 『京都大学百年史』総編
京都府・京都府畜産会編 1973年 『京都府畜産のあゆみ』京都府畜産会
京都府立医科大学創立八十周年記念事業委員会編 1955年 『京都府立医科大学八十年史』
京都府立医科大学百年史編集委員会編 1974年 『京都府立医科大学百年史』
京を語る会編 1975年 『近世京都絵図十種』
島田貞彦 1924年 「京都市北白川追分町発見の石器時代遺跡」『考古学雑誌』第14巻第5号
島田貞彦・水野清一・小川五郎・三宅宗悦 1929年 「摂津国高槻「摂津農場」石器時代遺跡調査報告」『人類学雑誌』第44巻第7号
清水芳裕 1991年 「遺跡の形成と地形の変化」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅳ—京都大学病院構内遺跡の調査—』
杉山信三・岡田茂弘 1961年 「尊勝寺跡発掘調査報告」『平城宮跡・伝飛鳥板蓋宮跡』（奈良国立文化財研究所学報 第10冊）
須藤定久 2008年 「篆刻用印材（ろう石・滑石など）の話」『地質ニュース』646号
千葉 豊 2013年 「京都大学北部構内採集の石棒」『京都大学構内遺跡調査研究年報 2010年度』
東京大学史料編纂所 1959年 『大日本古記録 言経卿記一』岩波書店
富井 眞 1998年 「北白川追分町遺跡出土の縄文土器—北白川C式の成立を考える—」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1994年度』
内記 理 2018年 「京都大学構内遺跡出土の近世瓦と刻印」『京都大学構内遺跡調査研究年報 2016年度』
中村徹也 1973年 『京都大学農学部総合館周辺埋蔵文化財発掘調査の概要』
1974年 a 『京都大学農学部総合館北棟建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の概要Ⅰ』
1974年 b 『京都大学理学部ノートバイオロン実験装置室新営工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要』
1975年 『京都大学農学部総合館北棟建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の概要Ⅱ』
濱田徳太郎編 1936年 『大日本麦酒株式会社三十年史』大日本麦酒株式会社
平尾太郎 1929年 『平尾賛平商店五十年史』平尾賛平商店
藤岡謙二郎 1973年 「北白川扇状地と教養部構内発見の遺物包含層並びにその先史地理学的意義」『人文』第19集（京都大学教養部）
藤沢英夫 2009年 「ビール醸造設備発展の系統化調査」『国立科学博物館 技術の系統化調査報告』14
松本将一郎 2013年 「白川・琵琶湖疎水沿線の土地利用」奈良国立文化財研究所文化遺産部景観研究室編『京都岡崎の文化的景観調査報告書』
宮下和幸 2006年 「幕末期における加賀藩京都詰の実態とその意義」『日本歴史』696号
藪田みゆき 2013年 「寒梅館地点出土の歯ブラシ形骨加工品：2002年度大学会館（室町殿跡）発掘調査に伴う事例報告」『同志社大学歴史資料館館報』16
横山浩一・佐原眞 1960年 『京都大学文学部博物館考古学資料目録』第1部日本先史時代
六勝寺研究会 1972年 『延勝寺跡の発掘調査』

京都大学構内遺跡調査要項 2018年度

京都大学文化財総合研究センター規程

- 第1条 この規程は、京都大学文化財総合研究センター（以下「文化財総合研究センター」という）の組織等に関し必要な事項を定めるものとする。
- 第2条 文化財総合研究センターは、文化財の調査・保存・活用に関する総合的教育研究を行うとともに、京都大学敷地内の埋蔵文化財についての調査研究及びその保存のため必要な業務を行う。
- 第3条 文化財総合研究センターに、センター長を置く。
- 2 センター長は、京都大学の専任の教授をもって充てる。
- 3 センター長の任期は、2年とし、再任を妨げない。
- 4 センター長は、文化財総合研究センターの所務を掌理する。
- 5 センター長に事故があるときは、あらかじめセンター長が指名する者がその職務を代理する。
- 6 センター長が欠けたときは、あらかじめセンター長が指名する者がその職務を行う。
- 第4条 文化財総合研究センターに、その重要事項を審議するため、協議委員会を置く。
- 2 協議委員会の組織及び運営に関し必要な事項は、協議委員会が定める。
- 第5条 文化財総合研究センターに、学際的教育研究拠点の構築に係る関係機関等との連携に関する重要事項についてセンター長の諮問に応ずるため、連携協議会を置く。
- 2 連携協議会の組織及び運営に関し必要な事項は、連携協議会が定める。
- 第6条 文化財総合研究センターは、次に掲げる研究科の教育に協力するものとする。
- 文学研究科
工学研究科
- 第7条 文化財総合研究センターに置く事務組織については、京都大学事務組織規程（平成16年達示第60号）の定めるところによる。
- 第8条 この規程に定めるもののほか、文化財総合研究センターの内部組織については、センター長が定める。

センター長

吉井 秀夫（文学研究科教授）

センター教員

千葉 豊

伊藤 淳史

協議委員会委員

吉川 真司（文学研究科教授）

富井 眞

千葉 豊（センター准教授）

笹川 尚紀

杉山 淳司（生存圏研究所教授）

内記 理

富島 義幸（工学研究科准教授）（～2018.11.30）

センター教務補佐員

磯谷 敦子

（工学研究科教授）（2018.12.1～）

柴垣理恵子

元木 泰雄（人間・環境学研究科教授）

長尾 玲

岩崎奈緒子（総合博物館教授）

センター事務室

長谷川直子（事務補佐員）

藤森 良祐（事務補佐員）

京都大学構内遺跡調査要項

表2 京都大学構内遺跡のおもな調査

(地点は図版1を参照, 文献中「埋」は京大埋文研, 「調」は京大調査会, 「文」は京大文総研をさす。)

年度	遺跡名	地点	担当者	調査の種類	面積(m ²)	遺構	遺物	文献	備考
1923	農学部	1・2	濱田耕作	表探・試掘			縄文土器, 石器	梅原23, 鳥田24	
1924	農学部	不明	藤本理三郎				石棒	横山・佐原60	
1929	大阪府満		鳥田貞彦 水野清一 ほか	発掘			弥生土器	鳥田・水野ほか29	
1934	大阪府阿武山古墳		梅原末治	発掘			乾漆棺, 玉飾枕	梅原36	
1935	北白川町		梅原末治				縄文土器, 石器	梅原35	
1956	農学部	3	羽館易	採集			縄文土器		
1971	農学部	4	石田志朗	採集			弥生土器	埋79	
1972	農学部	5		採集			石棒	千葉13	
1972	大阪府満		小野山節 都出比呂志	事前発掘	1500	条里の溝	弥生土器	小野山・都出73	建物をずらし条里の溝を保存
1972	追分地蔵	6	石田志朗 中村徹也	事前発掘	600		弥生土器	石田ほか72, 伊藤99	
1972	教養部	7	藤岡謙二郎	工事中採集・実測			縄文土器	藤岡73	
1973	農学部	8	中村徹也	事前発掘	13	瓦溜	縄文土器, 瓦(平安)	埋78b	瓦溜埋戻し
1973	農学部	9	中村徹也	事前発掘	600		縄文土器, 土師器	中村73, 第3章	
1973	植物園	11	中村徹也	事前発掘	400	縄文後期甕棺・配石遺構	縄文土器	中村74b, 泉77	甕棺・配石遺構の移築を決定
1974	農学部	12	中村徹也	事前発掘	800		縄文土器	中村74a	
1974	農学部	13	中村徹也	事前発掘	800		縄文土器	中村75	
1975	教養部	14	小野山節 中村徹也	事前発掘	750		土師器, 瓦, 陶磁器	小野山・中村76	
1976	農学部 B E33区	16	泉拓良	事前発掘	900	縄文晩期土壙墓	縄文土器, 土師器, 瓦	調77	
1976	病院 A E15区	19	岡田保良	事前発掘	2200	古代・中世溝, 池, 土器溜	土師器, 瓦, 陶磁器	調77, 埋81a	
1976	植物園 B D35区	29	吉野治雄	保存				調77	甕棺・配石の移築復元
1976	病院 A H17区	34	泉拓良	事前発掘	200	近世溝, 井戸, 集石	土師器, 瓦	埋78a	
1976	教養部 A S23区	35	吉野治雄	試掘	10	溝	縄文土器, 須恵器	調77	
1976	北学部 B J33区	36	宇野隆夫	試掘	10		縄文土器	調77	
1976	和歌山県瀬		丹羽佑一	事前発掘	300	縄文時代土壙墓	縄文土器, 人骨	埋78a	
1977	病院 A F14区	39	岡田保良 宇野隆夫	事前発掘	800	古代護岸, 溝, 井戸	土師器, 瓦, 陶磁器	埋78a, 埋81a	
1977	医学部 A O18区	41	泉拓良 吉野治雄	事前発掘	1200	中世溝, 土器溜, 井戸	土師器, 瓦, 陶磁器	埋79, 梶原03	
1977	北気管	43	吉野治雄 宇野隆夫	立合		溝, 土坑	須恵器, 土師器	埋78a	

京都大学構内遺跡のおもな調査

年度	遺跡名	地点	担当者	調査の種類	面積(m ²)	遺構	遺物	文献	備考
1977	教養部 AQ23区 AN23区	48	宇野 隆夫	試掘	80	溝	弥生土器, 土師器, 瓦	埋79	
1977	白河北殿 比定地 AA18区	49	岡田 保良	試掘	40	溝	土師器, 瓦, 陶磁器	埋79	
1978	理学部 BE29区	54	岡田 保良 宇野 隆夫 吉野 治雄	事前発掘	500	弥生中期方形周溝墓, 中世火葬塚	弥生土器, 土師器, 瓦	埋79	火葬塚と方形周溝墓を現地保存
1978	農学部 BG32区	55	泉 拓良 宇野 隆夫	事前発掘	100	縄文土坑, 古代溝, 土坑	縄文土器, 土師器	埋79	
1978	北部 BG31区	56	泉 拓良 宇野 隆夫	事前発掘	650	縄文晩期埋没林	縄文土器	埋80, 埋85	
1978	本部 AW28区	57	岡田 保良 吉野 治雄	事前発掘	500	近世白川道	陶磁器, 土師器, 銭貨	埋80	
1978	本部 AY22区	60	泉 拓良	立合		高野川旧河道		埋79	
1978	医学部 AN19区	64	吉野 治雄	立合		井戸, 溝	弥生土器	埋79, 埋80	
1979	北部 BH37区	66	吉野 治雄	試掘	46	土坑	土師器, 須恵器	埋80	
1979	教養部 AM24区	69	岡田 保良 清水 芳裕	試掘	8		弥生土器, 土師器	埋80	
1979	本部 AZ30区	71	西川 幸治 浜崎 一志	試掘	30	中世溝	土師器, 瓦, 瓦器	埋80	
1979	医学部 AP19区	74	清水 芳裕 五十川伸矢 吉野 治雄	事前発掘	2776	中世溝, 井戸, 土器溜	土師器, 瓦, 陶磁器, 旧石器	埋81 b	
1979	本部 AT27区	75	五十川伸矢	事前発掘	400	奈良後期堅穴住居, 中世土壇墓, 近世道路	土師器, 須恵器, 白磁	埋81 b	堅穴住居跡を現地保存
1979	北部 BD32区	79	泉 拓良	立合			瓦(平安)	埋80	
1980	本部 AT27区	89	泉 拓良	事前発掘	115	近世道路, 堀	土師器, 近世陶磁器	埋81 b	
1980	本部 AX28区	90	泉 拓良 五十川伸矢 浜崎 一志	事前発掘	1120	近世白川道, 中世土器溜, 井戸, 建物	土師器, 瓦, 陶磁器, 銅鏃(弥生), 磨製石鏃	埋83	
1980	京都府 美 月		泉 拓良 清水 芳裕 五十川伸矢 浜崎 一志 吉野 治雄	事前発掘	1468	弥生中期・後期水路, 土坑, 中世土器溜	弥生土器, 打製石斧, 瓦器, 陶磁器	埋83	立合調査中に遺跡を発見, 工事を中断し発掘調査
1980	教養部 AO21区	91	吉野 治雄	事前発掘	112	中世井戸, 土壇墓	土師器, 瓦器, 陶磁器	埋83	
1980	教養部 AM22区	93	吉野 治雄	立合		火葬墓, 石列	瓦器, 陶器	埋81 b	
1980	本部 実験排水	98	清水 芳裕	立合		流路, 中世土器溜	土師器, 丸瓦	埋83	遺構実測
1981	理学部 BD30区	109	泉 拓良 浜崎 一志	事前発掘	272	古代建物, 近世瓦溜	土師器, 瓦, 陶磁器	埋83	

京都大学構内遺跡調査要項

年度	遺跡名	地点	担当者	調査の種類	面積(m ²)	遺構	遺物	文献	備考
1981	和歌山県瀬戸		泉拓良 清水芳裕 五十川伸矢 浜崎一志	事前発掘	1500	弥生土坑, 弥生配石, 古墳時代土坑	縄文土器, 硬玉管玉, 弥生土器, 製塩土器	埋84	
1981	本部 AX28区	110	泉拓良 清水芳裕 五十川伸矢 飛野博文	事前発掘	34	中世土器溜	土師器, 瓦, 陶磁器, 硯	埋83	
1981	教養部 AP22区	111	五十川伸矢 飛野博文	事前発掘	1716	古墳, 古代梵鐘鑄造遺構, 中世門・溝・墓	縄文土器, 弥生土器, 須恵器, 土師器, 鑄型, 溶解炉	埋84	梵鐘鑄造遺構を現地保存
1981	京都市山本			分布調査			縄文土器, 緑釉陶器, 灰釉陶器	埋83	
1982	京都府道中海道		泉拓良	試掘	20	中世土器溜	縄文土器, 土師器	埋84	
1982	病院 AF15区	122	清水芳裕 浜崎一志	事前発掘	1028	中世井戸, 溝	白磁	埋84	
1982	農学部 BF33区	123	清水芳裕 浜崎一志	事前発掘	787	縄文住居跡, 中世土坑	縄文土器, 土師器	埋84	縄文住居跡を現地保存
1982	和歌山県瀬戸		泉拓良	事前発掘	297	古代製塩炉	縄文土器, 弥生土器, 製塩土器	埋84	古代製塩炉を移築保存
1982	本部 AT29区	124	泉拓良 飛野博文	事前発掘	890	中世濠, 建物	土師器, 瓦器, 陶磁器	埋86	
1982	農学部 BE33区	125	泉拓良 飛野博文	事前発掘	803	中世・近世水田, 溝	土師器, 瓦器, 陶磁器	埋86	
1983	医学部 AN20区	134	泉拓良 五十川伸矢	事前発掘	863	中世井戸, 土取り穴	須恵器, 瓦器, 土師器	埋86	
1983	北部 BF31区	135	清水芳裕 五十川伸矢	事前発掘	737	縄文埋没林, 古代・中世溝	縄文土器, 土師器, 緑釉陶器	埋87, 富井98	
1983	医学部 AM19区	139	泉拓良 浜崎一志	立合		中世土取り穴	土師器, 瓦器, 石鍋	埋86	
1984	病院 AF19区	141	清水芳裕 宮本一夫	事前発掘	863	近世池, 井戸, 野壺	縄文土器, 蓮月焼	埋87	
1984	病院 AJ19区	142	清水芳裕 浜崎一志	事前発掘	260	中世土坑, 近世土取り穴	土師器, 近世陶磁器	埋87	
1984	医学部 AN18区	143	五十川伸矢 宮本一夫	事前発掘	1920	中世井戸, 土取り穴, 中世梵鐘鑄造遺構	土師器, 瓦器, 鑄型	埋88	
1985	北部 BJ31区	153	清水芳裕 宮本一夫	事前発掘	624	古代溝, 建物跡, 土坑, 近世溝	弥生土器, 土師器, 須恵器	埋88	
1985	病院 AJ18区	154	清水芳裕 浜崎一志 菱田哲郎	事前発掘	4295	中世井戸, 近世土取り穴	土師器, 近世陶磁器	埋89	
1985	病院 AJ19区	155	五十川伸矢 宮本一夫	事前発掘	3000	中世井戸, 近世土取り穴	土師器, 近世陶磁器, 鑄型	埋89	
1986	教養部 AP25区	167	清水芳裕 宮本一夫 難波洋三	事前発掘	599	中世・近世溝	土師器, 近世陶磁器	埋89	
1986	本部 AX30区	168	清水芳裕 難波洋三	事前発掘	330	古代土坑, 中世道	土師器, 陶磁器	埋89	

京都大学構内遺跡のおもな調査

年度	遺跡名	地点	担当者	調査の種類	面積(m ²)	遺構	遺物	文献	備考
1986	医学部 AL20区	169	浜崎一志 難波洋三	事前発掘	331	近世土取り 穴	土師器, 陶磁 器	埋90	
1986	教養部 AL23区	170	清水芳裕 五十川伸矢 浜崎一志	試掘	24	中世溝	土師器, 瓦器, 陶器	埋89	
1987	北部 BD33区	180	浜崎一志 千葉豊	事前発掘	618	土坑, 河川	縄文土器, 土 師器, 須恵器	埋90	
1987	本部 AW27区	181	五十川伸矢 千葉豊	事前発掘	1604	中世土坑, 近世道路	縄文土器, 土 師器, 陶磁器	埋92	
1987	北部 BH35区	182	清水芳裕	試掘	16	包含層	土師器, 須恵 器	埋90	
1987	北部 BD28区	183	清水芳裕	試掘	12	包含層	土師器, 須恵 器	埋92	
1987	本部 AT25区	188	清水芳裕	立合		近世尾張藩 邸堀		埋90	
1988	牛ノ宮町 AR19区	190	清水芳裕 森下章司	事前発掘	216	中世土坑, 近世道路	土師器, 瓦, 陶 磁器	埋92	
1988	病院 AH19区	191	浜崎一志 千葉豊 森下章司	事前発掘	2495	中世土坑, 溝	土師器, 瓦, 陶 磁器	埋93	
1988	病院 AE12区	192	千葉豊 森下章司 宮原恵美子	事前発掘	599	近世道路・ 溝・野壺・井 戸	土師器, 瓦, 陶 磁器	埋93	
1989	病院 AE13区	198	千葉豊 森下章司 宮原恵美子	事前発掘	805	近世井戸・ 野壺・柵列	土師器, 陶磁 器, 瓦	埋93	
1991	病院 AG14区	200	千葉豊 森下章司	事前発掘	394	近世井戸, 道路	土師器, 陶磁 器	埋95	
1991	教養部 AR21区	202	五十川伸矢 浜崎一志 森下章司	立合		中世土坑	土師器	埋93	
1992	医学部 AM17区	207	五十川伸矢 森下章司	事前発掘	1950	中世井戸, 土器溜	土師器, 陶磁 器	埋95	
1992	北部 BA28区	208	浜崎一志 千葉豊	事前発掘	1242	噴砂, 古代 埋納遺構, 近世堀	縄文土器, 土 師器, 陶磁器, 棧瓦	埋95	
1992	和歌山県 瀬戸	213	浜崎一志 伊藤淳史	立合		縄文包含層	縄文土器, 石 器	埋95	
1992	本部 AV30区	214	千葉豊 伊藤淳史	事前発掘	1480	中世砂取り 穴, 近世野 壺	土師器, 陶磁 器	埋97	
1993	北部 BB28区	217	清水芳裕 古賀秀策	事前発掘	1323	古代溝, 中 世土坑	土師器, 陶磁 器	埋97	
1993	本部 AW25区	218	千葉豊 吉井秀夫	事前発掘	929	中世井戸, 濠, 溝, 土坑	縄文土器, 石 器, 土師器, 陶 磁器	埋97	
1993	本部 AU30区	219	伊藤淳史 古賀秀策	事前発掘	1074	弥生流路, 古代溝, 中 世土器溜	弥生土器, 土 師器, 陶磁器	埋97	
1993	総合人間 学部 AO22区	220	五十川伸矢 伊藤淳史	事前発掘	4080	弥生水田, 古代梵鐘鑄 造遺構, 中 世井戸・溝	縄文土器, 弥 生土器, 土師 器, 陶磁器	埋99, 伊藤10	梵鐘鑄造遺 構を現地保 存
1993	北部 BF34区	221	千葉豊 吉田広	事前発掘	1228	古代土器溜 ・土坑, 中世 ・近世道路	土師器, 陶磁 器	埋98	

京都大学構内遺跡調査要項

年度	遺跡名	地点	担当者	調査の種類	面積(m ²)	遺構	遺物	文献	備考
1993	病院 A F 12区	222	伊藤 淳史	試掘	113	近世道路	土師器, 陶磁器	埋97	
1994	北 部 B F 30区	229	千葉 豊 古賀 策 吉田 広	事前発掘	530	縄文貯蔵穴, 弥生方形周溝墓, 平安土壇墓	縄文土器, 弥生土器, 土師器	埋98	
1994	本 部 A X 25区	230	古賀 秀策 吉田 広	事前発掘	1314	古代溝, 土器溜	土師器, 陶磁器	埋99	
1995	総合人間学 部 A R 25区	238	伊藤 淳史 古賀 秀策	事前発掘	2092	弥生土器棺墓, 古代溝, 土坑, 中世溝	弥生土器, 土師器, 陶磁器, 瓦	埋00	
1995	病院 A G 20区	239	千葉 豊 吉田 広	事前発掘	2260	縄文流路, 弥生流路, 中世井戸, 近世大溝	縄文土器, 弥生土器, 土師器, 蓮月焼	埋00	
1995	病院 A F 20区	240	千葉 豊 吉田 広	事前発掘	280	近世池, 土坑	土師器, 陶磁器	埋00	
1995	本 部 A X 26区	241	古賀 秀策 吉田 広	事前発掘	627	中世大溝, 近世柵列	土師器, 陶磁器	埋99	
1996	医学部 A N 20区	248	五十川 伸 古賀 秀策	事前発掘	510	縄文流路, 中世土取り穴, 近世井戸	縄文土器, 弥生土器, 土師器, 陶磁器	埋00	
1996	総合人間学 部 A R 24区	249	伊藤 淳史 富井 眞	事前発掘	330	中世掘立柱建物, 土坑, 溝	弥生土器, 土師器, 陶磁器, 銭貨	埋02	
1997	総合人間学 部 A R 23区	254	伊藤 淳史	立合		中世瓦溜	弥生土器, 土師器, 陶磁器, 瓦	埋02	弥生~中世包含層
1998	総合人間学 部 A N 22区	261	千葉 豊 古賀 策 阪口 英毅	事前発掘	1800	縄文流路, 弥生方形周溝墓, 中世溝・土坑・土器溜・石室	縄文土器, 弥生土器, 土師器, 陶磁器, 瓦	埋05	
1998	本 部 A U 28区	262	伊藤 淳史 富井 眞	事前発掘	543	中世土坑, 近世柱穴	土師器, 陶磁器, 瓦	埋02	
1998	総合人間学 部 A L 24区	264	古賀 秀策 千葉 豊	立合			弥生土器, 土師器, 陶磁器	埋02	弥生~近世包含層
1999	病院 A F 20区	269	千葉 豊 阪口 英毅	事前発掘	49	中世井戸, 土坑	縄文土器, 土師器, 陶磁器	埋03	
1999	医学部 A O 17区	270	伊藤 淳史 富井 眞	事前発掘	2028	中世井戸, 集石, 土器溜	土師器, 瓦, 陶磁器	埋03	
1999	本 部 A W 26区	271	千葉 豊 阪口 英毅	事前発掘	1913	古墳時代溝, 中世井戸・瓦溜・溝, 近世溝	縄文土器, 須恵器, 土師器, 瓦, 陶磁器	埋03	
1999	本 部 A X 22区	272	富井 眞	立合		時期不明溝, 高野川系流路攻撃面		埋03	
2000	北 部 B C 28区	276	伊藤 淳史 富井 眞	事前発掘	2158	弥生水田, 中世溝, 近世井戸	縄文土器, 弥生土器, 石器, 陶磁器	埋05	

京都大学構内遺跡のおもな調査

年度	遺跡名	地点	担当者	調査の種類	面積(m ²)	遺構	遺物	文献	備考
2000	本 部 A T 21区	277	千葉 豊 阪口 英毅	事前発掘	2654	終末期古墳 周濠, 中近 世白川道, 尾張藩邸水 路・堀	縄文土器, 土 師器, 陶磁器, 鉄鍋, 馬具, 銭 貨	埋06	
2000	病 院 A E 19区	278	千葉 豊 富井 眞	事前発掘	8000	縄文流路, 古代土坑, 中世井戸, 近世井戸・ 土坑・池	縄文土器, 土 師器, 近世陶 磁器, 瓦	埋07	
2000	病 院 A E 18区	279	阪口 英毅	試 掘	320	近世土坑	土師器, 陶磁 器	埋05	近世包含層
2001	吉 田 南 A R 24区	288	伊藤 淳史 梶原 義実	事前発掘	2375	奈良時代掘 立柱建物, 平安時代経 塚, 古代・中 世溝, 柵	縄文土器, 弥 生土器, 石器, 土師器, 陶磁 器, 青銅製経 筒, ガラス玉, 瓦	埋06	
2001	病 院 A F 12区	290	清水 芳裕 千葉 豊	立 合		近世柱穴	土師器	埋06	
2001	病 院 A F 13区	291	清水 芳裕 千葉 豊	立 合		近世柱穴	土師器, 陶磁 器	埋06	
2001	本 部 A T 25区	293	清水 芳裕 千葉 豊	立 合		近世尾張藩 邸堀		埋06	
2002	本 部 A U 25区	296	伊藤 淳史 梶原 義実	事前発掘	1070	古代埋甕, 中世白川道・ 井戸, 近世 集石	縄文土器, 土 師器, 近世陶 磁器・瓦	埋07	
2002	北 部 B D 28区	297	富井 眞 吉江 崇	事前発掘	1925	縄文堅果集 積・埋没林, 古代道路, 近世野壺	縄文土器, 弥 生土器, 石器, 陶磁器	埋07	
2002	医 学 部 A R 19区	298	千葉 豊 梶原 義実	事前発掘	1200	縄文流路, 中 世道路・井 戸, 近世土取 り穴・野壺	縄文土器, 土 師器, 陶磁器, 近世陶磁器	埋08	
2002	北 部 B F 32区	299	富井 眞 吉江 崇	事前発掘	1900	縄文建物跡・ 焼土・土坑, 中世砂取り 穴, 近世溝 石	縄文土器, 石 器, 土師器, 陶 磁器, 近世墓 石	埋08	
2002	吉 田 南 A R 25区	302	千葉 豊	立 合		古代・中世・ 近世溝	土師器, 陶磁 器, 中世瓦, 磁 器, 将棋駒	埋07	
2003	医 学 部 A P 18区	308	伊藤 淳史 吉江 崇	事前発掘	2125	中世道路・井 戸・溝・集石・ 土器溜・野壺 群, 近世井 戸・溝	土師器, 瓦器, 陶磁器, 瓦, 石 鍋, 近世陶磁 器	埋08	
2003	北 部 B D 33区	311	富井 眞	立 合		砂取り穴, 野壺		文09	中・近世包 含層
2004	北 部 B C 30区	320	千葉 豊	事前発掘	85.5	古代土坑・ 溝, 中世土 坑	縄文土器, 弥 生土器, 土師 器, 陶磁器, 須 恵器, 瓦器	文09	
2005	本 部 B A 22区	321	富井 眞 吉江 崇	事前発掘	98	近世溝・瓦 溜	縄文土器, 石 器, 磁器, 近世 陶磁器・瓦	文09	

京都大学構内遺跡調査要項

年度	遺跡名	地点	担当者	調査の種類	面積(m ²)	遺構	遺物	文献	備考
2005	吉田南 A P 21区	322	伊藤 淳史	事前発掘	48	古墳周溝, 古代土坑・ 溝, 中世土 坑・集石	縄文土器, 土 師器, 陶磁器, 須恵器, 瓦器, 鞆羽口	文09	
2004	美 山	323	清水 芳裕 伊藤 淳史	立 合				文09	
2004	北 部 B C 35区	325	吉江 崇	立 合		古代道路?		文09	297地点の 古代道路と つながるか
2005	本 部 A W 24区	329	伊藤 淳史	立 合		近世白川道, 近世遺物溜, 煉瓦積水路	近世陶磁器	文09	縄文包含層
2005	北 部 B D 30区	330	富井 眞	立 合			縄文土器	文09	中・近世包 含層
2005	本 部 A T 22区	331	千葉 豊	立 合		近世白川道	近世陶器	文09	中世包含層
2006	本 部 A T 26区	335	伊藤 淳史	立 合		近世尾張藩 邸堀	近世陶器	文09	
2006	本 部 A V 24区	336	伊藤 淳史	立 合		中世白川道, 近世遺物溜	土師器, 近世 陶磁器・瓦	文09	
2001 ~ 2004	桂	337	千葉 豊	分布 立合		石垣	埴, 瓦	文09	
2007	病 院 A G 16区	338	富井 眞 笹川 尚紀	事前発掘	3700	中世井戸, 近世井戸・集 石・石垣	縄文土器, 土 師器, 陶磁器, 瓦	文10	
2007	病 院 A F 14区	339	千葉 豊	事前発掘	713	中世道路・ 井戸・集石	縄文土器, 土 師器, 陶磁器	文10	
2007	和歌山県 瀬 戸	346	佐藤 純一	立 合		古代土坑	土師器	文10	古代包含層
2008	西 部 A W 20区	348	伊藤 淳史 笹川 尚紀	事前発掘	2081	中世建物, 玉石集積, 井戸, 瓦溜, 土器溜, 流路	土師器, 陶磁 器, 瓦, 玉石	文12	中世建物跡 を現地保存
2008	病 院 A G 13区	349	千葉 豊 富井 眞	事前発掘	2164	近世井戸・ 野壺・土坑・ 溝	近世陶磁器・ 土製品	文11	
2009	北 部 B H 31区	355	富井 眞 笹川 尚紀	事前発掘	800	縄文加工樹 幹, 弥生土 器片敷, 中 世砂取り穴・ 溝, 近世溝	縄文土器, 弥 生土器, 石器, 土師器, 陶磁 器	文12	
2009	本 部 A Z 23区	356	千葉 豊	事前発掘	710	縄文住居, 古墳周溝, 中世土坑	縄文土器, 石 器, 須恵器, 土 師器	文12	
2009	北 部 B G 34区	357	千葉 豊 笹川 尚紀	事前発掘	1152	古代土坑, 中世砂取り 穴・道路・溝・ 野壺, 近世 野壺	縄文土器, 石 器, 土師器, 黒 色土器, 須恵 器, 緑釉陶器, 灰釉陶器, 陶 磁器, 瓦, 銭貨	文13	
2009	医 学 部 A Q 18区	358	伊藤 淳史	事前発掘	824	中世井戸・ 道路・集石・ 土坑・溝・柱 穴, 近世集 石・野壺・溝	土師器, 瓦器, 陶磁器	文13	

京都大学構内遺跡のおもな調査

年度	遺跡名 調査名	地点	担当者	調査の 種類	面積 (㎡)	遺構	遺物	文献	備考
2010	病院 AJ16区	366	網東 伸也 洋一	事前発掘	1085	中世土坑・溝, 近世畔野壺・柵・土坑・溝	縄文土器, 弥生土器, 土師器, 須恵器, 瓦, 陶磁器	文13	
2010	吉田南 AL22区	367	笹川 尚紀	立合		中世溝		文13	中世包含層
2010	本 部 AT25区	377	伊藤 淳史	立合		尾張藩邸堀	須恵器, 陶器	文13	先史~近世包含層
2011	吉田南 AN21区	378	富井 眞 笹川 尚紀	事前発掘	1650	縄文土器破片集中部, 弥生方形周溝墓, 方形墳, 中世溝・井戸・土坑・土器溜・陶器溜・埋甕・集石	縄文土器, 弥生土器, 古墳時代埴輪・須恵器・土師器・鉄器, 中世土師器, 瓦器, 須恵器, 陶磁器, 銭貨, 瓦, 近世陶磁器	文15	
2011	病院 AH12区	379	千葉 豊	事前発掘	1700	近世道路・水路・井戸・溝	近世陶磁器・土師器・土製品	文14	
2011	本 部 AV27区	383	伊藤 淳史	立合		白川道・尾張藩邸堀		文14	
2012	病院 AH15区	384	伊藤 淳史	事前発掘	583	近世道路・水路・井戸	近世陶磁器・土師器, 近代病院食器	文14	
2012	病院 AF17区	385	富井 眞	事前発掘	4100	近世段差溝・井戸・小穴	近世陶磁器・瓦	文15	
2012	北 部 BH38区	391	笹川 尚紀	立合		溝ないしは土坑		文14	先史~中世包含層
2012	本 部 AT23区	395	千葉 豊	立合		尾張藩邸堀	近世陶磁器	文14	
2013	本 部 AZ30区	397	笹川 尚紀	事前発掘	43	中世集石・溝	縄文土器, 弥生土器, 土師器, 瓦器, 須恵器, 陶磁器	文15	
2013	病院 AH13区	398	千葉 豊	事前発掘	960	近世水路・道路・溝・小穴	近世陶磁器・土師器	文15	
2013	吉田南 AM21区	399	伊藤 淳史 富井 眞 内記 理	事前発掘	923	弥生流路, 平安溝, 中世大溝・土器溜・瓦溜, 近世野壺・溝・土取り穴・瓦溜	縄文土器, 弥生土器, 埴輪・古墳須恵器, 古代土師器・須恵器, 中世土師器・陶磁器・瓦・銭貨, 近世土師器・陶磁器・瓦・西洋陶器	文16	
2013	医学部 AO20区	400	伊藤 淳史	事前発掘	173	縄文流路, 中世溝・井戸・集石・土器溜	縄文土器, 中世土師器・陶器	文15	

京都大学構内遺跡調査要項

年度	遺跡名	地点	担当者	調査の種類	面積(m ²)	遺構	遺物	文献	備考
2013	吉田南AM21区	401	伊藤 淳史 富井内記	事前発掘	945	縄文流路, 弥生流路, 古代溝・井戸, 中世建物・溝・土取り穴・土器溜・集石, 近世野壺・溝・土坑・土取り穴・集石	縄文土器, 弥生土器, 古墳須恵器, 古代土師器・須恵器, 中世土師器・陶磁器・瓦・錢貨, 近世土師器・陶磁器・西洋陶器	文16	
2013	北 部BF32区	402	千葉 豊	事前発掘	90	縄文土坑, 古代土坑	縄文土器・石器, 古代土師器・須恵器・緑釉陶器	文16	
2013	本 部AT22区	403	笹川 尚紀	事前発掘	62	中世道路・井戸, 近世道路・溝	中世土師器・陶磁器・瓦・埴, 近世陶磁器・土師器	文16	
2013	本 部AU28区	404	千葉 豊 笹川 尚紀	事前発掘	815	中世溝・道路・土坑・砂取り穴, 近世野壺・溝・集石	古代土師器・須恵器・緑釉陶器, 中世土師器・陶器・瓦・埴, 近世土師器・陶磁器・瓦	文16	
2013	北 部BA28区	405	千葉 豊	事前発掘	51	自然流路, 集石	近世陶磁器・土師器	文15	
2013	医 学 部AL17区	412	伊藤 淳史	立 合				文15	中近世包含層
2013	病 院AI12区	415	千葉 豊	立 合				文15	398地点の近世道路・溝
2013	吉田南AP21区	416	伊藤 淳史	立 合		中世溝	中世土師器・陶器	文15	先史～中世包含層
2013	病 院AG11区	419	伊藤 淳史	立 合				文15	近世包含層
2014	病 院AI15区	427	富井内記 眞理	事前発掘	2191	中世溝, 近世石垣・溝・土坑・井戸・集石・柱穴列	先史石器, 中近世土師器・瓦器・陶磁器・瓦, 近代陶磁器	文17	
2014	吉田南AP23区	428	伊藤 淳史 笹川 尚紀	事前発掘	1470	弥生水田・流路, 古代土器溜・土取り穴, 中世溝・井戸・土器溜・砂取り穴, 近世路面・野壺	縄文土器, 弥生土器, 石器, 古代須恵器・土師器, 中世鉄鋤, 中近世土師器・陶磁器, 瓦	文17	

京都大学構内遺跡のおもな調査

年度	遺跡名 調査名	地点	担当者	調査の 種類	面積 (㎡)	遺構	遺物	文献	備考	
2015	熊野 ZZ18区	435	富井 内記	眞理	事前発掘	1876	中世集石・瓦溜・土坑・井戸・土器溜・柱穴・溝、近世溝・井戸・野壺・集石・瓦溜・路面・瓦積み・埋納遺構・土坑	縄文土器、古代土師器・須恵器・瓦、中世土師器・陶器・須恵器・瓦器・瓦・石製品、近世土師器・陶磁器・瓦・石製品	文19	
2015	病院 AH18区	436	千葉 笹川	豊尚紀	事前発掘	480	中世土取り穴、近世土坑・土取り穴・溝、近代土坑・井戸	縄文土器、古代土師器・黒色土器・須恵器、中世土師器・瓦器・陶磁器・瓦、近世土師器・陶磁器・土製品・石製品・瓦、近代陶磁器・瓦	文18	
2015	北部 BJ37区	440	千葉 豊	豊立	立合		土師器・須恵器	文17	古代・中世 包含層	
2015	吉田南 AM22区	446	伊藤 淳史	立	立合			文17	中世包含層	
2015	和歌山 瀬戸	447	佐藤 純一	試掘	4	時期不詳堆積	土師器微小片	文17	遺跡東限か	
2016	北部 BC30区	450	伊藤 富井	淳史眞	立合		古墳時代埴輪溜・集石・落ち込み、古代溝	縄文土器、古墳時代埴輪・須恵器、古代土師器・須恵器・瓦	文18	古墳存在の 可能性あり
2017	関田町 BB18区	454	千葉 笹川	豊尚紀	試掘	5		文19	中世包含層	
2017	関田町 BB18区	455	笹川 内記	豊尚紀	事前発掘	920	中世溝・盛土、近世流路・井戸・野壺、近代野壺・溝	中世土師器・陶磁器・石仏、近世土師器・陶磁器・瓦、近代陶磁器	第2章	
2017	西部 AZ20区	456	千葉 豊	豊立	試掘	10		文19		
2017	岡崎 ZS23区	457	伊藤 富井	淳史眞	試掘	6		古代～中世の瓦・土師器	文19	古代～近世 包含層
2017	北部 BG36区	458	伊藤 淳史	立合			古代以前流路、中世溝ないし段差、近世野壺	中世土師器	文19	
2017	本部 AY29区	459	千葉 豊	豊立	立合		古代以前の流路		文19	
2018	岡崎 ZS23区	463	伊藤 富井	淳史眞	事前発掘	516	弥生～古墳流路、古代石敷土坑・瓦溜・井戸、近世大溝・井戸	弥生土器、土師器、古代～中世の瓦・土師器・木製品	第3章	近世以外は 次年度詳報

京都大学構内遺跡調査要項

年度	遺跡名	地点	担当者	調査の種類	面積(m ²)	遺構	遺物	文献	備考
2018	北BC33区	464	千葉 豊	立合				第1章	
2018	西AZ20区	465	千葉 豊	立合				第1章	
2018	吉田南AR23区	466	千葉 豊	立合				第1章	
2018	医学部AM19区	467	千葉 豊	立合				第1章	中世包含層
2018	熊野ZZ16区	468	富井内記	立合				第1章	
2018	本AX30区	469	千葉 豊	立合				第1章	
2017	西AX20区	470	千葉 豊	立合			中世土師器	第1章	中近世包含層

報 告 書 抄 録

ふりがな	きょうとだいがくこうないせきちようさけんきゆうねんぼう2018ねんど							
書名	京都大学構内遺跡調査研究年報2018年度							
編著者名	千葉豊, 伊藤淳史, 富井眞, 笹川尚紀, 内記理							
編集機関	京都大学大学院文学研究科附属 文化遺産学・人文知連携センター 京大文化遺産調査活用部門							
所在地	〒606-8501 京都府京都市左京区吉田本町 TEL 075-753-7691							
発行年月日	2020年2月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査 期間	調査 面積㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ななかせきでんちよう 田中関田町 いせき 遺跡	きょうとふきようとしせきちようく 京都府京都市左京区 ななかせきでんちよう 田中関田町	26100	-	35° 01' 32"	135° 46' 47"	20171016) 20180126	900	女子寮建て替え
しらかわがいくあと 白河街区跡 えんしょうじあと ・延勝寺跡 おかざきいせき ・岡崎遺跡	きょうとふきようとしせきちようく 京都府京都市左京区 おかざきいせき 岡崎成勝寺町	26100	-	35° 00' 36"	135° 46' 57"	20180723) 20181109	516	岡崎国際交流会館新設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
田中関田町 遺跡	田畑	中世	溝多数 盛土1		土師器・瓦器・須恵器 ・陶磁器			
	田畑	江戸時代	流路2・井戸2・野壺 11		土師器・陶器・磁器・ 瓦・石仏		流路周辺で、中世の石仏 ・五輪塔が出土	
	田畑	近代	野壺8・溝多数		土師器・陶器・磁器・ 石製品・瓦		清風館・清風荘にかかわ る遺物が出土	
白河街区跡 ・延勝寺跡 ・岡崎遺跡	集落跡	弥生～古 墳	流路・土器溜		弥生土器・古式土師器 ・木製品・石製品		次年度詳報	
	集落跡 ・寺院 跡	平安後期 ～鎌倉前 期	方形石敷遺構1, 井戸 3, 水溜3, 溝・土坑 ・土器溜・瓦溜多数		土師器・陶磁器・瓦・ 木製品		次年度詳報	
	田畑・ 集落跡	江戸時代	耕作関連溝多数, 大溝 1・大溝内木組遺構2, 井戸3, 野壺2		土師器・陶磁器・瓦		2面あり。幕末期は加賀 藩邸敷地内だが関連遺構 は不詳。	

緯度・経度は日本測地系（第Ⅵ座標系）にもとづく

第Ⅱ部 京都大学文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センター
京大文化遺産調査活用部門紀要Ⅰ

道路遺構の考古学的検討に向けて

伊藤淳史

道路遺構の考古学的検討に向けて

—京都大学構内遺跡での検出事例から—

伊藤淳史

1 はじめに

京都大学吉田キャンパスの本部構内には、現在は「志賀越え道」「山中越え」などと呼ばれている、京の荒神口から近江とを結ぶ交通路「白川道」がはしっていた。幕末に尾張藩邸が設けられたことで途絶し、そのまま大学の敷地となり現在に至るが、発掘調査では、最も古いものは平安後期ころまでさかのぼる各時期の路面が確認されている。また、白川道以外でも、吉田キャンパス全域で、おもに中～近世を中心とするさまざまな道路遺構が報告されている。しかしながら、白川道については関連する文献史料からの検討がみられるものの⁽¹⁾、ほかにも蓄積された多様な遺構データは個別の報告でとどまり、考古資料としての検討が進められる基盤が整っていない。そこで本稿では、京都大学吉田キャンパス内の発掘調査で昨年度までに検出されてきた道路遺構の調査事例を集成整理し、研究の基盤を据えることを第一の目的とする。そのうえで、試行的に遺構の分類を提出し、今後の考古学的な研究遂行に向けた課題を浮上させることを、第二の目的とする。

2 京都大学構内遺跡検出の道路遺構

吉田キャンパス全域での道路関連遺構を集成した(図58・表3)。このうちには、舗装や轍の確認される明らかな道路遺構から、硬化面や側溝とみられる溝が部分的に遺存するのみという程度のものまであり、路面と報告されていないが筆者が可能性ありと判断したものも含んでいる。以下、白川道関連とそれ以外に分け、概観する。

(1) 白川道にかかわる事例

本部構内と医学部構内の多数の地点で確認されている。また、医学部北側をはしる道路(現在も志賀越え道と呼称されている)における立会調査でも近世路面の遺存が京都市埋蔵文化財研究所により報告されている。これらのうち、路面の全幅がある程度把握可能な事例が報告されるのは本部構内の一部の発掘調査(西から277・296・181・57・90・168地点)にとどまる。また遺構の帰属時期では、中世と近世がほとんどであるなかで、最も遡る277地点の路面SF4では、12世紀前葉には成立し、11世紀代に遡る可能性も示唆され

ている。こうした確認地点を結んで復原される道筋は図58のごとくであり、中世以前の路面は比較的直線的に西南西－東北東方向にはしているのに対して、近世については本部構内時計台付近で大きく北に振れたのち東北東に向かっており、カーブがきついルートとなっている。296地点での所見によれば、勾配を緩和するために微高地となるその地点付近を避けて北側に迂回したものと推測されている。

中世路面の特徴（図59） 中世段階の白川道の全幅が把握される事例のうち、296地点と277地点で検出されている前半期（おおむね12後葉～13世紀代）に比定されるものとみると、側溝をともなう幅員は3m強程度の規模で、硬化した粗砂が路盤となること、微高地側の地山を切り通し状に削り出して造成している、といった点が共通している。一方で中世後半期についてみると、168地点では、層序的に14世紀代とみられる路面が確認されているが、最大幅4.5mと大規模で、細い溝状の轍が認められ、礫を敷き詰めて砂質土で覆い叩き締めるといふという舗装のあり方など、異なる様相がうかがえる。ただし、同じ中世後半期でも、296地点の路面S F－Nでは、砂礫層の路盤で幅は3m前後であることから、前半期から後半期へと様相が変化すると、単純には見なせないといえる。

近世路面の特徴（図60） 近世段階の白川道は、18世紀代以降幕末期までが明瞭に確認されるが、それに先行する段階は不詳である。全幅が把握でされる277地点や181地点の事例では、小礫を叩き締めた舗装による路盤が、側溝を伴いながら5面程度検出でき、多くは幾重にも重なる深い轍をともなっているが、最上面では認められない。規模は、277地点で5～6m程度、181地点では当初4.5mであったものが新しくなるに従い1mほど縮小していくとされる。いずれにしろ、中世段階に比べると、深く大きな轍が形成されることと、舗装が堅固になり、幅員も大規模となって側溝の護岸も管理されていることは確かである。

上記してきた白川道の中世と近世のあり方の違いを積極的に解釈するならば、中世段階は徒歩ないし馬による交通であって、直線的なルート設定が優先されたのに対して、大規模な轍の存在が明瞭に示すように、近世には大八車を使用した重量物の運搬であって、堅固な舗装の繰り返しと勾配の回避が重視された、といえよう。この場合、轍内に礫や砂質土が充填された様相は、近世東海道などでみられるような「車石」舗装の事例などを考慮すると、補修というよりも車輪の通り筋を意図的に設定して舗装して、同一路面でも轍の錯綜する範囲が車道、その脇の平坦面を人道としたと見ることもできよう（図4）。

京都大学構内遺跡検出の道路遺構

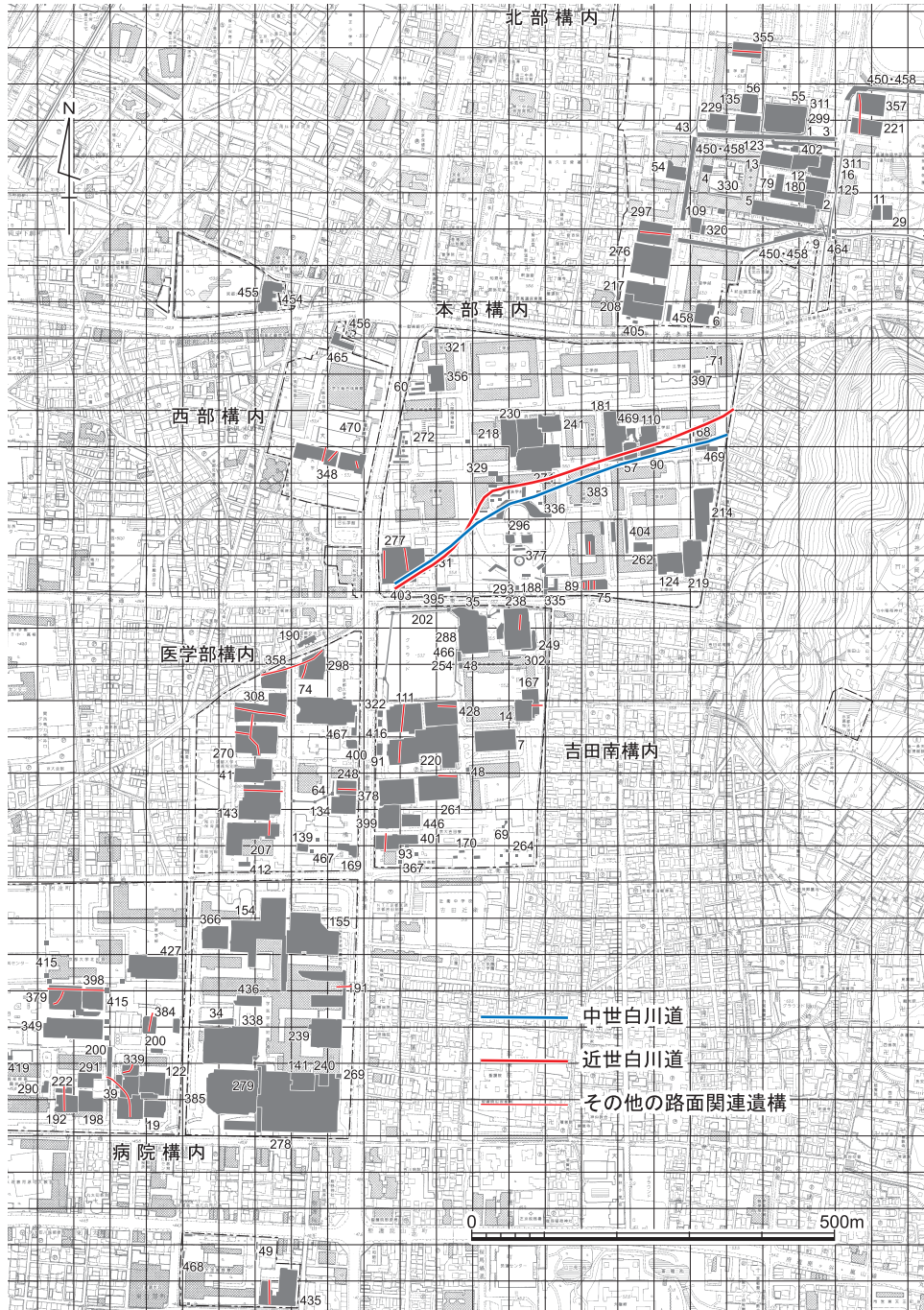


図58 吉田キャンパスにおける道路関連遺構の検出地点 縮尺1/10000

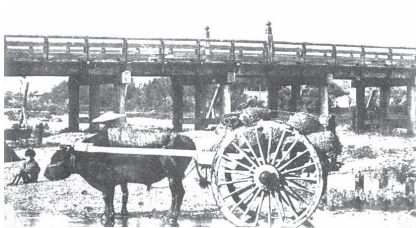
道路遺構の考古学的検討に向けて



図59 中世白川道路路面の状況（296地点北調査区） 左：平面を西から，右：断面を東から
*12世紀後葉～13世紀代（SF-S）と14世紀～15世紀前葉（SF-N）の2枚の路面が重複する。粗砂を主体に叩き締めた路盤で，上面に轍に相当するとみられる浅い小溝群が，不安定ながら筋状に検出されている。側溝も護岸の不安定な自然流路の様相を示す。



図60 近世白川道路路面の状況（277地点） 左：平面を東から，右：断面を東から
*18世紀～19世紀前半を中心とする砂礫を突き固めた複数の路盤が積み重なり，それが無数の轍で削られている。轍の内部には礫が充填されるものがみられる。側溝もしっかりと護岸される。



：荒神橋の下を行く牛車
明治時代 京を語る会・田中泰彦編集・解説『京都悠情』より



牛車と車石模型 真田孝男氏製作

図61 牛車と車石

（出典：『車石（くるまいし）：江戸時代の街道整備』大津市博物館企画展図録2012年）
*近世後半の東海道・竹田街道・鳥羽街道には，牛車の車輪を通すための凹みを設けた軌道状の敷石「車石」の存在が知られている。

(2) 白川道以外の事例

特徴は多岐にわたるが、具体例は次節において試行する分類とあわせて示すこととする。最も遡る時期の遺構は297地点のS F 1で、10世紀半ばに比定されている。東西方向に直線的な路面であり、白川道に相当する道路として最も古い事例となる可能性も残されている。これ以外の事例は、多くが近世であり、『山城国吉田村古図』⁽²⁾などで把握されるようなかつての字界などと対応する位置に検出されていることが多い。そして、中世に遡る段階のものも、近世段階の路面と同じ位置で下面に確認される傾向が強いことから、近世における土地境界の骨格は、中世のある段階までは遡って成立していることを知る事ができる。今後は、その時期の比定をより絞り込み、地域社会における画期の存否や、広域な社会変動との連関を検討していくことも、課題となろう。

3 発掘道路遺構の分類試行と課題

前節で集成した道路遺構を、考古資料としてどのような視点で分類することがふさわしいだろうか、ここで試行し、その意味と課題を考えたい。

まず、道路遺構にともなう属性で、平面的な調査範囲が大きくなり、断面からも認識しやすいと考えるa舗装・b側溝・c轍を抽出する。舗装については、礫主体と粗砂主体が認められるようであり、側溝についても、自然流路状のものと人為的な管理が明らかなのとで区別できるのが望ましいと考えるが、現況は明確な細別は困難であることから将来的課題としておきたい。また、轍についても規模や充填物には、先述したように多様なあり方が観察されるが、同じく細分は今後の課題である。ほか、幅員の規模や造成手法（地山の削出しや切り通し、あるいは盛土等）も特徴として把握されるが、部分の遺構検出では不詳とせざるを得ず、分類指標の属性としては未整理である。

以上述べたような属性や特徴については、集成表3においても有無を示しているところだが、その結果をふまえ、試行的に分類A-Fを作成した(表2)。分類にともなう「ランク」については、武部健一の整理(図62)等を参考に名称を付したもので、幹線道路のなかで、現代の高速道路に相当する性格とみなせる計画的な「駅路」を「計画基幹道」とした。古代の官道、都城であれば中枢的な大路といった国家的な計画・管理道を意識するもので、吉田キャンパスで該当するものは、現在までのところは明確に確認されていないと考える。今回対象となるのは、武部の整理で言えば伝路(地域道路)の範疇であり、そのなかで地域間を結ぶ幹線道Bが、白川道にかかわる道路遺構にほぼ該当するといえる。

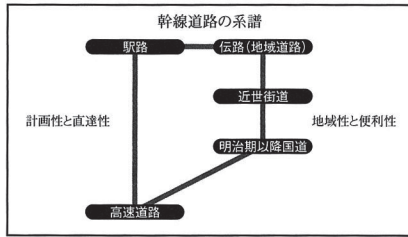


図2-9 高速道路の古代回帰の図式

図62 幹線道路の系譜 (武部健一による)
 出典：武部健一『道路の日本史－古代駅路から高速道路へ』(中公新書2321) 2015年

表2 発掘道路遺構の分類試案

ランク	属性	属性			空間	関与・管理	公共度
		舗装	側溝	轍			
A	計画基幹道	◎	◎	○	全域	政権	高い
B	幹線道	◎	◎	○	地方間	地方首長・権門	
C	補助幹線道	○	○	△	地域間	地域首長・宗教権威	
D	地域道	○	△	△	地域内	地域住民(村落)	
E	里道	△			地区内	地域住民(部落)	↓
F	私道	△			宅内	使用者	低い

◎：ほぼすべてにともなう／○：なかば以上ともなう／△：稀にともなう

補助幹線道Cも、それに準ずる属性を備えているもので、白川道から直接分岐する本部構内277地点のSF3や、おそらく白川道から北へ分岐して洛北・比叡山麓方面とを結ぶ北部構内の221地点・357地点の南北道路SF1などが該当すると考える(図63-1)。

地域道Dや里道Eとしたものは、構内遺跡で最も頻繁に検出されている、旧字界や耕地境界をはしる路面である。このうち、旧聖護院村と吉田村境をはしる病院構内398地点の路面SF3や、二本松と近衛の字界を成している吉田南構内261地点の路面SF1(同2)、窪と走り矢倉の字界である111・220地点のSF1(同3)などのように、礫や砂による舗装が施され、側溝、轍状の痕跡がともなう場合もある事例は、比較的広域単位の重要度の高い境界である道路として地域道Dとする。そうではない、硬化面が把握される程度にとどまるような吉田南構内428地点や238地点の事例などは(同4・5)を里道Eとし、管理主体や主たる通行者が地域住民の中でも、小規模な隣組的な部落単位であるものを想定している。私道Fは、宅地内の区画や畦道状のもので、属性としてはEに近似するものとする。構内遺跡では西部構内348地点の吉田泉殿比定地で検出した土堤状盛土遺構が、こうした範疇に属する事例とみたい。

以上は、現況においては古代～近世までの通時代的なものとして提出した。編年的な変

発掘道路遺構の分類試行と課題



1. 357 地点 SF1 北から・15 世紀後半～16 世紀
*掘り込み造成して礫敷舗装し、轍も確認される。



2. 261 地点 SF1 東から・18 世紀～19 世紀
*礫混じり土の路盤で、両側に側溝をともなう。



3. 111 地点 SF1 北から・近世
*礫敷舗装と、片側に側溝も確認される。



4. 428 地点 SF1 東から・近世
*硬化面上に、わずかに轍状の溝が確認される。



5. 238 地点東西畔北壁路面状盛土・近世
*細礫をまじえた堅く締まる砂質土の盛土断面 (矢印)。

図63 構内で検出された白川道以外の路面各種

遷を追跡することを主眼とした作業ではなく、道路遺構にみられる属性を、管理主体や関与集団のレベルを読み取る指標として利用することで、道路の背後にある社会組織や社会段階に接近することを志向している。道路遺構という考古資料をこのように通時代的に検討することで、ひいては時間的・空間的に生じている社会変化を浮上させることにつなげたいと考えている。

4 おわりに

以上に述べた試行は、数多く蓄積されている発掘された道路遺構について、これまで文献史料での記載や絵図資料を中心として研究されてきたと言える現状に鑑みながら⁽³⁾、あくまで考古資料として取り扱うとすればどのような方法があり、何を知ることができるかを考えた結果の、きわめて荒削りで実験的なものである。今後、既往の研究史的蓄積を十分に咀嚼しつつ、考古学の遺構論として洗練させていくことを目指すための、第一歩の叩き台として、不備を承知で敢えて提出したものである。諸賢の批判と叱正をいただければ深甚である。

〔注〕

- (1) たとえば、中世の白川道については、吉江崇「中世吉田地域の景観復原」『京都大学構内遺跡調査研究年報2001年度』、2006年など。また、近世の状況については、笹川尚紀「京都大学本部構内A T22区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報2014年度』2016年、において考察が深められている。
- (2) 京都大学総合博物館蔵。前掲注(1)吉江崇2006文献の図182参照。
- (3) 本稿作成時点で管見に触れた最も新しいものとしてたとえば、岡陽一郎『大道 鎌倉時代の幹線道路』（吉川弘文館歴史文化ライブラリー481）2019年

本稿は、2019年度科学研究費補助金基盤研究(C)課題番号19K01094（「都市近郊歴史像の再構築—京都・白川道の研究を基盤として—」研究代表者・千葉豊）にかかる研究成果のひとつである。

表3 構内遺跡検出の道路関連遺構

構内	地点	地区	種別	遺構名	方向	硬化	舗装	掘込	側溝	轍	幅員(m)	遺構時期	分類	報告文献	備考
病西	39	AF14	発	道路跡	NS	○	○		○		4+	近世	D	報告Ⅱ	
本部	57	AW28	発	SF1	NE-SW	○	○	○	○	○	4.5-6	近世	B	S54年報	近世白川道
本部	75・89	AT27	発	SF1	NS	○	○	○	○		2.5	近世中期以降	D	S55年報	
本部	75・89	AT27	発	SF2	NS	○	○					近世	D	S55年報	
本部	75・89	AT27	発	SF3	NS	○					2	鎌倉以前	D	S55年報	
本部	90	AX28	発	SF1	NE-SW	○	○	○	○	○	4.5	18-19	B	S56年報	近世白川道
本部	95・99	AU23	立	路面								近世		S55年報	
吉南	111	AP22	発	SF1	NS	○	○		○	○	2.5	近世	D	S57年報	
本部	114	AS21	立	路面								中世近世		S56年報	
医部	143	AN18	発	SF1	EW	○	○		○		4	近世後半	D	S60年報	
吉南	167	AP25	発	SD1・2	NS				○			18		1986年報	側溝残存?
本部	168	AX30	発	SF1	NE-SW	○	○		○	○	4.5	13-15	B	1986年報	中世白川道
本部	181	AW27	発	SF1	NE-SW	○	○	○	○	○	4.5	18-19	B	1988年報	近世白川道
医部	190	AR19	発	SF1	NE-SW	○	○		○	○	1+	近世	B	1988年報	近世白川道
病東	191	AH19	発	SD1	EW							近世		89-90年報	側溝残存?
病西	192	AE12	発	SF1	NS	○	○				1	近世	E	89-91年報	
病西	200	AG14	発	SF1	EW	○	○				4	近世	E	1992年報	
医部	207	AM14	発	SF1	NS	○	○				2	近世	E	1992年報	
吉南	220	AO22	発	路面	NS	○	○				2	近世	D	1995年報	
病西	222	AF12	試	路面	NS	○	○				1	近世	E	1993年報	
北部	221	BF34	発	SF1	NS	○	○	○	○		4	16-	C	1994年報	
北部	221	BF34	発	SF2	NS	○	○	○			2+	14後半-	C	1994年報	
吉南	238	AR25	発	段差内m層	NS	○					2	16-17	E	1996年報	
吉南	238	AR25	発	SD1	NS						1	19	E	1996年報	
医部	248	AN20	発		EW							近世		1996年報	野壺列のみ
吉南	261	AN22	発	SD4	EW							15-16		2000年報	
吉南	261	AN22	発	SF1		○	○		○	○	4	18-19	D	2000年報	
医部	270	AO17	発	SF1	NS	○	○		○		2	18-19	D	1999年報	
医部	270	AO17	発	SF2	NS?	○						14-16	E	1999年報	
医部	270	AO17	発	SF3a	EW	○						14-16	E	1999年報	

表3 つづき

構内	地点	地区	種別	遺構名	方向	硬化	舗装	掘込	側溝	轍	幅員(m)	遺構時期	分類	報告文献	備考
医部	270	AO17	発	SF3b	NS	○						14-16	E	1999年報	
医部	270	AO17	発	SF4	NS?	○						14前半	E	1999年報	
本部	277	AT21	発	SF4	NE-SW	○	○	○	○		3.4	11末-13	B	2001年報	中世白川道
本部	277	AT21	発	SF3	NS	○	○	○	○		4-5	11末-13	C	2001年報	
本部	277	AT21	発	SF2	NE-SW	○	○	○	○	○	5-6	18-19後半	B	2001年報	近世白川道
本部	277	AT21	発	SF1	NS	○	○				4.2	19末	F	2001年報	帝大道路
本部	296	AU25	発	SF-N	EW	○	○	○	○	○	3+	14-15	B	2002年報	中世白川道
本部	296	AU25	発	SF-S	EW	○	○	○	○	○		13	B	2002年報	中世白川道
北部	297	BD28	発	SF1	EW	○	○	○	○		2	10半-末	B	2002年報	古代白川道?
医部	298	AR19	発	SF2	NS	○	○	○			3-4	12末13初	C	2003年報	
医部	298	AR19	発	SF1	NE-SW	○	○	○	○		2+	13-14	B	2003年報	中世白川道
吉南	302	AR25	立	SF1	NS	○					1.2	18	E	2002年報	
医部	308	AP18	発	SF1	EW	○	○		○		3	13-16	D	2003年報	
本部	329f	AV24	立											04-06年報	近世白川道
本部	331	AT22	立											04-06年報	近世白川道
本部	336de	AV25	立											04-06年報	中世白川道
病西	339	AF14	発	SX1	NE-SW	○	○		○		4	14後半以降	D	2007年報	
病西	339	AF14	発	SF1	NE-SW	○	○		○		3-5	13-14	D	2007年報	
西部	348	AW20	発	SF1	NS	○	○		○		3	18	D	2009年報	
西部	348	AW20	発	SF2	NS	○	○				4	15以降	D	2009年報	
西部	348	AW20	発	土堤状盛土	NS						2	13	F	2009年報	
北部	355	BH31	発	土手状高まり	WE	○					2.4+	15以降	E	2009年報	
北部	357	BG34	発	SF1	NS	○	○	○	○	○	5	15-16	C	2010年報	
医部	358	AQ18	発	SF1	NE-SW	○	○		○		1+	13	B	2010年報	中世白川道
病西	379	AH12	発	SF1-2	WE	○	○				2.4+	1620-1650	D	11・12年報	
病西	379	AH12	発	SF2	NS	○					3+	SF1-2よりやや新	E	11・12年報	
病西	379	AH12	発	SF1-1	WE	○					0.8+	18後半	E	11・12年報	
本部	383	AV27	立	近世路面										11・12年報	
病西	384	AH15	発	SF1	NS		○				2	近世後半	D	11・12年報	
病西	384	AH15	発	SF2	NS	○	○		○	○	2.2	近世	D	11・12年報	

表3 つづき

構内	地点	地区	種別	遺構名	方向	硬化	舗装	掘込	側溝	轍	幅員(m)	遺構時期	分類	報告文献	備考
病西	398	AH13	発	SF3	WE	○	○	○			1.5	17以前	D	2013年報	
病西	398	AH13	発	SF2	WE	○	○	○			1+	1680-1710	D	2013年報	
病西	398	AH13	発	SF1	WE	○	○	○			1.8	18	D	2013年報	
吉南	401	AM21	発	SF1・4	NS	○					1	15-16	D	2014年報	
本部	403	AT22	発	SF1・2	WE	○	○	○	○	○	5.8	13と18	B	2014年報	中近世白川道
本部	404	AU27	発	SF1	NS	○				○	1.5+	鎌倉以前	D	2014年報	
吉南	428	AP23	発	SF1	WE	○				○	4.5	近世	E	2015年報	
熊野	435	ZZ18	発	路面SF1	NS	○	○				1+	19	D	2017年報	
関田	455		発	盛土	NE-SW							13-15		本年報	盛土のみ
医部北	市道		立	路面								近世	B	*1	近世白川道

凡例（略表記例）

吉南：吉田南構内 医部：医学部構内 病東：病院東構内 病西：病院西構内

発：発掘調査 試：試掘調査 立：立合調査

NS：南北方向 WE：東西方向 NE-SW：北東-南西方向

幅員の表記：2+→2m以上

遺構時期の数字表記：13→13世紀

報告Ⅱ→『京都大学埋蔵文化財調査報告』Ⅱ

S54年報→『京都大学構内遺跡調査研究年報昭和54年度』

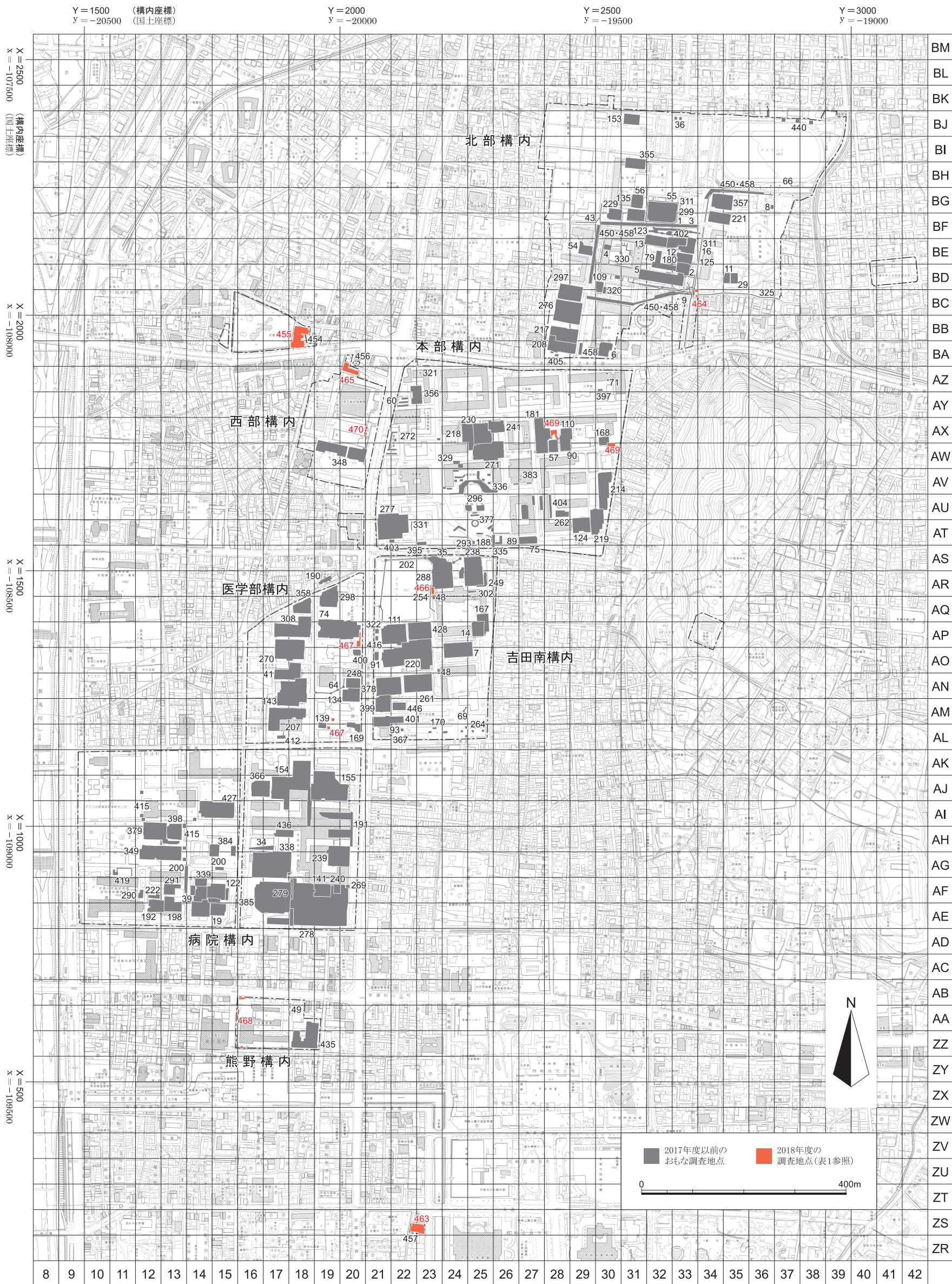
1986年報→『京都大学構内遺跡調査研究年報1986年度』

*1：百瀬正恒「17白河街区・京都大学構内遺跡」『昭和57年度京都市埋蔵文化財調査概要』1984年

京都大学構内遺跡調査研究年報 2018年度

目 次

- 1 京都大学吉田キャンパスの地区割と調査地点
- 2～9 京都市田中関田町遺跡の発掘調査
- 10～16 京都市白河街区跡・延勝寺跡・岡崎遺跡の発掘調査 I



国土座標は日本測地系第VI座標系を用いる



1 灰褐色土掘削後の南調査区全景（北から）



2 灰褐色土掘削後の北調査区全景（北東から）



1 褐色土掘削後の南調査区全景（北から）



2 褐色土掘削後の北調査区全景（南西から）



1 完掘後の南調査区全景（北から）



2 完掘後の北調査区全景（南西から）



1 流路S D 23完掘後（東から）



2 流路S D 23石仏出土状況（北西から）



3 攪乱S K 2からの五輪塔出土状況（北から）



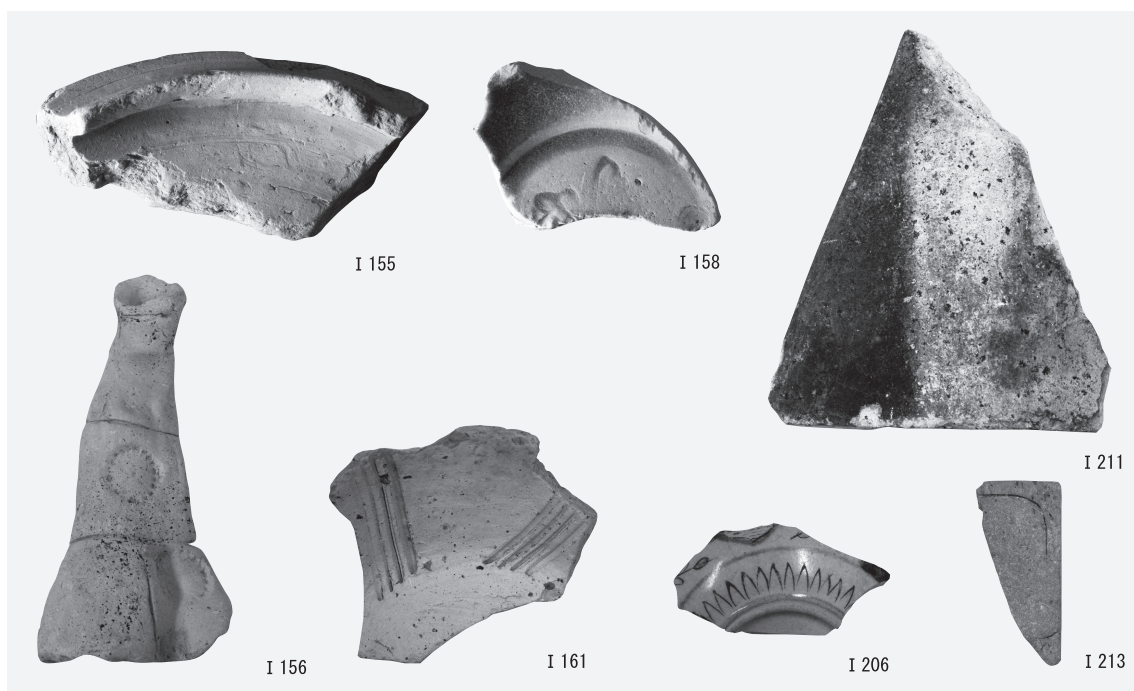
4 井戸S E 20（西から）



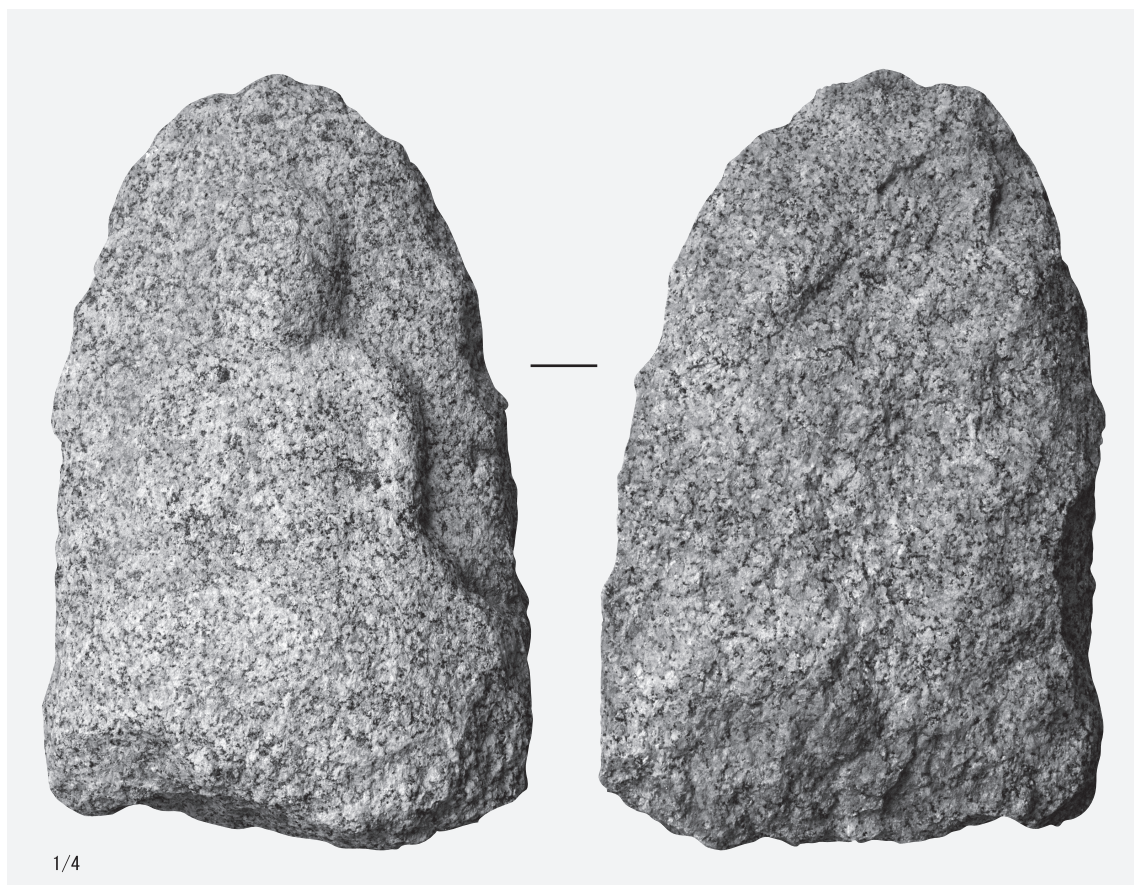
5 井戸S E 18（南から）



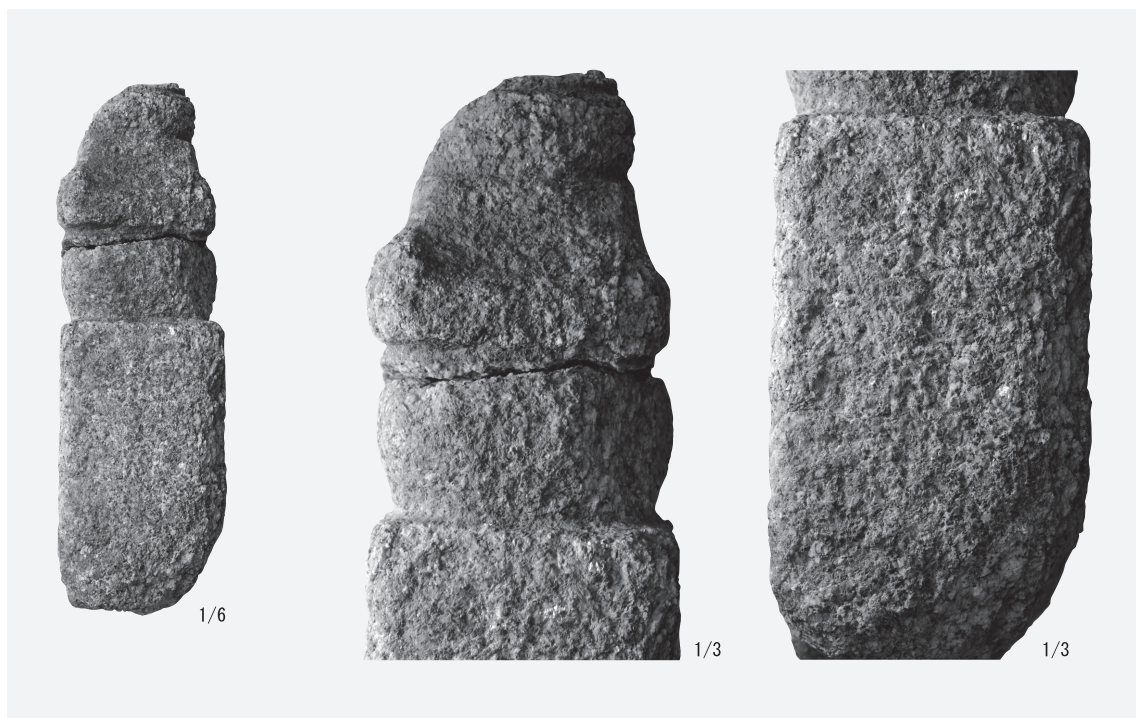
6 流路S R 1検出状況（東から）



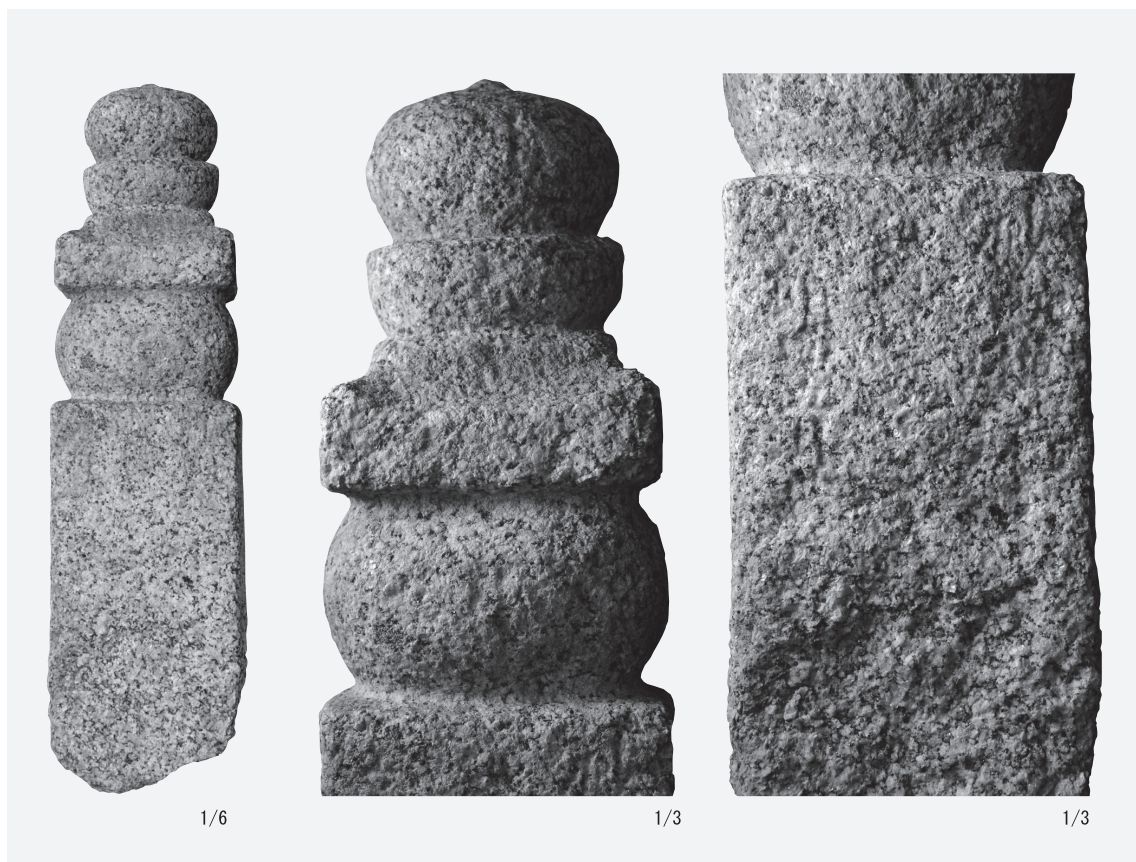
1 S D23出土遺物 (I 155土師器, I 156土製品, I 158青磁, I 161陶器),
S D24出土遺物 (I 206陶器, I 211瓦, I 213石硯)



2 石仏 (I 248)



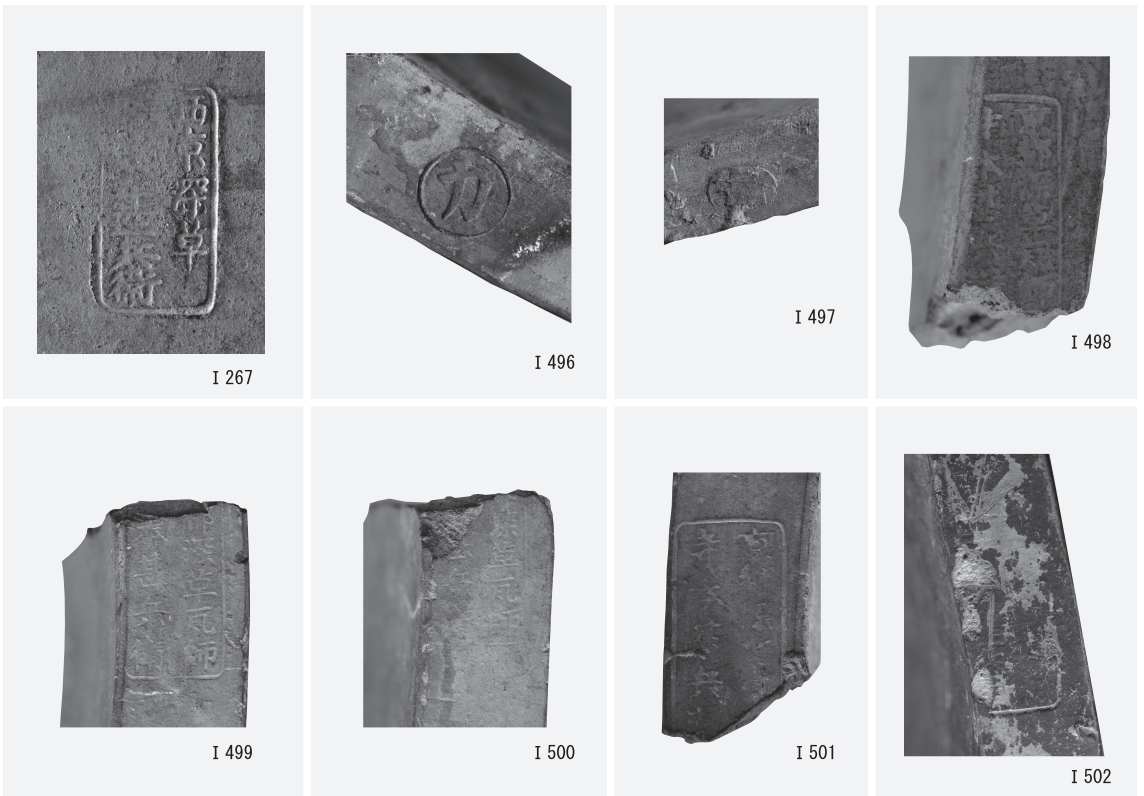
1 五輪塔(1) (I 249)



2 五輪塔(2) (I 250)



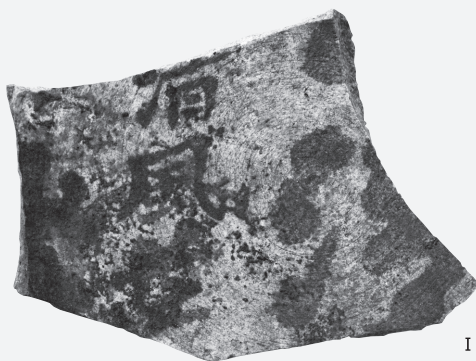
1 SP1出土瓦 (I 268)



2 瓦の刻印 実大



I 258



I 379



I 378



I 277



1 調査地全景その1 (表土攪乱除去後・東から)



2 調査地全景その2 (黒色粘質土掘り上げ後・東から)



1 灰褐色土除去後調査区全景（東から）



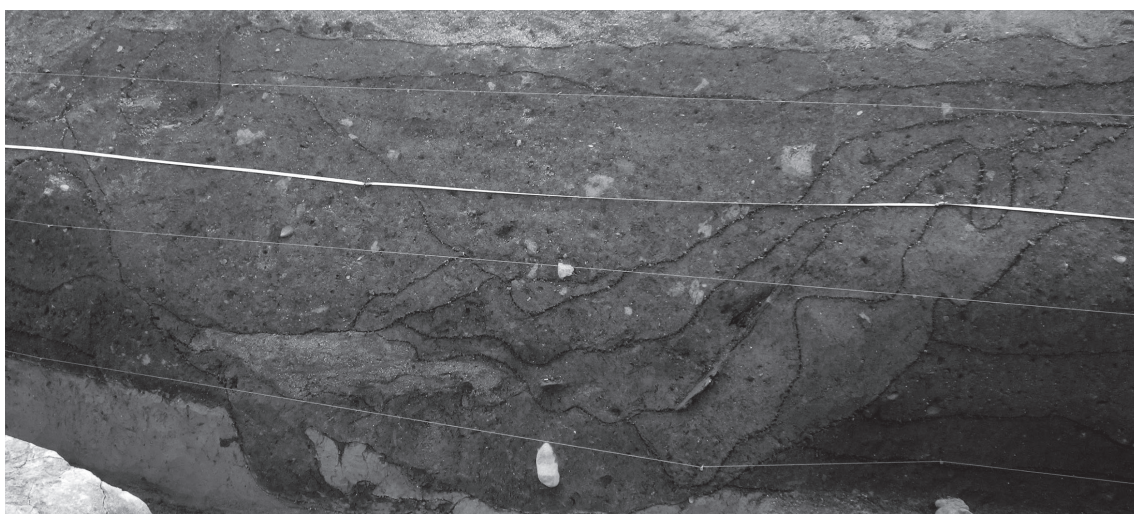
2 黄灰色土除去後調査区全景（東から）



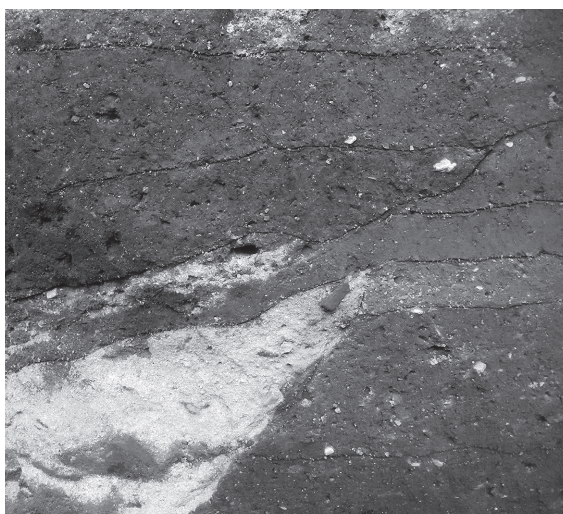
SD1 (南から)



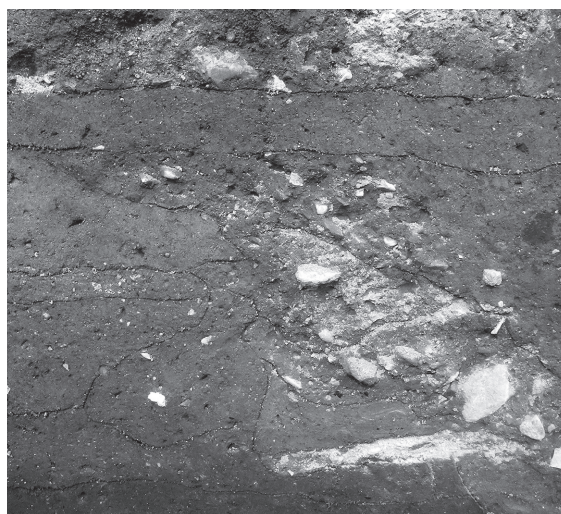
1 SD 1北壁断面（南から）



2 SD 1南壁断面（北から）



3 SD 1上部の東肩断面（南から）



4 SD 1上部の西肩断面（南から）

1 SX2 (南から)



2 SX2 (北から)



3 SX2 東肩 (西から)





1 SX2 第1列最下部の横木と西側の横板（北から）



2 SX2 第1列の辺材（北から）



3 SX2 東肩の縦置き板（西から）



4 SX2 第2～5列の杭（南から）



5 SX2 の構造材（東から）



6 SX2 第4列の横木直下の堆積相（南から）



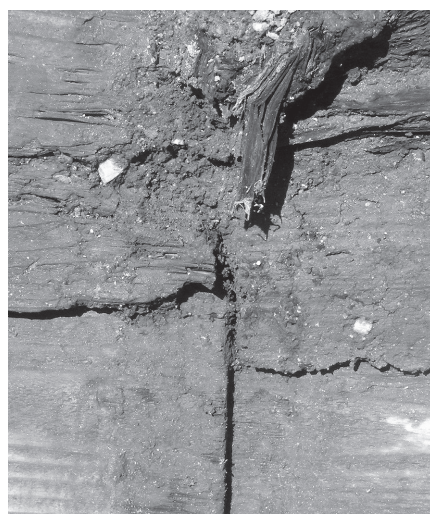
1 SX 2 第5列の横木直下の堆積相 (南から)



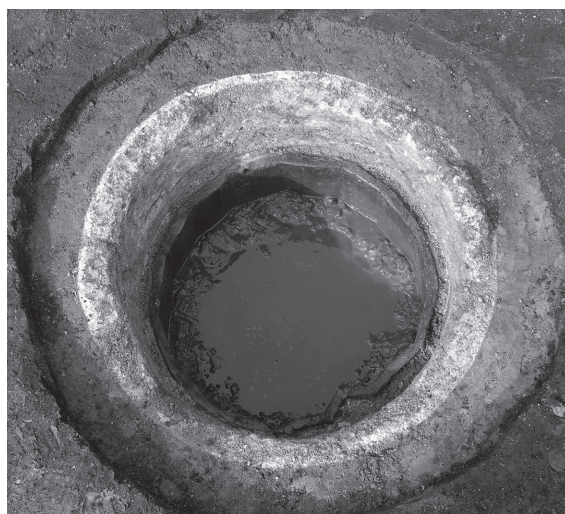
2 SX 2 第2列南側の底面 (北から)



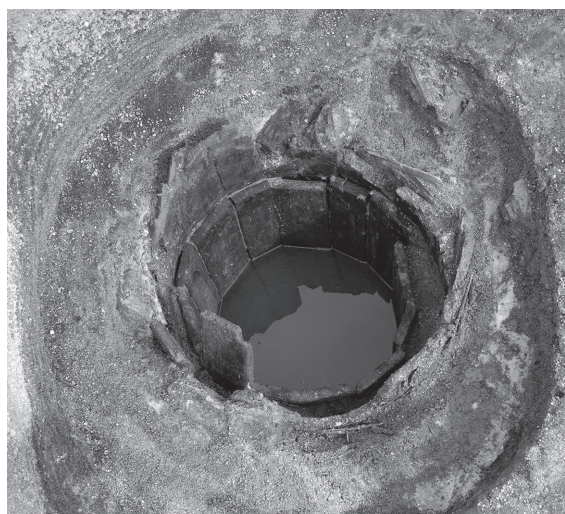
3 SX 1 (東から)



4 SX 1 横板の合わせ目 (東から)



5 SE 1 井筒検出状況 (南から)



6 SE 8 (南から)

2020年 2月28日 発行

京都大学構内遺跡調査研究年報
2018年度

編 集 京都大学大学院文学研究科附属
発 行 文化遺産学・人文知連携センター
京大文化遺産調査活用部門
京 都 市 左 京 区 吉 田 本 町

印 刷 三星商事印刷株式会社
製 本 京都市中京区新町通竹屋町下ル弁財天町300